
電車通学

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車通学

【Nコード】

N4163E

【作者名】

飯野こゆみ

【あらすじ】

中学の時に見たドラマの主人公に憧れて、高校は念願の電車通学に。だけど、ドラマのように朝のラッシュの中で小説を読む事も出来ず、かっこいい彼に会う訳でもなくただ満員電車で揺られていたのだけ。見つけてしまった理想の彼を！名前も学校さえも知らない彼。彼女と彼の交互の視点でお話が進みます。

彼女の電車通学

「どうして、電車通学にしちゃったんだろう」

朝の通勤ラッシュのせいで体と離れてしまったカバン。

無理やり引き寄せたら直ぐ横のサラリーマンが嫌そうな顔をしたのがちらつと視界に入り、もう泣きそうになる。

中学の時に見たドラマに嵌ってしまった私。

毎朝穏やかに電車で揺られ、小説や参考書を見ながら高校に通う主人公。

そして、かつこいい彼に出会い恋をする。

毎週その時間が近づくのとテレビの前で正座をしてしまう勢いで家族にも呆れられたみたいだけどそんなのお構いなし。

私もこんな恋がしたい、見終わった後はいつも数年後の自分に夢と希望を募らせたのだった。

別に行きたかった学校があるわけではなかったの、そのドラマに影響されて、友人達が地元の高校に決める中、私は最寄の駅から5つ先の高校へと進学先を決めた、そう憧れの電車通学をする為に。でも念願の電車通学だったのに、入学式の日からすでに後悔は始まっていたのかもしれない。

入学して1年経ったけど小説を読む余裕もなく、さらにかつこいい彼を見つけたわけではなく、満員電車で揺られ私の日常は過ぎていった。

ただ、学校生活は結構気に入っているセーラー服と共に、友達にも恵まれそれなりに楽しかったのだけれども。

そんなある日のことだった。

いつもの様に朝の満員電車と格闘中、3つ目の駅の反対のホームに眼鏡を掛けた高校生が目に入った。

背筋をピンと伸ばし片手で、本を読んでいた彼。

私達と進む方向の違うあちらの電車はいつも空いていて、きつと私の望む電車通学ライフなのだろうと勝手に想像してしまう。

初めのうちは羨ましいなあと思うだけだったのだけど、何日か続けて彼を見かけるうちに興味が湧いてきた。

いつもは、込み合うドアの付近を避け車両の中程へと移動するのだが、今日は思い切って彼の立つホームに近いドア付近に場所を確保した。

ちよっぴりワクワクしながら彼が待つ駅のホームに電車が滑り込む。ゆっくりと止まった電車は彼の真っ正面、うん位置はばっちりだ。

距離的にはさほど変わらないものの、座席をはさんで見るとより彼の事がよく見える。

限られた時間の中、そつと彼を観察。

今日は数学の教科書を見ているようだった。

一瞬こちら側の電車に目を向けた彼にドキッとするものの、これだけの人の嵐、彼を盗み見しているとはいえ私に気がつくはずもなく、また教科書に目を落とした彼。

身長は、180cmといったところだろうか。

少しだけ茶色い髪に、細いフレームの眼鏡。

どちらかといったら、少し冷たそうにも見えるその顔は

かっこいい。

あつという間に、朝の苦痛の時間が楽しみな時間変わった。

彼の制服は学生服。

ブレザーだったら、高校名わかるんだけどなあ。

反対方向の高校は私の地元をはじめ、何故か学生服が多い。

制服だけみただけじゃ彼がどの学校に通っているかさえ解らなかった。

学校だけじゃない、学年もそれに名前さえ知る手段はないのだから。

せめて名前だけでも解ったらな。

私は彼に”眼鏡君”とあだなをつけてしまった。

ありきたりな発想だけど、彼の眼鏡はよく似合っていたのでぴったりだと思っている。

いつも見ていると彼は電車が来るのが気になるのか、私が乗る電車がホームに着くと一旦顔を上げる。

もしかしたら、彼の目に私が映っているかもしれない、なんて都合のいい事を思ってしまったりするけど、こちらはぎゅうぎゅう詰め
の満員電車。

そんな事あるわけないよなあなんて思ったりしていたのだけど……

それは突然やってきた。

私は定位置になっているドアの付近に立っていた。

今日もやっぱりかつこいいなあなんて思っていたら

どういうわけか、今日はいつもより車両に乗る人が多かったようで
電車に乗る人々にどんどん押され続け、気がつけば私は

車に轢かれたカエルのようにドアにへばりついていた。

く、苦しい。

横向きになった私のほつぺたはドアにべったりとくっつき、おまけにカバンを持った手は万歳状態。
恥ずかしすぎる。
見られてないよね。
横目でちらりと彼をみると。

彼は、持っていた本で顔を隠し肩を揺らして笑っているようで……

もしかして私が笑われているのかも!!!

違いますようにと願ってみたのだけれども、電車が発車し始めた時、彼は持っていた本を下にずらし、
ばっちり目が合った。

そして、彼はまた顔に本を持っていくと、肩を揺らし始めたのだ。
た。

最悪だ。

彼の目に初めて入った私の姿がこんな、こんなみっともない格好な
んて。

明日からはこの車両に乗れないよ。

この気持ちを例えるならば、ドーンと海の底に落ちたような感じ。
最悪な出来ごとだった。

彼の電車通学

俺はこの春先、毎日乗る電車を1本遅くした。理由は簡単、空いているからだ。

今まで乗っていた電車は途中の学校の登校時間にぴったりらしく、車両はほぼ学生で埋め尽くされていた。

都会から離れるこの電車は通勤客はまばらで、1本ずらして他校の生徒がいなくなればそのこみ具合は全く違うと言う事に気がついたのは、高校に入学してから一年も経ってからだった。

駅から徒歩では遅刻ぎりぎりの電車だったが、春休みに家で乗らなくなった自転車を高校の最寄の駅まで漕いで置いてきたので、遅い電車でもHRが始まるまでには余裕も出来るのだ。

反対のホームに着く電車はいつも満員。

反対の電車通学だけは避けたかった。

朝からあんな疲れていくななんて考えたくもない。

大学や仕事に行くのなら仕方ないが、高校からあんな電車に乗るなんてな。

そして、今日もふいに反対側のホームに入ってくる電車を同情の目で見ていた。

車両の中程、セーラー服を着た女の子がいた。

俺がその子を目にとめたのは、彼女は何やら不満があるのか口を尖らせて眉間に皺を寄せていたからだ。

もしかして痴漢にでもあっているのか？ とも思ったのだけれど、そうでもないらしい。

直ぐに何かを思い出したように、今度はニコニコ笑みを浮かべていた。

時間にして、20秒位だろうか？

第一印象は変な女だ。

ただそれだけ。

いつも電車を待つ間、本を読んでいる。

いつだったか小説に没頭してしまって、目の前に着いた電車に気がつかず遅刻してしまったことがあるくらい本が好きな俺。

本さえあれば何もいらなと思っていただけ、

何となく反対のホームの電車に乗る彼女を捜してしまう自分がいた。

一人で乗っているんだろうに、その表情はくるくる変わって面白い。

一体何を考えているんだか。

まあ、向こうはそんな顔を見られていても知らないだろうから、そんな顔をできるのかもな。

今日も向こう側の電車に目を向けたのだけど、そこに彼女はいなかった。

かといってどうこう思ったりはせず、また本を読む。

しかし次の日もその次の日もそこに彼女はいなかった。

電車を変えたか、他の車両に移ったのか。

結構面白かったのに、なんて思っていたのだが。

ある日、ふと前の電車を見ると彼女がいた。

車両の中程ではなくドアの前に。

彼女はというと、後ろの乗客に押されドアに押しつぶされていた。

彼女は顔をドアにぴったりとくっつけ、手はカバンを持ったままの状態で万歳状態。

その表情は何ともいえず、というか何も言えない位おかしくて、やっぱり彼女らしいというか、俺は笑いを堪える事が出来ず、本を立てに笑ってしまった。

少し落ち着いてもう一度彼女を見ると、まだ同じ体制でドアに引っ付いていた。

ギャグだ。ギャグでしかない。

その日俺は一日中彼女の顔を思い出しては笑わずにはいらなかった。

その後の彼女

あーもう！

さっきのショックから立ち直れない。

電車を下りて学校まで来たのだけれど、ショックが大きくて私は呆然としてしまったよう。正直どうやって学校まで歩いてきたのかさえ記憶が無いくらい。

自分の席に着いて力が抜けたのか、どさーっと座ったまま動けなかった。

「郁、おはよう」

声を掛けてきたのは高校からの親友、桜。

「おはよう」

テンションの低い私に気がついたのか

「何？今日は眼鏡君に会えなかったんだあ」と私の顔を覗きこんだ。

「ごめん、今は話したくないんだ。後で話すからそつととして」と言う私に

「了解！」

と言って私の肩にポンと手を置くと嫌味の一つ覚悟していた私の想像と違いあっさりと桜は自分の席へと戻っていった。

ごめんね桜と心の中で謝りつつまた大きなため息をついた。

そんなこんなで授業なんて頭に入るわけも無く、ただ時間だけが過

ぎていく感じだった。

よりによって彼にあんな姿を見られるなんて。何度追い払っても、そればかり考えてしまう。私は授業中なのも忘れて、雑念を払おうと首を大きく横に何度も振ってしまった。

「お前大丈夫か？」
隣の席の大山が声をかけてきた。

「うん、駄目かも」
あっ私ったら。
大丈夫って言うつもりが思わず心の叫びを言ってしまうなんて。

「先生！ 郁が具合悪いみたいなんですけど」
大山が気を利かせて先生を呼んでくれた。
体調の方はすこぶる元気なんですけど、心の方がなんていえるわけもなくて。

折角気に掛けてくれた大山にも悪いかなと思ひ。

「すみません。保健室に行ってきます。」
と席を立ってしまった。

元気で保健室って行っても大丈夫なんだろうか？
と思ったりもしたんだけど、皆の前で言ってしまったからには行くしか無い訳で。

仕方が無く私は保健室のドアをノックした。

保健室の先生は私の顔をみると、直ぐに大した事はないと見抜いたのだろう、事務的に

「その用紙にクラスと名前書いて」と一言。

「はい」

といわれた通りに書き終えると、先生は座っている椅子をくるっと回し私の正面を向いてきて思わず身構えてしまう。

「どうした？見たところ顔色の良さそうだし、大丈夫そうに見えるのは気のせいか？」
「やっぱり。」

さすが保健の先生、ちゃんとわかってらっしゃる。

何と言っているのか解らず

「はあ。あのお」

と口を濁してしまい怒られるかなと思ったのだけど先生は

「まあいいや、折角来たんだ、ちょっとサボっていけば」と。

サボっていけばって。

いいんでしょうか？

私は勧められて、置いてあるパイプ椅子に腰掛けた。

そして、さすがといいか何と云うか、いつも生徒の話聞くことが多いのかいつの間にもやら誘導尋問にひっかかり、私の恥ずかしい恋の話話を話してしまったではないですか。

そう、桜よりも前に普段面識もない保健の先生に。

私の話を聞き終えたら

「青春だね」

なんてのん気な事を言われた。

その言葉と同時にチャイムが鳴り、ここが逃げ時とばかりに勢いよく椅子から立ち上がった。

失礼しました。

と保健室を出ようとすると

「そこまで話したんだ、ちゃんと経過を聞かせてね」

という先生は私が着たとき同様、椅子をくるっと回して机に向かった。

先生は気楽でいいよ。

そこまで話したなんて言うけれど、話させたのは先生の癖に。

経過なんかあるわけない無いじゃん。

と思いながら教室へ続く廊下を踏みしめるように進んだ。

すると直ぐに桜がよってきた。

「郁、大丈夫？ 調子悪かった？」

心配そうに言ってくれる桜に悪い気がした。

さつき保健の先生に話してしまったことで少し軽くなったようで、思い切って桜に話す事に。

桜は、思いつきり笑ってくれた。

だから話すのいやだったのに。

「ごめんごめん」

と謝りながらまだ桜は笑っていた。

桜は落ち着くと

「でもさあ考えようによったら、良かったのかもよ。印象ばっちり

じゃん。もしどこかで偶然あったとしても、覚えててくれるかもよ」「桜も先生と同じ、気楽でいいよ。本当に私の気持ちを察してっっていうの。

印象ばつちりってそれ最悪なんだから。

もっと、自然な感じで知り合っつていうか。

ドラマはドラマでしかないんだね。

今更ながらそう思った。

「もういいよ。真剣に落ち込んでるのに」

やっと笑いが止まった桜が必死に謝っていたけど、もう知らないと私は意地を張ってしまった。

本当に散々な1日だった。

その後の彼

「おい、圭吾何かおかしいんだ？」

放課後、真治に声を掛けられた。

また彼女を思い出して笑ってしまった。

「今日さあ」

そこまで言っただけまたおかしさが込みあがってきた。

お前怪しい奴だぞ。

といった後、真治は何事か？といった顔でまた俺の顔を覗き込んだ。

だって、おかしすぎるんだよ。

最近こんな笑ったのはいつなんだ？ と言うくらい平穏な日々だったからなおさらの事。

不思議顔をする真治に事の次第を話して聞かせた。

「へえーそれは俺も見なかったな。なんせ普段あんまり表情を出さないお前のつばに嵌るなんて貴重だぜ」

真治は自転車通学だからそれは無理ってもんだ。

そんな朝の出来事が強烈すぎて、今日は好きな小説もあまり進まなかったほど。

そしてあくる朝、俺はいつものように駅のホームに立っていた。

向いのホームに電車が入ってきた。

ざっと見渡してみたが、やっぱりというか彼女の姿は見られなかった。

昨日最後にばつちり目があったからな。

あの時も凄い顔してたし。

笑われてるのに気がついたか？

昨日まではそれほど思わなかったが、自分で思っている以上に楽しみにしている自分に気づいた。

そんな日が何日も続いた。

俺は毎日向いの電車を見渡すのが習慣になってしまった。

今日もいなかった。

印象が強烈なだけに何となく寂しい感じがした。

名前も知らない子なのに。

「よう、その後セーラーちゃんは見つけれられたか？」

真治がニヤッと笑っている。

近くにいた女子が

”セーラーちゃん？”

と言っているのが聞こえた。

何か怪しい響きじゃねえか！

「真治、そのセーラーちゃんっていうのだけは止めてくれ」と懇願した。

「だって名前も解らないんだぜ、他に言いようがねえじゃねえか」

「だから、言ってくれなくて結構だ」

ちよっとムっとしてまた本に目を落とした。

「気になってるんだろ？俺が捜すの手伝ってやるつか？」
こいつ面白がってるだろ。

実際、気にはなっているのだが正直そこまでか？ と聞かれたらそうではない と思う。

だいちつから、彼女が誰かわかったところで何をどうするといつともないのだから。

俺は丁重にお断りした。

「つまんねえの」

やっぱり、俺で遊びたかったのか。

俺は読んでいた本で真治の頭を小突いた。

ハプニング

朝、いつものように駅に着くと、何だか様子が違った。いつも以上にホームには人があふれていた。最悪だ。

暫くするとアナウンスがあり、信号機の故障でダイヤが乱れているとの事。

たまにこんな事があるのだが、そんな時はいつもより更にぎゅーぎゅー詰め電車になる。

仕方なしに比較的空いている列に並び電車を待っていた。

あれから、私は車両を変えていた。

彼はなんとも思っていないのは解ってはいるのだけど、私の方が躊躇ってしまった。

自意識過剰なのかもしれないって思うけど。

だから、彼のことを動き出す電車の中からすれ違う一瞬だけ見る事にしていった。

トラウマなのかどうもあれからドアの付近には近づかないようにしていたのだけど、今日はいつもより多い人のせいで、押されまくって仕方なしに久し振りにドアの前にきてしまった。

いつもと違うところから乗ったし大丈夫だね。

そして、彼の待つ駅へと電車が着いた。

ダイヤが乱れているのは反対のホームも同じな訳で、いつもはまだ電車のないはずのホームに電車が止まっていた。

私の乗る電車が、隣の電車と並んで止まった。

うわーあ

一気に心臓がドキドキし始めた。

だって、だって会いたくて会いたくなかった彼が、反対の電車のドアの前にいたから。

距離にして1メートルもない。

何十センチと言ったところだろうか？

思わず彼を見つめてしまった。

綺麗に通る鼻筋、肌も綺麗で近くでみてもまさに美少年といった感じ。

やっぱり眼鏡が似合っていた。

彼は一瞬驚いたような顔をしたが、ほんの少しだけ口の端を上げ微笑んでくれてるように見えた。

見えただけで気のせいかもしれない。

もしかしたら、また笑われてた？

多分時間にしたら、何秒か？っていう位なんだけど、私には時間が止まったように感じた。

気がついたらもう電車は発車していた。

はっとした。

髪の毛撥ねてなかったかな？

セーラーの帯、曲がってない？

顔赤くなってなかったかな？

それより何より、今日はカエルになってなくて良かった。

ほんの少しの間隙に上手に立っていられた自分を褒めてやった。

ドキドキは電車を降りても止まらなかった。

ハプニング2

あれから、彼女を見ることはなかった。

彼女をみないって事だけで、本を読むだけの朝の駅はいつもと何も変わらない。

ほんの少しだけ気になってはいるのだが。

そんな日が何日も続いたある朝、信号の故障でダイヤが乱れていた。いつもより、ホームにいる人がやけに多かった。

今日は電車の中で本は読めなそうだな。

そんなことを思いながら電車を待っていた。

最近では物足りなさを感じつつも、彼女の事を気にしなくなってきた。

やってきた電車に乗っていつもと同じように反対のドアに寄りかかった。

やっぱりいつもより混んでいて、本は開けそうになかった。

そして、いつもだったら開いている反対のホームに電車が入ってきて、並んで止まった。

無意識にいつも捜している彼女が目の前にいた。

驚いたのなんのって。

彼女はぼーっとしていた。

もしかして俺のことをみてる？何だか焦点のあつていなそうな目をしてきたから気のせいかもしれないが、一瞬そんなことを思った。

近くでみる彼女は印象とは違っていて……
何と言って良いのか説明出来ないけど、面白い彼女という発想は頭から抜けていた。

心臓の鼓動が早くなったのだけは解った。

次にあつたら絶対噴出してしまっただろうと思っていたのだが、そんなことは全くなく自然と口角を上げている自分に気がついた。

そのまま電車は発車してしまった。

ほんのわずかな時間だった。

ドアさえなかつたら手を伸ばせば触れられるような距離だった。

彼女の目の中に俺は映ったんだよな。

気にしなくなったのではない。

気にしないようにしていたのでは？

ドアに寄りかかって、外を眺めながら満足げに微笑む怪しい俺がいた。

急接近

電車で会う眼鏡の彼。

一旦近くで見てからは、自分の気持ちが大きくなっていくのが止められなかった。

だからと言ってどうする事も出来なくて、朝の電車も彼の近くの車両へは行けないでいる。

相変わらずこの学校に行っているのかも、名前も知らないままだった。

いつその事、早く起きて彼の待つホームで待ち伏せでもしてみようかななどと、大胆な事を考えた事が無いわけでもないのだが、実際行動に移せる訳でもなくて。

すれ違う電車からそっと彼を見つめることしか出来なかった。

だってもし、あんた誰？状態だったら、私立ち直れないよ。もし、じゃなくてその通りなだけにどうしようもない。

カエル状態を笑われたのと。

ダイヤが乱れたあの日に近くにいただけなんだから。

きっと同一人物だったことも解っていないはずなんだから。

彼にとつたら、記憶の片隅にもいないのかも。

虚しいとしかいいようがなかった。

でも一番気になる事は、あんなカッコイイ彼に彼女がいらないはずな
いうことだ。

客観的にみても、誰もが振り返るんじゃないかと思う程かっこいい

と思うから。

駅のトイレで鏡をみた。

どこから、どこをみても平凡な私。

可愛くないとは言わないけど、可愛いといわれることはない。

せめて、桜くらい可愛かったら勇気も持てるのかも知れないな。

なんて、ありっこない想像を試してみる。

電車が来るというアナウンスが入りホームへと降りていった。

帰りの電車は行きとは違って、座る余裕がある。

私は、いるわけないって解っているのだけど帰りの電車は、朝いつも彼が乗っている付近の車両へと乗ってしまう。

彼が乗る駅に着くと朝はここら辺に乗ってるんだよなあ。

なんて思いながら。

そうして今日も彼の乗る駅を通り過ぎて次の駅に停車した。

いつもだったら、直ぐに発車するはずなのに、電車は動かなかった。

おかしいなと思いつつ、席に座り待っていると、車掌さんからアナウンスが入った。

1つ先の駅付近で火災があり、電車の運転を見合わせているのだというのだ。

これでは電車が動くまでいつになるか解らない。

私は携帯を持ち出し家へと電話して迎えにきて貰うことにした。

「もしもし、私。電車動かないから迎えに来て。」
と駅名をいい電話を切った。

お姉ちゃんが出た。

今年大学2年のお姉ちゃんは、バイトに明け暮れあまり学校に行っていないようだった。

そんな中最近車の免許を取ったばかりで。

もしかして、お姉ちゃんが迎えに来るのかも！

一度だけ乗った事の有るその車は恐怖でしかなかった。

これなら電車を待ってた方が良かったかも。

なんて、思いながら携帯をカバンにしまおうとしたその時

目の前に眼鏡君がいた。

気がつけば、同じのホームに反対方向へ向かう電車が止まっていた。

今日は電車越しではなくて、至近距離に彼はいる。

私は思わずペコリとお辞儀をしてしまった。

なにやってるの私。

彼は私の事なんて知らないはずなのに。

なのに、彼は

「どうも」

と言った。

想像していたよりも低いその声に、私の心臓が加速した。

声も良いじゃん！

気がつけば、彼は私を見て笑いを堪えているようだった。

何？私何か変なことした？？？
髪？

制服のスカートが曲がっているとか？

すると彼が話しかけてきた。

「ごめん。悪気があるわけじゃないんだ。ただやっぱり面白いなと思って。」

それだけというと彼は今度は笑いを堪えずに反対を向いて笑いだした。

悪気があるわけじゃない？それって笑ったこと？

やっぱりって？

もしかして、私がカエルになったの覚えてるのー！

私はまた顔に出ていたようで、

「頼むから、これ以上笑わせないでくれ。」

と言われた。

私だって笑われたくないのに。

でも不思議と彼は初めて話したような感じはなくて、冷たそうに見えたけどよく笑う、気さくな人なんだなって思った。

「初めて話したのに、申し訳ないって思うけど良かったら携帯かしてくれないか？」

と私に聞いてきた。

彼の手には電源の切れた携帯が握られていた。

私は

指も長くて、手も綺麗なんて思ってしまっで一瞬返事をするのが遅

れた。

「駄目かな？」

私の顔をみる彼はやっぱりかっこよくて。

「どうぞ」

と言って私の携帯を差し出した。

「有難う」

と言って彼が私の携帯を受け取った。

今日は携帯を抱きしめながら寝よう！決定だ。

家へ連絡のついた彼が私に携帯を返してくれた。

「ちょっと待ってて」

といって買ってきてくれた缶コーヒーと共に。

2人で階段を上がって改札をでた。

車を待つ間、話せるかも。

と喜んでしまったのだが、

改札をでたところで

私は西口へ

彼は東口へと

一歩歩き出した。

「「あつ」「」

2人同時に小さな声を出したのだが、その後は彼の方へ一歩踏み出す事も出来ず、

また彼も私の方に一歩踏み出す事もせず。

ちよつとの間の後

凄く凄く名残惜しいけど

「じゃあ」

と行って歩きだしてしまった私。

彼は

「携帯ありがと。助かったよ」
と言った。

私は買って貰った缶コーヒを高くあげ

「こちらこそご馳走さま」
と言った。

その後は振り返りもせず、駅の出口へときてしまった。

迎えにくる待ち合わせの駅の近くの公園のベンチに座った。

やったー。

話ちゃったよ。

携帯を握りしめながらニヤケル顔を止められない。

声も良かったよ。

あの時ドラマに嵌って良かったあ

そう思ったのだが、

話をしたのはいいけど高校も、名前も聞かなかったよ。

なにやっつてるんだ私。
情けない。

せめて名前だけでも聞いとけばいいのに。
私の馬鹿！。

そればかりが頭に浮かんで、せつかくハイテンションだったのに。
少し沈んでしまった。

そして、それから15分後。
恐怖のドライブをして家に辿りついたのだった。

急接近2

世の中には偶然ってのがああるものなんだな。

それとも運命ってのか？

まあ、運命ってのは大げさだけど、俺は今日の前にいる彼女に釘付けだった。

遡る事3分前。

前の駅を定刻通りに駅を発車した電車は、この駅に着いたのだけでも、近くで火災があつたらしく、送電が止められ電車の運転が見合わせられてしまった。

仕方無く、バスにでも乗り換えようと電車を降りたその先に。

セーラー服を着た彼女がいた。

彼女は、携帯で誰かに連絡しているようで、一所懸命に身振り手振りで説明している。

電話なんだから、相手は見えないだろうに。

そんな彼女は俺のツボだった。

やっぱいいよなこいつ。

一緒にいたら飽きないんだろうな。

気がついたらそんなことを考えていた。

彼女は電話が終わり、俺に気がついたようでペコリとお辞儀をしてきた。

丸いくりつとした目が更に大きくなって、こちらを見ている。

俺は口が勝手に

「どうも」

と言っていた。

彼女は何にびっくりしたのか、拳動不審な動きを見せた。

思わず笑ってしまった。

流石に面と向かって笑うのは失礼かと思い堪えながら後ろを向いたのだが、今に思えば前を向こうと後ろを向こうと同じだったかも知れない。

「悪い……」

などと言っては見たが、彼女の拳動不審さは前にもまして、髪を押しさえたり、スカートを引っ張ったりで、そんなしぐさも俺のツボだった。

どうする俺。

思いついたのは在り来たりだが携帯を借りる事。

ポケットに手を入れとりあえず自分の携帯の電源を切った。

彼女に携帯を貸して欲しいことを告げるも彼女は固まったままで。

やっぱり無謀だったかとも思ったのだが、ここまできたら引き返せない。

もう一度念押しすると、彼女は貸してくれた。

頭の中では、一度俺の携帯に掛けて彼女の携帯番号をゲットしようなどと考えたのだが、焦った俺は自分の番号を思い出せなくて、仕方なく自分の家に電話をしてしまった。

俺んちってナンバーディスプレイ入って無かったよな。

目の前にあった自販機でコーヒーを2つ買った。
まだ大丈夫だ。

迎えの車が来るまでの時間、コーヒーでも飲みながら彼女のことを聞こう。

チャンスだと思った。

彼女に携帯とコーヒーを渡すと、並んで歩いて改札口へと向かう。
俺の隣に彼女がいる。

ただそれだけなのに、何も話をしなくてもドキドキしている自分がいた。

焦るなよ。

ゆっくりでいいんだ、まだ時間はあるのだから。

そう思ったのに。

改札口をでると、当たり前のように俺は自分の家のある東口へと、彼女もまた当たり前前のように、西口へと一歩進めた。

「「あつ」「」

小さな声が重なった。

少しの間の後、彼女は

「じゃあ」

と言って歩みを進めた。

動揺はピークに達してしまった。

俺は

「携帯ありがとう、助かったよ」

と。

そんなことを言いたかった訳じゃない。
知りたいんだよ、お前の事が。

彼女はコーヒーを掲げて

「ご馳走さま」

と言った。

足も口もそれ以上動かなかった。

目にするドラマでよくこんなシュチエーションがあった時。
いつも俺は

何やってんだか、とつとと話せばいいじゃないかとか、何でそこに
突っ立てんだよ。とか、テレビに向かつて突っ込みいれてみたり。
所詮ドラマだからな、なんて思っていたのに。

まさか、自分がそんな状況になるなんてこれぼっちも思いもしな
かった。

まさにその状況。

これじゃ駄目だ。

折角話せたんだ。

彼女が行ってからそんなに経っていない、迎えは来ていないはずだ。
我に返った俺は彼女の後を追った。

階段を駆け下り、周りを見渡す。

電車を降りた客で、西口は人が溢れていた。

ロータリーの周りの車をみるも、ベンチを見るも彼女はどこにもいなかった。

俺は大きく息を吸い込むと、きつと今までで一番大きなため息をついた。

名前さえ聞けなかった。

緊張で汗ばんだ手で額を覆い、せわしく動く鼓動を聞いた。

東口へと続く階段は、降りた時よりも遙に高く見えた。

もし彼女と一緒にいたら。

いないのだから、もしなんてありえないけれど、何か考えなくては、鼓動が止まってしまつような感覚だった。

一番いい日が、一番情けない日へと変わった瞬間だった。

嫌悪感？！

「郁っ怪しい人になってるって。」
桜の声に我に返った。

「なつてた？」

恐る恐る聞いてみるも、返ってきた言葉は

「いつもの3割増しって感じ？郁の百面相は見慣れたもんだけど、
久々だね今日のは。」

何だか意地の悪い笑みを浮かべて・・・

その笑みは美人の桜がすると、様になるっていうか。

ちよつと色っぽいなんて見とれてしまった。

前回の事を考えると、また笑われてしまいそう話すのはちよつと
様子を見てからに。

なんて考えていたのだけれど、私って直ぐに顔に出ちゃうんだよね。
どうすればポーカーフェイスが出来るのか誰か教えて欲しいもんだ
よ。

「郁の顔みたら大体想像できるけどね。私の推測によるとー」

「ちよつと待った。その先言わなくてもいいから！私をそつとと
いてよ。」

ほつぺたを膨らませて応戦してみるも

「まあ、聞くだけ聞いてみなよ。」
と勝手に話出した。

「まず、眼鏡君がらみは確定でしょ」

だから、顔を覗きこむなっていうの！

「それで、いいことが合つて、でも何かまた失敗して落ち込んで。」

いちいち私の反応を確かめるように私の顔を覗きこみながら話をする桜。

今更だけど、友達間違つたかも知れないとちょっと思ってしまった。

「それで、そのいい事ってのはちょっとお近づきになつたってところだね。」

私の顔を見て確信したんだろう。

満足気に頷くと、

「どう？いい線いつてるでしょう？」

とまたあの笑みだよ。

何か言つとまた突つ込まれそうなので、私は返事をする事なく机にうつ伏せた。

「郁つたらツレナイのお」

このままどこか行つてくれたら、と願つたものの私の前の席に腰を下ろしてしまつた桜。

「それで、私も眼鏡君に興味を持ったと言う事で、日曜日に郁の家に泊まりに行く事にしたから！宜しくね。」

ぜーったい嫌っー。

心の中で絶叫するも目の前の桜に面と向かって言えない私って、
やんわりと断ってみるけど、桜は

「もう決定事項だから。」
と私の返事を聞かずに席を立ってしまった。

まだ大丈夫、日曜まではまだ4日ある。
何か良い口実があればいいんだけど・・・

直ぐに顔に出てしまう私は、桜相手に嘘なんかもつての他で。
嘘なんてついてみようもんなら、たちまち突っ込まれて大事になり
そうだし。

頭が痛くなってきたのは気のせいなんだろうか？

あーもう。

折角、彼の声思い出して浸っていたっていうのに。

そしてふと思う。

そんな事してるから桜に言われるんだよね。

それにしても、彼の声思い出して浸ってる私って・・・危ない子
かも。

危ない子かもなんて自覚しているくせに、つい無意識に（この無意
識にとって重要だ）思い出してる私がいる。
とうとう大山にまで突っ込まれてしまった。

「極上のいいことがあったって顔してるぞ。」
そんな事を言いつつも大山はまた黒板へと顔を戻した。
桜の態度とはえらい違いだ、突っ込まれない事ではっとするも、本

音は気がつかない振りしてくれた方がいいのだけど。

「ちょっとね」

私の返事なんて聞いてないだろうけど一応返事はしてみた。
すると、大山は私の机にノートを近づけた。

そこには

「一目惚れしたって？」

ごつごつした山のような身体には似つかない、繊細そうな綺麗な字
でそう書かれていた。

一目惚れではないと思うけど、近いものはある。
それにしてもなんで？何で知ってるの？

大山の顔を見るも、ノートはまだそこに置かれたまま前を向いてい
た。

これって返事しなくちゃなのかな？私は

「秘密」

って綺麗なその字の下に書いてみた。

秘密ってばればれじゃん。

とうとう大山の咳きが聞こえた。

そんなこんなの日休み。

いつものように桜と屋上でしゃべっていたら、風によって何処から
か女の子の話声が聞こえた。

「沙織が大山に告って振られたらしいよ」

「大山ね。あの今時っぽくないとこがいいのかもね。何か解るかも知れないー」

桜と顔を見合わせた。

大山ってあの大山だよな。

確かに。ごつい顔にでっかい体、声も低いし今時からはかなり離れたところにいるかも。

美少年とはほど遠いどっちかって言ったら”男前”かな。

桜も沙織ちゃん見る目あるね、なんて言ってる。

そして、今度は2人で聞き耳立ててしまった。

「それで、どうして振られたって？沙織可愛いじゃん。」

「それがさあ沙織が”一目惚れです”って言ったら、それが決まりだったみたい。」

「何それー」

「大山は”一目惚れっていうのは、顔だけだろって。人を顔で判断してるの嫌悪感があるって、仮にも自分のどこがいいとか言ってくれたら、考えたかも知れないけど。”って言われたってよ。ちよつと納得しちゃったよー」

この後も何か話していたけど、あんまりにも衝撃的でちつとも耳に入ってこなかった。

私も大山に嫌悪感もたれちゃった？それより一目惚れされる方はそんな風に思ったりするのなあ、

眼鏡君もそう思うのだろうか？

桜というと

「でもさ、切欠は一目惚れかも知れないけど切欠は切欠としてその人をみているうちに段々とその人の事を解ってくるもんじゃないのかな？私は有りだと思っけどね。」

私をみながらそう言った。

でも、顔とか声に反応している私はやっぱり嫌悪感持たれる対象だったりして。

桜の言葉に励まされつつもその後の時間はそればかり考えてしまった。

大山はその後私に対して態度は変わらず、「先ず”ほっと”してはみたのだけどね。

それより桜だ。

あと4日どうやって逃れるんだ？
無い頭を絞って考えないと。

色々な意味で疲れた1日だった。

嫌悪感2

彼女は結局見つけられなかった。

一緒に飲もうと買ったコーヒーを手に持ち天井を仰ぐ。

近くでみた彼女は電車で見るそれより小さかった。

一際目をひくのはあの大きくなりつとした目だった。

缶コーヒーを飲もうとプルタブに指を掛けるものの、そおっと指を離しベットの脇に置いた。

どうして、ここにあるかな。

お前は本当だったら、駅のゴミ箱に捨てられていたはずなのに。人差し指で缶を弾くもコンという何とも寂しい音がするだけで。

あの後、話を出来ていたら、今頃携帯で話でも出来たかもしれないのにな。

面白くて、先が気になっていった小説も手付かずいつの間にか眠りについていた。

いつもの日常。

それは、彼女と話したことで少し変わってしまった。

次の日いつもと同じ場所に立って電車を待つも彼女を見ることはなかった。

ここで不安に駆られた。

どうして彼女は車両を変えたんだろう？

もしかして、俺避けられてる？

笑ってしまった事で嫌われてしまったのだろうか？
でも携帯を借りた時もしやな顔してなかったよな。
でも、俺が浮かれてただけで気づかなかったのか？
頭の中で疑問と不安が渦巻いた。
そんな日がまた何日も続いた。

今日こそは。

本をカバンの中にしまい、じつと電車が来るのを待つ。
この電車の中に彼女が乗っているかと思うと捜さずにはいられなかつた。

とはいえ向こうの電車はこちらと違って、いつも満員だ。この中から彼女を見つけ出すなんて無理難題もいいところなのかもだが。

やっぱりというか何としか、今日も彼女を見ることは出来なかった。

「圭吾、お前変わったな。」

そういつて真治が俺の前の席に腰を下ろした。

「圭吾とつるんでからずっとお前はポーカーフェイスだっと思ってたけど、うんうん」

なんて俺の頭をなでやがった。

そんなのお前が勝手に思ってただけじゃないか。

「俺、避けられてるのかも。」

言うつもりはなかったけど思わず呟いてしまった。

真治は口をあぐり開けて固まっている。

そして

「お前からそんな言葉が聞けるなんて。」

よほど驚いたのか、それとも言葉が見つからなかったのかそれ以上

言葉は続かなかった。

一番驚いているのが自分だったりするんだよ。

「やっぱさあ殆ど初対面なのに、笑っちゃったりしたら嫌悪感とか持たれたりするかな？」

否定してくれ、と心の中で願う。

「そういう奴もいるんじゃないの。」

「そっだよなあ」

やっぱあれは拙かったか。

「でもさあ。」

でも？俺はそういう真治の続きを待った。

「お前の話聞いている限りじゃあ、そんな事ないんじゃないかと思うけどな。んで、やっぱり捜してやるうか？」

真治は笑っていなかった。

でもそれはやっぱり自分で捜したいといううか、結局今まで電車を見るだけで何もしなかった俺が言う事ではないのだが・・・

真治は俺の顔を見て、多くを語らず

「どうしても時は言ってくれよな。」
と言ってくれた。

真治の言葉に少しだけ救われた気がする。
いい奴だよなと今更ながらに思った。

それより、これからどうすっかな。

解っていることはあの時間に反対の電車に乗っている事。時間的に逆算すれば、だいたい先にいったとしても精々3つ先の駅までだよな。

どついう訳だか、昔からこの辺りはセーラー服に学ランが多い。

俺らの学校も学ランだったりする。

女子は何年か前にはやりのブレザーになったのだが、どついうわけだか男子の制服は変わらなかった。

噂によると、PTA会長が反対したらしい。

変な話だ。

兎に角、該当する高校はいくつかあつて、5、6校つて感じだな。

せめて名前だけでも解れば、同じ中学の奴らに聞けるのだが・・・

聞くんたつて、名前も学校さえも解らないのに何を聞くんたか。

偶然を当てにするなんて、もうきつとないだらうからな。

一度しか話した事のない彼女がこんなに気になるなんてな。

今までだつたらありえない話だ。

過去に付き合つた事がないとは言わないが、その彼女には悪いと思つけどそんなに会いたいという欲求はなかった。

言われるままに一緒に帰つて、たまに休日に出かけて。

自分から連絡だつてした事はなかった。

彼女というよりも、本を読んでいたほうがずっと楽しかつたのだから。

俺つて酷い奴だつたんだな。

今までの自分を思い出して苦笑した。

それよりどうすれば彼女に会えるのか。
いくら考えても良案は浮かんでこなかった。

友達思い

今日はとうとう日曜日。

結局私は桜を断る事も出来ずに、今待ち合わせの駅前にいる。

あーあちょっと憂鬱だな、なんて思いながらも待ち合わせの10分前に来ている私が恨めしい。

どうも桜の押しの強さには負けてしまっ、眼鏡君の話なしだったら楽しい事間違いないけど。

時計を見るともう待ち合わせ時間とうに過ぎている。

後10分待つて来なかつたら帰ってやるんだから！なぐんで出来っこないくせに自分で自分に突っ込んでみる。

アスファルトをつま先で軽くつついた。

これが眼鏡君との待ち合わせだったら、何時間でも待つちゃうかも、きつとそんな時間も楽しみなんだろうな。

そんな事を思った自分に苦笑した。ありっこないか、と。

視線を上げると駅の階段から大きな荷物を持った桜が見えた。

あんた何処に行くんですか？って位の荷物だった。

「ごめん、ごめん。姉貴の車をあてにしてたら急に姉貴に電話掛かって着ちゃってさあ。」

荷物を道路に置き、両手を合わせて上目遣いに私をみていた。

そんな桜の顔に毒気を抜かれて家へと向かう。

既に待ち合わせの時刻から40分も経っていた。

さっきの顔は何処へやら、やたら上機嫌の桜。
それに比べて私の顔は・・・

もう明日の朝へと気持ちが向いていて何とも複雑な心境だった。

家に着いてしまった。

「ただいまーお母さん、桜来たよー」

「お邪魔します。突然すみません。」
ぺこりと頭を下げる桜。

「いらつしゃい、待つてたわよ。」
私とは対象的にニコニコ顔の母さんだった。

私の部屋に入ると大きなスポーツバックから制服を取り出しハンガーにかけて。

後でアイロン貸してね！なんて言葉を添えて。

バックからは出てくる出てくる、パジャマにはじまりゲームやお菓子、それにちゃんと教科書も。よくもまあこんなに持ってきたものだよ。

「私と背変わらないんだから、パジャマくらい貸したのに。それにお菓子だって」

「そう思ったんだけどね。泊まるの久し振りで気合入っちゃったよ。何しろ姉貴あてにしてたし」

そういつて、ペロツと舌をだした。相変わらず上機嫌な桜だった。

「まだ早いから、ぶらっと遊びに行こうか？」

「了解！」

桜の返事にほっとする。

こうして、出掛けてないといつ質問攻めになるか解らないからね。

駅前のショッピングモールは日曜の午後という事で人が溢れていた。一番人気のアイス屋さんで行列に並び、20分並びアイスを食べた。

「うん、これなら20分並んでも食べたいって思っちゃうねえ」

「本当、そう思う！」

美味しいアイスを食べ顔も綻んだ。

ウインドウショッピングも十分楽しんで家に帰ってくると、母さんは夕飯の用意をしていた。

桜はすかさず

「手伝います。」

とお母さんの横に並び玉ねぎの皮を剥き出した。

桜は手馴れたもので今度は手際よく母さんの指示に従って包丁をさばいている。

私はというと、お皿を並べたり、お箸を出したり、そのうちする「とも無くなつて紅茶を飲みました。」

お母さんは”郁ったら”と呆れ顔だ。

これ以上ここにいたら何を言われるか、たまつたもんじゃない。

「私、アイロンかけてくる！」

と桜をおいて2階へ上がってしまった。

夕飯の支度が整い始めると、

「今日はゆっくり話すのでしょ？先にお風呂に入ってきてちゃった方がいいんじゃない？」

との母さんの言葉に頷いた。

2人共さっぱりした後、美味しく夕飯を食べた。

その最中姉貴が帰ってきて一緒にになったのだが、初対面だということにとても気の合ったようでも私をそっちのけで話出す2人。私もできればそっちの方が嬉しかった。

このまま姉貴の部屋で寝てもらってもいいんだけど・・・なんて思ってみるも。

夕飯が終わると私の部屋に戻ってきて、私の心配をよそにゲームをしたり学校の話をしたりでその日だけでなく、月曜の朝まで眼鏡君の話は一切でてこなかった。

私の緊張はなんだったのだろうか？でも本番はこれからだ。

母さんに駅まで送ってもらい改札をくぐる。

私はいつもの場所に桜と並ぶと何だかドキドキしてきた。

「本当にここでいいんでしょうね。」

疑いの眼差しの桜。

「毎日ここで乗ってるよ。」

嘘はついていない。ただ正面の位置じゃないけどね。

自転車通学の桜は嬉しそうだった。

ただ、持っているバックが異様に大きく家出している人みたいに見えることは内緒ね。

程なくすると電車がやってきた。
桜はすかさず反対のホームよりのドア付近に移動した。
私はというとそのまた反対のドア付近に、恥ずかしくて近くにいら
れなかった。

そして、3つ目の駅のホームに。
その頃、桜はというと
じーっとホームを見ていた。

”少し茶色の髪にスラーっとした眼鏡君ね”

電車がゆっくり動き出すと目の前に学ランを着た2人組の男の子が。
いた！こいつかあ。
眼鏡君を見ていたら目が合った！私は

「またね」
と口パクをして彼を見送った。
いい男じゃん。
満足気に微笑む桜であった。

友達思い2

今日は日曜日。

俺の好きな作家が新刊を出す日だった。

いつもだったら行き着けの本屋に予約をするのに、最近の俺は何だかどうかしているようですっかり予約するのを忘れてしまって、こんな事は初めてだった。

昼飯を食ってから、本屋に行こうと家を出た。

出かけに母さんにジャガイモとにんじんを頼まれる。

今日はカレーかあ。

そんなことを思いながら、駅前のいつもの本屋に向かったのだが。

そういえば彼女はどの位先に住んでいるのだろうか？

そんなことを考えた。

俺は本屋の入り口で向きをかえ、駅へと向かう。

確か、3つ先の駅前に大きな本屋があったよな。

一度だけ行った事のある本屋。

品揃えも多く、時間はいくらあっても足りないほど魅力的な本屋だった。

ただ、地元の本屋もそこそこ大きく満足していたので、また電車に乗ってまで行こうとは思ってなかったのだが。

今日は思い切って行くことにした。

何となく彼女に近づけるような気がして。

本当に何となくだけ。

駅前は、日曜日のせいか人がいっぱいだった。

同じ位の女の子も多く、どうしてこんなにいっぱいいるのに彼女は

いないのだろう。
そんな馬鹿なことを思った。

前を見ると凄い行列。

今日は暑いせいか、アイス屋が人気があるようだった。
その行列を通り過ぎる際、一度だけ聞いたあの声が聞こえたような気がしたが、とうとう妄想の世界に入ってしまったかもと自分を笑い通りすぎてしまった。

本屋に着き、始めに目当ての本を手に取ると、後は時間を惜しむように自分好みの本探しに没頭した。
久し振りの感覚だった。

拳句の果てに、帰宅時間も遅くなりおまけにすっかり買い物忘れ
て母さんに怒られてしまった。
結果夕飯はカレーからチャーハンに変わった。

その晩は買って来た本にかじりつき、一気に読みふける。
お陰で深夜3時になってしまった。

あくる月曜日のけだるい朝。
まだ眠い目をこすりつつ俺はいつものように駅に着き、改札まで行くところに真治がいた。

「おっす！圭吾」

「おっすってお前、何でこんなところにいるんだ！」

「俺も捜してみたくなくてさあ、圭吾にそんな顔させる女の子をさ」

どんな顔だよ。

聞くと朝からわざわざ電車に乗ってこの駅で俺を待っていたそうだ。

「焦ったよ、他の連中はみんな1本前の電車に乗って行ったから来ないかと思っただぞ」

なんて笑いはじめた。

朝からテンションの高い奴だ。

それにしても真治の奴。

俺だって会えないのに、いきなり来て会えるわけないじゃないかと。

それに、こいつはあの子が誰だか見たこともないのに捜すことなんて出来ないだろうに。

って見たことないからみたいのか！心の中で突っ込みを入れてしまった。

本当何やってるんだ、全く。

そう思いながら、真治と電車を待った。

電車を待つ最中も真治の口は止まらず

背はどの位だ

髪の色は？長さは？

等と煩すぎだ。

無視していたのだが、しつこいたららない。

俺は根負けして

背は普通、髪も真っ黒ではなく茶色でもなく、長くもなく短くもなく

と端的に答えた。

隣でせめて背が高かったり、髪が長いとか短いだとかだったら見つけ易いんだけどなと言っていた。

お前に見つかる為に彼女は存在するんじゃないから、彼女は。

そして、向いのホームに電車がすべりこんだ。

「どれどれ」

なんて面白がっている真治。

ゆっくり入ってくる電車の先頭から目の前の車両まで目を凝らしてよく見ても、やはり彼女は見つからなくて……

電車が発車してしまった。

その時、

「あの子か？超かわいいじゃん！」

ゆっくり動き出した電車のドアの前にセーラー服を着た女の子が立っていた。

確かに制服は同じ様だが、彼女じゃない。

つつつか、思いつきり髪長いじゃないか！

彼女だったら良かったのにもう一度その子を見ると、ぱっちり目が合った？

ま・た・ね

そう口が動いたように見えた。

何なんだ？

隣で

「何か言ってたんじゃないか？それより良かったじゃないか会えて。」
ちよつと興奮ぎみに俺の背中を叩く真治。

「彼女じゃないよ。」
そう一言呟くと

「そっかあ残念だったな。っていうか俺はさっきの彼女とお近づきになりたい！」
なんて馬鹿なことを言い出した。
でもそれは、俺を元気付けようとした言葉なんだろうけどな。

また会えなかった。

会えない時間が思いを募らせるような、そんな切ない気持ちになった。

なんで！

いつもと同じ朝の通学風景。

自転車を漕いで駅に行き

改札を通り

いつもと同じ場所に立って電車を待つ

同じ時間に同じ電車に乗るのだからホームに立つ人も大体見知った顔で。

競馬新聞片手に真剣に考えこむサラリーマン

ブレザーを着崩し、I Podを聞いている高校生の男の子

必要以上に髪の毛を指先でもて遊ぶ女子高生

そして私

でもそれは電車に乗った事でいつもと同じでは無くなってしまった。途中までは同じだったのに

いつもの車両に乗り込むと、私は彼を知る前のように車両の中程まで進もうとして、ふと気がつく違和感が

私の定位置であるその場所がすっぱり空いていた。

周りを見渡してみるも他はいつもと変わらぬ混み具合

不思議だな？と違和感を感じたらそこで止まれば良かったものの私はいつもの場所に立ってしまった。

そして、直ぐにその原因が解ってしまった。
私の隣に立っているこの年配の女性の香水が

きついなのなのって!!

只でさえ蒸し暑い車両の中、この場に居るのは拷問に近かった。
でも小心者の私はその場から動けるはずもなく。

必死に息を殺して立っていたのだけれども、とうとう限界がきてしまった。

強烈なおいに耐え切れず

「すみません！降りますー。」
と頑張つて乗っていた電車を降りる事に。

あまりにも強烈なダメージをおってしまった為、電車に乗って彼を
気になりだしてから、初めて彼の事を考えなかったのだが。
私が降りた駅は

そう3つ目の停車駅だった。

電車を降りて、すぐさま大きく息を吸い込んだ。

ちよつとだけ胸のムカムカは治まったけど、まだ電車に戻るほど
回復せず、次の電車に乗る乗客達を押し分けてホームの先のベンチ
へと向かった。

やっとそこで見知った風景に出会ったわけでした、私は咄嗟に彼の
立つホームに目を向けた。

其処には、私の一番見たくなかった光景が。

いつもは一人で立っている彼の隣に、ブレザーを着た女の子がいた。
正確に言うと彼の隣ではなく、彼の腕に腕を絡ませて・・・

彼はいつもの事なのだろうか、絡んだ腕は気にもしないようで片手で本を持ち、いつものように本を読んでいた。本に隠れて彼の表情までは見えなかったけど。

やっぱりなあ。

彼女いたんだ。

折角、復活しそうだった私の胸のムカムカは先程より増したようで、学校に行く気も失せてしまった。

このまま家に帰ろう、そう思ったのだけど家に帰るには反対のホームに行かなくてはならない訳で。

仕方なしに、彼の電車が行った次の電車に乗って帰ろうと決めた。

その時間は10分といったところだろうか？その間には電車に乗る位には復活しているだろうから。

私は彼の前から避けるように彼の前を通らず遠回りをしつつ階段を上がる事に、最後に彼を見ようと、少しだけ首を捻るとその瞬間彼が顔をこちらに向けた？

彼はするつと彼女の腕から自分の腕を外すと、パタンと本を閉じ歩きだした?!

もしかして、こっちに来る？

そんな事は無いと思いつつも私は急いで階段を上がり、慌ててトイレに駆け込んだ。

胸のムカムカとドキドキで変な気分だよ。

そんな私に怪訝そうな顔をするOL。

何でもありませんよ、といった顔で（出来たかどうかはわからないけど）鏡の前に立った。

気分が悪いせいか、青い顔をしてる。
そのうち、電車のアナウンスが聞こえ、彼の乗る電車が発車したのがわかった。

そういえば、何で私は逃げるようにここに来たんだろう？

悪い事はしていないし、ましてや彼がこちらに来るとも限らないじゃないの！

変なドキドキが増したせいで、いつの間にか胸のムカムカは落ち着いていった。

息を整え、もう一度大きく深呼吸した。

これなら電車に乗っても大丈夫そうかな・・・

胸のムカムカは治まってきたのだけれど、今度は急に胸が苦しくなってきた。

失恋しちゃったのかな。

ってまだ恋してたわけじゃないけど。

他の子と一緒にいる姿はもうみたくなかった。

明日からは1本早い電車にしなくちゃだな。

そう思いながらトイレをでたら

「見つけた。」

一瞬で身体が熱くなった。

間違える筈が無い、この声。

夢にまでみたこの声。

振り返ると、トイレの脇の壁に寄りかかって、はにかんだ笑顔を見

せる眼鏡君がいた。

一瞬、時間が止まったように思えた。

なんで！（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。

とても嬉しく思います^^

お話も終盤に入りましたのでもう少しお付き合い合ってくださいと幸いです！

なんでだ！

結局のところどうすればよいのか解らなかったのだが。

もしかして電車を変えてしまったかとも思い、いつもより1本早い電車の時間から彼女を待つ事にした。

もしかしたらの期待を込めて。

よくよく考えてみたら、反対のホームにいるのだから見つけたとしても何が出来るという訳でもなく、ただ彼女が見れるというだけだったのだが俺はそんなことも気がつかなかった。

いつもの場所に立つと、そこは何ヶ月前までの風景で。

大事な事を俺は忘れていた。

この時間はあいつがいるんだった。

案の定

「圭吾ーっ。やっと見つけた。会いたかったよ。」

涼子だった、上総涼子。

所謂元力ノだ。

中学の同級生で、半年程付き合っていた。

2年間アタックされ続け、押しに負け付き合いはじめたのだが、自由奔放な彼女には随分と振り回された。

楽しくなかったわけではないが、何か違うといつも感じていた。卒業をきに、俺から別れ話をした。

涼子はあっさり

「いいよ。付き合えただけでも嬉しかったから、別れてあげる。でも私諦めないから、自信あるもん。絶対圭吾は私のところに戻ってくるって。だから少しの間自由に恋愛するといいよ。きっと私の良さが解るはずだから。」

とにっこり笑って帰っていった。

すんなり別れられたのはホッとしたのだが、正直ちょっと怖かった。卒業しても使う駅が一緒なのでいつも俺の隣にいた。始めに、よりを戻すことはないと言げ、涼子も頷いていたので、俺も邪険にする事なく放っていたのだが……。

久し振りに会った涼子はいつにも増してはしゃいでいたように見え

た。

俺はカバンから本を取り出し読み始めると、腕に絡んできた。

始めのうちは振りほどいていたのだが、涼子はしつこくていい加減俺も諦めてそのままにしておいた。

程なくして、向いのホームに電車がやってきた。

いつもより1本早い電車だ。

無理やり涼子を引き剥がした。

むっとしたようだ。そこは無視を決め込んだ。

涼子はむくれてそっぽを向いている。

これ幸いにとばかりに本を立てに向いの電車の中をじっと見つめた。電車が動き出すも、やはり彼女を見つけることは出来なかった。

落胆した俺は、また纏わりついてきた涼子を振り払うことが出来なかった。

そして、今度はこちらのホームに電車が入ってきた。

何ヶ月か前まで俺が乗っていた電車だ。

涼子が俺の腕を引っ張って一緒に乗ろうと言ったのだが、俺はその

場から動かなかった。

「どうしたの？」

と俺の顔を覗きこむ涼子。

「いいから乗っていけよ。」

涼子突き放すも涼子は足を踏み入れた車両から降りてしまった。

「圭吾と一緒に乗るんだもん。」

そういつて電車を見送ってしまった。

なんてこった。

最悪だよ。

そう思ってみるももう遅い。

仕方なくまた本に目を落とす。

そうして次はまた、向いのホームに電車が入ってきた。

今度こそ、期待を込めて向いの電車を見る。

そして、やっぱりなあ。彼女を見つけることは出来なかった。

その間も涼子はどうした？どうした？と俺の隣に纏わりついていた。ぼーっと、電車が行ってしまった向かいのホームを見ていると

あっ

ホームの先に先ほど電車を降りた乗客に紛れセーラー服を着た彼女を見つけた。

間違いない彼女だ。

涼子に、

「俺ちよつと行くから次の電車に乗って行くんだぞ。」

そういつて腕を振り解き、俺は歩き出した。

なんでだ？

どうしてこの駅にいるのかは解らなかったがそんなことを考えている暇はない、彼女は階段を駆け上がろうとしていた。

今度こそ捕まえなくては。

逸る気持ちを抑えることは出来なかった。

階段を急いで上がるも、彼女の姿はまた見つからない。

目の前にあるトイレが目に入った。

きつとここだ。

トイレの前で待ち伏せるなんて向こうにとったら嫌かもしれない。ただ俺にはそんな事をいつている余裕はなかった。

暫くするも、彼女は出てこなかった。

アナウンスが流れ俺がいつも乗って行く電車が来たことを告げる。

そして電車は発車した。

涼子が乗っていったことを願って。

トイレの壁に寄りかかる。

どれ位待ったのだろう、やっぱりここにはいないのか？

そう思ったとき

俺の前を彼女が通り過ぎた。

「見つけた。」

声が震えなかっただろうか？

それ位俺の心臓は一気にざわついた。

彼女が振り返った。

あの目だ。

丸いくりっとしたあの目。

俺は彼女しか目に入らなかった。

思いは何処に

見つけた？

周りを見るも、朝の通勤通学時間足を止める人もいなくて。

見つけられた？

私を???

彼を見ると私を見てる。

それも零れんばかりの笑顔で。

嘘、夢じゃないよね。

私に言ったんだよね。

信じたいけど、信じられない。

間違いだったなら早く気づいて欲しい。

人違いだったって。

「突然、ごめん。顔色悪いけど大丈夫？」

彼の先ほどの発言が頭の中でまだ”？マーク”が回っている私。

思考停止中。

何がおきているのか良く解らない。

とりあえず返事をしなくてはと思うのだが、口が開いてくれない。

私はコクリと頷いた。

すると彼は

「この前は突然携帯貸してくれなんて言ってすまなかった。助かったよ。」

私はまた頷いた。

この状況が今一信じられない。

さっきのコは？

どうして私に話しかけたりするの？

見つけたって何？

彼は困ったように笑い、頭を掻きながら何かを言おうとしていた。ごくりと唾を飲み込んで彼の言葉を待ったのだけど

「圭吾ー何やってんの！電車行っちゃったじゃない！」

さっきのコがやってきた。

ほらね。

見つけたと言われ少しだけ期待してしまっただ自分が恥ずかしい。と同時にさっきとは違う胸の疼き。だから、貴方が他の女の子と一緒にいる姿は見たくなかったのに。

彼は一瞬にして険しい顔になった。

これ以上ここにいるのはごめんだ。

ちょうど電車がくるアナウンスが聞こえた。

動け私の足。

涙が零れそうになるのを必死で我慢してもう話す事もないだろう彼に「じゃあ」

と告げると一気に駆け出した。

「待つて、話があるんだ」

彼はそう言ったが私には聞くことができない。

彼の隣では近くで見れば見るほど可愛らしい彼女が首を傾げている。

私は振り向きもせず、階段を駆け下り電車に飛び乗った。

鼓動が激しい。

それは急に走ったせいなのか

彼の話の聞かずに来てしまった事なのか

動き出した電車からちらつとホームをみると

けいこと呼ばれた彼が立っていた。

何かを言っていたがこちらには全く聞こえない。

でもこれでいいんだ。

電車にさえ乗らなかったら会わなかった彼。

最後の最後に名前は解ったけど。

何を話したかったのだろうか？

知りたくないと言えば嘘になる。

うつつん、知りたくてしょうがなかった。

でもでもあの彼女に

「この子誰？」って聞かれたら？

友達とも、知り合いともいえない、ただ電車ですれ違うだけの関係。

だっってお互い名前だっつて、学校だっつて何一つ知らないのだから。彼から否定的な言葉を聞くのが怖かったんだ。

否定的っつていっても事実なのだから仕方がない。

私と彼の関係。

私からすれば

姿を見るだけで、キーンと胸が疼く

好きになってしまった人

でも彼からすれば？

只の顔見知り。

たった一度だけちょっと話をしただけの顔見知り。

自分で考えて虚しくなってくる。

背中からお腹のほうから得たいのしれない何かが蠢いてきているような気持ち悪さがこみ上げてくる。

これは嫉妬という感情なのだろうか

仲よさそうに彼の腕に自分の腕を絡ませる彼女

それを払うことなくいつものように本を読む彼。

耳奥には彼女の可愛い彼を呼ぶ声。

全てが私の記憶から消えてしまえばいいのに

そう彼の事させへも

そうすればこんな気持ちになる事はなかったのだから
そうすればまたあの何も期待をもたない只の電車通学になるだけな
のだから

いつも間にかに唇をかみ締めていたようで
気がついたらほんのちよっぴり錆びた味がした。

思いは何処に2

彼女はきよろきよろ周りを見渡している。

自分が話しかけられたかどうかをみているのだろう。

小動物のように首を動かしたあたふたしてるみたいだった。

ここは笑いたいところだが、この前の一件がある。

しかし、この後なんて話掛ければいいんだ？

突然自己紹介から始めるのか？

そう思ったら、彼女が俺を真っ直ぐ見ていた。

俺ってこんな顔出来るんだ。

知らないうちに自分が微笑んでいるのが解った。

改めて彼女を近くで見ると顔色が悪そうだった。

「顔色悪いけど大丈夫？」

具合が悪かったから電車を降りたのかと納得してみる。

ほんの、ほんのちよっぴりだけど、もしかして俺に会いに？なんて考えたことは木っ端微塵に吹っ飛んだ。

無論そんなことはないって解っていたのだけれど。

君の名前は？って聞くのか

それより俺から名前を言うべきだよな

取り合えずこの前の携帯のお礼を言ってみた。

彼女はコクリと頷いた。

突然ふつてわいた偶然の再会。
やっぱり運命なのかなんて思っていたら

「圭吾っー電車行っちゃったじゃない」
と涼子がやってきてしまった。

なんでお前がくるんだよ。
彼女をみると具合が悪くなったのだろうか唇をかみ締めてじっとしている。

次の瞬間

「じゃあ」

と言って走り出した彼女。

一瞬何が起こっているか解らなかった。

咄嗟に

「待つて話があるんだ。」

と言つてはみたが彼女の足は止まる事がなかった。

慌てて後を追うも電車のドアが閉まった直後で

「また会いたいんだ。会つて話がついたんだ。」

と動き出す電車に向かって言つてみるもそれは無情で。

彼女が一瞬振り返つたが電車は行つてしまった。

最後に見た彼女の顔は悲しそうな顔だった。

また言いたい事も言えなかった。

「さっきの子知り合いなの」
振り向くと涼子が立っていた。

これ程までに他の誰かに嫌悪感を持ったことはあっただろうか？
自分がさっさと話しをしなかったことを棚に上げて涼子を怒鳴って
しまった。

「お前とはより戻す気はないっていったよな。もう俺に話掛けない
でくれ。二度と俺の前に来ないでくれ。」
八つ当たりだっていうのは重々承知だ。
でもどうすることも出来なかった。

涼子は目を見開き固まっていた。

「じめん。」

そう一言だけ涼子は言った。

そして

「あのこ、綾南の子でしょ？あの子と付き合ってるの？」
とても小さな声だった。

「綾南？」

「そう綾南。知らなかったの？付き合ってるんじゃないの？」

涼子の問いには答えず

「どうして解るんだ？」
と聞くと

「帯のループに校章が刺繍してあったから。」

と涼子は言った。

知りたかった情報を涼子から聞くなんてな。
少し落ち着いた俺は

「ごめん、言い過ぎた。でも俺本当にお前とどつこつなる気はないんだ。」

真っ直ぐ涼子の目を見て言った。

「そっかぁ結構自信あつただけだな。ここまで言われちゃしょうがないかもね。さっきは私の方こそごめん。嫉妬した。わざと」
そこまで言った涼子の言葉を遮った。

「もういいから。」
本当は良くなんかない。

今でもムツとしているのは確かだが、もっとちゃんと涼子に言っておくべきだったのは自分だから。

涼子の目から一粒涙が零れ落ちた。
別れるときだつて見せなかつた涙だ。

「あー本当に駄目なんだね。」
そういつて顔をぬつぐた涼子。

心の中でもう一度ごめんと言った
こんな俺を好きになってくれてありがとうと言う気持ちも込めて。

その後から来た電車で涼子を見送ると学校に行く気も失せ、また来た道に戻る事にした。

思い起こすのあの彼女の悲しそうな顔ばかり。

知らぬうちにため息の数も増えていく
でも1つ収穫あった。

高校がわかったからにはなんとしても彼女を見つけなくては
もしかしたら既に彼氏がいるかもしれない
でもそんなことは関係なかった。

俺は彼女が好きなんだ。

彼女が好きになってしまったんだ。
自分には恋愛感情が欠落していると思っていたのはつい最近なのに
それが思い出せないほど彼女のことばかり考えている自分がいた。

友情

「ただいま」

どうにか家まで辿り着いた。

「どうしたの」

怪訝そうな顔で私の顔を覗き込むお母さん。

「電車で香水のきついおばさんにやられて……ちょっと横になるね。」

それだけ言って自分の部屋へ。

嘘はついてないからね

引き出しから缶コーヒーを取り出した

彼からもらった缶コーヒー

これを貰ったのはそんな遠い日でもないのにな。

ポケットから携帯を取り出しそつと開いた。

見ないようになっている履歴と電話帳。

消してしまおう、ボタンを押せばたったそれだけで消去完了なのだから

「眼鏡君」

そう名前を入れていた

何回か間違い電話を装ってかけてみようかな、なんて考えたこともあるけど、やっぱり出来なくて。

ボタンを押して、コーヒーを飲んで彼との繋がりを絶ってしまおう。

そうは思っただけど、指が言う事をきかなくて。

その時急に携帯が震えた
桜からのメールだった

「どうした？」

一言だけそう書かれていた。
私は携帯に向かつて

「いろいろあつたよ」
って呟いた。

けいこって呼ばれていたな
この期に及んで彼の事考えてしまうなんて

携帯と睨めっこしながら桜への返信をどうしようか迷っていた。

結局

「気分が悪くて」
とだけ送った。

理由は書かなかった、というか書けなかった。
言葉にすると何だか残酷だから。

お母さんは何か察してくれたのか私に何も言わずそっとしておいて
くれた。

お姉ちゃんは部屋に来ておばさんの香水について熱く語っていた
けどね。

お姉ちゃんが笑わせてくれたお陰でほんのちよっぴりだけど元気が
出てきたのだけど、その晩は目を瞑ると彼と彼女の顔が浮かんでし

まっつて中々寝付けなかった。

ベットに入る頃は蒸し暑かったので窓を開けていたのだけど、私が寝付いた頃から冷たい空気になってきたようで、翌朝起きると声が全く出なかった。

どうやら風邪を引いてしまったらしく、微熱だけど熱もあった。

ちょうど良かったのかもしれない。

まだ電車には乗りたくなかったから。

「学校休んだのだから、病院行ってこよう。じゃないと明日、今より酷くなってるかもよ」

とお母さんは言ったのだけど、できればこのまま週末になって欲しいと願う私はお母さんの話に首を振った。

「しょうがないわね、じゃあおとなしくしてなさい。」
そういうお母さんに今度は縦に首を振った。

結局私は始めのサボりを加えると3日も休んでしまった。
後1日で週末だ。

その頃になると私の願いも虚しく風邪もすっかり良くなってしまっ
て、ほんのちよっぴりの掠れた声だけになっていた。

その日の夕方、桜が家にやってきた。

「どう？良くなった？」

そういつて3日分のノートをコピーしたものを手渡してくれた。

「ありがとう」

そういうとにこっと桜は微笑んだ。

暫く私が休んでいた間のクラスの様子などを話していたのだけど

「大丈夫そうだね。それより休んだ理由風邪だけじゃないんでしょ。」

突然話題が違う方向へ。

「風邪だよ」

動揺して小さくなってしまった私の声。

突然桜が立ち上がり机の前に。

そして、出しっぱなしにしてあったあの缶コーヒーを手に取った。

「丁度良かった、喉渴いてたんだよね。これ貰っていい?」

そういつてプルタブに指を引っ掛けようとした。

「駄目!」

大きな声を出して桜から奪い返し、ぎゅっと缶コーヒーを胸に抱きしめた。

飲んで捨ててしまおうって思っていたのに、やっぱりそんなことは出来なくて、思わず必死になって奪い返した自分にはっとする。

「そんなに大事?」

桜が私を真っ直ぐにみつめていた。

「大事だよ。」

桜の問いに答えながら不覚にもうるうるっときてしまった。

「溜まっている事言っごらん。苦しいんですよ。」
そういつて私にハンカチを渡す桜。

この3日部屋に閉じこもりながらずっと考えていた。

目を瞑れば浮かんでくる彼と彼女の姿。

でも最後に浮かんでくるのは、あの駅でみた零れんばかりの彼の笑顔だった。

桜に聞いてもらって慰めてもらって。

そう思っ桜に駅での事を話して聞かせた。

黙っ聞いていた桜は私の話が終わると、大きなため息をつき

「あんた馬鹿？」

と言った。

私は優しい言葉をかけてくれるとばかり思っていたので正直面食らった。

馬鹿って。

そりゃあ馬鹿かもしれないけど……

思わず唇を噛んで下を向いてしまった。

「話かけてくれたんでしょ、話があるっ言ったんでしょ。どうして聞かないかなあ。それにまだ彼女って決まったわけじゃないですよ。逃げてどうすんのよ。」

言葉とは裏腹に桜は私の背中を撫でながら、私の顔を覗きこむ。

「だって、さっきもいったじゃない。あんな可愛い彼女の前で私の事知らない奴呼ばわれされたら私、私立ち直れないっ……」
堰をきったように溢れてくる涙。

「だから、馬鹿だつていうの。知らない奴にわざわざホームを駆け上げてまで話掛けないでしょ。彼の言う通りあんたに話があるから追いかけてくれたんじゃないの？どうしてそう考えられないかなあ。それにこのまま忘れられるの？もしもう会わないって思ってるんだつたら最後まで頑張って告ればいいじゃん。それで駄目だったら電車を変えるなり車両をずらすなりできるでしょ。」

桜の言う事は尤もだよ。

でもそれをして彼に振られてしまう事を考えるとどうしても出来ない。

決定打をだされたくないから。

「今の郁は慰めてあげない。だつて逃げてるだけで何にもしてないから。でも、ちゃんと彼と話が出来たらいくらでも慰めるし、付き合つてあげる。中途半端な気持ちのままじゃ前に進めないよ。」

自分がこんないじいじしてる奴だと初めて思い知らされた。その後も桜はしつこく私に攻め寄る。

「出来ない」

「するの」

私と桜の攻防が続いた。私はやけになつてきて

「解つたよ、すればいいんですよ。」
「と思わず言つてしまった。」

すると出たよ、あの桜のニヤケ顔。

またやっちゃった?! どうも桜には勝てないらしい。

大きな声を出して桜と言いつたおかげなのか少しだけ前向きになった自分がいた。

友情 2

綾南かあ

ここから2駅先の高校だった。

そこは地元から通う奴も多くて、結構大きな高校だった。

「よう圭吾、今日久々にゲーセン寄って行こうぜ。あんまり思いつめた顔してつと、彼女にひかれちゃうぞ。」

冗談とも本気とも取れる言葉だ。

「悪い、やっぱパスする。俺、今日帰るから。」

そういつてカバンを手に取った。

「おい、6限お前の好きな日本史じゃん。いいのかよー」

後ろで真治の声がしたが、片手をあげ後は宜しくとばかりに教室を出た。

途中職員室に寄って早退届けを出した。

普段から真面目に授業を出ている俺は何の疑いももたれずに学校を出ることが出来た。

いつもよりまだ早い電車の中。

座席も疎らで、ちょっとした時間の差でこんなに風景が違う物なのかと思ってしまう。

それは、これから起こす行動のせいなのかもしれないが。

自分の駅を通りすぎた。

ここから先は最近来ていない。

電車に乗っていてもいつも本を読むばかりだったので周りを見渡すこともしないし、何も考えたことはなかったのだが、ここから毎日彼女が通っているところなのだと思うと感慨深いものがあつたりする。

こんな風に一緒に通うことができたならいいのにと。

綾南高校は大体の場所は知っていた。

高校受験をする時に一応選択肢に入っていたからだ。

一步一步近づくと彼女の高校。

段々と緊張してくるのが解った。

校門の前に着いたときは丁度放課後になったところのようだった。

早退しなかったら間に合わなかっただろう、幸先の良いスタートだ。

近くのガードレールに寄りかかって出てくる生徒を見る。

一人一人、彼女を見落とさないように。

そのうち同じ中学だった奴も出てきて話掛けたりされたのだが俺にとっては邪魔でしかなく、何人のやつにごめんといいたのだろう。

中には誰か捜しているのだったら呼んでやるよと言ってくれた奴もいるのだが、丁寧に断った。

自分で見つけないとそればかり考えていたから。

1時間ほど待った頃にふと思う、部活をやっているのかもしれないと。

自分の中では今日こそは、の思いもあるので時間は全く気にならなかったのだが、

もし彼女が彼と一緒にでてきたら。

俺の話を聞いてくれるのだろうかと今更ながらに考えた。
無論、俺は気にしないのだが、彼女のほうはどうなんだろう。

ここにきて、マイナス思考に囚われた。

すると突然目の前に影が出来た。

「またね会えたね。」

そう微笑むのはあの電車で見髪長い彼女だった。

俺は怪訝そうな顔をしたらしく彼女は

「そんな顔していると運も逃げていくよ。」

とニヤリと笑った。そして

「待っても無駄だよ。彼女今日休みだから。」

と言った。

俺は何が何だか解らなかった。

誰なんだこいつは、どうして彼女を待ってるって解るんだ？

彼女を見上げると、俺の隣に腰掛け俺に話しかけてきた。

「電車で会う女の子に会いに来たんでしょ。そうねえ背丈は私と同じ位、髪はショートボブのストレート。それに大きくなりっとした目をした女の子を。」

俺は思わず立ち上がってしまった。

「いいね、その反応。少し話をしようよ、大丈夫私彼女の友達だから。」

そういつて俺の返事を待たずに自転車を押し歩きだす彼女。真治の女版って感じだった。

まだまばらに校門から出てくる人を見ながら迷いもあったのだが、この不思議な女についていくことにした。

連れていかれたのは、細い路地裏にある喫茶店。

そこで俺は彼女に質問攻めにされた。

にも関わらず、俺の一番気になる彼女に関しては全く教えてくれなかった。

俺の名前や携帯の番号まで聞いたのにだぞ。

おまけに彼女が食べたケーキまで奢らせられて。帰り際

「大丈夫、私に任せて。そうね3日頂戴、それまではちょっと待ってて。絶対悪いようにはしないから」
と言ってさっさと自転車に乗って帰ってしまった。

狐につままれたって言うのはこの事なのだろうか。
でも不思議と、本当に不思議なんだが悪い気は全くしなかった。

自分で捜すと意気込んでいたにも関わらず、彼女のペースに巻き込まれてしまった。

3日か。

今までの期間よりずっと短いその時間。

彼女に一番近い友達だといっていた。

何もしないで待つのは不本意だが、高校名がわかった今、3日だけ

彼女を信じて待ってみようと思ったのだった。

覚悟を決めて

「だから、早く貸しなさいって。」

「貸さないって。」

さっきから、桜と私の携帯を貸す貸さないでいつたりきたり。

とうとう痺れを切らした桜が実力行使にでた。

「大丈夫だから、任せなつて。」

任せなつて言われても。

さっきは思わず”解つた”と言ってしまったけれど、正直まだ迷っている私の気持ちを無視して、携帯を取り上げられた。

手早く履歴を出し、ボ・ボタンを押してしまった。

そう、画面には

「眼鏡君」

の文字。

本当に押しちゃったよー。

「善は急げつていうからね」

とあの危険な笑みをして桜は私に携帯を差し出した。
やっぱり私が出るんだよね。

覚悟を決め耳に当てる。

数回のコールの後、眼鏡君もといけいご君のお母さんだろうか、女性の声が聞こえた。

「もしもし」

私の緊張は深まるばかり、やっとの事で声をだした。

「私、佐伯と申します。けいご君いらっしやいますか？」
すると

「圭吾ね、いるわよ。ちょっと待っててね。」

そういつて彼を呼ぶ声が聞こえた。
遠いところにいるのか大きな声だった。

どうしよう、どうしよう。

心臓がこれ以上ないって位動きだした。
隣にいる桜に聞こえるんじゃないかって思う程。

電話の向こうでは

「ごめんね、待たせちゃって」
と優しく響く女性の声

「いいえ、突然電話したのは私の方ですから。」
そう、私にとっても本当に突然なのだから。

このまま切りたくなってくる衝動にかられる。
まだ大丈夫、だって佐伯っていつても彼は知らないのだからなどと

思っている

いつの間にやら彼に受話器が渡ったようで

「……切るよ。」

と聞こえた。

反射的に

「待ってください。」

と言うものの何を話せばいいのだろう。

すると

「佐伯さんつてもしかして、電車の？携帯を貸してくれたあの？」
彼の声が途中で止まった。

怪しい人だと思われた？

ストーカーだなんて思われてないよね。

一瞬のうちに不安が駆け巡る。

「本当に、本当に君なの？」

低く響く彼の声

「はい」

それしか言葉が出なかった。

「嬉しい。」

嬉しい？今嬉しいっていった？

隣の桜をみるとニヤッと笑って親指を突き上げた。

「それで」
私がいかけると

「今何処にいるの？これから時間ある？」
矢継ぎ早に彼から発せられた言葉を理解するのに私の頭は追いつかない。

暫しの無言の後

「今は家にいます。時間もありません。」
彼の質問にだけ答えた。

「会いたい。君に会って話したい。駄目かな？」
遠慮がちに聞く彼。

「私も、私も貴方と話しがたくて。」

そこまで言うのが精一杯。

「今から行くから、教えて何処まで行けばいいか。佐伯さん。」

佐伯さんと彼が言った。

私の名前を彼が呼んでくれた。

暫しの呆然。

すると、桜に肘で突付かれた。
はっとして我にかえる。

何処ってここまで来てくれるの？
そう思ったのだけど

「じゃあ、あの駅まできてくれませんか？コーヒーを買ってくれた

あの駅に。」

彼からだけではなく、私も彼に会いに行きたかった。

「解った。直ぐに行くから、待ってるから。」

「はい。」

そういつて思わず携帯を切ってしまった。
あまりの展開に自分でもびっくりだった。
期待していいんだよね。

桜を見ると

「良かったじゃん」

と満足気に微笑んでいる。

「それより、早くした方がいいんじゃない？あんまり待たせすぎるのもどうかと思うよ。」
と立ち上がる。

「私駅前の本屋に寄って帰るから、駅までね。大丈夫頑張れ」
って背中を押してくれた。

「うん」

ここまでできたら行くしかないから。
例え玉砕しても、もう1度だけでも彼と話せるならそれでいいかもしれない。

クローゼットからお気に入りのワンピースを出し、袖を通した。
鏡の前に立ち

よしっ！

っと気合を入れた。

桜が

「よしっ！ってなに？」

と笑ってる。

気持ちもほぐれて桜と2人玄関をでた。

今からこんなに心臓がドキドキしっちゃって。

きつとこれ以上早く動いたら、このままドキドキが続いたら私の心臓壊れちゃうんじゃないかと思ってしまった。

覚悟を決めて2

「圭吾ーっ。電話よ」

母さんが下から叫んでいる。

家の電話にかけてくる奴なんてどうせろくな奴じゃないっつもの。仲いい奴はみんな携帯に掛けてくるからな。

面倒くさいと思いつつベットから身体を引き上げた。

「ちよっと、早くしなさいよ。待ってるんだから。」

俺にそういうと母さんは電話の相手に

「ごめんね、待たせちゃって。」

なんて言っている。

誰だ？

階段を下りながら聞こえてくる会話。

中学の同級生か？

「はい、佐伯さんよ。」

そう言っつて受話器を渡されるも、佐伯なんて知らないぞ。

俺はぶっきり棒に

「はい」

とだけ答えた。

無言だった。

いたずら電話か？

「あのー用がないんだったら切るから。」
そう言つと

「待ってもらえますか？」

受話器の向こうからは女の子の声でした。

もしかして！

似ている、あの子の声に。

でも、彼女がうちの電話番号を知っているはずがない。

あの彼女にだって俺の携帯しか教えてないのだから。

でも、間違えるはずがない、ほんの少しだけ掠れているようだけど
彼女の声だ。

一瞬のうちに緊張が高まった。

「佐伯さんってもしかして、電車の？」

そこまで言つと、電話の向こうで息を呑んだのが解つた。

緊張のあまり言葉が続かない。

気持ちだけが焦ってしまふ。

本当に？本当に？

そして、彼女は

「はい」

と短く返事をしてくれた。

思わず顔が、唇の端が上がってしまふ。

これ以上ないって位心臓が大きく跳ね上がっている。

俺は心の中で思ったことを口に出してしまった。

「嬉しい」

あっと思った時にはもう遅い。

かっこ悪いだろ俺。

嬉しいって、なんか他に言う事あるだろうに。

きつと頭の中がパニック起こしているからなんだろう。

すると遠慮がちに受話器から声が聞こえた。

「それで。」

一瞬のうちに不安が過ぎった。

もしかして彼女は、佐伯さんは、この前の友達だという彼女に言われて無理に電話を掛けてきたのかもしれない。もう学校に来るのは止めてくださいなんて言われたらどうすればいいんだ？

佐伯さんの言葉を遮ってしまった。

勝負にでた。

「今、何処にいるの？時間ある？」

何としても佐伯さんに会いたい。

会って話が見たいんだ。

やっぱり退いてしまったのだろうか？

急すぎたのかもしれない。

彼女の言葉を遮ってしまったのは失敗だったのか？

受話器に集中しているのだろう、普段だったら聞こえるはずの周りの物音は一切耳に入ってこなかった。

すると、少し小さな声だがはっきり聞こえた。

「今は、家にいます。時間もありません。」

落ち着けと思ってもそうはいかない。

逸る俺はストレートに

「会いたい、君に会って話したい、駄目かな？」

断られるかもしれないと不安を胸に思ったことを告げていた。
すると今度は間をおかず

「私も、私も貴方に会って話したい。」

と言ってくれた。

期待していいのだろうか？

「今から行くから、何処に行けばいいか教えて？佐伯さん。」
初めて彼女の名前を呼んでしまった。
君に会えるなら何処にでも行くから。

彼女は

「じゃあ、あの駅まで来てもらえませんか？コーヒーを買ってもらったあの駅に。」
と言った。

「解った、直ぐに行くから、待ってるから佐伯さん。」

その駅までは1駅。

俺の方が早く着くだろう。
でももし、俺がまだきていなくても待っていて欲しい。

「はい。」
と返事が聞こえた。

”はい”って言うてくれたよな。
完全に俺の頭はショートしたようで、いつの間にか電話は切れていた。

夢じゃないよな。

そう思ってみるけど、俺の手にはしっかり受話器が握られていて。

はっと、気がつく。

テーブルに肘を付き、満面の笑みで手を振る母さん。
浮かれすぎて忘れていた、母さんの存在を。

俺すつごく恥ずかしくないか?!

恥ずかしいだろ!

暫くまともに母さんの顔はみれないと思った。
母さんは

「急いだ方がいいんじゃない?」
と。

そうだよな、全部聞かれちゃってるよな。
顔が赤くなっただのが解った。

一生言われ続けるかも。
そんなことを思ってしまった。

その後は慌てて自分の部屋に行き着替えを探す。
着ていく洋服を考える事なんて今まで一度もなかった。
ジーンズを穿き、上に羽織るものと……
確か兄貴の部屋にあれがあったよな。

今は大学にいつている兄貴。

内緒で借りてしまおう。

悪いと思いつつそつとクローゼットを開け目当てのシャツを取り出した。

そして、財布とスイカを確認して部屋を出た。

母さんとは目をあわさないように、そつと玄関へと向かったのだが。

「頑張つてね、圭吾。」

と言われてしまった。

顔を上げずに、

「いつてきます」

と一言いい、駅への道を急いだ。

待ち合わせ

「じゃあ、頑張っておいで」と手を振って去っていく桜。

そんなにあっさりと行かれてしまうと。

まるで、また明日ねと学校で別れるみたいな感じで。

これから、私の一大事だつていうのに、喉けた本人は気にも留めていないようだよ。

こんな時は最後まで見届けるものじゃないの？

振られちゃったら、私一人で電車に乗って帰れるだろうか？

ここまできても、まだ不安が拭えないでいる。

いつもように、改札をくぐり駅のホームに立った。

大きく深呼吸して少しでも落ち着くように頑張ってみるものの、ドキドキは治まってくれない。

洋服大丈夫だね。

髪の毛はねてないよね。

何度も鏡でチェックしたのに気になってしまう。

とうとう電車がきてしまった。

電車をのるだけなのに、こんなに緊張したことはあつただろうか？高校受験だつてこんなに緊張しなかったと思うよ。

彼に会いたい気持ちと逃げてしまいたい気持ちと。

待ち合わせの駅が近づけば近づくほど、こころ胸がキューっとなるっというか、なんていうか倒れそうになったりして。

まるで、電車の中に私だけしかいないみたいに、周りの人も見えなくて、音も聞こえなかった。唯一聞こえるのは未だに落ち着かない胸の鼓動だけ。

そして、とうとう駅に着いてしまった。

一歩ホームへと足を踏み出す。

「頑張れ私。」
気がついたらそう言っていた。

目の前にはこの前コーヒーを買ってもらった自動販売機。
財布からお金を取り出し、毎日眺めているそれを2つ買った。

ゴトリと音を出し、落ちてくる缶コーヒー。
しっかりと両手で抱えて、改札をでる。

不安な気持ちで前を見るとそこには壁にもたれる彼がいた。
あの笑顔で私を迎えてくれた。

ま・眩しい

いつもは学生服しか見たことのなかった彼。
すらーっとした背にジーンズが良く似合う。
合わせて羽織っているシャツも。

まるでモデルのように壁に寄りかかっている彼に前を通り過ぎていく女の人が振り返っている。
そんな彼が私を待っていてくれるなんて夢じゃないよね。

改めて彼を見ると、彼の手には私と同じ缶コーヒー。

思わず顔を見合わせて笑ってしまった。
そして、彼が私に近寄り

「良かった来てくれて。俺、浅野圭吾。」
と。

「私、佐伯郁って言います。」

緊張がピークに達したせいなのか、私の声は凄く大きくて、周りの
何人かが何事か？と振り向くほどだった。

最悪だよ。

只でさえ赤かったらろう私の顔はこれ以上ないって位赤くなっていた
と思う。

耳の裏まで熱くなったのが解ったから。
恥ずかしくて、来た道を戻りたかった。
もう1度やり直したいよ。

そんな私を気遣ってくれてか、彼は
「ここじゃなんだから、移動しない。」
と言ってくれた。

彼の言葉に頷いた。

彼は小声で何処にいけばいいんだ？電車に乗って移動した方がいい
のか？

なんて呟いていた。
きつと独り言を言っているとは気がついていないようだった。
そんな彼を見て少しだけ、緊張がとれたみたいで。

「じゃあ、この先に公園があるのでそこにいきませんか？」
と言ってしまった。

この前お姉ちゃんと待ち合わせた公園。

「そうだね。」

と言って、くるりと向きを変え2人で並んで歩いた。

私の隣に彼が並んで歩いている。

もうそれだけでおかしくなりそうだった。

それなのに、時折コーヒーを持った手がぶつかって。

また心臓が飛び出すんじゃないかって思ってしまった。

私だけがドキドキしてるんだろうな。

ちらつと横目で彼を見上げるも、彼は前を向いたままでその表情はよく見えなかった。

何から話せばいいのかな。

公園までの道のりを1歩1歩踏みしめながら歩いていった。

待ち合わせ2

逸る気持ちを抑えられない。

いつもより自然と速くなってしまう駅への道。

彼女との待ち合わせは、ここから1つ先の駅だった。

そうあの缶コーヒーを買った駅。

その日のことを考えていると、突然携帯がなった。

見ると、見覚えのない番号。

無視してしまおう、そう思ったのだが癖なのか思わずボタンを押してしまつて。

「出るのが遅い」

俺より先に声がした。

忘れもしない、この前の彼女だった。

機嫌の悪そうな声にまたまた思わず

「悪い」

と謝ってしまう俺。

言った後に何で謝ってるのだから疑問に思ったのだが、次の彼女の一言でそんなことは吹っ飛んだ。

「嬉しそうな顔して、今駅に行つたよ」と。

嬉しそうな顔してた。

その言葉が頭を駆け巡る。

「本当に？」

と聞き返した。

まさか嘘ですなんていわないだろうけど。
すると彼女は俺の問いには答えず

「私の大事な友達だから、泣かせたら承知しないから。無言電話毎
晩かけてやるから。」

と笑い声を交えながらそう言った。

「俺が泣かされたりして。」

どうしてこんなことを言ってしまったのかは解らない。
言った瞬間に後悔していた。

案の定彼女は大笑いしながら

「クールな顔してるのに、あんたも天然なんだね〜まあ兎に角、後
は自分で頑張りなよ。」

最後の言葉は笑い声ではなく、真剣味のある少し低い声だった。

「ああ、やるだけやってみる」

そう言った俺の言葉に安心したのか

「じゃあまたね」

と電話が切れた。

俺としてはあまり会いたくないのだけけれど。

自転車を駐輪場に止め、電車を待った。

5分後にはあの駅に着く。

今度こそ自己紹介をしなくては、そして彼女の名前を。
これ以上のすれ違いはごめんだ。

いろいろな事を考えていて気がついたら電車に乗っていた。そしてあつという間に目的の駅に。危うく乗り過ぎすところだった、洒落にならない。

ホームに降りると一番初めに目についた自動販売機。

ここからやり直した。

そう思ってあの日と同じコーヒーを2つ買い小脇に抱え改札を出た。

彼女はまだ来ていないようだ。

向いの壁に寄りかかって真っ直ぐに前を向く。

来ないってことはないよな。

さつき駅に行つたつて言つてたよな。

期待と不安が入り混じり変な汗が出てきた。

どれ位経つただろうか？アナウンスが入り電車がホームへ到着した事を告げる。

一人二人と階段を上がってくる。

この電車に乗っているとは限らないが、よく目を凝らし前を見つめる。

この電車には乗っていないなかつたのだろうか、段々階段を上がってくる人も疎らになったその時に、視線を少し下に向けた彼女が現れた。

ベージュを基調とした小さな花柄のワンピースを着ていた。

制服しか見たことのない彼女はいつもより少しだけ雰囲気違って、俺の心臓は加速する。

改札を出た彼女は顔を上げ 目が合った。

彼女の手にもコーヒーが。

彼女も俺の手に気がついたらしい。
顔を見合わせて、笑っていた。

彼女に近寄り

「良かった来てくれて、俺、浅野圭吾。」

彼女を待つ間、なんて言おうかと考えていたのに、結局口からでたのは”良かった来てくれて”って。まあ名前を言えたから良かったのか？

「私、佐伯郁って言います。」

彼女も緊張してくれているのか、それはそれは大きな声で。

やっぱり良いよな。なんて俺は思っていたのに、彼女はとても複雑そうな顔をしていた。

そんな顔しないで、そんな君だから好きになったのだから。

いつまでも、ここに居るわけにはいかないだろう。

何処か場所を変えようと言ってみたのだが何処へ行けばいいんだ？
電車に乗って移動するのか？何処に行けば？

真治だったら得意そうだよな、駄目だな俺って。

そう考えていたら佐伯さんが公園へ行こうと言ってくれた。

そうして今2人並んで歩いている。

俺の隣に彼女が。

こんな風にずっと隣にいてくれたらいいのにと彼女がいるのに話もせず、そればかり考えていた。

時折コーヒーを持った手が触れた。

その度にトクンと鼓動が跳ね上がる。

他の子とは手だって繋いだ事もある、それ以上だって……

今の俺は小学生か！って位に1つ1つの出来事に反応してしまつ。
思わずにやけてしまいそんな顔をぐつと堪え公園への道を歩いた。

これからも

前を向いて歩けない。

きつと私の顔は真っ赤だから。

視線の先には浅野君の足と私の足。

そして、コーヒーマグを持った2人の手。

私と彼の身長差があるように足の長さも違うわけで、それなのに同じように歩けるのは彼が歩調をあわせてくれるからなんだろう。そんな些細な事だって私にはドキドキの要素だったりする。

「ここかな？」

突然の彼の声。

もう公園に着いていた、着いたっていつても駅からほんの少ししか離れていないから、たかが2、3分のところなんだけど。

「うん。」

そういつて大きなケヤキの木の下にあるベンチに向かった。

もうすぐそこに迫る夏の気配を感じて、夕方近くだというのにまだ強い日差し。

ベンチの下はケヤキに包まれ心地よい空間を作り、穏やかな風が私の頬を撫でていく。

ほんの少しだけ、私の赤くなった顔を冷ますように。

でもそれは一瞬の事で、直ぐ隣から発せられる彼の声に反応してあつという間に沸騰状態。

「佐伯さんって、この辺良く来るの？」

彼の声は私の心臓に良くないみたい。
なんてことない問いにだってドキドキする。
こんな至近距離で普通に会話が続けるのかちょっと心配、耐えられる？私の心臓。
自分を落ち着かせるように息を整えて。

「2回目です、この前電車が止まった時にこの駅で降りたのが初めてで、その時の姉との待ち合わせ場所だったんです。姉は近くに友人がいるみたいでここでよく待ち合わせをしていたらしくて」
緊張しながらも一気に捲し立て、ベンチの横に置いたコーヒーを持ち上げた。

あの時の思い出のコーヒー。

彼は納得したように頷くと

「そっか、あの時ここに……」
と小さな声で呟いた。

そしてまた無言が続く。

私は手に取ったコーヒーを彼の前に差し出して
「飲みませんか？」
と言ってみた。

浅野君は

「ああ、ありがとう。」
と言ってコーヒーを受け取ってくれた。
良く考えると彼も同じものを持っているのに。
すると彼は

「はい」

とにつこり笑って彼の買った方のコーヒーを差し出してくれた。
そんな気遣いが嬉しい。

「同じ事考えていたみたいだね。」
彼はプルタブに指をかけ、ゴクリと喉をならした。
美味しいと言葉を添えて。

私は彼に見えないように缶を持ち変えると彼と同じようにプルタブに指を引っ掛けてコーヒーを一口飲んだ。
味は……よく解らなかった。
ただ緊張していてカラカラだった喉を少し潤わせてくれて、思わずもう一口二口。
そして

ふーっと一息ついてしまった。

すると横から感じる視線。
恐る恐る横目でチラッと彼を見ると、慌てて視線を逸らすのが解った。

私、またやっちゃった?!

彼はあの時のように肩を揺らして笑っていた。

私は居た堪れなくなつて手で顔を覆ってみるも。

そんな私に気がついたようで彼はあの声で

「ごめん。」
と一言。

私はまだ恥ずかしさが引けなくて手で顔を覆ったまま

「いえ……」

とだけ言ってみた。

いえ、とは言ったものの別に謝られることは何もしていないのに、私の方が呆れられたかも。

そう思ったのにかえってきた言葉は意外なものだった。

「やっぱり、いいんだ。そんな佐伯さんが。そんな佐伯さんだから俺……」

いい？そんな私だから？

いつかのように彼の言葉を待つ。

すると浅野君は突然立ち上がって私の真正面に。

な・何が起こるっていうの？

私はベンチに座ったまま浅野君を見上げた。

これでいいんだよね、私も立った方がいいの？

そんな事を考えていたら、浅野君は1つ大きく息を吸い

「好きなんだ。どうしようもなく。佐伯さんの事が気になって気になつて、こんな何も知らない奴に言われて戸惑うのは承知だけど、考えてくれないか？俺の事。」

頭の中はハレーション。

整理を試してみる

好きなんだって言った？私を？

思わず周りを見渡してしまつ。

誰もいなかった。

考えてくれないか俺の事？

いつも考えてます。浅野君が思う以上に。

もしかして、期待していいの？

私に言ったんだよね。

もう一度浅野君を見上げると、顔こそそんなでもないものの、耳は真っ赤に染まっていた。

そして、真っ直ぐ私を見ている。

私は、気がついたらベンチから立ち上がっていた。

落ち着け落ち着け、そう思っても口の中は再びカラカラになっていて。

コーヒーを手に持ちもう一度コクリと飲んでみた。

頑張れ私。

そして、浅野君と同じ様に息を吸い込むと

「私も、ずっと見てました。いつの間にか浅野君の事ばかり考えている自分がいました。私の方こそ宜しくお願いします。」

きっと私の心臓の音は彼に聞こえていると思う。

言っちゃった。

言っちゃったよとうとう。

浅野君はというと

口を少しあけた状態で固まっていた。

「浅野君？」

心配になって彼の名前を呼ぶと、彼は手の甲を口に当て後ろを向いてしまった。

私はどうしていいのか解らずその場に立ち尽くしていた。時間にしたら何秒って位なんだけど、その時間は私にとってとても長く感じるもので。

勢いで言ってしまったものの果たして良かったのだろうか？もしかして、ドッキリ？！

木の影から人が出てきて、ネタばらしなんて事ある訳ないよね。頭の中の妄想が膨らんでいった。

「……いいんだよね。」
はっと気がつくとき浅野君は私の顔を覗きこんでいた。

「えっ」
トリップして聞いていなかった。

私は真っ直ぐに私を見る浅野君の視線に耐え切れず下を向いてしまった。

浅野君は小さな声で囁いた。

「俺、期待していいんだよね。それって友達としてじゃなく……付き合ってくれるってとつてもいいんだよね。」
不安気な表情で見つめられて、どうしてそんな顔をするの？

私は顔を上げ浅野君の顔を見ながら

「私でいいの？」
本当は”はい”って言ったかったけど、口が勝手に動いていた。

浅野君、今度は直ぐに返事をくれた

「佐伯さんがいいんだ。佐伯さんじゃなくちゃ。」
そういつて一度空に向けた視線をゆっくりと私に。

私は今度こそ、大きく頷きながら

「はい。私で良かったら、宜しく願います。」

嬉しくって笑いたいののに、何だか、何かが胸の奥からこみあがってきて思わず涙がでそうになるのを必死で堪えて空を見上げた。

もう大丈夫かなと思い前を見ると、まだ早かったみたいで右目からポロつと涙が零れてしまった。

次の瞬間、頭の上から降ってくる浅野君の声。

「俺も泣きそう。」
と。

え、ええー。いつの間にか私は浅野君の胸の中にいたようでパニックになった。

「浅野君？」

恐る恐る声を出すと。

浅野君はパツと私から離れ、

「ごめん、嬉しくってつい……」

浅野君は今度は耳だけでなく、顔も真っ赤までとはいかないが、赤くなっていた。

勿論、私はそれ以上赤い訳で。

夕日に照らされていたのもあるかもしれないけど、それはほんのちよつとの事。

これが私達の始まりだった。

これからも（後書き）

こんにちは

ここまで読んで下さってありがとうございます。

お話ですが、次の圭吾の視点で最終回となります。

桜や大山の話など番外編を書いてみようかなどと思ったりしていますが果たして読んでみたいと思う人がいてくれるのか？

早めにUPするつもりですので後1話お付き合い頂ければ幸いです^^

では失礼します！

これからも2

「佐伯郁っていいいます。」

ビツクリするような大きな声だった。

笑いそうになるのを必死で我慢する。

くるくる変わるその表情。

今は目を見開いたかと思うと、恥ずかしそうに視線を下に向け

そんな1つ1つのしぐさが可愛くて仕方がない。

こんな彼女の傍にいたい。

本気でそう思った。

隣に彼女が歩いている。

頭の前からつま先まで神経を集中して自分より少し小さい歩幅の彼女と歩調を合わせるように歩く。

そんなことに集中していて、会話は全く出てこない。

気の利いたこと1つ言えない俺って。

さつき階段から降りてくる時にちらつと見えた公園。

多分ここだろう。

駅のホームに面してその公園はあった。

通学途中、外を見ていたら目に入るはずの公園、電車の中は読書と決めていたからちっとも気がつかなかった。

ほんの2、3分歩くと目の前に公園の入り口。

「ここかな？」

「うん」

彼女が頷いた。

あつまた手が触れた。
そうになると、全身の神経が今度は手に移ったみたいに指先まで熱くなる。

にやけてしまいそんな顔を堪えるのは一苦労だ。
俺ってこんな奴だったろうか。

彼女は大きなケヤキの下のベンチに目を向け歩き出す。

実は緊張のあまり暑さも忘れていたようだ。

でもケヤキの下に入ると、駅からほんの少しの間に浴びていた日差しを遮ってくれ、とても心地良かった。

木洩れ日が彼女を照らして、着ているワンピースに影を作る。

それを見ただけでも、自然と微笑んでいる。

怪しい奴だと思われないように、必死になってみるもこんな近くにいる彼女。

どうやったって無理だった。

彼女、佐伯さんは良くここにくるのだろうか？

「佐伯さんはこの辺良く来るの？」

ここへきて初めてまともに会話を切り出した。

佐伯さんはこの前初めてきたと。

あの日だ。

この会話で1つ解った、お姉さんがいるって事。

そんな小さな事でも彼女を知って喜んでいる自分がいる。

「そっかあの時ここに。」

どつりで捜してもいなかったはずだ。

あんなに必死になって、ロータリーの周りを走ったのに、忘れていた悔しさを思い出す。

もしも、あの時と。

でも、今隣にいるのは紛れもないあの時の彼女、佐伯さんなのだから。

隣にいるのだから。

そうしてまた話せない。

そんな俺にみかねてか彼女がコーヒーを差し出してくれる。

俺も彼女にコーヒーを返した。

勿論自分が買った方を。

俺と同じ理由で買ってくれたのだろうか？

そう思いたかった。

コーヒーに手をかけ、一口飲んでみた。

それはいつもと変わらない味はずなのに、いつもより美味しく感じた。

きっとそれは隣にいる佐伯さんのせい。

彼女がいれば、どんな事だって嬉しく思えてしまうような気がした。

彼女はプルタブを空けると、コクリコクリと何口もコーヒーを飲んだ。

そんなに喉が渴いていたのだろうか。彼女は満足そうにコーヒーを飲み終え

ほっぺたを膨らましたと思ったら、ふーっと息を吐き出した。

その仕草が何ともいえなくって。どうしてなのか解らないが、何故かあの時のかえるになった彼女を思い出してしまって、笑いがこみ上げてくる。

この前の失態をすっかり忘れ、耐えられなくなった俺は後ろを向いて笑ってしまった。

そんな俺に気がついたのか、佐伯さんは何ともいえない顔をしていった。

まるで恥ずかしくて仕方がないように。

そして、手で顔を覆い下を向いてしまった。

「ごめん。」

そう謝る俺に佐伯さんは

「いえ……」

と、でもまだ手は顔に。

そんな顔をさせたいんじゃないのに。

ここでこの前の失態を思いだす。

これじゃああの時の繰り返しだ。

さつきとは違う緊張感。

本当はもっと話してからと思っていたのだけれど

この前の二の舞だけにはなりたくない。

そう決意した。

「やっぱり、いいなと思って。そんな佐伯だから、俺」

だけど、肝心の言葉が続かない。

自分を奮い立たせるように彼女の前に立った。
言え言うんだ。

自分で自分に発破を掛ける。

小さく息を吸い込み

そして、彼女を真っ直ぐ見据えて

「好きなんだ。どうしようもなく。佐伯さんの事が気になって気になって、こんな何も知らない奴に言われて戸惑うのは承知だけど、考えてくれないか？俺の事。」

緊張の一瞬。

彼女は何かを考えているようだった。

断りの言葉でも考えているのだろうか？

俺はロボットののように身体が硬くなるの感じた。

すると、彼女は突然立ち上がり俺の目の前に。

コーヒーをコクリと飲み小さく息を吸い込んだ。

「私も、ずっと見てました。いつの間にか浅野君の事ばかり考えている自分がいました。私の方こそ宜しくお願いします。」

断られるのかもという不安のせいだったのか、身構えていた俺の耳には素直に言葉が入ってこなくて。

「浅野君？」

俺の名前を呼ぶ彼女。

彼女の気持ちを知りたくて。

はつきり聞きたくて。

まさか、友達からって事は……ありえるかもしれない。

付き合うつって友達じゃなくて、佐伯さんの事彼女って思っていていいんだよね。

心の中で考えた事が口に出ていたようで佐伯さんは

えっ

と言った。

やっぱり俺の勘違いなのか？

もう一度聞いてみた。

「俺、期待していいんだよね。それって友達としてじゃなく……付
き合ってくれるってとつてもいいんだよね。」

不安を映し出すように小さな呟きともとれる声だった。

そんな俺の問いかけに佐伯さんは意外な答えを

「私でいいの？」

と真っ直ぐ俺をみてそう言った。

「佐伯さんがいいんだ、佐伯さんじゃなくちゃ。」

必死になって答える。

心を落ち着かせるように空を見上げ、佐伯さんの答えを待った。

「はい。私で良かったら、宜しくお願いします。」

佐伯さんはそういつて、一旦空を見上げこちらを向いた。

その時、涙が一粒零れ落ちた。

愛しい。

これがどこから湧いてくる感情なのかは解らないけれどそう思わずにはいられない。

そして頭で考えるよりも先に彼女、佐伯さんを抱きしめている自分がいた。

会う事さえも儘ならかった彼女を。

思わず

「俺も泣きそう。」

と口にしてしまった。

かつこ悪いだろ、いくらなんでも。

「浅野君？」

佐伯さんの声に我に返る。

思わず抱きしめてしまった腕を慌てて放した。

そしてまたかつこ悪い一言を

「ごめん、嬉しくってつい……」

きつと俺の顔は赤いに違いない。

まだ腕に残る彼女の感触。

これからは一緒にいられる。

只彼女を捜すだけの毎日が終わるんだ。

俺の前ではにかんで笑う彼女を見つめていた。

これからずっとこの笑顔を近くで見れる。

幸せな時間の始まりだった。

念願叶い電車通学になって早1年と数ヶ月。

ドラマのように隣に座って学校へ通う事はないけれど私にはとつても素敵な、とつても大事な人が出来ました。

毎朝の通学電車、彼の待つホームに着くちょっとした時間。私達は

「おはよう」

と声に出さない声を出す

私と彼の電車の行く先は反対方向だけど、きっと私達の想いは同じ方向へ向いていると信じてる。

ほんの1分にも満たない時間だけどそれは私達の大事な時間。

佐伯郁、毎日楽しい電車通学しています。

きっとこれからも。

これからも2（後書き）

最後までお読み下さってありがとうございました。

お互いに付き合う人は始めてではないけれど、友達とは違う、憧れとも違う初めて人を好きになる気持ちを書けたらいいなと思って書き始めた話です。

実は5話位の短編にしようと考えていたのですが欲張ってしまつてここまで引つ張つてしまいました。稚拙な文章故、読み辛かつたところや表現等、お見苦しい点もあつたかと思いますが最後まで読んで下さつた皆様に感謝しています。

そして、感想や評価を頂きまして本当に嬉しかったです。とても励まされました。

きつとこの2人

圭吾はツンデレぶりを発揮して、郁は天然ぶりを増して波乱もありつつ仲良くやっていくのではないかと思えます。

最後に中途半端に登場してしまつた桜や大山の話などを番外編として書くかもしれせん。その時はまたお越しいただけたら嬉しく思います。

では本当にありがとうございました。

失礼致します^^

番外編その1 圭吾の兄（前書き）

こんにちは

調子に乗って番外編を書いてみました！

始めは桜の登場予定だったので、リクエスト頂きました兄の登場です

読んで頂けたら嬉しいです^^

番外編その1 圭吾の兄

「ただいま」

玄関で声を掛けるも返事がなかった。

母さんいないのか？

そう思つてキッチンを覗くと、妙に機嫌が良さそうに鼻歌まじりで料理をしている母さんがいた。

作っているのはこれまた手の込んだビーフシチュー。

母さんのお得意の料理の一つだけどこれを作るときは何かの記念日やいいことがあつた時だ。

それにしても、今は夏だぜ。

このくそ暑いのに何でまたシチューなんだよ。
何があつたんだ？

母さんがやつと俺に気が付いて振り返つた。

「あら、優真帰つてたの？ただいまくらい言いなさいって」

口ではそんなことを言っているけどご機嫌なのは変わらないらしい。

「言つたよ、ちゃんと。それよりこれは何のご馳走なわけ？」

不機嫌さを出さず聞いてみた。

「それはね 内緒だよ」

ふふつと笑つ母さん。ちよつと恐いんですけど。

「そのうちに解るわよ」

そう言つとまた鍋をかき回し始めた。

また鼻歌の再開だ。

ちよつと音程のずれたその歌は確か……

青い三角何とか、一昔前いや三昔前の青春ドラマの主題歌だったらしい。

さっぱり意味が解らなかった。

自分の部屋に入りベットに寝転ぶ。

今日みたいに暑い日は冷やし中華が食べたかったんだけどなあ。

また外に出るのも面倒だし。

今更だな

汗を流しながら頂くことにしますか。

喉が渴いたのでアイスコーヒーでも飲もうかとキッチンへと。

いったい、いつから煮込んでたんだ？

すっかり料理を終えた母さんがちらちらと時計を見ていた。

”もしかして帰ってこないってことはないわよね。”

一人呟いていた。

「帰ってこないって？ 父さんが？」

聞いてみたら

「うおつ。優真か、驚かせないでよ。圭吾よ圭吾」

そう言ってまた時計をちらりと。

「圭吾がどうした？」

聞き返すと

何か考え込んだ後

「あーもう黙ってられない！　それがね今日女の子から電話があつてね」

思い出し笑いですか？母さん。

「女の子からって圭吾には良くあることじゃん」

そう、昔から圭吾には女の子から電話が掛かってきたのだ。

でも圭吾はちつとも嬉しそうではなく、残酷なんじゃないかと思うほど”あっけなく”というか”そっけなく”電話を切ってしまうのだった。

「それが違うのよ！いつもとは」

また思い出してるな、にやける母さん。

「じゃあ、涼子ちゃんよりもどつたんじやない？」

そう圭吾にしては珍しくたまに笑いながら会話をしていた子が一人だけいた。

結構可愛かったしな。

「違うわよ、涼子ちゃんだったら私だつてわかるわよ。初めて掛けてきた子よ。あなたにも見せたかったわ、あの時の圭吾の顔を。そりゃあもう必死になって！　我が子ながら応援しちゃったわよ」
母さんの言葉に耳を疑った。

圭吾が必死？

あの本ばかり読んでて他の事にあんまり興味を示さないあいつが？
どうもぴんとこなかった。

「そうそうその顔。私だつてそんな顔してたと思つたわよきつと」

ふーん、それはそれは非常に興味がありますね。

俺は2階へ上がることも忘れて母さんと2人リビングでコーヒーを飲んでいた。

会話のとまったその時。

玄関を開ける音がした。

「ただいま」

その声にがっかり肩を落とした俺と母さん。

「「お帰り」

ちよつと低めのトーンで声が揃った。

「何だ2人共、そんなあからさまに嫌な顔しなくても」
父さんはちよつと不機嫌そうにそう言った。

「「ごめんごめん。お帰りなさい」」
母さんはそう言って父さんからかばんを預かり2人で2階へと上がっていった。

着替えを済ませ下りてきた父さんは至って普通だった。
と言う事は父さんには話してないんだろうな。

改めて席についた父さんに

「お帰り、今日は早かったんだね」

と声を掛ける。

すると父さんは

「ああ、何でも久しぶりにビーフシチューを作るからと母さんからメールがあつてな」

新聞に目を通しながらぼつりと話した父さん。

もしかして！わざわざ父さんにメールで知らせたんかい？！でもその疑いは次の一言で消え去った。

「それにしても、今日は何の日なんだ？ 結婚記念日でも誰かの誕生日でもないよな。お前心あたりないか？」

父さんは小声で聞いてきた。

そりゃあそうだろ、父さんにとつたら？？？だらけだよな。ちよっとビクビクしてるとみた。

「いや、そういう気分だったんじゃないの？ 記念日とかそういうのじゃないから。……きつと」

そう父さんにいうと少しだけホッとしたようだった。

何処に行ったんだか圭吾はまだ帰ってきていなかった。

もしかして、今日は失恋記念日になったりして……

意地の悪い妄想が頭の中を駆け巡った。

圭吾に悪いなと思いつつもそんなところも見てみたかったりして。

そうこうしているうちにまた玄関で物音がした。

今度こそ圭吾だ！

一瞬母さんと目が合った後、俺は席から立ち上がり玄関へと向かった。

無論、今まで圭吾を出向かいに玄関なんぞに出ていったことなどなかったのだが。

母さんから話を聞いて、いらぬ妄想が駆け巡ったせいも、いつもはすました弟のちよつと違う顔を拝んでみたいという気持ちになったのだ。

下を向きながら、

「ただいま」

と反射的に言葉を発して靴を脱いでいる圭吾。

靴を脱ぎ玄関のあがりばなに足をかけ振り向いた顔はニヤケた顔だった。

俺が固まったのは無理もない。

そして　　もっと固まってしまったのは圭吾だ。

まさか俺がこんなところに立っているとはい思ひもしなかったんだろ
うから。

動揺したんだろう圭吾はいつもより少し高い声で

「悪い兄貴、服借りた」

それだけという階段を上がり始めた。

圭吾の顔は赤かった。

こんな顔が見れるとはね。

俺の服を着た圭吾。

あの服は俺の一番お気に入り服だったりする。

雑誌に載っていたのを一目ぼれしてわざわざ買いにいった服だ。

圭吾に見せた時は何の興味も示さなかったと思っただが。

それにしても悔しいはその服が俺より似合っているという事だった。

そして、テーブルに着き圭吾が来るのをみんなで待ったりして。

4人で食事をするのは久し振りだった。

程なくして圭吾も席に着いたのだが。

すでに着替えていて、洋服と共に顔の表情もいつもと同じになって

いた。

違うのは、他の話をしながらもとてもテンションの高い母さんだけだった。

圭吾は居心地悪そうに手早く食事を終わると、食器を片付け部屋に戻ろうとした。

その時

「今度、家に連れてきてね」

今まで全くその話題に触れなかった母さんが爆弾発言をした。

3人の目が圭吾に向けられると、一瞬のうちに顔が赤くなった圭吾。そして

「そのうちな」

そういつて自分の部屋に戻っていった。

母さんは

「きゃっ」

と女子高生のような声を出した。

俺と父さんは目が合い暫しの沈黙。

母さんだけが鼻歌しながらテーブルの上を片付けはじめ。

圭吾が照れてたぞ

父さんがぼつりと呟いた。

我が家にとつたらビッグニュースだったりして。

これで暫く遊べるかもな。

楽しくなってきたぞ。

それにしてもどんな子なんだろう？

圭吾にあんな顔をさせる子って。

そのうちかあ

さっきの圭吾の顔を思い出しましたにやけてしまう俺だったのだ。

番外編その1 圭吾の兄（後書き）

調子に乗ってもう何話か書こうかと
次回は桜のお話をUPする予定です
お付き合い頂けると嬉しいです！

番外編その2 策士?!桜(前書き)

調子にのって2つ目の番外編です。
読んで下ると嬉しいです

番外編その2 策士?!桜

いつからだろう？

背中に視線を感じるようになったのは

屈託ない笑顔を浮かべて、楽しそうに話している郁。

私の大事な友達だ。

郁は裏表のあまりない子で女の子からも男の子からも好かれてるんだよね。

そんな郁は恋をしてるんだ。

そうこの顔！

会話している最中だって少し遠い目をして、少しだけ唇の端を上げてみたりして。

思わず抱きしめたくなくなっちゃうんだよ。

だからといっても私はいたってノーマルなんだけど。

ここ最近特に熱い視線を浴びるような気がする。

違うね、浴びてるのよ。

そうかなあなんて思ってたけど核心をもった。

大山だ。

野球部に入っている大山は今時の男の子とは違って、線の太いゴツイ系。

部活で日焼けした肌に逞しい体。

何より彼の目力は相当なものだ。

郁を見てるのは確実だった。

私はいつの間にか大山の観察をするようになっていた。

彼は郁のことを少なからず気に入っている。

でも今の郁は電車で会う名前も知らない彼に心を奪われている。

郁は人のことを最優先に考えるとところがあるから、大山が動いたら、流されちゃったり、なんてちよつと不安になったりしてゐるんだよね。だから私は先手を打ったのだ。

人もまばらになった昼休み。

私の席には郁がいる。

そして、ひとつ置いた後ろに大山がいる。

クラスには何人かの人が残っているけど皆それぞれの会話に夢中になっているようだった。

そんな中、大山は一人で席に着いていた。

きつと郁の声を聞いているのだろう。

私は少し大きな声で郁に話し掛けた。

「どうした？今日は眼鏡君に会えなかったの？」

郁は顔を少し赤く染めて首を振っていた。

ちらりと大山を見るとさっきまで細められていた眼がより一層細かい眼に。

聞いているな。そこで私は追い討ちを掛けるように

「郁が一目ぼれとはね。そんなに気になるんだ眼鏡君の事。」
と試みてみた。

郁はこれ以上無いってほど顔を赤く染め

「桜の意地悪。」

つてちよつとほっぺを膨らましている。

誰が見てもそうだと言っているようなものだった。

そのとき大山が席を立った。

彼は下を向いて顔は見えなかったけどダメージを与えたことにかわりはないだろう。

心の中でごめんと謝ってみたけれど、それが伝わる事はないだろうからな。

教室を出て行く大山を見送った。

「桜、桜？」

郁の声に気がついた。

「ん？」

と返事をする

「ん？じゃないよ。さっきから呼んでるのに。あつ今桜、大山見てたんでしょ〜」

意地の悪そうな笑みを浮かべてる郁。

まあ、いくら郁がそんな顔したって可愛いだけなんだけど。

しかし、人のことには気が付くんだね。やれやれだよ。

「うん、でっかいのが出て行くなと思って」

私が素直に認めると

「ちょっとビックリ。桜から反撃にあうと思ったよ」

とおどけて笑っていた。

おいおい、私ってどんな奴なんだって。

それから

郁は念願叶って、眼鏡君こと圭吾君と付き合うようになった。その噂はあつという間に広がって、クラスの誰しもが郁が彼氏もちになったと知れ渡ったのだった。

今日も私の席でのろけ話をしている郁。

本当に凄く嬉しそうだ。

そして、後ろの席では変わらず大山がいたりして。

私はあれからというものどうも大山のことを観察する癖がついてしまったようだった。

ある日、圭吾君と待ち合わせがあるから！と郁においていかれ、一人下校しようと自転車置き場に向かうと。

丁度、大山も自転車を転がしている所だった。

「よお」

軽く挨拶された

「よお」

私も同じように返してみる。

そういえば今日からテスト前で部活も休みになるんだっけ。

何となく一緒に校門を出た。

「お前さあ」

大山が私に話し掛けた。

「何？」

何の気の無いように返事を返した。

「お前、あの時わざと俺に聞える様に言ったんだよな」

何時とも誰にとも言わなかったけれど私には直ぐに解った。

「だとしたら？」

私はそれだけ答えた。

「ん〜まあ、今となつたらありがとつかもな」

大山は私に微笑んだ。

ありがとう？ 何で？ 私の頭はハテナマークが回り始めた。

そんな私の顔を見て大山は

「俺には、あんな嬉しそうな顔はさせてやれなそうだからな。凄い
幸せそうに話してるからさ」

大山は何もしないで失恋したというのに（そうさせたのは私かもし
れないけど…）不思議とすっきりしたような顔をしている。
少しだけ罪悪感が晴れた気がした。

「だね」

私は短く返事を返した。

彼は言いたいことを言い終えたのだろう、自転車にまたがって

「じゃあな」

と言つて帰っていった。

私は大山の後ろ姿を見つめながら

きつと私の観察は続いていくのだろうと思つた。

ねえ大山、一目ぼれじゃないから私に嫌悪感もたないでね。

一人そう呟いたのだった。

番外編その2 策士?!桜(後書き)

こんなのでいいのかな?と自答しつつ前作、今回とUPしてしまいました。この番外編続けていいのかな?続きを読みたいと思ってくれる方はいるのかな?なんて、かなり不安になってきました……

番外編その3 大山（前書き）

番外編その3です！

今回は大山登場です。読んで頂けたら嬉しいです

番外編その3 大山

入学して初めての中間テストの時だった。

間違えてしまったところを消しゴムで消していたら、手が滑って使い込んでカバーも剥し、角も丸くなった消しゴムは無情にも3列前まで転がっていった。

俺はスローモーションでも見るようにその行方を目で追っていた。

消しゴムが落着き、顔を上げて先生をみるも先生は窓の外を眺めていて、どうしたのもかと考えていたときだった。

左隣からすーっと出された消しゴム。

その消しゴムは真新しい消しゴムを2つに割ったものだった。

テスト中という事もあり顔を見ることも出来ずに消しゴムだけをそっと手に取った。

テストも無事に終わり改めて隣を見ると話たことのない女の子だった。

ありがとう

そういつて消しゴムを差し出すと

「いいよ。良かったら使ってね」

そう言つて微笑んだ彼女。

俺の心臓がトクリと波打った瞬間だった。

「サンキュウ、助かったよ」

もう一度お礼を言い、その消しゴムを筆箱にしまった。

彼女は

「いいて事よ」

と笑いながら席を立っていった。

好きだという自覚は無かったものの、それから何となく彼女を目で追ってしまう自分がいた。

今まで野球一筋だった俺は女の子にはあまり見向きもしなかった。

俺の視界に映る彼女は、表情がクルクル変わるんだ。

嬉しかった事、悲しかった事顔を見ていれば一発で解った。

元々キャッチャーという守備から相手の顔を見るのは得意な方なのだけれど、それだけではないんだろな。

冬に近づいた時には自分の気持ちにもはっきり気が付いていた。

そうして、春になりクラス替えが行われる日。

教室のドアを潜り抜けた後、彼女の顔を見つけた時には心の中でガツポーズをあげてみたりして。

その頃から、俺の視線にもう一人入る奴が。

彼女の親友。

こいつは、クラスの中でも一味違う奴で。

あの何もかも解ってますというような見透かされた眼。

何よりももの凄い眼力があるんだ。

目が合うとまるで”何でもお見通しよ”とばかりにこちらを真直ぐに見据える。

暫く、彼女を目で追うことを意識して避けていた時期もあったりした。

それなのにどうしてか、こいつとは目があったりするんだよ。それでもって、どうでもいい話を振ってきたりもするときは、苦手意識を持ってしまったせいかな、無口な俺はさらに無口になったりしてしまった。

そんな中、クラス替えをして初めての席替えがあった。俺の隣は偶然にも彼女の席だった。

運命かもしれない、なんて女みたいな事を思ったのも束の間。ある日を境に彼女は変わり始めた。

隣の席にいた俺は彼女のため息や、独り言を間近でみるようになった。

嫌な予感が胸を過ぎった。

何日か後でそれは的中してしまう。

人も疎らな昼休み。

自分の席に腰掛る。

彼女は親友の元で話に興じている。かすかに聞える楽しそうな笑い声。

ため息をつく彼女とは裏腹にとても楽しそうだった事にほっとする。

そして、あの一言が俺に突き刺さった。

「郁が一目ぼれとはね、今日は眼鏡君に会えた？」

他の会話は全くと言っていいほど聞き取れなかったのに、彼女の親友が放った言葉は俺の耳にダイレクトに届いた。言葉が耳にこだまする。

思わず彼女の顔を見てしまった。ほんのりと顔を赤く染め、頬を膨らませながらも幸せそうに笑う彼女。

本当のことを言うと、あのため息の付きようから何か声を掛けようと、何日か前からそう思っていたのだが俺の出る幕はないんだろうな。俺は、それ以上その場にいられなくなって、昼休みも後僅かだというのに教室から出てしまった。

あの目が追っているような気がした。

それから、彼女は相変わらずため息を吐くものの、以前とは違い窓の外を眺め微笑むことが多くなった。もう諦めなくちゃだろうな。

何を想っているか、またもや幸せそうな顔をしている彼女。

「極上のいいことあったって顔してるぞ」
黒板を見つめ口にだした

「ちよつとね」
彼女はそう言ったのだがちよつとじゃねえだろ、なんて。そして俺なりのけじめをつける為に、ノートの端に書いてみた

「一目ぼれしたって？」と

彼女は一瞬驚いた顔をした後

「秘密だよ」

と俺の書いた字の下に書き込んだ。

秘密ってバレバレじゃん。

自分の気持ちを伝えられないなんて情けないよな

と思いつつ、最近の彼女の幸せそうな顔を見る度にこれでいいんだよな。

と思う俺もいる。

そのうちに彼女は彼が出来たと噂が広まった。

あの顔見れば誰となんて聞くのは野暮だろ。

眼鏡君か。

顔も、どんな奴かも知らない。

でもきつといい奴なんだろうな、そうであって欲しい。

もうあのため息は聞きたくないからな。

テスト休みに入ったある日、駐輪場であいつに会った。

「よう」

と声を掛けると

「よう」と返ってきた

「お前さあ」

話掛けてみたのだが一瞬、躊躇してしまった。

それに対して、こいつは動じないというか、なんと言うか

「何？」

たった一言そう言ったのだ。

「お前あの時、わざと俺に聞えるように言ったんだよな」

別に責めてる訳じゃない。俺の気持ちを見透かされていたのを知りたかったから。

そんなに解りやすかっただろうか。何時、何の話とも言わずに話し掛けた俺。”何のこと？”と言われればそれまでだけれど。すると

「だとしたら」

だとしたら と返ってきた。

予想外の返事だった。

「んゝまあ、今となったらありがとうだな」

少しだけ心残りの感もあるのだが、そう思えるのは確かだった。

俺の言葉に、先ほどまでのクールの顔は何処へやら、こいつは不思議そうな顔をして俺を見ていた。

本当はここまで言うつもりじゃなかったけれど、勝手に口から

「俺には、あんな嬉しそうな顔はさせてやれなそうだからな。凄く幸せそうに話してるからさ」

そう言っていた。

「だね」

どうしてこいつはこんな返し方しか出来ないんだ？まあ俺も似たようなものだけど。

でも、その短い言葉には、彼女の幸せそうなという言葉に対しての肯定が入っているわけだからな。あまり話していると、また何かを見透かされそうで、俺自体も何か口走ってしまいそうで。

「じゃあな」

と、いってその場から立ち去っていた。

それにしても、なんか怖い奴だよな。

相手の先を見ると、多くを語らずに目でものを語るといっ

絶対男だったら、野球に誘うな。

あいつはキャッチャー向きだ。いや、俺の考えを読むのだからピッチャーか？

そんなわけの解らないことを考えながら自転車をこいだのだった。

番外編その3 大山（後書き）

番外編その3をUp出来ました。前回こちらで不安な気持ちを書いてしまったのですが

コメント、評価そして、直接メッセージを頂けてとても励みになりました。心から感謝しています！

ものすごく嬉しかったです^^

続編を希望してくれる方もいらっしやって、この話を書いて本当に良かったなと思いました。

調子に乗って続編書いてしまうかも^^

ここまで読んで下さってありがとうございます！失礼致します。

彼のため息

目に映るもの

周りの風景だったり、学校の仲間達だったり、この日常はいつもと同じはずなのに、俺の目には全てが明るい色に見えるのは今の俺の気持ちと関係しているのだろう。

学校までの道のり、いつもだったら黙々とその道を進んで行くだけだった。

でも今日はちょっと違ったんだ。

今届いたばかりのメールを見ながら電車の中で見た佐伯さんを思い浮かべていた。

それはほんの少しの時間。

電車ですれ違う一瞬、声に出さない声を出しお互い”おはよう”と言い合った。

俺は照れてしまって、あんまり顔を見れなかったんだけど。

きっと彼女もそうだと思う、顔を真っ赤にしてハニカンダ笑みを浮かべて。

勿論、俺に向けて笑ってくれたんだけど、それはそれは可愛くって思わず俺の周りの奴の目を覆いたくなるほどだった。

だってそうだろ、あの顔を見れるのは俺だけでいいのに！

違う方向に進んでいく電車を恨めしく思った。

窮屈そうな電車に乗って、小さくなっている彼女を守ってあげたいと。

あんなに向こうの電車に乗りたくなかった俺が、今は向こうの電車に乗りたいた切望するようになるなんて、半年前の俺ならこれっばちも思わなかっただろう。

佐伯さんも今頃、この空の下学校に向かっているんだと思うと妙に足取りも軽くなったりして。携帯の画面には

今日は天気がいいですね このまま何処かに出掛けたいくらいです！

俺も行ってーっ

心の中で叫んでいた。

「ようー！」
物凄い衝撃が背中を襲った。

「よう、じゃなえよ。馬鹿力君」
言わずと知れた悪友だ。
佐伯さんと思いが通じて数日経った。
俺はこここのところこいつにおもちゃにされっぱなしだ。

「今日もセーラーちゃんは可愛かった？」
だから、セーラーちゃんは止めろって言ってるじゃねえか！
ジトリと睨んでやった。

「おお恐っ、そんな顔していると写メで今の顔送ってやるから」
豪快な笑い声で携帯をちらつかせた。

一瞬動揺してしまうものの、こいつが佐伯さんのアドレスを知るは

ずもなく、只単に俺をからかって遊んでいるだけなのだ。

こいつの事、いい奴だと思った俺は忘れよう、マジでそう思った。こんなことを考えているにも関わらずおかまいなしに続ける悪友真治。

「それにしてもお前ここ何日かでキャラ代わりまくりだぞ。一体クルルなお前は何処へ行ったんだ」

手を目の上にかざして遠くを見るこいつ。

俺はこいつを無視して自転車を漕ぐ足に力を入れた。

「浅野君待つて〜」

この期に及んで何が浅野君だ！友達止めようか本気でそう思った。

学校へ行っているのだから当たり前のことなんだけれど、登校中の生徒が目に入る。でもそれは今までなかったことで。

でも、こここのところ嫌でも目がいつてしまうのだ。

それは、仲良く並んで登校する奴ら。

ぴったりくっついて歩いていたり、中には手を繋ぎながら歩いているのもいて。

自然と手を繋ぐまでにはどのくらいの間が必要なのだろうか？

そんなことを考えてしまっ自分もいた。

ありえないだろ俺。

これじゃあからかわれるはずだよな。

俺の隣で自転車を漕ぐ悪友をみて、思わずため息をついてしまったのだ。

そして、そんな俺をこいつは見逃すわけもなく。

悩み事があるなら、聞きまっせ

妙な関西弁でまた俺をからかいやがる。

俺が無視を決め込んだのは言うまでもない。

その日の休み時間のことだった。

「浅野君、最近良い事あった？」

突然クラスの女子に声を掛けられた。

その言葉に、今この瞬間まで自分顔が緩んでいた事に気が付いた。
気を引き締めて顔を戻し

「……」

俺は改めて、無言の笑みで答えを返した。

するとそいつは

「ごめん、何だか最近表情が柔らかくなったみたいで、何かあったのかな？って素朴な疑問だよ。気に障ったらごめんね」

と言い終わるや否やそいつは何処かへ消えていった。

そして、タイミングよく近くにいる真治。

「いいねえいい男は。これがそこの奴じゃ、最近一人でニヤニヤしてて気持ち悪いよね〜って感じだぞ。モテル男は待遇が違っよな

あ

一人自己完結したようで、こいつは”うんうん”と頷きながら俺の顔を見るのだった。

「くだらない。」

そう一言いい、本に目を落とした。

でも本を見たのは確かなのだが、一向に文字を追うことは出来なくて。

俺って怪しい奴になっっているのか？

自分で気がつかないうちににやけているのかもしれないとちょっと
ばかし、不安になった。

そして、考える。

浅野君かぁ。

さっき声をかけられた女子にも他の子にも、俺は浅野君と呼ばれて
いる。

それは、佐伯さんも同じで。

同じ名前でも彼女が呼んでくれると、それだけで嬉しくなる俺が
いる。

同じこと言っているのにな。

でも本音は、名前で呼んで欲しいと思うのだけれど。

どうすれば……どのタイミングで切り出せばいいのだろう。

俺が、”佐伯さん”って呼ぶことにしたってそうだ。

折角、思いが通じたっていうのに、いくらなんでも苗字で呼んで
たんじゃ他人行儀だよな。

ってよりか、俺は彼女を名前で呼びたいんだ。

彼女を思い出す度に本当は呼んでいるんだ。

彼女の名前を。

でも、今日こそはって思うのだけど、いざって時には呼べなくて
意気地がないよな俺って。そう思ってまたため息がでた。

彼女のため息

「いつてきます」

玄関で鏡をチエックして靴を履いた。

髪の毛 今のところ大丈夫。

タイも曲がってないし、スカートもうん、平気だね。

駅までの道のりを慎重に自転車を漕いだ。

あんまり飛ばして髪の毛はねちゃったら恥ずかしいもんね。というわけで、いつもより20分も早く家を出てしまった。

当然の事ながら、いつもより早く駅に着いてしまう。

一本前の電車にも乗れてしまう時間だった。

だけどそれじゃあ意味がないもんね。

どうしよう、ちょっと緊張してきたかもー。

ホームに下りる前にトイレの鏡でもう一度髪の毛をチエックした。うん、これならばうちりだよ。

知らぬうちに顔がにやけている私。

危ない人みたいだった。

いつものように列に並んで電車を待った。

その間、携帯をパカんと開いてみる。

おはよう、今起きたところ！今日は天気がいいね

今朝届いた浅野君からのメール。

絵文字もなにもなく、至ってシンプルなメール。

だけど、こんな風にメールをもらえるとは思わなかったから、すっ

ごく嬉しかったんだよ。

でもそれに対してどう返信すればいいか悩んでしまっただけで結局何も返せなかった私。

きつと桜に知られた馬鹿にされる事間違いないとみた。
学校行くまでには返信しなくっちゃだ。

ホームに降りて一本電車を見送った。

この時間、中学の同級生もちらほらいて、久しぶり！なんて言葉を交わして、慌しく電車に乗っていったりした子もいた。

少し早いだけで当たり前だけど人の顔ぶれも違うもんだ。

初めて列の先頭に並んだ気がする。

線路の先に電車を見つけて”そわそわ”しはじめる。

いつもと何一つ変わる事のない風景だけれど、私の気持ちは別のところに飛んでいってしまったようだった。

電車に乗り込んで特等席の位置をキープ、それは反対側のドアの前、押されてカエルにならないように、ちょっと端っこによるようにして足を踏ん張った。

結構これが大変なんだよね。

電車が動き始めると車掌さんだろうか、”なるべく車両の中ほどにお進みください”なんてアナウンスが流れていた。

大変なのは重々承知んだけど、浅野君に近づけるこの位置は絶対譲れないもんね。

一駅、一駅浅野君のいる駅に近づいて行く。

私は学校に通っているのに、まるで彼に会うことが一番の目的みたいだよ。

そして、彼のいる駅へ到着。

うん、今日もびったり正面だったって当たり前か！

ばつちり、目が合った。

彼は優しく微笑んで”おはよう”と声こそ聞えないけれど、私に向かって言ってくれる。

私は思わず頬が下がり、同じように”おはよう”と声に出さずに挨拶した。

たった数秒のすれ違い。

一気に押し寄せる人の波に負けないようにポールを掴んで彼を見るんだけれど、やっぱり恥ずかしくって。

あっという間に電車が動き出してしまった。

朝の一大イベントの終了だった。

あんなに楽しみにしていた電車だったけれど、浅野君のいるホームを通過した時点からまたあの嫌なラッシュ地獄に早変わり。

単純な自分に思わず笑ってしまった。

そして、いつもと同じ通学路。

一人で歩くその時間、私はさっきの浅野君の顔を思い出してしまった。

今日も朝からかつこよかったなあ。

そうだ、メールの返信打たなくちゃだ。

悩みに悩んだ結果

今日も天気がいいですね 何処かに出掛けたいくらいですと入れてみた。

本当に今日は天気が良かった。

こんな日に浅野君と何処かに出掛けられたら最高なのになあ。

流石にそこまでは入れられなかったけれどね。

私のにやけた顔はどうやら教室まで直らなかったよう。

「にやけ過ぎ」

と桜に言われてしまった。

だってしょうがないじゃん！心の中で叫んでみたけれどこっさりほつぺをつねって見る私。

こんなことをして元に戻るとは思えなかったけれど、一応ね。

「何してるんだ。」

怪訝そうな声に振り向くとそこには大山が立っていた。

「顔の体操です。」

というと

「お前って」

とそこで言葉をぶちきる大山。

ちょっと気になるんですけど

でもどうせ変な奴とかだろうな、聞かないほうが身のためか。

私はにこっと笑って見せた。

大山が一瞬ひるんだのは気のせいかな？

笑い顔にひるまれる私って……

本格的に顔の体操でもしなくちゃか？

私の隣で桜と大山が

「」出たよ、お得意の百面相が「」

なんて言っているのも気づかずにいる私だった。

現国の時間はすつごく退屈だったりする。

なんせ先生の声が小さくて、子守唄みたいに聞えるのは私だけじゃないはず。

その証拠に、あそこにもそこにも船を漕いでるのがちらほらいたりして。

私は近づいてくる眠気を必死で追い出そうとするのだけれど、それは容易な事じゃなかった。

他の事を考えよう、他の事。

といつても、今の私の頭の中は浅野君でいっぱいだったりするんだよね。

浅野君かあ

付き合えたことで浮かれまくっていて、今までは考える余裕がなかったけれどずっと引つかかっていることがあるんだよね。

今でも思い出すと涙が出そうだけど、あの時あのホームで浅野君と会ったときの事。

浅野君の隣にはすつごく可愛い女の子がいて。

あの子は浅野君の事、”圭吾”って呼んでたよなあ。

今でも気になっているあの子の存在。

浅野君 圭吾

呼び名一つで動揺してしまう私がいる。

彼女とはどういう関係なんだろう……

浅野君が私の事を好きだと言ってくれはしたのだけれど。

まだお互いにそれほど知らない私達。

私がそんな風に他の女の子のことを気にするって分かったら、嫌われちゃったりしないかな。

当分聞けないよなあ、ってよりこの先も聞けないだろうな。
私はこっそりため息をついた。

彼女のため息（後書き）

こっそり、初めてしまいました続編を。

更新はゆっくりかもしれませんがお付き合い下さると嬉しく思います。

勘違い

いつものように待ち合わせをして、駅前をぶらりと歩いている時だった。

遠慮がちに佐伯さんが話し出した。

「あのね、今度の土曜日なんだけど……」

「土曜日？」

俺が聞き返すと

「うん、土曜日。近くの神社で夏祭りがあつてね。もし、浅野君の用事がなかったら一緒にどうかなんて思つて」

佐伯さんは真直ぐ前を向いてそう言ったんだ。

初めてだった、佐伯さんから誘ってくれたのは。

これが嬉しくないはずなくて。

直ぐにでも返事をするところなのに、舞い上がってしまったと思わずぼーっとしてしまった。

「あつ、用事があつたら無理にとは言わないから。やっぱり急に誘つたら無理だよな」

俺が直ぐに返事をしなかったせいか、不安そうな顔をして、そんなことを言い出してしまった。

俺は慌てて

「行くよ、絶対。今から楽しみだよ。」

佐伯さんの顔をみながらそう言ったんだ。

すると、さっきの不安そうな顔がみるみるうちに明るくなって満面の笑みを浮かべてくれた。

「私も楽しみ」
と言葉を添えて。

付き合い始めてそろそろ1ヶ月たとうとするけど、未だに佐伯さん、浅野君と呼ぶ俺達だったりする。

悪友に言わせると、中学生だってそんな奴はいないと、笑われるのだけれど、きっかけがつかめなくて、こんな調子が続いていた。付き合い始めた日に思わず抱きしめてしまったのだけれど、その後は手を繋ぐことさえ出来なくなつて。

俺だって、いろんな願望は山ほどあるのだけれど、いざ佐伯さんを目の前にするとどうしていいのかわからなくなってしまうんだ。何をやってるんだろうな俺は。

それはそうと、土曜日って明後日じゃないかと暫しの回想。

「夏祭りに行くとか夏が始まったって感じがするんだよね。お雛子の音色に誘われて、色とりどりのお面が並んで、射的に金魚すくい。それでもって、綿飴だったり、林檎飴、たこ焼きに焼きそば。もう考えただけでワクワクしちゃうよ。」
そういう佐伯さんはとても嬉しそうな顔して、本当に好きなんだなつてのがよく解つた。

「浅野君は？」
佐伯さんは両手を後ろで組ながら、俺の前にひよっこり顔をだして聞いてきた。

「俺は」
今までは、親や友達の付き合いで行っていたくらいで、実のことを言うところ”蚊”に刺されるし、あんまり好きじゃなかったんけれど……

「俺も好きかな」

何より、佐伯さんと一緒に出掛けられるならばね。

待ち合わせ時間が遅かったせいで、段々、日も暮れだした。

俺達はゆっくりと佐伯さんの家の方に歩みだす。

待ち合わせはいつも、彼女の駅。

別れるのは、彼女の家の近くの公園。

本当は家まで送って行きたいけれど”いいよ”の一言に頷いてしま
う俺。

そして、彼女が視界から消えるまで見送ってから帰るのがここ何日
かの日課となっていた。

一緒にいると、こども時間の経つのが早いものなのか。

いつもの公園に辿り着いてしまった。

そうだ、今日こそ。そう思うのだけれどいざとなると言葉が出て来
ない。

他の奴らはどうしてるんだ？何て言っているんだ？

早く言わないと。

刻々と夕闇は近づいてきて。

よし、と自分に気合を入れて彼女と向き合った。

「俺達、付き合い始めて1ヶ月だよな。そろそろ、けっ圭吾って」
あまりの緊張に言葉が続かず。

呼んで欲しいんだ。

肝心なことが言えずに、ゴクリと唾を飲み込んだ。

恥ずかしくつて、言った瞬間下を向いた顔を上げられなかった。

すると、すんなりと佐伯さんは

「けいご？」

と言ったのだ！

佐伯さんの言葉に顔を上げると、佐伯さんは首を傾げて言葉を続けた。

「私、そんなに敬語で話してるかな？」

けいご違いだった。

「そうじゃなくて……」

そこまで言っつてふと考える。

そつだ、俺から先に名前を言えば良いんだ！と。

一つ大きめな呼吸をして。

「郁」

きつと俺の顔は赤いと思う。

心の中では何度も呼んでいる、その名前を初めて彼女を目の前に呼んでみた。

ちよつと緊張して語尾が上がってしまった。

彼女は大きな目を更に大きく見開いていたのだけれど。

何かに閃いたように、頷くと。

「そうだね、もう暗くなってきたから、そろそろ行くところかと真顔で返してきた。」

「あ、ああ」

今度は”いく”違いだ。

俺のシヨックは計りしれない。

「ちょっと、勘違いしちゃったよ」
そう言って舌をだして笑った彼女。

俺は間髪入れずに

「勘違いじゃなから。俺は帰りたいんじゃない、名前を呼んだんだ」

公園内を歩き出した、彼女の足が止まった。

「郁って呼んでいいかな？それで、俺の事は圭吾って呼んで欲しい」
一度口にしたせい、今度は最後まで言えた。

彼女は見る見るうちに真っ赤になってきて。

そういう俺も多分真っ赤だ。

恥ずかしくなって、視線を落とした。

その先には、彼女と俺のが重なりあった一つの長い影。
彼女をすっぽりと覆う俺の影だった。

その晩、俺の元に届いたメール。

明日は委員会があるので遅くなるので会えないという事が書いてあり。

文末は

おやすみなさい、圭吾君

郁より

と結ばれていた。

俺が眠れなかったのは言うまでもない。

勘違い2

「郁、土曜日だけど夕飯どうする?」
突然お姉ちゃんが言ってきた。

「土曜日って何だっけ?」
はて? 考えてみたけど思い当たらず、冷蔵庫に張ってあるカレンダーに目をやった。
そこには赤い文字で

歌舞伎

と書いてあった。
そっか、お父さんとお母さん歌舞伎を見に行くって言ってたっけ。
今週だったんだあ。

私の視線を辿って、お姉ちゃんは私が気が付いたとわかったようだった。

「私はバイト入ってるから、郁だけなんだよ。カレーでも作っていいこうかなってお母さん言ってたんだけど。」

お姉ちゃんはその言葉で言葉を切って、にやりと笑った。

何? 何なのその笑みは。

「きつと、郁は出掛けるからいらなと思うよ。って言うておいたから。」

まだ変な笑みを浮かべつつお姉ちゃんはそう言った。

「出掛けるって、何処に……」
そこまで言うて気が付いた、そうその日は高山神社の夏祭りの日だ

った。

「そうそう、だから誘って行って来れば？どうせ2人共帰ってくるのは遅いと思うからね。まあ”誰と”とは言わないけれど。」
お姉ちゃんはその言うのと、冷蔵庫から冷えた麦茶をコップに注ぎ、ゴクリゴクリと飲み干した。

誘っちゃおうかなあ

お姉ちゃんが隣にいるのをすっかり忘れ、お祭りの中を浅野君と2人で歩く姿を妄想してしまった。

気が付くと、冷蔵庫の前で一人ぼつんと立っていた。

お姉ちゃんはいなかった。

その晩も習慣になった浅野君へのお休みメールをしたのだけれど、お祭りの事は書けなくて。

だって、何だか断られた場合それが文字で残るのって寂しい感じがしちゃったんだよね。

だから、直接会って言えばいいやって思ったんだけど、結局私が言い出せたのはお祭りの2日前だった。

いつものように私の使う駅で待ち合わせて、ぶらぶらと駅前を散歩して。

深呼吸して切り出した。

浅野君は一瞬の間があった後、”楽しみだよ”って笑顔で言ってくれた。

返事を貰うまではドキドキしっぱなしだったけれど、こんな風に笑顔で返事をもらえるんだったら、もっと早くに言えば良かったかなあなんて。

だけど、誘うって結構勇気がいるんだよね。

それはそうと今日の浅野君はいつもと違う？

いつもだったらもつと……どういっていいのか解らないけれど何か違うっていうのは私にも解ったんだ。

もしかして、お祭り嫌だったのかな？

日も暮れだして、私達はいつもの公園へとやってきた。

赤と青の交じり合う夕暮れの空を渡り鳥が群れをなして飛んで行った。

時折聞えるその鳥達の鳴き声は少し寂しそうに聞えるのは、そろそろ帰らなくてはいけない私の胸に響くからなのかな。

会話が途絶えて暫しの沈黙の後、突然浅野君は話出した。

「俺達、付き合い始めて1ヶ月だよな。そろそろ、けっけいごって

」

そこまで言って下を向いてしまった。

ちよつとビクツとしてしまった。

何を言い出すかと思ったら、それにしても私そんなに敬語で話してるのかな？まあ確かに桜に話すみたいには話せないけれど。

「敬語？」

私が漏らした言葉に顔を上げる浅野君。

私の言葉が足りなかったよね。

「私、そんなに敬語で話してるかな？」
と聞いてみた。

すると小さな声で

「そうじゃなくて……。」「
と。私の頭に？が浮かぶ。
そうじゃなくてとは？？？
そんなことを考えていたら

「いく？」

と遠慮がちに言った浅野君。

その言葉が、私の名前を呼ばれたようで心臓がドキリと大きく波打った。

落着け私。落着くんだ。

夕日を背に負った浅野君はそれはそれは眩しくって。

1ヶ月経ったってこのドキドキはおさまってはくれなかった。
きっと、帰ろうって、行こうって意味だよね。

そう解釈して、

「そうだね、もう暗くなってきたから、そろそろ行こうか。」
私の顔が赤いのは夕日のせいにしてもらおう。
顔を引き締めて名残惜しいけれどそう浅野君に返事をした。

「あ、ああ」
浅野君が返事をしてくれた事でやっぱりこの解釈で合ってたんだよね。
なあ。

なんて、ちよっぴり恥ずかしくなっちゃった。
私は勢いで

「ちよっと、勘違いしっちゃったよ。」
と公園の出口に向かいながら、おどけてみせた。

”何に”と聞き返されたら、どうしようなんて思っていたのに浅野君の反応は素早かった。

「勘違いじゃなから。俺は帰りたいんじゃない、名前を呼んだんだ。」

体の中を何かが走ったような感じがした。

そう電気が頭の先からつま先まで走りぬけたそんな感じ。

耳の中で何度も浅野君の声がこだまする。

私の名前を呼んでくれたんだと。

「郁って呼んでいいかな？それで、俺の事は圭吾って呼んで欲しい。」

体中が熱くなってきた。

まるで、サウナに入ったみたいだよ。

ノックアウトです。

きっと私はゆでたこです。

私は声が出したくても声が出なくて。

大きく頷くのが精一杯だった。

すると、頭の上の方からあの低く響くあの声で

「郁」

と私の名前が聞えた。

いろいろな人に名前を呼ばれたことなんて何度もあるのに、浅野君が呼んだだけでどうしてこうも響きが違うのだろう。

まるで違う名前みたいだった。

自然と頬が緩んでいくのが分かった。

私はまた一つ頷いた。

恥ずかしくって顔をあげられなかったけれど。

それからあつという間に日は落ちて、私達はそれぞれの家に帰った。家に帰ってから私の顔は元に戻らなくて、散々お姉ちゃんにかわられてしまった。

そういえば、明日の事を言うのを忘れちゃったよ。

月に一度の委員会の集まりだった。

寝る前に携帯を開いてメールを送った。

さっきは言えなかった彼の名前。

おやすみなさい、圭吾君 郁より

と。ここで私は気がついてしまった。

”けいご”と入れて変換すると”敬語”となる事に。

もしかして、私はあの時も一つ勘違いをしていたのではないだろうか……

私って、もしかして鈍感？

祭りの前日

「お前さあマジ最近怪しいって」

窓の向こうを見ながら、意識はもう明日の夕方へと向かっていった俺。今日の放課後会えない事に物足りなさを感じてはいるのだが、明日のことを考えるとどうしたって顔が緩む。そんな俺に突っ込む真治。

「大きなお世話だ」

「お前って喜怒哀楽が激しい奴だったんだな。何か以外だったよ」
そう言いながら真治は俺の方に手を置き青春だねえと窓の外へ視線を移す。

地平線から沸き立つ入道雲。

梅雨空はいつの間にかもうすっかり夏の空へと変わっていた。
遠くの方でせみの鳴き声も聞える。

むあつとした湿り気を含むねっとりした暑さ。
もう直ぐ夏本番だ。

「今日もデートか？まあお前の顔みりゃ解る気もするが」
ニヤリと笑う真治、最近この顔ばかり見ていると思つのは気のせいじゃない。

「いや」

「いや」ってお前、セーラーちゃんにもそんな調子で話してるんじゃないねえだろうな？だとしたらお前」

多少早口で話す真治の言葉を遮った。

「んなわけねえだろ」

口調がキツクなる、それは真治の例え話だとしても聞きたくない言葉が続くと解るから。

「はいはい、余計なお世話でした」
肩を竦めてため息をつかれた。

「あつ浅野君。それに飯田君も。明日つて暇かな？」
目の前にはクラスの……名前は分らん。
何で俺が明日の予定を聞かれなくちゃいけないんだ。

「おう、どうした渡辺。」

真治が調子よく答えている。
渡辺？そんな名前だったかもしれない。

「えーつと明日、何人かでボーリングに行かないかって話しがある
んだけどどうかな？」

「ボーリングかあ最近やってないな。圭吾行こうぜって、お前何で
眉間に皺なんてよせて。」
真治に頭を小突かれた。

「行かねえ」

行くわけないだろ、何でこいつらとボーリングなんてしなくちゃい
けないんだ？それに明日は

「おいおい、だからさっきも言っただろ？そんな言い方すると。」

「すると？」
思いつきり睨みをきかせた。

「ごめん、渡辺さんという事で明日はパスします。また誘ってね」
真治の言葉に頷き渡辺さんとやはらは、廊下に消えていった。

「別に、俺が行かなくなっただってお前はいいじゃないか。
こいつが人見知りなんてするわけ無いのに。」

「お前ねえ、ちつとは周りを見てみるよ。って言ってもセーラーちやんしか目に入らないお前には言ってもしょうがないかもしれないけど。あれはどうみたってお前を誘っていたんじゃないか、俺はオマケだよ。のこのこついてく方がおかしいだろ。」

今聞き捨てならないことを言わなかったか？
さっきの会話をどうとればそんなことになる。

俺の顔をみて真治は大きくため息をつき。

「話しかけられたら顔を見る、これ基本ね。あんなに顔を真っ赤にしてお前の名前を呼ぶあいつをみたら一目瞭然だろ。っていつかお前、顔くらいみてやれよ。可哀相に。」

「見たぞ、初めに。それにそのセーラーちゃんってのどろにかしろ。」
「どうも怪しい響きだ。」

「ふーん。じゃあ”郁ちゃん”って」
またあの顔だ。

俺だって昨日やっとこ呼べたっていつのに。

「はあ？今なんて言った？昨日やっそこだった？」
額に手を当て追討ちをかけるようにあっちゃあ〜との声。
声に出したのか俺。多少うるたえながらも

「うるせえよ」

と言っではみたものの。

真治の興味をそそのくには十分だったようで。

「何々？進展有りなんだあ。今日はデートもお休みなようなのでゆ
っくりとお話聞かせてもらおうとしますか。いやあ放課後が楽しみ
だな」

「俺はお前に何にも言うつもりは」

人が話しているというのに、真治の奴、背中を向けて手を振ってい
つちまいやがった。

俺はフンと鼻をならし、机の中から読みかけの小説を取り出した。

そして放課後

俺は今某有名ファーストフードに真治という。

どうして、こいつにと思うのだが、あの時のあの状態をこいつには
一部始終見られていた訳で。

脅迫めいた誘いに断れなかったのだ。

といつつも、実は郁に対してもどのようにつけたらいいのか、今
までまともに恋愛していなかった俺にはちょっと聞いて貰いたかつ
たという思いも無いわけではないのだが……。
やっぱり相手を間違ったか？

真治に大分掻い摘んではいるもの話をした。

そして、この沈黙。

ようやく開いた口からは

「もっと自信持っていていいんじゃない。自分で思うよりお前はいい奴だ
と思うぞ」

という言葉に

「ガンガン引っ張ってっやってやるのがいいと思うぞ。多分だけど
とアドバイスを貰ったのだった。」

会話の途切れたその時、無造作にテーブルに置いた俺の携帯がブルブルと振るえメールの着信を知らせる。ディスプレイには”郁”の文字が。

はっとして前を見るとしてやったり顔の真治。

「見ないの？気になってるんだろお」

何とかならないかその笑いは。

俺は携帯を手にとり画面を開く。

そこには明日の待ち合わせの時刻が書いてあり最後は

楽しみにしているね。郁

の文字が。

「フーン。駅前に4時半ですか。楽しみにしてるって可愛いな」

真治のことは無視して返事を打ち込む。

了解！俺も楽しみだ。圭吾

送信ボタンを押して送信完了だ。

「何かさあお前らのメールってそっけないよな。普通もと絵文字と

か大好きだよとか書いたりとかしないのか？」
何だか幸せな気分にな水をさされた感じがした。

いいんだよこれで。

「煩いって」

「お前そんなこと言っちゃっていいのかな？ 駅前に4時半ちゃんとインプットしといたから。いやー明日が楽しみだ」

そう言って

「そろそろ行くか」

真治は親父のように”よっこらせ”と声を掛けながら立ち上がった。

そのまま真治と別れ電車に揺られた。

頭の中で、まさかあいつ明日突然現れたりしないだろうなと考えてしまった。

あいつには前例があるだけに少々嫌な感じがしなくもないのだが。
今から考えてもしょうがないしな。

それにしても明日の今頃は

はつきりと口角が上がるのを自覚した。

祭りの前日2

「郁ってばそんなそわそわしてるの？そんなに委員会が楽しみだったりするわけ？」

背後から突然桜に話しかけられ、慌てて携帯をパタリと閉じた。

「分かってる癖に。」

そつとスカートのポケットに携帯を忍ばせた。

私は”美化委員”なるものになってしまった。

これが結構大変なのだ。

学校の方で何やらクリンアップ大作戦なるスローガンを掲げられ、こつやつて月に一度の集まり、そして、その他に町の掃除をしなくてはならない。

同じ委員でも図書委員とは大違いだよ。

なり手のいないこの委員、学年初めの学活で中々決まらず、思わず手を上げてしまった。

つまり自ら立候補してしまったのだ。

でも、文化祭の実行委員や秋に行く修学旅行の実行委員の方が数段大変なだけれど。

そつちの方はどこのクラスにもいるまとめ役みたいな子がいて、すんなりと決まってしまったというのに。

それはさて置き、今日は月一度の委員会。

前回のゴミの収集量の報告や次回の掃除場所などを決めるのだ。

当然2人1組で委員となるのだが、私の相方はバスケット部の山本君で、どういった訳だかうちの学校、運動部っていうだけでこの集まりが免除になるんだ。暗黙の了解ってのね。

これってどうなの？って感じでしょ。勿論掃除をする日は出席してもらうのだけれどね。

「そろそろ、行った方がいいんじゃない？あつ私図書室にいるから一緒に帰ろう。最近眼鏡君ばかりで何だか……。まあいいや。じやあ後でね。」

桜は私の返事も聞かないまま、カバンを掲げ教室を出て行ってしまった。

何時になるか分からないのに。

それにしても最後の言葉。私って友達がい無い子だったよね。

悪い事したなって思うのだけど、やっぱり圭吾君に会えるのは嬉しくって。

私って嫌な奴じゃんね。って本当に集合時間だ。

私は集合場所の視聴覚室へと向かった。

委員会の始まりはいつもと同じ。

まず一学期担当の3年生から前回の結果発表。

それから委員長からの今回の抱負、そして町の清掃場所の論議に入った。

地元ではないので地理は苦手な私。

黒板に大きな地図を掲げ説明してくれるけれど、今一ピントこないんだよね。

でも大抵は駅周辺だったり、駅から学校への通学路だったりするんだけどね。

何でも今度は市内の町内会の方たちと合同で行うそうだ。

司会を務める先輩の声を聞きながら、視聴覚室の中を見渡すと席はあまり埋まっておらず、それは運動部の人が多いせいなんだろうな、なんてボーっとしていた。

結局、清掃場所は町内会の方たちと相談して各方面分担して行う方向になった。

今回だけでは決まらなかったのもまた後日集まりなおすとのことだった。

一通りの事をノートに書きとめ視聴覚室をでた。

時間を確認しようとポケットの携帯を取り出したところで、書きかけのメールを思い出した。

桜に会う前に打ってしまおう。

視聴覚室の壁に寄りかかり、メールを打つ。

待ち合わせ時間を何時にしようか、昨日から何度も打ち直しているメール。

その時間は早くなったり、遅くなったり。

迷いに迷った結果、4時半にしてメールを送った。

待ち合わせは明日だけど気がついてくれるよね。

毎日おはようとお休みのメールをしているから大丈夫だとは思っけど。

すっかり忘れて、予定が入っちゃったなんて事……。

そんな心配は杞憂に変わる。

直ぐに返信が返ってきた。

了解。俺も楽しみだ。圭吾

その文面を見てちょっとドキっとした。

だって、今までそんな言い方しなかったから。

楽しみだ

いつもと違った言い回し。

一緒にいられるようになって、圭吾君はそれ程口数が多くないものの、暖かい眼差しを向けてくれる。

電車の中から見る事しか出来なかったあの頃の圭吾君は、シルバーの細いフレームの良く似合う少しクールな印象だった。

そして聞いてしまったあの声。

もしかしたらこっちが本当の圭吾君かもしれないな。なんて思ってしまった。

メールで良かった。

あの声でこんな言葉を間近で聞いたら倒れちゃうかもしれない。

そんなことを考えながらも私は図書室へと向かっていて、知らぬ間に目の前に桜が立っていたらしい。

「郁ってばかり怪しいから。何を妄想してるか分からないけれど一人でそんな顔しながら歩いてたら他の人は避けて通るって。まあ私からしてみたらいつもの事だけどね。」

桜の言葉に顔が固まる。

確かに、圭吾君の声を思い出してはいたけれど顔に出てたの？

「怪しかった？」

桜の顔は見れなかった。

「はい、十二分に。それで何があったのかな？私の可愛い郁ちゃん。」
「
がっちりと腕を組まれ2人カバンを取りに教室へと強制連行だ。」

「まあ今日はゆっくり時間もあるし、あそこ行ってケーキでも食べながらお話聞かせてね。」
「
とウインクされた。」

桜のそれはかなりの威力がありました。

女で良かったかもなんて思ったのは内緒にしておこう。

途中渡り廊下に差し掛かると、校庭から運動部の声が響いてくる。サッカー部だったり、野球部だったり、陸上部だったり。私とは縁のない世界。

同じ校庭なのに何故か体育の時間の校庭とは違う場所のようだった。

桜はじっと校庭を見つめていた。

「桜？」

「何？」

いつものことながら短い会話だよ。

「陸上戻りたい？」

入学してから少しして桜から聞いた。

中学まではバリバリの陸上部で短距離の選手だったと。

中3の最後の大会で本当は痛めていた膝を隠し無理に出場し、怪我を悪化させてしまった事。

十分休めばまた復帰出来るとお医者さんにも言われたそうなのだが、高校へ入って、お医者さんの許可が下りても、陸上部には入らなかつたとの事を。

「へっ？何を今更。どうしてそう思った？」

桜は素つ頓狂な声を上げたあと、そう私に問いかけた。

「切なそうな目してたから。」

素直に言ってみた。

「郁って、鋭いんだか鈍いんだか。」

そういつたまま会話は終了。

私の頭は？なのに、桜の中で自己完結してるし。

なんだかな？たまには私も反撃してみようかな？

これからいく喫茶店を思い描き少しシユミレーションしてみるも、

あえなく撃沈。私が勝てる見込みは全くなさそうだ。

今日も私一人餌食になってしまふのだろうな。

でもそんな嫌じゃない自分もいる。

それはきつと、いつも自信の無い私を桜に勇気付けてもらえるから。

助けられてるよな。私の隣を歩く桜をみながらいつもありがとうねと呟くのだった。

彼の待ち合わせ

さっきから時計の音が気になって仕方が無い。

何度も何度も振り返って時間を確認してしまう俺。

そんな何度も見たって時間の進みは変わらないって分かってはいるけど。

待ち合わせ時間は4時半だ。今はまだ2時にもなっていないかった。

本当だったら、もっと早くに待ち合わせをしてもっと長い間会っていたかったっていうのが本音だ。

誘ってくれたのが郁だったから、自分で時間を言い出せなくて郁が言い出すのを待ってしまった俺。

結局昨日の放課後、真治といる時にメールが届いた。

何とも間の悪いメールだった。

俺はどうも顔に出してしまうようで、真治に追求されて今日の祭りの事まで話す羽目に。

すると真治は

「だって祭りだろ？いろいろ準備するのがあるんじゃないのか？」
なんて言い出して。

なんだよ、祭りの準備って？と思ってみたのだけれど、もしかしてそれって浴衣だったりするのだろうか？

「いいね、彼女と一緒に祭りなんて。俺も行っちゃおうかな。」
という真治の言葉に我に返った。

冗談じゃない。

冗談じゃないぞ

俺の顔は一瞬で変化したらしく。
真治は腹を抱えて笑い出した。
全くむかつく奴だ。

そうして今に至る。

こんなに時が経つのが気になるのは初めてだった。
好きな作家の新刊が出るのを楽しみにしていた時だってこんなには
待ちわびたことはなかった。

またちらりと時計を見ても5分と進んでいない。

時計が狂っているのでは？といらぬ考えをしてしまう。
どうせなら、先に出掛けるとするかな。

財布と。

ジーンズのポケットに無造作に突っ込む。

本屋にでも行くかな。

左の手首に時計を嵌める。

これで出かける準備は完了だ。

廊下に出ると、カチャリと玄関を開ける音がした。

買い物袋を持った父さんだった。

その後ろから母さんがひよっこり顔を出した。

「圭吾、出掛けるの？」

「ああ。」

だからその顔はやめてくれって。

学校では真治、家では母さんって、どうしてこう俺の周りには……

すると2人と廊下をすれ違い様に今度は父さんが

「デートか」と。

その瞬間”痛って”の声とボスっという衝撃音。

「嫌だあお父さんったら、圭吾が照れてるじゃない、こっいつ時は黙って見送ってあげなくちゃ。」

と一際大きな声の母さん。

そっちの方が恥ずかしいから。

どうしてこうなるかなあ。

顔を上げずに靴を履き

「今日夕飯いらないから、じゃあいつてきます。」

後ろ手にドアを閉める瞬間、声を抑えた2人の笑い声が。

帰りたくないかも。

でもここに兄貴までいなかったのは幸いか？

などと考えてしまった。

駅へと続くいつもの道。

待ち合わせ時間にはたっぷり時間があるというのに自然と早足になっってしまう。

早く着いたからといって、早く会えるわけでもないのにな。

俺ってこんな奴だったのか？と思わず苦笑してしまった。

改札を通りホームへ降りた。

朝とは反対方向のこの場所。

本を持たずにここに立つのは初めてかもしれない。
朝電車を待つホームを眺めてみる。

ホームの端には花壇があったり、気がつかないうちにベンチが増え
ていたり。

如何に自分が周りを見ていないかが分かった。

電車に揺られ窓の外も眺めてみた。

これは郁が見ている風景なのかと漠然と思う。

それは住宅街の中にぽつんと見える公園だったり、建物の上だけ見
える教会だったり。

毎朝乗っている電車にも関わらず、どれも初めて見る風景だった。

駅に着いた。

郁と付き合うようになって最近良く降りるこの駅。

駅前の道は、休みせいか、お祭りのせいか、いつもよりも人が多い
ような。

人の波を潜って始めの予定通り本屋に向かった。

買うのが目的ではないので多少申し訳なくなってしまうのだが、今
日は大目にみてもらおう。

ぐるりと店内を見渡し、目的のコーナーへ。

地元の本屋より規模の大きいこの店は、今まで見た事のない本も平
積みされていた。

おもむろに手に取った1冊のハードカバー。

通学中や出掛ける時は文庫本がいいのだが、じっくりゆっくり読む
のはこちらの方が断然いい。ずっしりと手に残る感触が堪らない。
本を開いてみると案外面白くて、ページを捲る指が進んでいった。
半分ほど読んだところではっとして時計を見る。

待ち合わせ時間の20分前だった。

慌てて本を閉じる。買っていつでもいいのだが、今日はこの後
。

多少後ろ髪を引かれつつ、店から出ようとレジの前を通り過ぎると
店員に大きな声を掛けられた。

何も買っていないのに、”ありがとうございます”はないだろ。
その時レジの横の張り紙が目に入った。

バイト募集

の文字。心の中に少しだけ留めた。

引き返す道は来たときよりも人が多く感じられた。

きっとそれは、浴衣姿の子が増えたせいかもしれない。

一段と早くなる足。

階段を駆け上がり、待ち合わせ場所へ。

時計を見ると、15分前だった。

一息ついて、壁に寄りかかる。

そして、郁の家のある方向一点を見つめる。

後もう少し、そう思う俺の前に2人の女の人。

俺より少し年上だろうその人は

「待ち合わせしているの？」

と話掛けてきた。

「彼女を待ってますから。」

自分でも驚く程の低い声だった。

2人は一歩引き

「そうなんだ、じゃあ」

と言って消えていった。

楽しい時間に水をさされたような気分がした。
時計を見る。

後10分。

その後も話掛けられてしまって、仕方なく目を瞑って待つことになったけど時間は気になるもので、つつい時間を確認してしまう。

後5分。

時計を確認して、前を見ると。

「ごめんね、圭吾君。待つちゃった？」

と息を切らして自転車を転がす郁が立っていた。

浴衣じゃないのは少しだけ、ほんの少しだけ寂しい気がしたけれど、ワンピース姿の郁も凄く可愛くて。

にやけそうになる顔を抑えるのに必死だった。

彼女の待ち合わせ

圭吾君は一瞬の間があった後、”楽しみだよ”って笑顔で言ってくれた。

こんなことならもつと早くに言えば良かったかななんて思ったりもしたけれど、結構誘うって勇気があるんだよね。

圭吾君か。

呼びたくて、でも呼べなかった名前。

緩む頬を押さえることなく何度となく彼の名前を呟いてしまった。

夜から興奮してしまったのか、まるで小学校の時の遠足の前日のようなそんなふわふわした感じで中々寝付けなくて。

今日の朝も目覚ましがなる前に起きてしまった。待ち合わせは夕方だったりするのにな。

そう、今日は高山神社の夏祭りなんだ。

両親は、久しぶりのデートだからと午前中から出掛けていってしまった。

残されたのは私とお姉ちゃん。

お姉ちゃんは私が今日出掛けるを知っているから、さっきから何か何か言いたそう。

何を言われるかちょっとビクビクしちゃったりしてるんだ。

「郁。」

ほらきた。

「何、お姉ちゃん。」

平常心平常心。

「大丈夫だよ、そんなに身構えないでつて。お昼どうする？私2時には出るから何か食べたいものあるんだったら、買い物行くけど。」
何だ、買い物ね。とは思うもののやっぱりそれは車だったりするんだよね。
是非ともそれは遠慮したい。

「あるものでいいよ。ご飯残ってるんだったら、それでいいし。パ
ンなかったけ？」

確か、何枚か残っていたような気がするけれど。

「ごめん、昨日の夜おなか空いて食べちゃったんだよね。ご飯は
。残念ながらさっきので最後だったみたいだよ。」
水切りの中に綺麗に洗った炊飯釜があった。

「じゃあ、パスタは？」

確かパスタソースがあったような。
そう呟きながらお姉ちゃんは、ストッカーを覗き込んでいる。

「あつた。これでいいつか。」
手にはトマトソースのパスタソース。
一時我が家で嵌ってしまい、売り出しの時に買ったためたのもだった。

「あれだけ、しょっちゅう食べてたのにぱったり食べなくなっちゃ
ったんだよね」

確かあの時は、お母さんが次のターゲット”サラダラーメン”に嵌
ってしまったからだ。

ほんとだねって2人で笑いあった。

パスタを茹でている間に、ありあわせの野菜でサラダを作ってインスタントのカップスープを用意した。

久しぶりに食べたせいか、その味が良かったのか、とても美味しかった。

食後に紅茶を飲みながらお姉ちゃんと他愛もない話をしていたら、私の携帯が鳴りだした。

「圭吾君？」

とにっこり微笑むお姉ちゃん。

「違います。よっちゃんだよ。」

そっぴながら携帯を耳にあてた。着信音が違うものに設定してあるにも関わらず、私も一瞬ドキッとしちゃったんだけどね。

お姉ちゃんの疑いの眼差しを浴びながら

「もしもし」

と声を出すと、携帯の向こうから

「郁ー元気だったー？」

と大きな声が聞えた。

ちゃんとお姉ちゃんにも聞えたみたいで、わかったよと言わんばかりに一つ大きく頷いてる。

中学の時によく家にも遊びに来たからお姉ちゃんもよく知ってるもんね。

「元気だよ。久しぶりだね。どうした？」

私はあんまり考えずに声に出したら

「どうした？ってそれはないでしょー。今日は何の日だか忘れちゃったわけ？毎年一緒だったのにあんた薄情だね。さては男が出来たんだ。」

一気に捲くし立てられて、おまけにさっきの一言で分かっちゃうものなの？

息を呑んだ私によっちゃんは

「もしかして、当たっちゃった？」

「う・うん」

思わず頷いてしまった。

「へえー、私には教えてくれても良かったんじゃない？それで？まさかその彼とデートなわけ？」

よっちゃんはやっぱりよっちゃんだった。

桜に初めて会ったときの親近感はこの友人のせいだと何度思ったことだか。

顔とかは全然違うんだけどね。

桜は綺麗系で、よっちゃんは格好いい系だ。

桜は顔と性格のギャップがあって、よっちゃんは……。

そんなところです。

「郁ーっ」

「なあに？？」

「なあに？って、変わらないねそのマイペースなところ。みんな最

近、郁に会ってないから楽しみにしてたんだよ。特に × ……」
最後の方はよく聞えなかったけど、よっちゃんの勢いは感じられて。

「そっか、連絡しなくてごめんね。でも私も今日行くから向こうで会えるかもね。」

圭吾君と一緒にいるところを知っている人に見られるのはちよつと恥ずかしかったけど、こればかりはね。

「ふーん、一緒に夏祭りに来るんだ。そりゃあ見ものだ。でもまあ、毎年約束してたわけじゃないからな。さっき一方的にああ言っちゃったけどしょうがないって分かってくれるよ、みんなも。」
最後の方は笑いながらよっちゃんはそう言ったんだ。

その後は、圭吾君の事とか言わされて、違う学校にいった奴の話なんかしながら長電話してしまった。

途中お互いが家にいるのが分かったから家電話に切り替わったけどね。
随分と話し込んでしまった。

2階から着替えて出てきたお姉ちゃんを見て、時計を見た。

お姉ちゃんはさっきバイトに行ってしまった。

危なかったよ、お姉ちゃんが降りてこなかったらもっと話し込んでいたかも。

今の時刻は3時半だったりする。

待ち合わせまで後1時間。

私は、和室でこの2組の服を並べて悩んでいた。

一つはお気に入りのワンピース。

一つは 紺色の浴衣だった。

浴衣は去年おばあちゃんが私に縫ってくれたもので、私の大好きな朝顔の花が散りばめられたもの。私とお姉ちゃんが成長する度に仕立ててくれるんだ。

お祭りには毎年浴衣を着ているのだけれども、浅野君と一緒に思うと恥ずかしくなってしまう。

気合入りすぎって思われないかなあ。

そう思っているうちにも時は過ぎていくわけで。

浴衣だったら、歩いていかなくちやだから、着付けをする時間を入れるともうタイムリミットだ。

すっごく悩んだ結果、私は一方を取り着替え始めた。

でも着替え終わっても、まだ迷ってしまった。

かなり悩んでしまったせいか、結構時間が過ぎてしまって、待ち合わせの駅にはぎりぎりの時間になってしまった。

そこにはもう壁に凭れ掛かった浅野君がいて。

遠目でみてもよくわかる、格好良すぎです。

このドキドキは自転車を急いせいなんかじゃない。

「ごめんね、待つちゃった？」

息を切らせて、「静まれ心臓」と右手で心臓を押さえながら声を出す。

「うん、待った。でも俺が楽しみで早く来すぎたせいだから。それにほらまだ時間になってないし。」

腕時計をした腕をくるりと上げ、3分前の時刻を私に見せた。
その時の圭吾君の顔。

やばいってその顔は！心臓はますます早くなるばかり。

私は

「ねっ。それより早く行ってみよう。お祭りなんて久しぶりだよ。」
そう言つと。

圭吾君は私を見つめた。

一瞬のうちに顔が更に熱くなるのが分かった。

付き合いはじめて1ヶ月経つというのに、まともに浅野君の顔を見るとおかしくなりそうだった。

甘味処

って俺何やんでんだ。

思わず郁に見入ってしまった。

たった1日会わなかったただけなのに。

ちよいと上目使いで俺を見ている郁。

分かってやっているんならまだしも……

学校行ってそんな顔で他の奴見たりしないだろうな。

ちよっと、いいや、大分不安になった。

ふいに顔をそらした郁はやっと会えた俺に

「ちよっと待ってて」

と自転車に跨り何処かに行こうとするし。

俺はびっくりなのか？

思わず郁の腕を掴んでしまった。

「圭吾君？」

だから、圭吾君じゃなくてどうして俺を置いていくんだよ。
ちよっとぶつきら棒に

「何処行くの。」

って言ってしまった、拗ね全開って奴だ。

「自転車を置いてこようかと。だって邪魔かなって。」

きつと俺が急に腕を掴んだからか、郁は小さな声で言ったんだ。

確かに、自転車は邪魔かもだが。

だからって俺を置いていくことないじゃないか。

「一緒に行くよ。」

郁から自転車を引き離した。

直ぐそこだよ

って郁の声が聞えた。

だったら尚更一緒にいけばいいのに。

「そっか、そうだよな。」

郁はそういうと”こっちだよ”と半歩先を歩いた。

もしかして、また口に出してしまったのか。

半歩先の郁を見て、顔見られなくて良かったとほっとする。

自転車を置いてきた郁と歩く。

神社へと続く道すがら、ちらほら屋台も並び始めている。

電線には町内の商店の名前らしき提灯もぶら下がっていて、中には浴衣姿の子も、このお祭りの雰囲気を実際立たせていた。

そして、部活帰りだろう学生の集団やカレ、カノっぽいのもいたりする。

そんな風景を羨ましく眺めてしまった。

同じ学校か、と。

しかし、さつきから2人のこの微妙な隙間はどのようなだろう。ほんのちよっぴりのその隙間が、今の俺達の間を表現してリアルだつたりする。

さつきの郁といい、勿論俺もただお互いの遠慮が抜けていない。今だって手を繋げばいい、只それだけのことなのに。

さつきから、たまに手が触れるんだ。

その度に手を掴みたいと思うのだけれど、郁はちよっと手を竦める。そして、また微妙な隙間が出来てしまうんだ。

郁はさつきからこの町の説明をしてくれている。

このパン屋はフランスパンが絶品だとか、この駄菓子やは種類が豊富だとか。

いつもの通りに身振り手振りで説明している。

そんな郁を見て相槌をうちながら、自然と口角が上がる。

さつきの学生を見て思い出したのか、郁は昼頃に中学の同級生から電話があったのだと話し出した。

子供の頃こそ家族で来ていたが、小学校の高学年からは友達とお祭りを楽しんでいたと。

だけどそれは待ち合わせではなく、暗黙の了解のように誰彼ともなく神社の境内に集まってくるというものらしい。

今年も集まっていると思うんだと楽しそうに話す郁にちよっと嫉妬をしてしまった。

でも、その話の最後に、電話をかけてきた友人に彼氏が出来たって報告したんだ。

って頬を染めながら話してくれた事によって気をよくしている俺。たった一言であがつたり下がったりしているな。

「あっここね、すっごくあん蜜が美味しいんだよ。最近食べてない

なあ。」

郁は俺に説明しながらもガラスケースを覗き込んでいる。

ガラスケースにはあん蜜や、蜜まめ、ところてん、安倍川もちなどが並んでいた。

甘味処か。

ちらつと腕時計を見て時間を確認する。

梅雨明けのこの時間、陽はまだ高く蒸し暑い。

祭りの時間はもう少し後でも十分だよな。

「入ろうぜ。」

自分で言った後に”あつ”と思った。

まるで真治に話掛けるようにそう言ってしまったことを。

「昨日まで”佐伯さん”なんて言っていたのに。

しまったと言う顔をしていたのが通じてしまったらしく。

郁は一瞬きよとんとした後、うんと頷いた。

そして

「遠慮しないで、いつもの圭吾君でいてね。私はその方が嬉しいから。」

今度は俺がきよとんとするほうだった。

慎重になりすぎているは確かだ、でもこんな自分も嫌じゃなかった。他の奴らに対しては全く沸かない感情や、言葉一つ一つを選んで話してしまうこんな俺を。

決して無理をしていたわけではないのだが、もしかして、郁は気がついていていたのかもな。

郁に続いて暖簾を潜るとそこは、昔ながらのという言葉がびったり

な店だった。

テーブル席はなく、畳敷きのその空間は違う時代へとトリップしたようなそんな感じになる。

奥の座敷には2組の客がいた。

ちやぶ台を挟むように郁と向かいあつて座る。

「はい。お勧めはあん蜜だけど圭吾君は甘いのか食べられるのかな。」

郁に渡されたそれは、和紙で出来たお洒落な物で、当然そこにはメニユーなどという言葉は載っていないくて、控えめで上品な毛筆で”おしながき”と書いてあつた。

「甘いものは嫌いじゃないんだ。母親が昔からお菓子つくるのが好きで、小さな頃から食べていたせいか何でも食べる方かも。」

さつきはああいつてしまったけれど、いきなり言葉ががらつと変わるのはどうだろう？

今までより言葉選びに慎重になつてしまった。

少しづつでも前に進めばいいよな、この時はそんなことを考えていた。

郁は”そうなんだあ、ちよつと意外だったよ”と笑つていた。

俺は蕨もちを頼んだ。

郁はおしながきには目もくれず、郁言うところの”いつもの”あん蜜を注文した。

程なくしてやってきたその味は、ほんのりと甘く優しい感じがした。洋菓子も嫌いじゃないけど、この甘さが丁度よく郁が食べたがるの

も納得だ。

きつとあん蜜もそんな味がするのだろう。

目の前で美味しそうに頬張る郁を見つめてしまった。

きつと俺の目の前に鏡があつたなら見たことのない自分の顔を見てしまったかもしれない。

それは、俺だけの話であつて、郁には俺の顔が見えているという事に気がついたのは

「あん蜜食べたい？」

の一言だつた。

俺があん蜜をみていたと思つたのだろうか？思わず

「美味しそうだね。」

と言つてしまった。

すると郁は、なんの躊躇もせずにあん蜜を一掬いすると

「はい」

と俺の口の前にそれを差し出した。

そして、瞬く間に顔を真っ赤にさせて手を下げ始めた。

「ごめんね、つい……」

そう言つて下を向いてしまった郁。

ごめんねなんて言わないでくれれば良かったのに。

思わず口をあけそうになつてしまった俺。

きつと、自分も十分赤い顔をしていたに違いなかった。

甘味処2

よくおばあちゃんが

” 血圧があがっちゃうよ ”

って言ってるけど、その気持ち分かる気がするよ。

眼鏡を通して、圭吾君の目は真直ぐで。

これに動じない人っているのかな？

きつと学校でも……。

これから行く高山神社までは細い裏道を通って行くの。

結構人も集まるし、これ邪魔だよね。

私は、契約している自転車預かり所に置きに行こうと自転車に跨った。

ここからほんの50mほどのところ。

あまりに、加速してしまった心臓を休める為にも、ちよっぴり風に当たりながら、そう思っていたのに。

ちよっと待ってて

そう言った私の腕は突然圭吾に掴まれて。

同時に何か圭吾君が言ってたみたいだけど、私はそれどころじゃなくなってしまった。

圭吾君が触れているその場所から、私とは違う生き物が住んでるみたいにドクドクしてくる。

直ぐ近くだから

多分、私はそう言ったんだと思う。

びっくりしたのとドキドキが混ざって言葉に出来たかわからない。その後で、圭吾君の小さな声が聞えた。

だったら尚更一緒にいけばいいじゃないか

って。

一緒に行ったら、落着かせられないよと思ったけれど。だけど、”一緒に行けばいい”その一言が嬉しくって、そうだよなって返事をしていた。

圭吾君が自転車を転がしてくれたんだけど、何となく恥ずかしくって隣にいれない私。

ほんのちよっぴりだけ前を歩いた。

今の私の顔を見られたらきつと変に思われるかもしれない。

だって、ほっぺが下がって元に戻らなかつたんだよ。

自転車置き場までに元に戻りますように。

なんて思っても駅の間と鼻の先にあるからあつと今に着いてしまつて。

圭吾君から自転車を受け取ると、いつものおじちゃんに声を掛けた。

「おじちゃん、佐伯です。ここに置いておくので宜しく願います。」

すると奥から

「あいよーいつてらっしゃい」と声が聞えた。これで大丈夫。

「お待たせ」って、そんなに待たせた訳でもないのに思わず言ってしまう。

隣に圭吾君がいるだけなのに、いつもの風景が違つものに感じられるから不思議だよ。

先週辺りから張られた提灯や飾りがお祭りのあの独特な雰囲気をもじだしている。

お祭りのある神社へと続くこの道は、高校の制服を着た子達もいきつと部活帰りなのだろう皆、肩から大きなスポーツバックをかけていた。

あの頃の私達のように中学生の姿なんかもあつたりする。

そして私は前の方を歩く2人組が目に入った。

手を繋いで歩く姿は後姿だけでも仲が良さそうなのが分かつてちょっぴり羨ましく思つたり。

手を繋ぎたいって思うんだよ、さつきからたまに触れる圭吾君の手。何度そう思つたことか。

でも、私の方から繋いだりして嫌だつて思われなかなとか余計なことを考えちゃつたりしてるんだ。

いつだったかクラス男子が”手とか繋ぐのつて鬱陶しいよな”つて言つてたのが聞えちゃつたから。

だから、その私の心を見透かされないように少し引つ込めてしまつ。

そんな私の頭の中を払うように私の口は動いていくんだ。

緊張してしまつているせいか、動きすぎて早口になつてしまつ。

でも黙つているよりはずつといい。

そうじゃないと、きつと私の心臓の音が聞えちゃうよ。

話す事と言つたらお祭りに毎年来ている事とかそんな話。

思わず、お昼にあつたよつちゃんの話までしてしまつた。

調子にのつて彼氏が出来たつて報告しつちやつたとまで。

本当に動きすぎだよ私の口。

でもそんな私の話にも、あのドキツとする笑顔をみせてくれた。

落着け私。他の事を考えよう。

そう思つて周りに目を向けた。

そういえばこの道、久しぶりに歩いたな。

自転車で通るけど、最近ゆっくり歩いたことなかったかも。

普段は通り過ぎるだけの道も歩くと本当に周りが見えてくる。

パン屋さんでしょ、おもちゃ屋さん駄菓子屋さん。

お店の前を通る毎に圭吾君に説明してしまつた。

つまらないかな？とも思つたけれど、圭吾君は私の話を相槌をうちながら、たまに質問！？みたいに聞いてくれたり。

そして、私の大好きな甘味処やさんの前にやつてきた。

このお店はうちの家族も大好きで、中学の頃は友達とも食べに来たんだ。

高校へ入って直ぐの頃こそ、中学の友達と待ち合わせをしてきていたけれど、2年にながってからは1度も来てなかったかも。

久しぶりに覗き込んだガラスケース。

それは見本だつて分かつているけれど、その見本と本当のあの味が、私の中の記憶とちゃんと合わさつて絶対近いうちに来るぞと思つた時だつた。

私の後ろに立っていた圭吾君が

「入ろうぜ。」
と言つた。

入ろうぜ。

本当にその声は反則です。

最近貰った圭吾君からのメールを思い出してしまった。

あの時もこんな感じだったよなあと。

きつと、こつちが普段の圭吾君なのかもしれない。

そう思うと無理しているのかも？なんて不安もわいてきた。

ガラスケース越しに見た圭吾君の顔は、反射されて、はつきりとは見えなかったけれど複雑そうな顔に見えてしまった。

勘違いだとしたらとも思っただけれど

「遠慮しないで、いつもの圭吾君でいてね。私はその方が嬉しいから。」

圭吾君は頭を掻きながら大きく頷いてくれた。

格好いいって思ってたけれど、この時初めて可愛いかもなんて思ったのは口が裂けても言えなそうだよ。

暖簾の奥。その場所にホツとしてしまう。

そんな暖かい感じのする場所だ。

小さなちゃぶ台に座って圭吾君と向き合った。

ファミレスやファーストフードの椅子とは違い、小さいちゃぶ台はちよつと足を伸ばすと膝がつきそうなくらい。

お母さんやお姉ちゃんや沢山の友達と来たことがあるのに、初めてそんなことを思ってしまった。

くるりと店内を見渡した圭吾君も気に入ってくれた様で柔らかい表情をしている。

甘い物の嫌いじゃないって聞いてほつとするけど、それって入る前に聞くものだったかも。

でもまた一つ圭吾君のことを知れたことに内心うきうきして。

甘い物は大丈夫なんだ、ちよつと以外だった。

それにしても、お母さんはお菓子作り上手なのか。
実を言うと私も作るの好きだったりするけど、お菓子は作れなそう
だね。

私はいつもの”あん蜜”を圭吾君は”わらびもち”を注文した。

ん〜やっぱりこの味最高だよ。

大好きなあん蜜を頬張って、目の前には圭吾君。

あまりにも久し振りに食べたせいか、夢中になってしまっただけの
ちよっぴりだけど、会話する事も忘れてしまった。

圭吾君も既に半分以上わらびもちを食べ終わっていた。

どうやら、味も大丈夫だったらしい。にこやかにこちらを見ている
圭吾君。

「あん蜜食べたい？」

勝手に動く私の口。

「美味しそうだね。」

と圭吾君。

この時ふいに昨日の桜の言葉を思い出した。

あんた達って手も繋げないってどうよ。ていうより遠慮しすぎ
なんじゃない？付き合ってるんだから冗談の一つ言えなくてどうす
んのよ。彼氏なんでしょ？知り合いじゃないんだから

確かそんな言葉だったような。

頑張ってみようかな？

「はい。」

そういつて木目のスプーンにあん蜜を掬って圭吾君の口元へ。

直ぐに冗談だよってとか嘘だよとか言うはずだったのに、圭吾君の口元に目をやってしまってまたもやドクリとなる私の心臓。

「ごめんね、つい……」

ついつて何だよと自分で突っ込みたいくらいだよ。

恥ずかし過ぎて圭吾君の顔が見れない。

中途半端な私だった。

射的

お囃子の音に下駄の音。

小高い山にあるこの神社には周りを木々に囲まれて、少し前の時代に戻ってしまったようなそんな感じさえした。

郁のはしゃぎっぷりは大したものだった。

あちらこちらの出店に顔を出してはニコニコしている。

何故か電車で見えていた頃の郁を思い出した。

こんな近くにいれるようになるなんてな。

「あーこれ可愛い。」

郁の声に引かれて覗き込むと、そこは射的の出店。

「どれ？」

と聞くと

「あれだよ、あの熊さん。」

郁の指差した先にはど真ん中に鎮座する小さなぬいぐるみ。

俺は財布から小銭を取り出して若い店主に渡した。

隣で郁は

「やっってくれるの？」

と嬉しそうだ。

「取れるかは解らないけれどね。」

3発分の弾を貰い5つ並んだうちの真ん中の銃を手を取った。実をいうと好きだったりして。

ど真ん中にあるって事は結構目玉だったりするから難しいってわかるけど。

集中して、狙いを定めた。

パン

と軽い音の後、弾はちよいと左に曲がった。

コトリと音がして隣の何かに当たったが何が落ちたかは解らなかった。

正面狙って、隣に行くって、この銃身曲がってないか？

真直ぐ飛ばない銃だからこそ、射的なのかもしれないが。

店の人が何か言っていたが、気にもせずもう一度あのぬいぐるみに狙いを定める。

今度は勿論ちよつと右側を狙って。

引き金を引くと思った通りの弾道で当たったにも関わらず、ぬいぐるみはビクともしなかった。

「上手っ」

って郁の声が聞えた。

いつの間にか俺の隣には小学生の男の子がいて

「俺もやりたいー」

って後ろにいる母親らしき人にねだり始めた。

そして、最後の一発。

今度はかすりもしなかった。

お店の兄さんが

「ぬいぐるみは残念だったけど、はいこれ。」
と手渡されたのは大きなカラフルなビーズで作ったネックレスだ
った。

「取れなくてごめん。もう一度するから待ってて。」
そういうと

「うん、いいの。それよりそれ……」
郁の視線は俺の手にあるこの子供むけのネックレス。
小学生でもないだろ？って感じのそれ。

「これ？欲しいの？」
半信半疑で聞いてみるも

「うん、いい？」
いい？って俺は要らないから。それよりこんなのでいいのだろうか？
解らないながらも手渡すと

「ありがとう。圭吾君って上手なんだね。」
って嬉しそうに射的の真似をした。

そして、そのネックレスを首に掛けた。
普段の街の中じゃ浮いてしまうそのネックレスもこのお祭りの中で
はそれも有りに見えるから不思議だ。

それにしても、こんなおもちゃで喜んでくれる郁って。
いつかもつとちゃんとしたのを渡せる日がくればいいとそう思わず
にはいられなかった。

俺がそんな事を考えているうちに今度の興味は金魚掬いに移ったらしい。

水槽の脇にちょこんとすわり金魚を眺めている。

「ねえ、圭吾君。勝負しようよ。」

悪戯な笑みを浮かべながらそういう郁。

「いいけど、最後にしないか？まだ祭りにいるんだろ、金魚もその方がいいんじゃないか？」

小さなビニールに窮屈そうにしている金魚を持っている人もいるけど、折角だったら後の方が金魚も俺らも楽だろう。そんな思いから郁に小声で囁いた。

「そつか、そくだよね。金魚もそのほうがいいよね。段々弱っちゃうのも可哀相だもんね。」

名残惜しそうに水槽を見つめながら立ち上がった。

お祭りに並んでいる屋台は半分が食べ物だったりする。

さっきあん蜜を食べたばかりだというのに郁はじーっとカキ氷の店を見つめていた。

「食べたい？」

聞くのも野暮かと思っただけれど一応聞いてみると

「やっぱり、夏祭りにはカキ氷でしょ。」

と。

莓だよね

と呟いて、郁はカキ氷を買ったのだった。

「さっきは甘いのが食べたから、さっぱりするよ。」
柄の長いスプーンでざっくりと頬張る郁の舌はあっという間に真っ赤になった。

さっきの甘味処の郁を思い出してしまった。

今度は”はい”なんて聞いてくれないだろうな、なんて。

その時だった。

「郁じゃない。」

と俺の後ろのほうから声がした。

「本当だ、郁だ。何だよあいつ来てるんじゃない。」

「来ないとは言っていないでしょ！」

そんな会話が聞えてきた。

射的 2

高山神社の境内が近づいてくるとお雛子の音もはっきりと聞えてきた。

甘味処で休憩したから、辺りは段々と薄暗くなってきた、提灯の明かりも映えてくる。

先ほどとは違い人も賑わってきて、浴衣姿の女の子も大勢目に入ってきた。

着てくれば良かったかな。

ほんのちよっぴりだけどそう思ってしまった。

階段を上がりきるときっしり隙間無く並ぶ屋台の数々。

これを見てウキウキしないなんて人いるのかな。

本当は、匂いに誘われてたこ焼き食べたいなんて思っているんだけど、さっきあん蜜食べたばかりなのに、それはないよねと我慢もしてみたりして。

頼むから私のお腹鳴らないでよ、なんて。

あつここにもたこ焼きが……咄嗟に振り返り後ろの屋台を覗くとそこは射的のお店だった。

あれは！真ん中に置いてあるクマの縫いぐるみ。

この年になってまで縫いぐるみとは思っけど、熊の縫いぐるみには目の無い私。

思わず「可愛い」と言ってしまった。

「どね」

圭吾君が私の後ろから覗き込んだ。

だからその後ろからのこの声は反則なんだってば。

倒れちゃうかも私。必死で気を取り直して

「あれあの熊・・・・・・・・・・」
と試みてみる。

そうしたら、圭吾君は小銭を取り出して。
「うわーやってくれるんですか？」

恋に焦がれていた中学生の時、彼氏が出来たらやってもらいたかったことの一つだったりする。それはゲーセンのクレイニングゲームの事だったのだけど、こっちの方がよっぽど格好よかったりするって。銃を構えて、狙いを定める圭吾君に見ほれてしまった。

ちよつとだけ眼鏡が邪魔じゃないだろうか？なんて事考えちゃったりして。

パンと乾いた音の後コツンと音がして、熊さんの隣のネックレスが落ちた。

私何かが落ちるの初めて見た気がする。

凄いついていいそうになったけれど、狙いは隣だったのだからそれを言っちゃ失礼かも、なんて思ってそれは口に出せなかった。

圭吾君は何かを言ったようだったけれど、それは聞き取れなくて。既に圭吾君は次の弾で熊さんを狙っていた。

一息ついた後放った弾は、熊さんに命中するもののビクリともしななくて。

ちよつとお兄さん、まさか両面テープでなんて張ったりしていないだろうね？

と思わず目を細めてしまった。

丁度3発目の玉を込めた時、圭吾君の隣に小学生が並んだ。その時、男の子を見た表情がとても優しい笑顔で。

「しゃ・写メに取らせてもらえないだろうか？」

なんて思ってしまった。

ほらその証拠に彼の後ろに立つ、子供お母さん。

少し顔赤くないですか？

子持ちのお母さんにまで嫉妬してしまった。

人を好きになるって結構恐いかも……

そんなことを考えているうちに圭吾君の撃った弾は熊さんに当たる事なく後ろの幕に当たってポトリと落ちてしまった。

屋台のお兄さんからネックレスを受け取った圭吾君。

欲しい

強烈にそう思った。

だって圭吾君が取ってくれたんだよ、って不可抗力かもしれないけれど……。

あんまり物欲はないほうかもなんて思っていたくせに（食い意地は張ってるかもだけど）圭吾君がとってくれたものだから、だよ。

熊さんのことはすっかり頭から抜けていた。

思い切つて聞いてみたら、戸惑いながらも圭吾君は手渡してくれて、早速首に掛けてみた。

うん、結構いいかも。

ワンピースで正解だったかもね。

あっ金魚だ。

昔から金魚掬いだけはお姉ちゃんに負けたことがなかった私。と言つても2匹取れるのがやっとこなんだけどね。

水槽のふちに座つて色とりどりの金魚を眺めた。

この黒い出目金、可愛いよ。

よし、ゲットだぜ！とあの漫画の主人公のようにガッツポーズを試みた。

「圭吾君、勝負しようよ。」
意気揚々と声を掛けた。

さっきの射的の腕をみたから、きつと金魚掬いも上手なんだろうな
と思いつつ。

そんな私に隣に座った圭吾君が囁いたんだ。

「いいけどまだここにいろんだろ。俺達の為にも金魚の為にも後で
も方がいいんじゃない？」

と。言われてみればその通りだね。あんなに小さなビンビールの中に
入れられて、振り回されたんじゃないや可哀相かも……。圭吾君ってやつ
ぱりいい人だ。

後でしようなと言ってくれた圭吾君に頷いて、また参道を歩き始め
た。

シャカシャカと子気味のいい音が聞えてきた。
手がきのカキ氷屋さんだ。

機械のそれとは違うさらさらな氷は中々出会えなかったりするんだよ
ね。

掛ける蜜も苺とメロンとレモンだけで。

さつきからあるカキ氷屋さんにはコーラやカルピスやブルーハワイ
なんてもあったけれど、ここは至ってシンプルな蜜しか置いていな
かった。

「食べたいの？」

と圭吾君に声を掛けられた。

あんまりにもじつと見ていたからばれちゃったか。

ここは開き直って

「夏祭りにはやっぱりカキ氷でしょ。」

と列に並んだ。

やっぱり苺だよな。

あん蜜といい、カキ氷といい私は好きなものがあるとあんまり冒険しない方なのかも。

早速、食べてみると、さらさらの氷は口の中ですーっと解けて後からほんのり甘い苺の味が広がった。

美味しいーっ

この感動を圭吾君にも味わって欲しいけど……

さっきの甘味処さんのおん蜜を思い出してしまった。

もうあんな恥ずかしいことは出来ないよ。

なるべく圭吾君の顔を見ないように、隣にあるお面を覗いて見た。

あの場面を思い出してしまい、緩んだ顔を隠す為だね。

そんな私の後頭部に衝撃が。

思わずカキ氷を落としてしまっかと思っただ。

くるっと後ろを振り向くと、そこには、ほんのちよっぴり大人びた懐かしい顔があった。

懐かしい友人

「本当だ、郁だ。何だよあいつ来てるんじゃない。」
「来ないとは言っていないでしょ！」

そんな会話が聞えてきた。

後ろから近づいてきた足音は俺を通り過ぎお面を覗き込んでいる郁のそばへ。

4人の浴衣をきた男女だった。

瞬時にさっきの郁の話しを思い出す、きつとこいつらが郁の言っていた同級生なんだろうと。

すると、その中の一人が”コツン”と郁の頭を小突いた。

「痛っ」

と振り向く郁。

小突いた相手を確認した郁は

「聡史つてば、久し振りの私にそれはないでしょ。」

郁の口から男の名前が出た事に衝撃がはしった。

俺の知らない過去に嫉妬を覚える。

落着けとばかりに手を拳を握った。

それにしても、頬を膨らませて怒っているようだが……この顔を見て誰が怒っていると思うのだろう。

郁に好意を持っているのなら尚更の事だ。

聡史と呼ばれたその男は一瞬こちら側に目を向けて

「お前それ好きだよな、一口くれよ」
そう言つて、郁のカキ氷に手を伸ばそうとした。

俺の中でプチンと何かが切れた瞬間だった。

この野郎、俺がいるって解つててわざとやってやがる。

一歩踏み出そうとした俺の前に浴衣姿の女が立ちはだかった。

小声で

”勘弁してやって。あいつなりにぶんぎろうとしていると思うんだ”
そう言つて、俺の代わりにそいつの頭を持っていた巾着で殴つたのだ。

間髪入れずに

「あんだ、調子に乗りすぎだよ。」

とはつきりと口調で追い討ちを掛けた。

「由乃、お前ちょっとは加減しろよ、何が入ってるんだその巾着。

堅いの入つて洒落になんないだろうが。」

聡史と呼ばれた男は頭をさすりながらも視線はしっかりと郁に向けられていた。

誰もが何も発つせずに少しの沈黙のあと

「変わってないね」

と笑い出したのは他でもない郁だった。

郁は男の視線などお構いなしというか全く気がついていないようで、
すつと俺の隣に並んで

「圭吾君、さつき言つてた同級生なんだ。よつちゃんにメグに聡史
に孝君。あつ圭吾君の事紹介しなくちゃか。私の……彼氏。浅野圭

吾君だよ。」

郁は恥ずかしそうにそう紹介してくれた。

彼氏と紹介された俺は内心にんまりとするも顔を緩めないように

「ども」と頭を下げた。

顔を上げてはじめに目に入るのはこの男だった。

挑戦的な目に見えるのは気のせいではないだろう。

するとさっきまで黙っていたメグとやらが郁を肘で突っついて何やら耳元で囁いて、俺を見ながらにっこりと笑った。

浴衣の似合う少し大人びた子だった。

続いて孝君とやらがやたら人懐っこい笑顔で「ども」と短く挨拶してきた。

そして、最後にさっきの会話にも出てきた彼女が

「ども」とこれまた短い挨拶。

さっきのあいつはさて置いてどうしてこう郁の周りには、目で会話をする奴が多いんだ？

特に最後のこやつはあの俺の苦手な誰かさんとそっくりじゃねえか。

そう、この見透かしているようなこの目が。

少々どころかかなり窮屈な俺をおいて、郁は楽しそうに友人達と話し始めた。

そんな郁を目を細めながら見ている奴1名。

俺の知らない郁を知っているこいつらを前にどうしようもない不安を感じてしまった。

そんな俺に

「毎年浴衣の郁が洋服なんてな。」

とまるであざけ笑うように言ったこいつ。

煽られているようにしか聞えなかった。

でもそれは明らかに嫉妬だろう。

だってそうだろ？今郁の隣にいるのは間違いないから。
それはまるで自分にいい気聞かせるようなそんな言葉。

屈託無く友人達と笑い合う郁をみてそうだよなと自答する。

「圭吾君ほつといていいの？デートの途中でしょ。」
郁の談笑はあの女の一言で途切れ、俺に向き合う。

「うん、そうだね。じゃあまたね。またメールするよ。」
そう言った郁を苦い顔で見ているあいつがいた。

最後に

「そいつに振られたらいつでも胸かしてやるから。」
笑いながら言ったそいつに、一瞬顔を強張らせた郁。

俺は

「ご心配なく。俺が借りるかもしれないけどな。」
と言い返してやった。

圭吾君

と俺の名を呟いた郁。

「じゃあ。」

と言って、郁の手を取った。

それはとつても自然な行動で、あんなにも頭で考えていたのが馬鹿らしく思えるほどだった。

しっかりと握り返された手。

たったそれだけの事でさっきまでの不安が吹き飛ばされていくかのようだった。

しっとり湿った2人の掌。

その湿り気は俺かもしれないし、郁かもしれない。郁も意識をしているようで、先ほどのようなきよるきよるする姿はみられなかった。

ただ、2人並んで参道をまっすぐ歩いてた。

無言で歩いていた俺の耳にかすかに聞えたその音。もしや、郁の顔を見ると耳まで真っ赤だった。

慌てて顔を隠そうと繋いだ手を離そうとする郁。

一瞬緩みかけたその掌。

俺は郁の指を絡め取りさつきよりもきつく握り締めた。

折角繋げた手をみすみす離す事なんて出来なかった。

郁は独り言を言っていた。

やっぱり、こいつなんだよなと改めて思った。

「あそこでいい？」

本当は気がついていたんだ、郁がたこ焼きの屋台を気にしている事に。

きつと限界だったんだろうな。

さっきの可愛いとは言い難いおなかの音。

どうやら、郁は顔に出るだけでなく、身体の中まで態度に出やすいのかも。

そこまで考えて、頭の中が暴走するところだった。

頭の中を払うようにして、たこ焼きの列に手を繋いだまま並んだ。大きなたこが自慢と書かれた店だった。

懐かしい友人2

「痛っ」

頭に衝撃を感じ振り向くと、そこには浴衣姿の聡史がいた。危うく力キ氷を落とすところだった。

「久し振りに会ってそれはないんじゃない？」

あんまり痛くなかったけれど、ちよつと大袈裟にそんな声を出してみた。

去年まではいつも一緒にいたからな。

聡史の後ろにはいつものメンバーがいた。

愛子と純はいないのかな？

そんなことを思っていたら聡史が私の力キ氷をくれと言い出した。

なんですと！

思わず固まってしまった。

この状態はあっけに取られるともいつのだろうか。

そうしたら、聡史の後ろのよっちゃんが一步こつちに踏み出すのが見えた。

バシッ

それは一瞬の出来事だった。

見事によっちゃんの巾着が聡史の頭にヒットした。

聡史が溜まらず声を上げて。

懐かしいー。いつもこんな感じだったよね。
姉御肌のよっちゃんはいっつもこんな感じ。

変わってないねー

思わず声にでてしまった。

変わらな過ぎるみんながおかしくて笑ってしまう。
釣られてみんなも笑い出した。

懐かしさに自分の世界に入ってしまった私の視界に目を細めた
圭吾君が映った。

圭吾君ごめんなさい、一瞬だけど忘れてしまいました。
私は圭吾君の隣に立ってみんなを紹介した。

「圭吾君、さつき言ってた同級生なんだ。よっちゃんにメグに聡史
に孝君。あつ圭吾君の事紹介しなくちゃか。私の……彼氏。浅野圭
吾君だよ。」

誰かに圭吾君本人を目の前にして紹介したのは初めてだった。

桜にだって会わせていないのにね。
心の中でごめんと謝ってみた。

それにしても緊張した。
言っちゃったよ、彼氏って。
ちらっと、見てみたけど嫌そうな顔はしていないみたいで、ほっと
した。

みんなも圭吾君と言葉を交わしてくれて、ちょっとこそばゆかった
りする。

前を向くと、よっちゃんの目が私を呼んでいるのが分かった。
圭吾君大丈夫そうだよねと思いつつ、久し振りに会えた親友に尋問を受ける事に。

「郁、すっごい格好いいじゃん、高校の同級生なん？」

「それとも先輩だとか？」

「もしかして、逆ナンとか？」

つて凄い質問攻撃だよ。

よっちゃんは知っているだけに、ニヤリと笑って様子を伺ってるし。
小さな声で答えたりしてしまった。

私だつて聞きたい事はあるのに。聡史とよっちゃんがどうなったとか、孝君は先輩とまだ付き合ってるのかなとか。
でも私には一切その権利はなかったみたいで。

何でも彼が出来たのを内緒にしていた罰らしい。

一通り質問ならぬ尋問を終えた後でよっちゃんがちょっと大きな声で

「………はいいの？」

といつてくれた。

やっと開放された。

よっちゃんもつと早くに助けけてくれてもいいものを。

「またメールするね。」

とみんなのところから足を踏み出したら

あつ

圭吾君が私の手を掴んで。

今私、圭吾君と手を繋いでる。

ドクドクと大きくなりだした私の心臓。
そこに聡史の大きな声が響いた。

「そいつに振られたら、いつでも俺の胸かしてやるから。」

ドクドクし始めた心臓はズキツと小さな音を立てたみたいだった。
いつも思っていた不安が更に大きくなった瞬間だった。

聡史は冗談のつもりだったのかも知れないけれど、私にとつたら…
…。

その時ぎゅっと手が握り返された。

「俺が借りるかもな。」

それは隣にいる圭吾君から発せられた言葉で。

聡史の声よりも更に大きな声だった。

前にいるよっちゃんがにこって笑って一つ頷いてくれたのが見えた。

私は聡史に向かって”アツカンベー”と舌を出して圭吾君の手を握り返した。

大丈夫だよね、って願いを込めて。

前に向き直って、また歩き出す。

繋がれた手はそのままに。

今日一番の緊張かもしれない。

さっきよっちゃん達に茶化された後だから余計にそう感じるのかも。
手が、汗ばんできたのが分かった。

それがどうしようもなく恥ずかしかった。

手に神経が集まっているみたくて、会話は何も思いつかなかった。
無言で歩いていたその時私に悲劇が起こった。

な・なんで鳴っちゃうかな私のお腹！

気づいちゃったよね……やっぱり。

顔を隠したくて手を引いてみたら、ってさっきよりもぎゅって握られてしまった。

何でなの

決して可愛いとは言えなかったさっきの音。

案の定、それは聞いてしまったようで圭吾君は

「あそこでいい？」

とたこ焼きの屋台に目を向けた。

体中が熱くなるのを感じて、足元を見つめることしか出来なかった。

もう、なんでそんなに美味しそうなのよ。

私には開き直るしか路はなかったみたいだった。

それでこそ

手際よくたこ焼きがさばかれていき、俺達の番がやってきた。

「たこ焼き、ふたっ」

そこまで言って考えなおす。

「すみません。一つ下さい。」

「あいよ、青海苔はどうする？」

そう言って郁の顔を見る屋台のおっちゃん。

郁は

「勿論たっ……普通に……」

恥ずかしそうに下を向いてしまった。

なるほど、青海苔を気にするのか。

ごつつい顔したおっちゃんの配慮。

どう考えてもミスマッチだろ。

今時の屋台はこんなことを気にするんだと感心した。

出来立てのたこ焼きの上で踊る鰹節と青海苔は郁でなくとも食欲をそそるもんだ。

ビニール袋に入れられたたこ焼きが目の前に出されて。
お金払わなくちゃか。

折角繫いだ手を離さなくてはいけない事に気がついた。
失敗したな、もう少し歩いてからにすればと少し後悔。

スルッと離された手を一瞬見つめてしまう。

仕方なく財布から500円硬貨を出し、ごっついおっさんの手に乗せた。変わりに渡されたたこ焼きが郁の変わりになってしまった。

「俺さつき始めて知っただけで、女って青海苔とか気にするもんなの？」

と聞いてみた、ふとした疑問。

「うん、気にする子は気にするかな。でも、やっぱりたこ焼きには青海苔のつてないと駄目でしょ。」
と返ってきた。郁らしいなって思った。

「じゃあ、焼きそばとお好み焼きも？」

「うん！」

弾むような声が返ってきた。

きつとこっちも好きなんだろうな。

そうと決まれば。

俺は近くの焼きそばとお好み焼きも1つずつ買った。

郁は目を丸くしてたけど、それは気にしない。

因みに両方青海苔をたっぷりとかけてもらった。

焼きそばとお好み焼きは最初に買った、たこ焼きの袋に入れてある。空いた手でもう一度、手を繋いだ。

今度は最初から、しっかりと指を絡めた。

ちよつとぎこちなかったかも知れないけれど、きつと直ぐになれるよな。

郁に案内してもらって神社の境内に腰掛けた。
ソースの匂いは袋の中からでも十分に食欲をそそった。

たこ焼きは摘むとして。

俺は焼きそばとお好み焼きを取り出し、半分に分けた。

「食べきらなかったら、俺食うから。」

半分づつ、入れ替えてその1つを郁に渡す。

目をまん丸にさせて

「こんなに食べれないかも……なんて言わないよ！私結構食べるんだよ。」

と舌を出した郁。

可愛いなんてもんじゃない。

思わず周りを見渡した。

誰にも見せたくないって思った。

「それでこそ、郁だよ。」

思わずそう言ってしまう自分がいた。

何だそれでこそって。

郁は美味しそうに焼きそばを頬張っている。

たまに見える歯に青海苔がついていた。

このことか、と改めて思う。

でも郁はそんな事全く気にしていなくて。

その食べっぷりは気持ちがいいほどだった。

最後のたこ焼きを食べ終わると結構な満腹感があった。

郁は結局たこ焼きを2個俺に譲ってくれたけど、ちゃんと完食。

言うだけの事はあった。

「ちょっと食べ過ぎたかも。」

本当に食べ過ぎたみたいで、息を吐くようにそう言った。

そして

「半分払うね」

と財布を出し始める。

俺は初めっからそんな気がないのにと

「今日はおごらせて。でも変わりに頼みがあるんだ。」

「頼み？」

小首をかしげる郁。

それはさっきから考えていた事

「そう、頼み。来月俺の地元で花火大会があるんだ。それに一緒に行って欲しいんだ。」

「知ってる、行った事はないけど結構大きいんだよね。連れてってくれるの？」

その声は本当に嬉しそうに聞えた。

よっしゃと心の中でガッツポーズ。

だけどこれだけじゃない、本当の頼みは。

「郁と見たかったんだ。それで、その時に……浴衣着てくれないか？」

じっと郁の返事を待った。

「……浴衣着て行くね。」

郁はニコツと笑ってそう言ってくれた。

さっきの奴に対抗意識を燃やしたわけじゃないが、燃やしたか。

横を通り過ぎる浴衣姿の女の子に郁を重ねた。

それにしても、何で来月なのかと、考えても仕方の無いことを考えてしまう。

郁は後ろを向いて青海苔をチェックしているみたいだ。

青海苔が付いていようがまいが、気にしないんだけどな。

其処まで考えて自分は？と。

直ぐ、郁に見つからないように、そっと口を拭った。

袖口に付いた青海苔におかしくて笑ってしまった。

それでこそ2

こうなったら、開き直るしかないよね。

圭吾君と屋台のおじさんがやりとりをしていたら、急におじさんが私に話しを振ってきた。

青海苔ですと！勿論たっ……

一瞬私の頭の中で青海苔が駆け巡る。やっぱりここはいららないと言
うべきなのだろうか。

いいや、やっぱりたこ焼きには青海苔が無くちゃ。

普通でお願いします。

私はそう言ってしまった。

でもそれは正解だったみたいで、おじさんはニカツと笑って青海苔
をぱらっと振りかけてくれた。

そうして、たこ焼きはビニール袋に入れられて、私たちの前に差し
出された。

当然お金を払わなくちゃいけないわけで、とつても残念だとは思っ
けれど折角繋げたてを、しっかりと合わさった指を解いて手を引い
た。

離れた手に空気が触れて、暖められた体温が逃げていく。

圭吾君がお金を払うのをぼーっと眺めてしまった。

さっきまで繋がれた手はたこ焼きにうって変わってしまった。

圭吾君にとつたら大したことではないのかもしれない。

その証拠にスタスタと先を歩いていってしまう。

慌てて後を追いかける私に圭吾君は

「俺さつき始めて知ったんだけど、女って青海苔とか気にするものなの？」

なんて聞かれてしまった。

普通はそうだと思う。

青海苔チエック！とか女の子同士でもしているくらいだから。

それが好きな男の子と一緒にいるのだったら尚更……

でも、青海苔は捨てがたいよ。

ここで、私もなんて言っちゃたら、この先も我慢しなくちゃだね、それは無理かも。

後ではれるくらいなら、言ってしまうおう。

「うん、気にする子は気にするかな。でも、やっぱりたこ焼きには青海苔のつてないと駄目でしょ。」

素直な気持ちを言ってみた。

「じゃあ、焼きそばとお好み焼きも？」

「またもや聞かれたその問いに”勿論”とばかりに大きく頷きながら

「うん」

と返した。

圭吾君の満面の笑みが返ってきた。

そしてまた前に向かって歩き出した圭吾君、って、向かった先は焼きそばの屋台？！

そこでも私は隣にぼーっと立つだけで。

圭吾君は袋を断り、たこ焼きの上に焼きそばを重ねた。

「屋台のお兄さんに”割り箸は一本でいいです”と言っていたのはしつかりと聞えた。

そしてまた、今度はお好み焼きですか！実はさつきからもう2度も

お腹がなっている。

小さい音だったから聞えてはいなかったとは思っけれど、
もうどうにかして状態だよ。

そしてまた、お好み焼きは焼きそばの上に重ねられた。

おまたせ

と圭吾君は私の手を取ってくれた。

それはそれはビククリして……だって指をね、さっきみたいに絡めてくれる。

それだけで、どうしようも無いくらい心臓が跳ね上がってしまう。
今日の心臓は大忙しだよ。

言葉も交わさず黙々と歩くけれど、繋いだ手が暖かくて。

びっくりして私のお腹もなるのを止めてくれたみたいだった。

圭吾君が反対の手を持ち上げて

” 何処かい場所ある？”
と聞いてきた。

真っ先に浮かんだのは神社の境内だ。

そして私は今、神社の境内の階段に腰掛けている。

手にはお好み焼きと焼きそばのハーフ&ハーフ。

私と圭吾君の間にはたこ焼きが。

こんなに幸せでいいのでしょうか？

大好きな食べ物に、大好きな人……。

「食べきらなかったら、俺食うから。」

そういつてこれを渡してくれた圭吾君。

「こんなに食べれないかも……なんて言わないよ！私結構食べるんだよ。」
「なんて思わず言ってしまった。」

それでこそ郁だよって言われちゃったけど、それでこそってなんだろう。

隠してたわけじゃないけど、やっぱりそう思ったんだなんて。

ふーっ。

やっぱり少し食べ過ぎたかもしれない。

私のお腹ははちきれんばかり！

さすがに、たこ焼きは半分食べれなかった。

今日はワンピースだったから良かったかも、ジーンズなんて履いてたらきつとベルトの穴を緩めなくてはいけなかっただろう。

浴衣だったらそれこそ大変だよ。

私は手を合わせご馳走様でしたと空になったパックにお辞儀をした。
そうそうお金だ。

「半分払うね」

と財布を出した。

圭吾君は私の財布をじっと見つめて

「今日はおごらせて。でも変わりに頼みがあるんだ。」

奢らせてしまっているのだろうかと考えつつも最後のその言葉がちよっとドキドキだよ。

何を言われるのだろうか？

「頼み？」

びくびくしながら聞いてみた。

「そう、頼み。来月俺の地元で花火大会があるんだ。それに一緒に行って欲しいんだ。」

花火大会ですと！ビックイイベントじゃないですか。

「知ってる、行った事はないけど結構大きいんだよね。連れてってくれるの？」

連れてってくれるの？なんて言いながらにやける顔を抑えられない。もしかして、それが頼み事なの？

そんなのん気な私に

「郁と見たかったんだ。それで、その時に……浴衣着てくれないか？」

ゆ・浴衣着ですか！

本当だったら、今だっただけで着ていたかもしれないそれ。

「……浴衣着て行くね。」
ちよつと照れてしまった。

圭吾君も下向いている。

あっそうだ、青海苔！

こっそり後ろを向いてハンカチで口を拭ってみる。
案の定たっぷりと着いた青海苔。

ふと見ると、圭吾君もなにやら。

2人で顔を見合わせて笑った。

それも大声で。

ムードもへつたくりもあつたもんじゃないけど、この空間がとても心地良かった。

金魚

そして、約束の金魚掬い。

郁も検討して3匹捕まえたが、俺は4匹捕まえた。

ちよつとやばかった。

郁はぶくつと頬を膨らませて、納得いかない顔をしているけれど、惚れた欲目かそんな顔もどんな顔も愛しく思う。

違うな、泣き顔だけは見たくない、な。

その時隣にいた女の子が大声をあげた。

「私も金魚ーっ。」

涙をいっぱい浮かべて、お母さんにすがり付いていた。

どうやら、その子のお兄ちゃんがやっているのを見て自分もやりた
いと言いつ出したようだ。

きつと2歳くらいだろうか？無理っばいよな。

きつと母親もそう思ったに違いない。

一生懸命なだめようとしていた。

すると郁がその子の隣にしゃがみこんだ。

「金魚欲しいんだよね。」

視線を合わせてそのこにたずねた。

「うん。」

堪えきれずに溢れた涙が女の子の頬を伝う。

「じゃあさ、お姉ちゃんのお金魚貰ってくれる？」

にっこり微笑んだ郁。

その言葉に途端にしゃくり上げる事を止めた女の子。

じつと、郁のビニール袋を眺め始めた。

「はい、大事にしてあげてね。」

と金魚を渡すと女の子の顔は笑顔に変わった。

「ありがとう。」

とお礼をちゃんと言って女の子は母親を見上げた。

困ったような母親と目が合った郁。

「いいんでしょうか？」

と遠慮がちに聞く母親に。

「はい。」

と返事をする女の子の頭を撫でていた。

ばいばいと手を振り別れた後で、今度は郁が俺の金魚をじつとみた。

俺は店のおじさんにもう一枚ビニール袋を下さいとお願いした。

おじさんはニカッと笑って、俺の金魚を受け取って2匹ずつに分けてくれた。

「これでいいんだろ？良い彼女だな」
って。

郁は真っ赤になって金魚を受け取ると深くお辞儀をした。

俺はおじさんに

「ありがとうございました。」

とお礼を言った。

勿論、金魚の事ではない、郁のことを褒めてくれたからだ。

郁は

「金魚ありがとう。大事にするね。」

とにっこり笑って

「オスとかメスとかあるのかな？」
なんて呟いている。

心の中でないわけないだろって突っ込んでみた。
解らないだけだよって。

金魚を持つ手をあげ、時計を見た。

いつまでだって一緒にいたいのが、そうはいかないからな。
残念だが、これまでか。

俺はいいのだが、郁は違うだろうから。
後ろめたさを感じるも

「そろそろ送っていくから。」
と声を掛けた。

金魚を見つめ微笑んでいた顔が一瞬歪んで見えたのは俺の勘違いだろうか。

俺だって……。

「そうだね、金魚掬いもできたし。もうそんな時間だよね。」
そっと手を出し、郁の手を優しく握った。

来た道とは違い、言葉少なな郁。

俺の踏み出す足も小さくなる。

郁の家まで送るつもりだったのだが、駅前に自転車を置いていたのを思い出す。

神社の階段を降りていく俺達の横を、腕を組みながら上がって行く人々。

その顔は対照的だな。

どんなにゆっくり歩いてても、自転車置き場についてしまうのは当た

り前の事で。

本当はここで別れるのと郁が言ったのだが、俺は首を振った。
”電車に乗って”という郁の言葉を制して、自転車を受け取り、郁の家まで送る事にした。

いくら自転車とはいえ、祭りで浮いている輩がいるこの辺りを一人で帰す事が出来なかったから。

そういえば郁を家の前まで送るのは始めてかもしれない。
いつもの公園の角を曲がりながらそう思った。

郁の家は住宅街の真ん中であつた。
暗がりの中、少し見えた庭には芝生が広がり、その周りには色とりどりの花が植えられていた。

「本当に駅まで行かなくていいの？」
郁が聞いてきた。

だったら俺が送った意味がないだと郁の頭に手を置いた。
冗談とも取れる本気な郁。

「また、家に着いたらメールするから。」

郁は上目使いで俺を見て

「今日はあるがとう、気をつけてね。メール待ってるから。」
そう言つて俺の渡したネックレスを右手でぎゅっと握っていた。

俺に勇気があれば……。

そう思つと同時に

ゆっくりでいいんだ、ゆっくりで。

と思う俺がいた。

結局俺は勇気が出せないまま、手を挙げ踵を返した。

首筋をすーつと撫でた生暖かい風。

心の中を誰かに見られたようなそんな感じがした。

あつという間に過ぎた楽しい時間。

終わってしまえば寂しい時間になってしまふ。

目線に金魚を持ち上げて、じつと見つめた。

ちよいと苦しそうに見えなくもない。

きつと、今頃郁の家では、この狭いビニール袋から抜け出て自由に泳ぎ回っているに違いないこいつらの連れ。

全匹あげてもよかったのだが、どうしてか手元に残ってしまった。

今日の証にしたかったのかもしれない。

しかし、俺の家に金魚鉢なるものはあるのだろうか？

そんなことを考えながら電車で揺られた。

金魚2

小高い山の上にあるこの神社からは私達の町が見下ろせる。木々の間から微かに見える街の明かり。

もしかしたら、圭吾君の家の明かりも見えるのかなあ。

ここからだ、3つ先の駅なんて直ぐ近くに見えるのに。

「行こうか。」

そう言つて手を差し出してくれた。

左手をそつと出すと、圭吾君の手に包まれた。

ここでいい？

圭吾君は金魚掬いの出店の前で足を止めた。

お腹がいつぱい、胸もいつぱいの私の方が忘れちゃってたよ。後でしようねって言ったもんね。

そんな些細な事でも覚えていてくれた事が嬉しくて堪らない。

勿論だよ！

と返事をして水槽の端にしゃがみ込んだ。

きつと、長袖をきていたならば腕まくりをしただろう、それだけ気合が入っていた。

そんな私を圭吾君が笑いを堪えながら見ていたとはちつとも気がつかなかつた。

やる気満々でお金とポイの交換をした。

一匹目は直ぐにゲット。

二匹目はちよつと狙った黒の可愛い出目金ちゃん。姿は他の金魚よりもちよつぱり大きいくせに、意外と素早い動きで追いかけているうちにポイの端が少しだけ捲れてしまった。仕方なく、目線ではその黒出目金を追ってみるも……無謀だよなと思ひ直し、再び、目の前の金魚にターゲットを縛りこんだ。ちよつと苦戦しながらももう一匹捕まえた。そつと、反対端に座った圭吾君の手元を見ると既に4匹の金魚がいた。

いつの間に……

その時、私の右隣に幼稚園位の男の子が座った。小さな手からお金がおじさんに渡されて、換わりにポイを受け取るとそれはそれは豪快なポイ捌きで、見事に金魚が散っていく。当然私の前の金魚たちも逃げまくるわけで、つていなくなっちゃったよ。

男の子のポイはもう既にプラスチックの縁しか残っていないかった。その姿がとても可愛くて、不意に顔を上げてみると、おじさんは怒ることなく目を細めて男の子を見ていた。そして

「坊主、そんなに一気に入れると金魚が驚いちゃうんだぞ、いいか見てろよ。」

水面が落着いた頃合を見計らって、店のおじちゃんはポイを取り出すとまるで流れるような動きで一瞬にして、一匹捕まえたのだ。

まさに”掬う”と言った感じで、思わず凄いと声が漏れてしまった。男の子は目を輝かせて、おじさんの手元を見つめていた。

おじさんはもう一匹掬うと前の一匹と合わせてビニール袋に入れて男の子に渡してあげた。

男の子は嬉しそうに受け取ると大きな声でお礼を言っていた。

男の子がじつと私を見つめる中、何とかもつ一匹捕まえた。ただどそれが限界で、無常にもポイはぼろぼろになってしまった。

おじさんに入れて貰った金魚を持って立ち上がった時、圭吾君の隣に座った小さな女の子が突然泣き出した。

どうやら、さっきの男の子の妹らしい。

きつと、自分もやりたいのかな。

見上げた母親は首を振っていた。

心の中でぐるりと巡って出た答えは、自分の金魚を差し出す事だった。

一匹だけおにちゃんより多くなちゃうけれどいいよね。

女の子は納得してくれたみたい。

すっかり泣き止んでニコニコしながらみんなで帰っていった。

もう一回しようかな？

なんて思いながら圭吾君の金魚を見つめると。

圭吾君の手から金魚すくいのおじさんに金魚が渡って、おじさんは圭吾君の金魚を二匹ずつに分けてくれた。

何だか褒められてしまったみたい。

ちよっぴり恥ずかしくなってしまった。

圭吾君から渡された金魚。

このネットレスもそうだけれど、圭吾君が掬ってくれた金魚とうだけで格別可愛く見えるのは気のせいかな？

それにしても、二匹づつなんて。

そつえば金魚にもオスとかメスとかとかあるのかな？

なんて。

こっさり私と圭吾君を重ねてしまった。

そんな浮かれ気分の私の耳に聞きたくなかった言葉が届いてしまった。

一瞬遅れて入ってきたお囃子の音はとでもリズムカルで、まだまだ続くお祭りを盛りたてている。

もっと、もう少しでいいから一緒にいたい

そう言えたらどんなにいいだろう。

そんな事言ったら……

でも気のせいとは思いたくなかった。

ちよっぴり低かった圭吾君の声、少しは残念に思ってくれているのかなって。

自然に握られた私の手。

お祭り来てちよっと近づいた私達の距離。

ずっとこんな風に一緒にいられたらいいのにな。

神社の階段を降りながら、すれ違う人達を羨ましげにみてしまう。

この人達はこれからがお祭りの時間なのだと。

何を話したらいいのか、言葉が出てこなかった。

2人でゆっくりと来た道を歩いていく。

行きと帰りがこんなにも違うものなのかと、楽しい時間の終わりが近づくのもう少し。

いくらゆっくり歩いてもどうしたって駅には着いてしまっ

ここでお別れだなんて思っていたのに、圭吾君はうちまで送ってくれるって、言ってくれた。

口では、”ここでいいよ”なんて言いつつもちよっぴり延びた一緒にいられる時間が嬉しくって堪らない。

そういえば、うちまで送ってもらうのは初めてかも。いつもの公園の曲がり角でそう思った。

家の前で足を止める。

自転車が私に返ってきた。

思わず、”本当に駅まで行かなくていいの”と言ってしまった私。

「俺が送った意味がないだろ」って

頭にポンと圭吾君の手が置かれた。

多分一瞬で真つ赤になったと思う。

「また、家に着いたらメールするから。」
優しい笑顔だった。

「今日はありがとう、気をつけてね。メール待ってるから。」
知らぬ間に私の右手はネックレスを掴んでいた。

ゆっくりと手を上げ圭吾君は行ってしまった。

途中、一回だけ振り返って同じように手を上げて。

曲がり角で見えなくなった圭吾君。

お祭りが終わってしまった瞬間だった。

鍵を取り出して、がちゃりと鍵を開ける。

先に金魚鉢だよ。

そうは思っけれど、何処にしまっただけあるかなんて分からなかった。

仕方なく、庭に置いてある大き目のバケツに少しだけ水を汲んで金魚を放った。

途端に広くなったせいか、物凄い速さで縦横無尽に泳ぎ回る金魚たち。

これから宜しくね

とバケツの上から覗き込んで話しかけてみた。

金魚2（後書き）

ポイとは金魚をすくう網の事です

私は子供の頃から一匹も掬った事がありません

一度でいいからあの感動を味わってみたいのですけれどね。

不安な彼

早いもので、あれから付き合い始めてから数ヶ月が経った。

郁の事を見つけて以来、誰だか知りたくて、話がしたくて、一緒にいたくて。

そんな郁が俺の彼女になってくれた。

始めのうちは、一緒にいれる。

只それだけで良かったのに。

郁は誘うと断ることをせずにもいつも一緒にいてくれる。

はにかんだ笑顔をみせながら、つまらないだろう俺の話にも付き合い合ってくれて。

でも、祭りに行ってから最近の俺は、一緒にいれるだけでいいってそう思っていたのにちよつと欲張りになってきたようで。

そもそも、郁は本当に俺と一緒にいたいって思ってくれているのだろうか？

俺の想いの方が強いつていうのは自分でも分かっているんだ。

でも郁は俺のことを本当に想ってくれているのだろうか？

そんな不安にかられてしまう自分がいた。

それというのも、俺は郁に一度も”好き”という言葉聞いていないからだった。

俺だってあの時、あの公園で言った事しか無いくせに。

好きだと言われたい。

いや、違うな。

郁の気持がちやんと俺にあるのかを知りたいだけだ。

俺だけが一方通行の気持ちでない事を知りたいだけなんだ。

はつきりと郁の言葉で。

一度頭に浮かんだ不安は消える事がなくて。だから、それを考えてしまった。

今日こそは、今日こそは聞いてみよう。そう思うのだけれど、どうしたらいいのか分からず、折角郁と一緒にいるのに時間だけが過ぎていってしまうのだった。

今日だってそうだ。

待ち合わせをして、映画を見てちよつとぶらついて。

あの祭りの日から、手は繋げるようになった。

それだけで幸せな気分になるのも事実なんだが。

今日はやけに郁の言葉が耳についてしまった。

映画館に着いてから、2人並んで席に着いたまでは良かったんだ。

「私、この女優さん好きなんだよね。」

郁にとつたら何気ない一言だったのかも知れないが、俺にしてみればその言葉は残酷で。

だってこんなに近くに居る俺には言ってくれないその言葉をさらっと言っただぞ。

スクリーンにでかかど映るその女優を羨ましく、そして妬ましく思ってしまった。

俳優の方じゃ無かっただけ良かったのかもしれない。きっとその俳優を嫌いになっていたかも。

我ながら重傷だよ。

それから、郁がまたその言葉を使った。

「見て見て、この熊さん可愛い。私大好きなんだよ、熊さんの縫いぐるみ」

シヨッピングモールの雑貨やに置いてある、ウェルカムボードを持ったその熊の頭を撫でる郁。

大好きだああ

熊にも負けている。

郁が熊の縫いぐるみが好きなのは祭りの射的の時に聞いていたから知っていた。

比べる事自体おかしいのは分かっているんだ。

嫉妬という感情がこんなにあるなんて、俺自身が驚いているんだ。

それから、アイスだろ、花だろ。

今日は一体いくつの好きを聞いたのだろう。

その中に俺は全く入っていないくて。

自分で自分にいらいらしてしまった。

何度も首を傾げて俺に

「どうしたの？」

って聞く郁に

「何でもないよ」

と喋ってしまう俺。

ふざけながらも、じゃあ俺は？って聞いてみればいいのに。思いつきり拗ねてる奴になってしまった。

郁も俺の態度を不思議そうに思っているようだ。

兎に角、情けなかった。

郁が心配そうな顔をしていて。

そんな顔をさせたいんじゃないのに。

花火大会まで後4日。

大丈夫か俺。

結局、何も聞けないまま帰ってきてしまった。

自室に戻って、部屋に置いてある金魚鉢に目を向ける。

お前らは仲良さそうでいいよな。

同姓同士かもしれないけれど。

ビンの中から一つまみ餌をすくって、金魚鉢に放った。

元気そうに動きまわる金魚達にまで嫉妬をしてみました。そうだった。携帯が振動を始めた。

映画館に行ってからマナーモードのままだったのに気がついた。郁からだった。

今日はありがとう。でもちょっとお疲れモードだったのかな？あんまり無理しないでね。

おやすみなさい。

自己嫌悪だ。

本当にごめんと携帯に向かって謝った。

そんなことしたって意味ないって分かっているけれど。

返信。

今日はごめんな。でも大丈夫だから。次は花火大会だな。楽しみにしてる、おやすみ。

送信ボタンを押した。

大丈夫って何がだよ。

ちっとも大丈夫じゃない癖に。

携帯のマナーモードを解除した。

ベットの上に放り投げ、風呂に入ることにした。

そのまま夕飯を食べたのだが、いつもは煩すぎる程聞いてくる母親がやけに静かだった。

さすが親子というのだろうか。

俺の機嫌の悪さを察知しているようだった。

そっとしてくれたのかもな。

部屋に戻りベットに寝転ぶと視界に入った携帯のランプが点滅していた。

着信は真治からだった。

2回コールすると直ぐに真治の声がした。

「よう、今日のデートはどうだった？」

開口一番に俺の痛いところをついてきやがった。

「別に。」

いつもと変わらない返事をしたつもりだったのに。

「別につて、何だよ。とうとうケンカでもしたのか？」
その声はからかうような声ではなかったが。

「ケンカなんかするわけないだろ。それよりどうかしたか？」
話題を変えようと真治に話を振った。

「そうそう、たまには俺にも付き合えつて。うち明日誰もいなくて
昼マックでも行こうぜ。」

真治の真意は如何ほどかは分からないが、そうだよな。

「何時にする？」

「じゃあ、11時に駅前な」

約束を取り付けた真治はさっきの話しに突っ込むことなくあっさり
と携帯を切った。

翌日時間通りに駅前に着くと真治は既に其処に居た。

俺とさほど変わらない身長の実治。

普段はおちゃらけている奴だが、こう黙って立っていると結構、さ
まになっていたりするもんだ。

「よう」

「おう」

短い挨拶を交して、目的地のマックへ。

そんなに食えるかよと思う量を注文した。

こんなに払うんだったら、ほか行った方が良かったんじゃないのか
？なんて思ってしまった。

やっぱり昼間は暑いよな。

そんな会話をたらたらとした後、真治は急に真顔になった。

「何か悩んでるんだろ？聞いてやるよ。」
そんな俺様的な話し方も真治の照れ隠しだというのは、分かっている。

「そんな悩みって程のもんじゃないけど」
そんな前置きをしながらも、俺はこの胸の内を真治に話してしまった。

どうも、真治には敵わない。
いつだって、乗せられて話してしまうのだから。

中学の時も仲の良い奴はいたが、こんな付き合いはした事がなかった。

話す必要もなかったし、例え聞かれても絶対話さなかったと思う。

「そっか。そういうもんかもな。」

真治は窓ガラスの向こうに視線を這わせて行き交う人を眺めていた。
そしてもう一度俺に視線を合わせて

「でもよ、お前も分かっているんじゃないか。本当は。素直に聞いてみるのが一番だと思うぞ。それこそギクシャクして気まづくなったら、最悪だからな。まあ俺からしたら、自分の好きな女と一緒に掛けられるだけで幸せかななんて思うけれど、それは付き合ってみないと分からないから。俺が言えるのはもうお前らは付き合い合っているんだから、あんまり遠慮しない方がいいんじゃないかって事だよ。」

羨ましい悩みだな

最後にポツリとそう言った。

やっぱりそうだよな。

真治の言葉にドキリとした。

もうぎこちなさは始まっているみたいだから。

それを招いたのは俺な訳で。

向かいのビルの壁に貼ってある花火大会のポスター。

まさか最後のデートになんてならないよな。

何処までいってもマイナスモードになっってしまう俺がいた。

不安な彼女

待ち合わせの場所に着いたときからその違和感があった。

いつもだったら、真直ぐこちらを向いて立っている圭吾君。

私の姿をいち早く見つけてくれて、あの笑顔を見せてくれるのに。今日は何だか険しそうな顔をしていた。

もしかして体調が悪いのかもしれない。

始めに思ったことだった。

映画館に着くまでびったりと寄り添って歩いて、しっかりと握られた手に安心したのだけれども。何だか上の空みたいな、そんな感じ。私の話に相槌打って、笑ってくれたりもするのだけれど。段々といつもと違った胸のドキドキに襲われてきた。

会話を探そうと、そんなことは最近では考えた事がなかった。例え、沈黙が続いていても心地よささえ感じていたのだから。

映画館に入って2人並んで座って映画をみた。

大好きな女優さんでご機嫌な私だったのに。

ちらりとみた圭吾君の横顔は　唇を噛んで今まで見たこともないような顔をしていた。

この映画嫌だったのかもしれない。

申し訳ない気持ちになってしまい、女優さんの表情もおぼろげにしか覚えていないほど集中出来なかった。

どうしようもない不安に駆られてしまう。

もしかして、もう私の事……

始めっから分かっているんだ。

圭吾君よりも私の方が好きだって事。

あの何も知らなかったあの頃から。

一緒にいて、実は思ってた人とは違いました。

そう言われてしまうのではないかという不安は始めの頃に比べると減ったけれど、全く無くなったということもなく。心の片隅にあった事。

もしかしたら、今日何か言われてしまいかもしれない。

さっきの変なドキドキは収まってはくれなかった。

だとしたら、それまで楽しんだ方がずっといい。

少しでも私の事を知って貰って、それで駄目ならしょうがない。気を取り直して、自分の中で気合を入れた。

私の好きなもの。一つ一つ説明していく。

熊さんでしょ、ガラス球でしょ、お花に、アイス。

本当は一番好きなのは、圭吾君だけ。

こればかりは、言えなかった。

私がそんな言葉を言ったところで喜んでくれるとは思わないから。もし、別れたら思っていたのなら尚更の事。

でも、私の気のせい。

圭吾君の体調が悪いだけなら。そんな淡い期待を込めて何度も何度も聞いてしまった。

でも圭吾君は大丈夫だよって言うばかり。

時々、大きなため息をついていた。

きっと知らないうちについているのかもしれない。
日暮れも近づいてきてそろそろ帰る時間。

いつものように、私の家まで送ってくれて。

その間も小さなため息は続いていた。

いつそのこと私の方から。

そう思ってみたけれど、やっぱりそんなことは言えなくて。

気まずい雰囲気の中その時間はきてしまった。

圭吾君は

「じゃあ、また。」

そう言つて最後はいつもの笑顔を見せてくれて。

”また”という言葉にほっとしている自分がいた。

願いを込めて

「気をつけてね。またね。」

と手を上げた。

踵を返した圭吾君は途中一回振り返つて、何か言いたそうな顔を
して。

私の心臓はこれでもかかっていうほど大きく波打った。

圭吾君は目を細めて私を見るだけで、そのまま前に向きなおい角を
曲がつてしまった。

家に帰つても食欲は湧かず、こんなことは今まで無かったかもしれ
ない。

部屋に籠つて、携帯に手をかけた。

電源を落としてしまいたい。

ふと目の端に金魚鉢が入る。

無邪気に戯れているように見える金魚をみて泣きそうになつてしま
った。

暑さと変な汗をかいてしまった体をさっぱりさせる為、シャワーを浴びた。

頭のとっぺんから流れる雫を見て、こんな私の気持ちも流せたらどんなにいいかと考えてしまう。熱めに設定してあった水温を低く設定しなおして、暫く浴びてみるも何も変わることはなくて。

すっかり冷えた体を拭いて、部屋着に着替えた。

震える手でメールを打った。

先手必勝のように、先に圭吾君からのメールを貰う前に。

今日はありがとう、疲れてたのかな？あんまり無理しないでね

自分で打ってて涙が出てくる。

こんな他愛もない文章。

直ぐに返事がきた。

左手で胸を掴みながらボタンをクリック。

大丈夫だよ。次は花火大会だね。楽しみだよ。

ほっとしてか、体中の緊張がとけようなそんな感じ。

背中がぐにやりと曲がった。

まだ、大丈夫。

自分に言い聞かせたけど。

私は携帯を持ち直し、電話を掛けた。

「もっしもし」

相変わらずのテンションだ。

一瞬声の出なかった私に

「郁？どうした？」

と優しい声が胸に沁みた。

しゃくりあげるほど泣いてしまって、言いたいことが伝えられない。

桜は

「大丈夫だよ。きっと今は気持ちも高ぶっているから、明日ゆっくり話を聞くから。あのケーキやさんに11時。どう？それまでに言いたいことを纏めておくんだよ。今日はゆっくりやすみな、ねっ。」
そう言ってくれた。

私は

「うん」と一言かえすのが誠意一杯だった。

ケーキが美味しくて評判のお店。

奥には選んだケーキと飲み物を飲むことが出来るスペースがあって、当然のことながら、ある程度の時間になると席は埋まってしまふ。

別段やることの無い私は待ち合わせ時間よりもずっと早くに店に出向いていた。

案の定、席は殆ど埋まっていた。

通りに面した奥から2番目の席に腰を下ろす。

私の背中側には、同じ年くらいだろう女の子達。

後ろにくっついた席の女の子の髪が綺麗で思わず見とれてしまった。

運ばれてきたカフェオレにたっぷりの砂糖を入れて、銀のスプーンでクルクルとかき混ぜる。

ミルクの上に乗っていた砂糖が静かに沈んで見えなくなった。

まだ熱いそのカフェオレを一口含んで、息を吐く。

そして、一人、入り口を見ながら頬づえをついた。

どのくらい時間が経ったのだろう、カフェオレが底をつく頃に桜がやってきた。

「早かったんだ。それよりなんなのその顔は、クマになってるじゃん。」

開口一番、桜は私の顔を見てそう言った。

自分でも分かっている、でもいくら冷やしたところでクマは取れなくて。

赤い目だけはかろうじて、ひいたかな。

桜がきたことで、もう一度注文を取り直して、ケーキも頼んだ。

桜は、静かに私の顔を見るだけで何も言っただけでこなかった。

私から、話をするのを待っているんだよね。

ケーキが目の前に並ぶのを目で追って。

それからやっと私の口が開いた。

毎日メールを貰っても、2人で何処かに出掛けても、本当に圭吾君は私の事を好きでいてくれるのか、分からない事。

好きと告げてくれたのは、始めのあの日だけだからこそ、一緒にいるようになって、圭吾君の思っているような子ではなかったと思われるのではないだろうかという不安。

昨日のデートも上の空で、不機嫌そうな顔をしていた事。まだ一度も自分の気持ちを伝えていない事。

堰を切ったようにまた溢れ出した涙と共に一気に話した。

話し終えたら、桜の目が一瞬見開かれた。

私は流れる涙をハンカチで押さえて、桜の顔をそれ以上見る事が出来なかった。

「バカだね、郁は」
「あんた、バカ？」

ガタっという音と共に、桜の声と後ろの女の子の声が重なって。

「なに言ってるの、りょうじ」
と言う声が後を追った。

りょうじ……

後ろを振り返ると、そこにはさっきの綺麗な髪の子が立っていた。
瞬間頭の中でフラッシュバック。

そうあの駅のホームで圭吾君の腕に絡んでいたあの女の子。

あまりの驚きに涙が引っ込んでしまった。
僅かな沈黙の後、彼女の声が響き渡った。

「あんたは、ちつとも圭吾の事が分かってない。圭吾はね、今まで、
誰一人にだって自分から電話を掛けたことはないわよ。圭吾から何
処かに行こうなんて誘ってくれたことなんて一度だって無かったわ。
人がどんなに、面白い話をしたって、ちつとも笑ってくれない。い
つだって、本に負けて。それがなに？メール貰っても？出掛け
ても？あんたはちつとも圭吾の気持ちの事なんて考えたことないで
しょ。一度しか好きって言うてもらったことがないって。私なんか
半年付き合ってたって、一回もそんな事言われたことないわよ。こん
なの子に私が、私が。」

それはすぎましい勢いで。
最後は涙声で。

歯を食いしばりながら私を見下ろす彼女は今でも圭吾君を好きなんだって全身でそう言っているみたいだった。

ドクドクと周りに聞えてしまうのではないかというほどの鼓動。何が起きたのか分からないし、分かりたくもなかった。

ただただ情けないだけの私が出た。すると桜が席を立って、興奮しているりょうこさんの前に手を出した。

「私、沢渡桜。宜しくね。」

そう言つてりょうこさんの手を取るとつかつかと出口に向かっていて引張って行く？

振り返った桜は

「今ので良く分かったでしょ。自分の気持ちを言うこともせずには相手の気持ちばかり求めちゃ駄目なの。あとは良く考えなさい。そうそう後ろの友達の人、ちょっとこの子と出掛けるから、解散ね、じゃあ」

そういって、店から出てしまった。

残されたのは、2人分のケーキと紅茶、そして、伝票だった。

二人乗り

あれほど楽しみにしていた花火大会。

今俺は、いつもの待ち合わせ場所で郁を待っている。

本当はお揃いで。とほんの少しだけ頭を過ぎったのだが、そんなものは持っているはずもなく。

一人で男物の着物を買いに行くなんて事は出来なかった。

結局いつもの格好でこの場所に立っている。

郁は俺の駅まで来ると言ったのだが、浴衣姿の郁を一人で電車に乗せることなんて出来ないだろ。

なんで分からないんだろう。

ちよつと不機嫌な気持ちのまま、この駅で待ち合わせをするとメールを打ったんだ。

メールでよかった、郁にあんな不機嫌な顔見せられないから。

結局あの後、俺は郁になにも言えなかった。

だからあの気まずい雰囲気のまま

腕を組み、俯きかげんに郁を待つ。

遠くでカランコロンと下駄がなる音がした。

少しだけ踵を引きずるような歩き方。

郁だ。

足音だけで分かっってしまうなんて。

どんだけ俺は郁のこと好きなんだか……

顔を上げた俺の前に現れた郁は、約束通り浴衣姿で。

息を呑むという経験を初めてした。

一度吸い込んだ息を呑み込んでしまった。

小説には度々出てくるこの表現。

嘘くせえと思っていたのだが。

なるほど、納得だ。

約束はしてくれただが、あんな別れ方をして、もしかしたらという気持ちがあっただけにその嬉しさは相当なもの。

郁も始めに見た顔はどことなく不安そうな顔をしたが、きっと俺の顔が目に入ったのだろう少しだけ頬を赤らめてニコツと笑ってくれた。

自分の顔は前にいる郁と同じ位赤かったと思う。

何せ俺は一瞬で体が熱くなったのだから。

セーラー服ともワンピースとも違うそれ。

一人で着たのだろうか？

歩いてきたようだが、浴衣の乱れは全くなく。衿の抜き加減も全くいやらしくもなく。

髪を三つ編にしてから結い上げたその髪型は、容赦なく首筋をあらわにするもので。

大きい朝顔の浴衣は、郁の柔らかいイメージそのもの。

思わずごくりと唾を飲み込んでしまいそうになった。

やっぱり一人で電車に乗せなくて正解だな。

「おまたせ」

と消えてしまいそうな声なのは照れがあるのだろう。

「待つてないよ、浴衣淒く似合ってる。」
それ以上言葉が出てこなくて、そっと郁の手をとった。

風呂上りなのか、隣に並ぶ郁からは一步踏み出す度に、甘い石鹸の香りがした。

まだ時間が早いせいか、人もそんなに多くはなかったが、郁の隣に人が並んで歩くのをみると変に感ぐってしまう。
もっと向こうに行きやがれってな具合に。
いつも以上に指先に力がこもった。

改札を潜って駅のホームへ。

一緒に電車に乗るのは初めてということに気がついた。
郁も同じことを思ったようで、2人で顔を見合わせて笑った。

電車を待つ間、2人で会話をするんだけど、どうしたって、郁の首筋に目がいつてしまう。

白くて綺麗な肌が、目について離れなかった。

そんなこんなで、郁の気持ちはどうなんて事、すっ飛んでしまった。
電車の中もさほど混んでいなくて、いつものようにドアの前へと進んでいく。

郁をドアの前に寄りかからせて、自分は郁を覆うように立ってみる。
ふと、あの日の郁を思い出してしまった。

こんな華奢な体で、大勢の人に押しつぶされるなんて、さぞかし苦しかっただろう。

それよりなにより、郁に密着した野郎がいるかと思うと、本気で転校を考えたくなる位だ。
マジで笑って悪かった。
ふいに郁が顔を上げた。

圭吾君もしかして、今思い出してたでしょ

俺にだけ聞えるような小さい声で少し頬を膨らませて。その顔は止めてくれたって。何だか煽られてるみたいなのが。つり革を持つ手を額に当てて、顔の熱を確かめた。大丈夫か俺？

声には出さず曖昧に笑ってみせた。

車掌のアナウンスが会場となる俺の地元の駅名を告げた。

そつと郁の肩に手を掛けてホームに降り立つ。

一緒に電車からは花火大会へ行くだろう浴衣姿もちらほら見えた。

「初めて降りたよ」
と微笑む郁。

心の中で、これからはちよくちよく降りて欲しいものだと思ってみる。

自転車置き場まで一緒に歩いて、自転車を取り出す。

自分の自転車ではなく、荷台のある母さんの自転車を借りてきた。

まだ、明るくて花火大会までは時間がある。

俺は郁を自分の小学校へと誘ってみた。

零れんばかりの笑顔で

「うん」

と答えてくれた郁。

いつもの自分の風景に郁が居ることが無性に嬉しかった。

もしかして、無理と断れるかもしれないと思いながら、自転車の荷台を勧めると

間髪入れずに返事がきた。

「重たいって言ったら、泣いちゃうからね」

と。

舌をだしながら、郁は遠慮がちにチヨコンと荷台に腰掛けた。

気合を入れて、ペダルを踏み出すと全く抵抗がなくて、普段男を乗せているせいだろうが、軽いなんてもんじゃなかった。

ふざけて

「重いかも」

って言ったら、浴衣なのに自転車から飛び降りようとして、一瞬にして背中が凍った。

慌てて

「嘘に決まってる」

って言ったら

「私も冗談だよ」

って。

顔が見えないから、分からないけれど怒ったかもな。

座った時と同様に遠慮がちに回す手。

落ちたら困るからと言って、郁の手を俺の腰にがっちり回させた。自分でそうさせた癖に、体の反応は正直で……

それをごまかすために、普段付き合いのない同級生の家まで説明を始めてしまった。

兎に角、何か話していないと落ち着かなくて。

微妙に当たる胸が、これ以上ないくらい心臓を加速させる。

失敗だったかも。嬉しさよりも、恥ずかしさが勝ってしまった。

でもこれから行く花火大会の雰囲気や、隣に並ぶ浴衣姿の郁に堪えられるのか、心配になるのも事実だ。

そのせいで益々口数の多くなる俺。

郁に話す隙を与えなかったほどだ。

ペダルをこぐ足にも力が入って、郁が下駄を飛ばさないように必死

で足を上げていることなんか気がつきもしなかった。

後になって、太ももが筋肉痛になったとの報告で判明したことがあった。

俺が勢いよくペダルをこいませいか、無駄に話しをしていたせいか、知らぬ間に学校の前に着いていた。

久し振りに来た学校。

いつもだったら、日曜日は閉まっている校門も今日は花火大会という事で開放してある。

会場からあまり離れていないこの場所は、結構穴場で、既に場所取りのビニールシートが校庭を半分埋めていた。

俺は校庭ではなく、中庭を通り校舎の前に。

どの教室だったとか、職員室はあっちだとかそんな説明。

そして一番連れて行きたかった飼育小屋の前。

前に聞いたことがあるんだ。

郁がアヒルを飼いたがっていた事。

でもそれは叶わぬ話でせめてと思っただ自分達の学校の飼育小屋には数匹のウサギと凶暴なにわとりしかいなかったって事。
なんであひるなんだ？と思っただけだ。

いつしか公園のアヒルに近寄ったけれど、みんな逃げてしまって近寄らせてくれなかったんだって残念がってたから。

郁は目を輝かせて、飼育小屋の前にへばりついた。

可愛いー

喜んでもらえたみたいで、ちょっとほっとした。

金網の前に座り込んだ郁。

上から見下ろすとそれはまた必要以上に俺を動揺させる姿で……。

だって、背中が、背中が。俺はそんな郁を見られるわけもなく、思わず背中を向けてしまった。目の毒だ。

そんなことばかり考えているって知ったらどう思われるだろう。

暫く、アヒルの観察をした郁は満足したらしく、アヒルにむかって

「また来るからね」
って言っていた。

アヒルにむかって”また来るから”って。

やっぱ郁だよな。

知らぬ間に顔が緩んでしまう。

そろそろ行こうか

また校庭に目を向ける。

子供の数も増えてきた。

校庭の角にあるジャングルジム。

あそこはこの学校でも一番のポイントだったりすると説明すると、私も登りたいと言い出した。

だから、浴衣だろって頭をコツンと押してみた。

冗談だつてって笑いながら目線はジャングルジムにある郁。

心の中で、結構本気だったんじゃないのか？なんて。

本当に郁と一緒にいると飽きることはないよな。

改めて思った。

学校を出て花火大会の会場へ。

人も増えてきたので、学校に自転車は置いていくことにした。

これ以上心臓が早く動いたら、危険だ。

自転車をこいだ時とは対照的に下駄の郁に合わせてゆっくりと歩き出した。

石鹸の香りはまだ変わらぬまま。

自転車を置いたのにも関わらず、どろしよつもなく、ドキドキしてしまう俺がいた。

二人乗り（後書き）

自転車の二人乗りどうしてももさせたくて……
本当は交通違反と分かっているのですが、お話の中でだけという事
でお許し下さい！

二人乗り2

引き出しにしまっていた浴衣を昨日の晩に引っ張りだしてカーテンレールに吊る下げて、付いてしまった折り目を伸ばして。

シャワーを浴びてバスタオルを巻いたまま、ベットに腰掛けて浴衣を見上げた。

お母さんにバレてしまった。

あら、やっぱり浴衣着るのね
って。

少しこそばゆかったり。

でも。ちょっと迷っているんだ。
着てっていいのかな？

何だかあの時と今とでは温度差がある感じ。
私の気持ちも上がったたり下がったり。
まるで空気が萎み始めた風船みたい。

結局あの後、桜とは話せぬままっていうか、話すことは話すけれど
肝心な涼子さんの話は全然してくれなくて。
何があったのかは凄く気になるのに、桜の口は貝になってしまった。
桜曰く、自分の気持ちが一番大事なんだよ。
って。分かってはいるんだけどね。

一応、一人で着物は着れるのだけれど、髪は今一自信がなくて、お
姉ちゃんに頼んである。

時計の針は刻々と進んで、もう支度をしなくてはいけない時間だっ

た。

頑張れ郁。

自分に気合を入れて、浴衣に袖を通した。

クローゼットの扉を開けて全身を写しながら、衿を抜いて。

おばあちゃんにもお母さんにも言われている事。

あわせもそうだけど、衿の抜き加減が一番重要なんだよ。

と。

頭の後ろに手を回して、衿を引っ張り上げて。

下げすぎず、上げすぎず。

この頃合が一番難しい。

大事なのは分かっているけれどこれでいいのか不安にもなる。

朱色の帯を蝶の形に整えて、正面を向きなおす。

こんな感じかな。

着崩れないように歩幅に注意して、お姉ちゃんの部屋のドアをノックした。

お菓子を頬張りながら、ドアを開けたお姉ちゃんは一つ頷いて私を部屋に入れてくれた。

私の部屋にはないドレスサーの前に座らせられて、おもむろに髪を一掴みされる。

「上手になったね、浴衣の着付け。」

どうやら、衿の抜き加減は合格のようだった。

昔かつらお姉ちゃんに髪を結ってもらっていた。

性格からは想像できないけれど、お姉ちゃんは結構器用で何でもこなすタイプ。

唯一、こなせないのが車の運転だったりということとは家族一致の内

緒の話。

これが一番危ないんだけど。

お姉ちゃんが櫛を使って三つ編を2つ結び上げて、手際がいいのに奇麗に揃って本当に上手。

その三つ編をクルクルつと上に巻き上げて、Uピンで留めてくれた。

髪を下ろしていた時とは感じが全く違って。

自分で見てもいい感じかな？思わず頬が緩んでしまった。

鏡越しに見えたお姉ちゃんもにっこり笑っていた。

仕上げにこれかな。

と呟いたお姉ちゃんは、淡いピンクのグロスを唇に乗せてくれた。

「郁、可愛い。襲われちゃうかもよ。」

なんて。

ないから、そんな事……。

浴衣と揃いのおばあちゃんお手製の巾着袋。

財布とハンカチにティッシュ、それに携帯。

何度も確認してしまった。

そして、出掛ける時間。

「折角、浴衣着てるんだから。」とお姉ちゃんが、駅まで送ってくれると言ってくれた。

一瞬引いてしまったものの、駅まで歩くのはちよつと辛いかもと思つた私はあの日以来乗っていかなかったお姉ちゃんの車に乗せてもらうことに。

ちよつと早いけれど、待ち合わせ場所に向かった。思ったよりお姉ちゃんの運転は怖くなくなって、やっぱり器用なのねと思ってしまうた。

待ち合わせ時間が近くづく程心臓が小波たつて、正直会つのが怖かつたけれど、車の中のお姉ちゃんのテンションが高くて少しだけ緊張が解けたみたいだった。いつもの公園まで送ってもらった。

「郁、帰りは……」といいかけたお姉ちゃんは、そっかそっだねと独り言を呟いた後

「あんまり遅くならずに帰って来るんだよ。」
つて送りだしてくれた。

「ありがと、気をつけて帰ってね。」
と車を見送った。

下駄の歯がアスファルトに反響して、コツンコツンと音を立てる。なるべく音を立てないように気を付けながら待ち合わせの場所へと一歩一歩進んでいく。

少しだけ、目線を下げてその場所へ向かう。
待ち合わせ時間まではまだ20分以上あるから、今日は私の方が先だろうと思つたのに。

私の視線にはナイキのシューズにインディゴブルーのジーンズ。スラリと長いその足は。
目線を上げるとやっぱり圭吾君で。

やっぱり怖い気持ちはあつただけだ。
だけど、圭吾君は零れんばかりの笑顔を見せてくれた。

浴衣で大丈夫みたいだった。

怖い気持ちは消えてくれたけれど、同時に恥ずかしさが出てきて。

「おまたせ」

声が少しかすれてしまった。

「待っていないよ、浴衣淒く似合ってる。」

そう言って私の手を取ってくれた。

まるで指先にポンプが付いているみたいに一瞬にして、手が汗ばんだのが分かってしまった。

桜の言葉を思い出す。

自分の気持ちが一番だよ。

そうだよ。今日こそ言わなくちゃだよ。

圭吾君の手の暖かさを感じながら、自分に誓った。

改札を通過して、2人で電車に乗るのが始めてなのに気がついた。

口に出すと圭吾君も同じことを考えていたようで、2人で顔を見合わせて笑ってしまった。

いつもは擦違っただけの電車に2人で乗ることが嬉しかった。

ホームに電車が着いて、手を繋いだまま電車に乗り込んだ。

奥のドアに立つと、目の前に圭吾君が。

背の高い圭吾君。

さほど混んではいなのだけど、他の乗客から押されないように覆うようにたっつけてくれた。

まるで、抱きしめられているみたい。

電車が少し揺れて背中がドアにぶつかった。

途端に思い出した、そうカエルになったあの日の私。

ふと、圭吾君を見上げるとなにやら考えているようで。

圭吾君もしかして、今思い出してたでしょ
と聞いてみたら、返事の変わりに微妙な笑い。
絶対思い出したんだ。
忘れて欲しいのに、本気でそう思った。

そのうち、アナウンスが圭吾君の使う駅名を告げて。
圭吾君の手が私の肩にかかってホームに促される。
いつもは通り過ぎるこの駅。

「初めて降りたよ」
と口にした。

そして、駅の外へ。電車の中から見える風景とは違って見えるから
不思議。自転車を取りに行つて、そうしたら、まだ時間があるから
つて圭吾君が通つていた小学校に誘つてくれた。
圭吾君の事をまた一つ知れる自分が嬉しかった。

そして、自転車の後ろに乗る？つて言つてくれた。
間髪入れずに返事をしてしまった。

やつてはいけないことだつて分かっているけど、やつて見たかつた
んだよ。

ちよつと懂れてました。
重たいつて言つたら泣いちゃうかもつて言つたのに、重いかも？な
んて。

こんな冗談を言えることが、少し距離が縮まったかもなんて思つて
しまつて、前を向いている圭吾君に見られる心配もなく、にやける
顔を抑えられなかった。

そんな私に衝撃が。

恥ずかしくつて、遠慮がちに回した手をお腹の前まで引つ張られて。
少し余裕の出たはずの私の緊張は突然マックス状態。

圭吾君の背中にぴったりとくっついて。
動揺して下駄が落ちないように必死で足を上げること集中してしまっただ。

圭吾君は自転車を漕ぎながら、友人の家や溜まり場だった公園などいろいろなところを説明してくれた。そして、学校へ。

校庭には花火をみる人が置いたシートがすでに半分ほど。結構穴場なのだと教えてくれた。

圭吾君が向かったのは飼育小屋だった。

そこにはアヒルちゃんがいて。

前に話したアヒルの事を覚えていてくれたんだ。

たわいもない会話を覚えていてくれたことも嬉しくて。

本当に圭吾君の事を分かっていたいなかたのは自分の方だって改めて思った。

金網ごしにアヒルちゃんを堪能して、立ち上がった。

いざ、花火大会の会場へと。

学校を出る時に、ジャングルジムの上でよくみたよって。

私も上がってみたかったけれど止められてしまった。

ちよつと残念だったりして。

自転車を学校へ置いて、2人で並んで歩くことに。

私の歩幅をちゃんと気にしてくれて、ちよつとさっきの自転車で太ももが張ってる気がしたけれど、圭吾君と並んで歩けることが嬉しくってそんなことは片隅に。

私の頭の中では、圭吾君にいつ自分の気持ちを伝えればいいのか、そんな考えがグルグルと巡っていた。

香り

「結構な人だね。私こんな近くで花火見るの初めてかもしれない」
郁が顔を向けて話しかけてくれるけれど、その 何ていうか、い
つもと違う浴衣姿の郁を直視出来なくて。

耳元に纏わりつく虫を払う振りをしながら

「結構大きく見えるよ」

とそっぽを向きながら言ってしまった。

さっきから、俺の鼻腔をくすぐる郁の香りと、どうしたって目線を
下げると入ってしまう首筋にどうしようもない程の胸の高鳴り。

繋ぐ手は、多分俺だろう緊張からくる汗でしっとりとして湿っていて。

中学生かっているの。

郁と一緒にいると、初めての経験が多くて、正直どう対処したら
いいのか良く分からないんだ。

慎吾曰く、思ったことを口にするると嬉しいんじゃないのか？なんて
そんなことを言ってたけれど、俺にはさっきの浴衣似合ってるで精
一杯だ。

それに、この気持ち正直に話したら引かれそうだなぞ。

こんなことなら敬遠していた恋愛小説でも読んでりゃよかったかも。
人の熱気に押されながら、繋いだ手をしっかりと握り直した。

夜店が隙間なく並んだ土手まで来るといろいろな匂いが入り混じっ
て、郁の香りも薄らいできた。ほっとした自分と残念に思う自分。
郁はというと既に屋台を物色中らしい。

目線がきよるきよるとしてている。

マジ可愛い。

首筋同様、会った時に目に入った郁の唇。

いつもとは違って、少しだけ濡れてキラキラと光っていた。どれだけ目の毒なんだか。つていうかこれに反応しない男がいない方がおかしいだろ。

浴衣にうなじに唇に。

大丈夫か俺。

この花火大会は土手を降りた河川敷がメインの会場で、いつもはサッカーや野球をするグラウンドいっぱい、主催者がビニールシートを敷いてくれている。

家族連れやカップルなど結構の人が既に席を確保しているようだった。

ざっと見渡して比較的すいている中ほどに座ることに。

その前にたこ焼きと焼きそば飲み物を買った。

準備万端だ。

郁が浴衣の裾を綺麗に揃えて座った瞬間に一発目の花火が打ちあがった。

オーピングにふさわしく大輪の花火が夜空いっぱい広がった。

あちらこちらから歓声や拍手。

郁はというと歓声を上げることもなく、拍手をするわけでもなく、花火の残り火というのだろうか疎らに落ちてくる火の粉をじっと見つめていた。

まだ立ったままの俺は郁の顔を上から覗く形で……

次の瞬間、すーっと郁の目線が下にさがって。

俺が見ているの気がついたのだろう。

一瞬はつとした後に

近くで見る花火って圧巻だね。突然お腹に音が響いてくるんだもん

びつくりしちゃったよ。それに凄く大きくて、思わず息を呑んじやった、と。

郁の顔を見れば喜んでくれたのがよく分かった。

ほっと一安心で俺はしゃがみこんだ。右側の郁を意識して、右手は郁の腰の後ろ辺りに。

少しだけ、触れる浴衣の袖がくすぐったかった。

一発目の花火から少し間をおいてから本格的な花火大会が始まった。定番の大輪の花火から始まったのだが、次からはスターマインと呼ばれる花火で間髪いれずに打ち上げられる花火は見事だった。

中にはUFOの形をしたものやキャンディの形をしたもの、それにハートの形をしたものまで、いろいろな形や色とりどりの花火。

郁もやつと気持ち追いついたようで、先程とは違い花火が上がる度に歓声をあげていた。

俺はというと、花火よりも隣にいる郁が気になってしまっ、夜空を見上げながらも半分の意味は郁に向かっていた。

暑さと緊張も手伝ってか喉が乾いて仕方がない。

ゆっくりと手を引き、さっき買ったばかりなのに、既に気の抜け始めたコーラを口に含んだ。

郁も少しは俺のことを気にしてくれているのだろうか？

そう考えて首を振った。

いいじゃないか、こんな郁を近くで見れるのだからと。

間違いなく、今ここにいるのは俺なのだからと。

何度繰り返し分らない自分への問いかけ。

この花火大会の会場に来てからというもの、郁は花火に見入っている。

俺はというと、いつもにも増して至近距離にいる郁に心臓が大きく鼓動を打ちまくって普段に増して気の利いた言葉も出てこなくて。ついつい、食べ物に頼ってしまう。

あの祭りの時のように、たこ焼きと焼きそばを半分づつに分けて。そんな俺とは対照的に花火を見ているせいだろうか、俺と違って箸の進まない郁。

あれだけ食べることが好きなのにだ。それも好物と豪語しているたこ焼き。

気になっていた。

俺が言葉が出てこないのと同様に郁もいつより言葉が少なくて。というよりは俺に対してなんだけど。

花火に向かっては何やら言っているんだよな。

花火も終盤に迫ってきたこともあり、思い切って聞いてみた。食べないの？と。

すると、ちよつと顔をしかめて言葉を濁した。

食べてもいいよ。

って。どうしたって言うんだ？

もしかして、腹の調子が悪いとか？それともトイレを気にしているのだろうか？

だとしたら、言い辛いよな、などと勝手に思っていたのだが。郁がやたらと浴衣の帯をさすっているのに気がついた。

もしかして、帯がきつくなると思ってたか？

それならそうと言ってくれればと思うのだが、それは男と女の違いなのかもしれないと考え直す。

どちらにしても、聞かない方がいいのかも知れないと。
俺は遠慮なく、郁のたこ焼きに串を刺して、口元に運ぶと。
郁の熱い視線を感じた。

やっぱり我慢しているんだろうな。

そう思うと何だかおかしくて、たこ焼きを郁の口元に持っていくと、
反射的に口を開けた郁。

ポンとたこ焼きを放りこんだ。

ちょうど大きめな花火が上がって郁の顔を照らす。

昼間見たいに明るくなって、郁のまんまるになった目が良く見えた。
固まったままの郁を尻目に

旨いよな

と言ってみると、口をもごもごさせたまま顔を俺と反対の方向に向
けてしまった。

恥ずかしかつたのかもしれないけれど、反対側には人が座っている
んだぞ。

そう思った傍から、ほら郁の隣にいる2人組。男は彼女を通りこし
て郁を見てないか？

頭で考えるより先に手が……。

郁の頭を横から自分に引き寄せてしまった。

そして今、俺の口元には郁の頭があるわけで。

やっと、たこ焼きと焼きそばのソースのおかげで紛れていた、郁の
からのシャンプーの香りがこれでもかというほど鼻孔をくすぐる。

俺は 気づかぬうちに郁の髪に唇を寄せていた。

腕から伝わる郁の強張った体。
押し返されないのは、嫌じゃないから？それとも押し返そうにも固まってしまったからなのか？
そんな事を考える余裕があったは不思議だった。
そして、これは花火がくれた力なのか、郁の髪に唇をのせたまま。
好きだ。

自然とその言葉が出てきた。
郁の気持ちじゃなくて、自分の気持ちなんだと。

すると俺の腕の中で動かなかった郁の手がすつと動いて、俺のシャツの裾を掴んだ。
そして、言っただ。

私も圭吾君が大好きだよ

と。
今度は俺が固まる番だった。

夜空の花火はクライマックスをむかえ、次々に上がり会場を切れ目なく明るくさせていた。
体いっぱいを感じるはずの花火の音も、これでもかとはかりに咲き誇る大輪の花も俺には全く記憶がなくて。

突然沸き上がった歓声と割れんばかりの拍手で我に返った。
宴の終わり。ひと際大きな最後の花火が上がったようだった。

花火が終わり会場から帰る人々がシートから立ち上がり始める。
離したくないと思ったが、さすがにこのままでいられるはずもなく

郁の頭から腕を下ろした。

目の前には残ってしまった郁のたこ焼きと焼きそば。

恥ずかしくて顔を見れないのは郁も一緒だったようだ。2人の視線はたこ焼きに注がれていた。

食べよう。

そう言っただけで俺は郁の手を引き、人の波に逆らって土手の斜面へ。

たこ焼きの入っていたビニール袋を地面に置き、そこに郁を導いた。もう少しだけ、2人でいたかったんだ。理由なんてなんでも良かった。

言葉少なに2人でたこ焼きを食べながら、店じまいをする屋台の人々を見下ろしていた。

そして、ぽつりと郁が

この角度だと、あんまり上を見上げなくても花火が見れそう。来年はここから見てみたいな

と。言い終えて直ぐに、慌て始めた郁。

独り言だよとか、来年は受験だとか何とか。

独り言なんかにさせるかよ。

だってそうだよ。

来週でもなく、来月でもなく、一年先の約束だよ。

自分でも抑えが効かないほど顔が緩んでしまっていた。

香り（後書き）

今は何月？大分時期はずれな話で……

おかげ様でこの話も無事？に50話になりました。

これも読みきて下さる皆様あつてのことです。

心より感謝申し上げます。

ありがとうございます！

あまり進展のない2人ですがまた応援して貰えると嬉しく思います。

香り2（前書き）

前回、主人公の名前を間違えた状態で投稿してしまいました。失礼致しました。

なんとかかさん様　メッセージで教えて下さり、どうもありがとうございました。ございました。非常に助かりました！嬉しかったです！

今回はいつもの倍の長さになってしまいました。ちょっと長いですが、読んで頂けると嬉しいです。

香り2

この前見たテレビで、脈が早い人はそれだけ心臓に負担が掛ってな
んて言ってたけれど。

私、非常にやばいんじゃないだろうか？

それは、暑いからでもなく、早足で歩いているわけでもなく、隣に
圭吾君がいるから。

この前のあの香水いっぱいのおばちゃんに電車で遭遇してからは、
においや香りに敏感になってしまった。一種のトラウマかもしれない。
ってトラウマってというのは大げさか。

ともかく、反応してしまう自分がいたりするんだ。

男の子＝汗臭いという図式がなんとなくあったけれど、そんな事は
全くなくて。

例えば胸を締め付けられてしまうようなその圭吾君の香り
に、ついクラクラしてしまったり。

後……花火大会が終わったら、自分の気持ちを伝えようって考えて
いるから余計にそう思うのかもしれないけれど。

このままじゃ、何を口走るか分からないよ、実はさっきもお姉ちゃ
んに突っ込まれた。

その独り言怪しいからって。

一つ呼吸を置いて、

「結構な人だね。私こんな近くで花火見るの初めてかもしれない」

上ずらなくて良かった。ただ会話をするだけなのに、いつも以上の緊張感。

さっきまでの私は良い感じだったのに。

頭の中で学校で会ったアヒルちゃん達を思い描く、リラックスだ。話掛けるタイミングが悪かったのか、圭吾君は顔の周りに纏わりついている虫を払いながら、結構大きく見えるよって横を向いて教えてくれた。

心の中でいけない想像。

あの人、地元の人って言ってたよな、同じ中学だと。一緒に見た事あるのかな、なんて。

駄目駄目、そんな昔の事考えちゃ。違う事、違う事。

一歩進む毎に圭吾君から香ってくるのは、シャンプーの匂いなんだろうか？ちよつと、気が緩むと容赦なく鼻をくすぐるこの香り。

そんな時、これまでとは比べ物にならない程、周りに人が。きつと目指す会場は近いんだらうな。

土手の上に差し掛かると、それは見事な光景で。大好きな屋台がいっぱいあるよ。

上手い具合にソースの香りも辺りに広がっていて、心臓の鼓動を抑えるのにはちょうど良かったかも。

だけど……

お祭りの時みたいに、フルコースっていうわけにはいかないだろうな。巾着を持った手でそつと帯をさすってしまう。

浴衣好きだけど、それが難点だったりするんだよね。

好きなだけ食べるときと苦しくなっちゃう、こんな時でも食欲がある事がおかしかった。

流れゆく人の波に紛れ、ゆっくりと土手を進む。

さつきから、圭吾君は口数が少なくなっているのに気がついた。けれど、時折合う目は優しい目をしていて、この前みたいな不安は全くと言っていいほど感じなかった。

急に進みが悪くなり、流れが止まった。小さな声で圭吾君がもつすぐだからと、教えてくれた。

その顔はとっても柔らかい顔で、やっと落ち着いた心を再び暴れさせる効果はばっちりだ。

次に私の視界に広がったのは、大きなグラウンドいっぱい広がるシートの中。

市の観光協会が力を入れているだけあってとっても準備が良いんだよ、と。

シート近くの屋台で、圭吾君はたこ焼きと焼きそばと飲み物を買ってくれた。

目の前の好物を食べられないほど辛いものはないのに。私の事情を知らない圭吾君は、これははずせないよな、とこれまた満面の笑みを見せてくれた。必殺スマイルと命名します。

人のざわめきで良く聞き取れなかったけれど、どうやらもうすぐ火花が打ち上がるらしい。

圭吾君がシートの中程に連れてきてくれたその時

ダイレクトに伝わる花火の音、そうそれは体中に響き渡って。

夜空には、これでもかといわんばかりの大輪の花。

初めて間近でみる花火に圧倒されてしまって、思わず息を呑んでしまふ。

息を止めて、ゆっくりと落ちてくる花火の残り火を消えるまで目で追っていた。

周りから聞こえる歓声と拍手に我に返り、私の目の前でまだ立っていた圭吾君と目が合った。

よっぽど間抜けな顔をしていたに違いない。

穏やかな笑みのような、それでいて笑いを堪えているかのような。ぼーとした顔を見られて恥ずかしくって、今見たばかりの花火の事を言ったと思う。正直なんて言ったのかは記憶にないんだけど。

だって、その後圭吾君は私とぴったりくっついて座るから。

圭吾君の右手がね、少しだけ浴衣を掠るの。

分かっているこーやってぴったりと座るのは、ここは花火大会の会場でいっぱいの人がここに座るからってということ。

自意識過剰だって思われちゃうかもしれないけれど、その距離は大事にされているように思えて、頭のとっぺんから足の指先までもが緊張が走った。

頭の中は爆発寸前で、花火に集中とばかりに隣の圭吾君を見ることなく、ずっと夜空を見上げっぱなし。

勿論、花火はとっても綺麗で、見飽きる事は全くなくて。ただ上をずっと向きすぎてちよつと首が痛かっただけ。

途中、圭吾君がコーラに手を伸ばした。

すーっと離れていく腕にちよつとほつとしてしまって、圭吾君に分からないように小さく息を吐いた。

さっきまではあんなに食べたいと思っていたたこ焼き。

あんまり食べれないかもと思ったのはあくまで帯の話だけの話で、食欲はばっちりあったはずなのに……。もうすぐ近付く告白のタイ

ムリミットが近付いたせいなのか、ちつとも箸が進んでくれなかった。

自分自身にまだ緊張するのは早いからと、花火に向かっていちいち感想を言ってみたりして気を紛らわせる私。

そんな状態で圭吾君の顔なんて見る余裕もなくて、話し掛ける事だつて出来なかった。

私が食べない事を不思議に思ったのだろう、圭吾君が”食べないの？”ってちよつと心配そうに聞いてくれた。そりゃそうだと思う、私だつてこんな事は初めてだよ、これぞ予想外だ。

まだ帯は大丈夫そうだけど。

実際は告白前で緊張して、食べれませんだなんて言えるわけがない。そう思いながら、理由は言わずに、食べてもいいよって言っただ。

圭吾君は”じゃあ遠慮なくつて”つてたこ焼きに箸をつけて口元に

瞬間、私の頭の中はとんでもないことを考えてしまっていた。

たこ焼き相手に

羨ましい、つて。

きつとたこ焼きを熱い視線で見ってしまったんだと思う。

圭吾君の口元まで運ばれたたこ焼きは、あろうことが私の目の前にやってきた。

それに反応して、口を開けてしまった私。次の瞬間、ぼんと私の口の中に。

これつて、もしかして間接キスとかいうものでしょうか！

圭吾君は何とも思つてないみたいだけど、これつてそうだよね。

たこ焼きが羨ましいつて思ったのは、ちよつと前に座るカップルが

花火の合間に唇が触れ合うのが目に入ってしまったからだった。

自分の心の中を見透かされているわけじゃないのに、圭吾君は何とも思っていないって言うのに、そんな事を思ってしまった私は多分じゃなくて、顔が真っ赤。

花火が上がって、会場は昏間みたいに明るくなって人々を照らしている。

私もその中の一人。堪らなくなって、あからさまに横を向いてしまった。

突然振りかえった私に、隣に座る人が何事だ？と視線を向けたその時だった。

一瞬、何が起こったか分からなかった。

気がついたら、さつきよりも、ずっと近く。近くなってもんじやない。

私は圭吾君の腕の中にいた。

夢じゃないよね。そう思っけれど首から肩にかけて見える圭吾君の腕。

そして、私の頭の上に圭吾君の重みを感じた。

私の髪に、圭吾君が顔を埋めたみたくて。

周りに聞こえないような小さな声だったけれど、私の頭にダイレクトに伝わる圭吾君の響き。

好きだ。

の言葉。泣きそうになった。

まだ好きだって思ってくれている事に、違うな。そうかなと思う自

分とまだ信じられない自分がいたんだ。

本当は、私が言おうと思っていた言葉。

頑張れ郁、自分にエールを送って、圭吾君のシャツを掴んで少しだけその勇気をわけて貰って。

私も圭吾君が大好きだよ

と。初めて伝えることが出来た。

圭吾君は何も言ってくれなかったけれど、今まで以上に回された腕に力が入ったから。
包み込むように抱きしめてくれたから。

あれだけ夢中になっていた花火なのに、気がいたら最後の花火を打ち上げた後だった。

シートからは帰る人々が一齐に立ち上がって私たちの横を通り過ぎていく。

首筋を風が撫で、圭吾君の手が私から離れことに気がついた。

それは、今日のこの楽しい時間が終わってしまう事を意味する。

ちよつと近付いた2人の距離。もう少しだけでも一緒にいたいと思ってしまうのは、欲張りになってしまったから？

そうは思いつけれど、真正面から圭吾君の顔を見れなくて、目の前にあるたこ焼きに目が行ってしまう。

圭吾君が何かを言っ、返事をしてしまったけれど本当はなんて言っただか聞こえなかった。

そして、手を引かれ着いたのは先程いた場所を見下ろせる土手の斜面だった。

もう少しだけ、タイムリミットが伸びた事に嬉しさを隠しきれなく

て、多分ずつとにやけた顔をしていたと思う。
私の食欲も復活して、2人でたこ焼きを頬張った。
気が緩んだんだと思う。

この角度だと、あんまり上を見上げなくても花火が見れそう。来年はここから見てみたいな。

圭吾君が私を見る目で、またやらかした事に気がついてしまった。せつかく、お姉ちゃんが釘をさしてくれたというのに。凶々しいよね、だって来年の事を話すなんて。慌てて、思いつく限りの事を言ってみたら、突然私の口の前に圭吾君の人差し指が。

来年は、ここに場所取っておくから。

眼鏡の奥の透き通った目を細めて言ってくれた。
人の波が落ち着き始めてから、その場所を立ちあがった。

来た時と同じように、私の駅まで送ってくれて。
迎えに来てくれたお姉ちゃんに、挨拶までしてくれた。

お姉ちゃんの方がぎこちなくて、隣で見ている私は面白くて笑いをこらえるのに必死で。

2人に、軽く睨まれてしまった。

それが、緊張の糸を解いたみたいにな、雰囲気は柔らかくなって。

そこで、別れるのかと思いきや、お姉ちゃんは暇だからと圭吾君を無理に車に乗せてしまつて。乗ってしまったが最後、私たちはお姉ちゃんから質問攻め。

さすがの圭吾君も頭をぼりぼりしながら、苦笑いしていた。

思いがけない、時間の延長もあと言つ間に終わってしまう。今度こそ、本当のバイバイだ。

帰り道、以前よりもずっと上達したお姉ちゃんの運転。

2人きりになった、その車内では更に激しい突っ込みが入ったのだ。
つた。

登校日

やばいって。

何度も頭を振って追い出してみるけれど、”大好き”と言ってくれた郁のあの声が頭から離れない。

あんなに悩んでいたのが、もうずっと前のような、そんな気がした。

「かったりいよな、何で高校にもなって登校日があるんだって圭吾お前聞いてる？」

目の前にどアップになった真治の顔、思わずのけ反ってしまった。

「聞いてない。」

自分の世界に浸ってしまったのがばれてしまったようだ。

思いっきり、にやけた顔で大きく頷いている真治。

こいつが口を開く前に

「言わないぞ」

と凄んでみたが、真治には全く効かないらしく。

「おっ、とうとう郁ちゃんと」

真治の言葉が終わらないうちに、思いっきり頭をひっぱたいた。

「暴力反対！凶星だからって照れてるんじゃないやねえよ。」
頭をさすりながら、まだにやけてやがる。

「凶星ってなんだよ。意味分かんねえ」
そのにやけた顔を鎮めやがれってんだ。

すると真治が俺の耳元で囁きやがった。

「決まってるじゃん。あれだよ、あれ。」

「何にもしてない。」と反射的に答えてしまった。言った瞬間に、またやられたと思った。

俺って、騙され易いのか？誘導尋問ってやつだろこれ。

「ふーん。そうなんだ。へえ〜」

まだ何か言いたそうな顔をしていたが、そこに助けのチャイムが鳴った。

「また、後でな。」

そう言い、背中を向け自分の席に腰を下ろす、そうこいつは俺の前の席だったりする。

何が後でだ、後はない。

つてつか、報告することなんて無いし、もしあっても言うわけないだろと心の中で呟いた。

午前中といえど、3階の窓際とあってかなりの日差しだ。

時折吹く風がカーテンを揺らす。入ってくる風は既に熱風だ。

頼りない扇風機が頭上で唸っているけれど、そんなものは対して役に立たなくて、休み慣れしてしまった俺達はこの教室の中いっばいに気だるい雰囲気醸し出していた。

だけど、俺の隣のこいつだけは違っていたようだ。真治が去ると、直ぐに声を掛けられた。

「久しぶりだね、浅野君。」

小首を傾げて、にこつとしているこいつ。

夏休み直前に席替えしたから、名前もはっきり思い出せない。

取り敢えず”ああ”と返事してみた。

夏休みはもう何処かに行った？宿題はやった？だの質問されている心の中ではお前は誰だ？何なんだ？とも思ったが、その質問に答えられている俺がいた。

変わったか、俺？

そして

「さつき、真治君と何話してたの？楽しそうだったね」ときた。

さつきの会話を思い出し、なんでお前に言わなくちゃいけないんだと反射的に横目で睨んでしまった。

つい、真治にする癖が出てしまったようで、マズイとは思ったが取り繕うもの何だか変な気がして、そのまま黒板をじっと見つめていた。

隣のこいつはやつと静かになつてくれた。

というか、さつきの言葉を最後に何も話さなくなったというのが正解か？

チャイムに遅れて入ってきた担任が、隣のこいつと同じような質問をして、最後には規律有る生活を送るようになんて言ってる。

机の上に投げ出した指にカーテンから零れた日差しが当たる。

指先を見つめながら、この指が郁の髪を掠めたんだと思うと……。

髪に触れたのを思い出すだけで、こんなに意識してしまっなんて。

この先、もっと郁に触れることが出来たのなら　俺はどうなってしまうのだろうか。

1限の現国が終わる時間をチャイムが告げると、隣の席の女は足早に廊下へ向かっていった。それを目の端で追いながら、また郁の事を考えていた。

隣の席が郁だったら良かったのにと、いや隣の席だなんて贅沢は言

わない、せめて同じ学校だったならば。何度思った事だろう。

次の時間になっても、隣の席は空いたままだった。

具合でも悪くなつたか？位にしか思わなかつたのだが、どうやらそれは俺のせいだったらしい。

今、俺の席の前には3人の女がいる。

隣の席の美奈子という女がいかに俺に会いたがつていたかを、淡々と語っている。

どうやら、先学期の終わり雰囲気柔らかくなつた俺に期待をしたらしいとのこと。

俺はただ黙つて、彼女達の話を上の方で聞いていた。

何が言いたいのかさっぱり分からなかつた。

笑つて会話してやれとでも言いたいのだろうか。

そこに、見ていられなくなつたのが真治が首を突っ込んできた。

「まあまあ。こいつさ、今彼女とすっげー良い感じで周りの子が目に入らないんだよね。だからさ、簡便してやってよ、なつ。」

気持ち悪い程の笑みを浮かべてそう言つた真治。

何も言う気にはなれず、俺は一人揺れるカーテンを目で追つていた。その言葉を聞いてからか、彼女達は何処かにいったようだった。

「お前さあ、分かりやす過ぎ。もうちよつとこう、上手く出来ないかねえ、相手は女の子だからさ、こんな圭吾見たらきつと郁ちやんに。なつ」

真治は言葉を大きく省略してそう言つた。

「お前は上手くやりすぎだよ。」
と言つてやつた。

暫くして、隣の椅子が引かれる音が。

俺はまた前を向いたまま

「さつきは、悪かった本気で睨んだわけじゃないから。」
言われたからじゃないからな。前の席で肩を揺らす真治の背中にそ
う呟いた。

「私こそ、べらべらとごめんね。」
か細い声が返ってきた。

「いや」
そう短く返事をした。

その瞬間、真治の肩より一層大きく揺れた。
俺は真治の椅子を足で蹴飛ばしてやるうかと思って踏みとどまった。
丁度、携帯が震えだしたからだ。机の下で、こっそり携帯を開くと
1通の新着メール。
送り主はあの桜だった。

題名 「今日の郁」

今日の郁？これが気にならないはずがない。

写メだった。

そこには教室で、不意打ちで取られたのだろう友人らしき女と自然
にほほ笑む郁が映っていた。郁も今日は学校だ。

これは永久保存版だな、自分の頬の緩みが直りそうもない。いつも
は苦手な桜に感謝しようと思った瞬間に目に入ってしまった。

郁の後方に小さく映った一人の男が。

その視線は何だか郁に向いているような気がしてならなかった。

愛おしそうな顔をしているそいつ。

さつきまでの、郁のあの声も吹っ飛ぶ程の衝撃だったかもしれない。
暫く元に戻らなそうだと思った頬が引き締まるというか、全身が固

まっている。

焦りだす俺。このくそ暑い教室にいるっていうのに、背中がすーっと凍ったようなそんな感じ。違ってくれよと願ってみるも、あれだけ可愛い郁の事を好きになる奴はきつと沢山……。桜は、気がついていて俺にこの写メを送ってきたのだろうか？

授業中だというのに、俺は立ち上がってしまった。

そして、勝手に口が動いた。

「先生、具合が悪いので帰ります。」

と。何事か？と振り返った真治に一つ頷いた。

「大丈夫か？浅野。一人で帰れるか？」

担任の言葉に

「はい、今ならまだ帰れそうなので。」

そう言ってお辞儀をした。一刻も早く学校を出たかった。

「おう、じゃあ職員室で早退届出して先生の机に置いて帰りなさい。」

「

はい。」

そう言っ顔を上げずに教室を出た。

職員室に行くのももどかしかった。

登校日2

「おはようっ。随分とすっきりした顔してるねえ。うん良かった良かった。」

桜は私の顔を見て満足そうに頷いている。

自分では分からないけれど、そんなに違うものかな？

「幸せそうな顔してるよ、郁。いいなあ私も花火ついてけば良かったよ。」

あのいつもの悪戯な笑みで私を見ていた。桜は私の心の中が分かるみたいですんなりと答えをくれた。

そう。やっと、自分の思いを圭吾君に告げることが出来たのは、桜のおかげだ。

そして、彼女、涼子さんのおかげでもある。

「幸せそうじゃなくて、幸せなんだから。」
後ろ手に鞆を持ってくると桜に背を向けた。
言ってしまった言葉があまりにも恥ずかしかったから。

真後ろになつた桜がぼそっと

耳が真つ赤だよ

って呟いたのが聞こえた。

あの時は花火の雰囲気の後押しして貰ったのも大きくて。

その後は照れもでてしまつてか、ちよつとどきまぎするもの事実だったり。

だけど、思いだすだけで顔がほころんでしまつたり。

また、思いにふけってしまったようで、後ろからふくんと意味ありげにと言っている桜には全く気がつかなくなった。

久しぶりの教室は、いつもにも増して賑やかだった。

部活をしている子もそうでない子も、結構なクラスメートがこんがり日焼けしていて、夏を楽しんでいるようだった。

桜は元タイムドア派だから、少数の色白組み。

私は中間といったところかな。

「郁っ久しぶり。」

あっという間に席の周りを囲まれて、ちょっと驚いた。

なんでも、先日圭吾君と行った映画館に今私の目の前にいる、美穂がいたらしく、私たちの事を見かけたらしい。

私に彼が出来たというのは、桜が話してくれたお陰?!で皆に知れ渡っているけれど、私の口からは詳しく話たことが無かったからなのかもしれないけれど。

何なの、この質問の嵐は。

中には調子に乗って、恥ずかしくなる質問まで飛び出す始末。

何処まで進んだかって。

そんな事言えるわけないのに。

完全におもちゃのようになっちゃった。

他人に頼っちゃいけないって思うけれど、いつもだったら、助け舟を出してくれる桜は、桜は何処に？

教室に入ってくるまでは一緒だったのに、はて？

教室をぐるりと見渡すと、慌てて手元を隠す桜が壁際に一人立っていた。

どうしてあんなところにいるんだろう？

不思議に思っ、見つめてしまった。

桜は、私に気がついて鼻歌を歌いながらこちらに向かって歩いてくる。

そして

「はい、これでお終い。郁は恥ずかしがりやだからね。それ以上聞いても何にも話さないんじゃないかな。」

八キ八キと話す桜に私の周りにいたクラスメートが一斉に黙ってくれた。

やっぱり一目置かれていた人は違うんだなこれが。

あんまり嫌味に聞こえない所も凄いなだよ。

私は自分の事を言ってくれたというのに他人事のように桜を眺めてしまった。

桜は、私の顔を見てばっちりウィンク。

私は小さな声で”サンキュ”って返した。

やっぱり誰が見てもかっこいいって思うんだよね。

美穂が興奮しながら圭吾君の事を聞いてきたのを思い起こす。

きっと圭吾君だから、圭吾君だったからあんなにも話を聞きたがってたんだと思う。

何処で知り合ったとか、同じ年？だとか。

だって、桜が私の事を言った時だって、そこまでは興味もなさそうだったのに。

美穂は去り際に、今度彼の友達とカラコンしようよ。なんて言ってたっけ。

圭吾君とカラオケ……想像出来ないかも。

けどあの低い声。

きっと歌も上手なんだろうな。

勝手に妄想に入ってしまった私。

思いっきり頭を振って、マイクを持った圭吾君を頭の中から追い出した。

駄目だ。そんな圭吾君を美穂達に見せるのは絶対嫌なんだから。その前に、音程の外れる私の歌は絶対に圭吾君には聞かせられないんだけど。自然と大きなため息がでてしまった。

「夏ボケか？」

笑いをこらえたような震える声が背後から聞こえた。少し掠れたその声は大山だ。

「夏ボケって何？夏バテでしょ？」

振りかえって、そう言くと大山は

「じゃあ色ボケ？」

なんて言い出した。

「どっちにしても、ボケてませんから。」

ちよっとむくれて、言い返すと。

「良い事あつたんだろ？良い顔してるよ。」

って、無邪気な笑顔。

ごつくって、男って感じの大山だけれど、今見せた笑顔が少年っぽくて大山こそ良い顔してるじゃんって思った。

きっと桜はそんな大山の事が気になっているんだろうなって私は思ってるんだ。

桜と話をしている時にたまに思ってた、私の頭をすり抜ける桜の視線に。

きっとそれは大山に向かっているんだろうなって。

だけど、それを言ったら何を反撃されるか恐ろしくて口にしたことがないんだけど。

私じゃ頼りないのは重々承知だけど、いつかきくと桜は私に話して

くれるだろうから、その時までにはじつと我慢しようって決めているんだ。

秘密だよ

いつかノートに書いたみたいに大山にそう告げていた。

エアコンの効いた快適な部屋で過ごす習慣はめっきり私の体を怠けさせてしまって、蒸し暑いこの教室で話す先生の声はあんまり耳に入ってきてくれなかった。

やっとの事で学校が終わって、帰り支度を始めるとまた美穂達が近寄ってきた。

「郁、ちよつと本気でカラコン考えてくれない？」

ちよつとすぎるようなそんな声。

カラコンって……。

桜にだって会わせていないっていうのに。

それに、私が圭吾君を誘って合コン?! 駄目駄目絶対に考えられない。

「ごめんね。」

これ以上何か言われるのはちよつとまずい。それだけ告げて、美穂達から逃げるように鞆を掴んで机から離れた。

幸い今は夏休みだ、そのうち諦めてくれるだろうと期待を込めて。

ちつらと桜を見ると、それだけで分かってくれたようで携帯を握ったその手を軽く振り上げてくれた。

後でメールするね。

そんな合図だと思う。

美穂が何やら言っていたけれど、言葉を聞かずに

「じゃあね」

と教室を出た。

追いかけてくるとは思わなかったけれど、なんとなく急ぎ足に。

昇降口は、普段部活の子も休みとあつてか結構な人がいた。

今日は久しぶりに桜と帰ろうと思っただけだなあ。

いつか、桜の好きなあの喫茶店からメールでもしよう。

そう思いながら、校門に近付くと前を歩く女の子達が何やらきゃあきゃあしているのが聞こえた。

あんまり気にしていなかったけれど、一歩校門を出たその先にはガードレールに腰かける圭吾君がいた。

瞬間後ろを振り返り、美穂がない事を確認する　　うわっもう昇降口にいるじゃん。

急ぎ足で教室を出たのは正解だった。

私は、圭吾君に挨拶するよりも先に圭吾君の腕を捕って、走り出した。

「いつ郁？」

呆気にとられているみたいだったけれど、ごめんね説明は後でするからと皆が通る駅への道から一本外れた裏路地に圭吾君を引っ張りこんでしまった。

やっと落ち着けて一息吐いた。

「郁、どうした？」

その声にはっとした。

まだ掴んだままの圭吾君の腕をそつと放す。

何から話せばいいのか分からずに曖昧に笑ってしまった。

すると、圭吾君はがばつと抱きしめ始めたんだ。

やっと落ち着いた心臓はまた逆戻り、私は何が何だか分からずあたふたしてしまう。

それは、一瞬の事だった。直ぐに圭吾君は私から離れて

「ごめん、調子に乗った。」と一言。

またもや曖昧に笑うことしか出来ない私だった。

勢いで

勢いで来てしまった。

まだ、郁の事を知らないあの頃、名前も知らない郁に会いたい一心でこの学校までやってきた時以来だ。

あの時と同じように校門の前のガードレールに寄りかかって郁を待つ。

早退したかいあったか、まだ郁の学校は下校時間をむかえていなかった。

一言でいうとそれは嫉妬というものだろう、俺の知らない学校での郁。

机に座って友達と話す姿だったり、授業を受けたり、学食や弁当を食べる学校での郁。

ずっと一緒の空間ですごせばどんなに良い事だろう。

離れてしまうなんて大げさかもしれないが、同じ時を過ごしたいと考えてしまうのは欲張りなのだろうか。

今こうしている時も郁の周りには沢山のクラスメイトがいると思うとやるせない気持ちになってしまう。

特に……あの写真に写っていた男。あの男の目は穏やかな見守るようなそんな目をしていた。

郁は、俺の。

俺の彼女なのにと。

だからと言ってここまで来たとしても何の事実も変わりはないのだが。

はあと大きなため息しか出てこなかった。

どの位この場にいたのだろうか。どこかぼーっとしていた頭の中にうちの学校とは少し音色の違う鐘の音が響いてきた。

どうやら、終わったらしい。暫くすると、正面口から出てくる生徒達。目を細めて、じっと前を見据えた。

ここにいる俺を見て郁はどんな顔をするのだろうか。

俺はなんと郁に話しかければいいのだろうか。いつしかも思った自分への問い。

もし、あの男と一緒に校門から出てきたら。考えたくないことを考えてしまう。

いいさ、その時は思いっきり郁を引きよせて見せつけてやればいいだけの話だ。

郁には俺がいるんだって事を見せつけてやれば。自分の中に沸き起こるどす黒い感情。

只でさえ恥ずかしがる郁が良い顔をす訳もないことは承知の上だ。そんな事を考えていたら。

突然目の前に現れて、袖を掴まれて。

俺、郁に引きずられている?!

何にからだか分からないが、追ってから逃げているようなのでついて来ているのだが。足が止まったのは小さな裏路地で。

俺の袖をパツと放した、郁を見ると。

走ったせいで肩を弾ませ、赤く上気した顔で、零れるような笑みを浮かべている。

自分でも、驚いた。

気がついたら、腕の中に郁がいた。無意識の行動。って俺思いつき

り怪しい奴じゃねえか？

郁は固まってしまっているし。

慌てて腕を解き”調子にのった”なんて言ってみたりして。

調子に乗ったって何だ？自分でも意味不明。それだけ、俺がテンパっていたのかもしれない。

さつきから、郁の声は全く聞いていないことに気がつく。

今も、ほほ笑むだけで。

だけど、ほほ笑むっていうのは否定されていないんだよなと、何処かでほっとしている自分もいた。

「何から逃げてきたの」やっと会話らしい言葉が出てきた。

郁はというと、俺の問いには答えずに

「圭吾君こそ、学校早かつたんだね。」といきなり鋭い刃をつかれてしまった。

お互いにその問いには答えずに一瞬目を会わせて二人で嘔き出してしまった。要は2人ともバツが悪かつたんだ。

「この先に、良く行く喫茶店があるんだけどどうかな？」

遠慮がちに、聞いてきた郁。

もしかしなくても、あの喫茶店、あいつに連れられて奢らされた。

だけどそれがきっかけで、郁とこうやって一緒にいられる事になったのは事実。

俺にとっては、ある意味思い出の喫茶店かもしれないな。まさか、知っているとも言えずに

「連れて行って」と言っていた。

郁の隣をゆっくりとした歩調で歩く。あの時には気がつかなかった

周りの風景。

裏道一本入った住宅街はある程度の広さを持っていて、今流行りのガーデニングが多かった。

薔薇のアーチがあるものや、レンガで小洒落た花壇を作っている家。郁も俺もさっきの照れがあつてか、目を合わす事もなく、そうただ真直ぐにその道を歩いていった。

「ここだよ。」

そう言つて着いたのはやっぱりあの店で、ドアを開けるとカラーンと澄んだ音の鐘。

鼻孔いっぱいに広がった香ばしいコーヒーの香り。

郁は俺に向きなおし

「このコーヒーはお勧めだよ」そうほほ笑んだ。

まさか知っているとは言えず、俺はこくりと頷いて一步店へと踏み出した。

今日は学生の姿がなく、近所の主婦や、仕事の合間に立ち寄つた会社員らしきスーツ姿の数名がいるだけだった。

郁が迷わず向かったのは何時ぞやのその席で、俺はここに来たということを郁に話していないことを少しだけ後悔したりした。

郁と一緒にいると結構な頻度で喫茶店に入る。

大抵俺はコーヒーで、郁はケーキのセットを頼んだりするのだが、いらっしやいませ

と控えめな声でやってきたウエイトレスに

俺は郁お勧めのコーヒーを頼み、郁はあいつが頼んでいた大きなパフェを注文していた。

ここまで来るともしかして郁は俺がここに来た事を知っているので

はないかという気もして、妙に気ぜわしくなってしまった。

久し振りだなとニコニコしている郁。

その久し振りというのとはも勿論俺の事ではなく、ここのパフェの事を言っているのだろう。

なんせいまは夏休みだから。郁はきつと自分が独り言を言っているのを気がついていないんだろうな、窓の外を見つめながら何やら突然険しい顔になってしている郁の顔を見つめる。

そうそうこの顔。電車の中で始めてみた郁の顔はこんな顔だったかもな。

くるくる変わるその表情、少し前の事なのにちよつと遠い昔のようなそんな感じがした。

郁は何かを決めたようなそんなしつかりとした目で俺を見つめてきた。

な、何を言うつもりなんだ。

いつもとは違う強い瞳で見つめられると少しドキつとしてしまう俺。もしかして、俺が学校まで来た事と関係あるのだろうか。

俺と一緒にいるのを見られたくなくて逃げてきたとか？そんなマイナスな気持ちが襲ってくる。

「圭吾君。」

俺の名前を呼んで一つ呼吸を置く郁。

次の郁の言葉が出るまでほんの数秒にも満たないその瞬間、不安な気持ちに駆られる。

そして

「あのね、会って欲しい人がいるんだけど、いいかな？」

改まってそんな事を言い出す郁にさっきの不安な気持ちが一気に押

し寄せた。

「会ってほしい人？」

俺の頭の中にはさっきのあの男の顔がちらりと浮かんだ。

「そう、私の大事な人。」

まっすぐな瞳でそう言われて、俺は思わず頷いていた。

勢いで2

きつと、私の顔は真っ赤だと思う。
心臓が別の生き物みたいに体の中で跳ねまわってるみたい。

調子に乗ったってどういう意味なんだろう。

頭が回らなくて考えつかないよ。

あんまりびっくりして考えていなかったけれど、どうしてここに圭吾君がいるのだろう。

自惚れちゃっていいのだろうか私。

言葉が出てこない……

何か言いたそうな圭吾君。

そりゃそうだよね、いつまでもここにいたって仕方がないよ。

でも今圭吾君と2人でこの路地から出たらきつと見つかったちゃう。

私が思いついたのは、桜と良く行く喫茶店だった。

もし、見つかったら圭吾君に紹介させてなんて言われるのが目に見えている。

何より桜に紹介する前に、彼女たちに会わせるなんて事出来ないからな。

本当はそれだけじゃなかったりするんだけれどね。

そう桜の事は口実だ。

一緒に行ってくれるかちょっと心配だったけれど圭吾君は承知してくれた。

一先ず安心。

喫茶店へと向かう道を2人並んで歩いた。

さつき抱きしめられた時に鼻いっぱい広がった圭吾君の匂い。

何かをつけているわけじゃないみたいだから、洗濯洗剤の香りかもしれない。

隣を歩く今もほのかに香るんだ。

さっきの光景を思いだして、一人照れてしまう私。

とてもじゃないけれど、ほんと会話なんて出来なかった。

ここら辺の町並みはとても落ち着いていて素敵なお庭のお家が続く。いつもは桜と話ながらこの道を通るからこんなにじっくりと見る事は初めてかもしれない。

すると、いつもは目に入らなかった小さな桜の木がとある家の庭の隅に植えられているのに気がついた。あっちの桜に何かを訴えられているようなそんな感じがしてしまった……。

私が教室を出る時には大山達と話をしていた。まだ学校にいるはずだよ。

私が諦めずに圭吾君と付き合えたのは桜のおかげでも有るわけだし、やっぱりそうした方がいいんだよね。そんな事を考えていたら、もう店の前に着いてしまった。

圭吾君に声を掛けて、喫茶店の重厚なドアを開けた。途端に広がってくるコーヒーの香り。

マスターに軽く会釈をしていつもの席に座った。

マスターの前を通り過ぎた時に、マスターの唇の端が僅かに上がったのが目に入った。

私だってまさか、この店に圭吾君と一緒に来ることになるうとは夢にも思わなかったからマスターが驚くのも無理はないかもね。

圭吾君は私のお勧めしたコーヒーを私は景気づけに特大のパフェを注文した。

いつもは何かのご褒美で頼むそのパフェ。腹が減っては戦は出来ぬ

の心境だったりする。

頃合いを見て、圭吾君に言ってみた。

私の大事な友達と会ってくれる？って。緊張して口が回らなくてちよつと省略してしまった。

一瞬圭吾君が驚いたような顔した。

やっぱり、友達に会って貰うだなんて図々しかったかな。考え直して

やっぱりいいよ、気にしないでって言おうとしたら。

「郁の大事な人なんですよ、ちよつと緊張するけれど。」って了解してくれたんだ。

一度目を伏せてから、私の目を真直ぐみる圭吾君。またもやドキユンと心臓が跳ねた。

じゃあ、連絡してみるね。

携帯を取り出して、桜を誘うメールを打った。会って欲しいんだと一言。

桜は送信を押して、一分も経たないうちに返信してきた。

言葉は何にもなくて、画面いっぱいハートマークが書いてあった

ちよつと恐ろしい。

桜を待つ間、ちよつとだけ圭吾君に桜の話をした。

圭吾君は話の途中に無意識だろ眉間に皺を寄せていた。やっぱり、駄目だったかな？ちよつと心配になる。

そんな時、カランと鐘の音が聞こえた。

桜だ。

桜は私と目が合うと、思いっきりニヤーっと笑ってくれた。私のほつぺは固まった。

あれよという間に私の隣に腰かけて、圭吾君の顔をじっと凝視している。

桜ってば！。

私の心の叫びは桜に届かなかったようだ。

さっきの私へのほほ笑み同様のあのニヤーって奴を圭吾君にまで。

一瞬仰け反ったよ圭吾君。

私は堪らなくなって、パフエを口に運んだ。

先に口を開いたのは圭吾君だった。

「初めまして」

そんな短い言葉。

大丈夫なんだろうか？桜に凝視されて気を悪くしたとか？

桜と言えば、まだじっと圭吾君の顔を見ている。

耐えられなくなったのは圭吾君のほうだった。

目の前にあるコーヒーを口元に運んだ時だった。

桜が口を開いた。

「初めまして……じゃないよね。浅野君。」

はっ？

私の頭に？マークが浮かんだの同時に

ブハッとコーヒーを吐きだす圭吾君。

それを見て、桜が大笑いしていた。

ちょっと桜ってば、それに圭吾君。それってどういうことなのー？

罪な友達？

「大事な人」ってそんな事を言われてちょっとびくつとした。郁が小さな声であつと言つたので多分言い間違えたのだとは思つのだが。

小さな嫉妬だ。

思い当たるのはあの女だよな。

やっぱり、郁が説明する特徴はまさしくあいつの事で。

言っていないだよ、もう知り合ってるって言つこと。

何度も言おうと思つたんだ。

だけど、どうしたって情けなくつて。

初めのうちこそ今日こそはと考えていたのに。

何度かそんな事を繰り返すうちに時間が過ぎすぎて言いだせなくなつてしまつたんだ。

たまに、名前が出てくるとドキつとしていた

その時に言えば良かったんだ。

いつかはこんな日がくるとは思っていたけれど、今日なのか。

少しだけ、胃が痛いと感じるのは気のせいではないだろう。

郁が心配そうな顔をしているので、慌てて顔を作ってしまった。

多分ひきつっているに違いない。

そうこうしているうちに、ドアが開いた。

あいつだ。

って早すぎだろ？まだ心の準備が。

待っている間に本当は郁に打ち明けようとしたんだよ。

実は協力してもらつていたって。

コツコツとなる靴の音がまるで時計の秒針のように規則正しい。

真直ぐ伸びる背筋がまた……

何かの執行人を思わせる。そう何かの。

4人掛けのテーブルだから当たり前なのだが、こいつは郁の隣にす
とんと腰を下ろした。

俺の隣に座るのはおかしいのは分かるんだ。

でも、向かいに座るこいつは俺の正面にくるわけで。

真正面から俺の顔をじっと見るんだよ。

ほんと、心の中を透視されているかのよう。

だから、目で話すなって言ってるだろ。

まだ話してないの？

多分そんなとこだ。

俺は察してくれとばかりに

「初めまして」

と口を開いた。

普通だったたら、どうもとか、初めましてとか言うだろ？

でもこいつは、俺がそのあとに言葉が続けると思っているんだか、
黙っているときたもんだ。

そして、ニヤリと蛇のような（俺にはそう見えた）ほほ笑みのあと
爆弾を落とすやがった。

「初めまして　　じゃないよね、浅野君」

ガーン

まさしく俺はそんな感じだ。

それをお前がここで言うか？

もう何を言っても無駄だと思った。

だからそんな余裕な顔しなくても、俺は泣きそうだよ。

あいつが言う言葉に従う他ないだろ。

郁は今更こんな事を告げられてどう思うのだろう。

郁の学校に辿り着いた時のあの今とは違った不安が吹き飛んでしま
う程の強烈な不安。

俺は郁の顔が見れなかった。

こいつが多少の脚本を加えた事の経緯を話した後、俺は正直に自分
の気持ちを言った。

情けなくて言えなかったと。

ね、やっぱり言った方が良かったでしょ。

言葉の後ろにハートマークでもつきそうないつの言葉に顔をあげ
ると。

小さな声で、嬉しい事聞いちゃったと聞こえた。

多分それは、郁お得意の独り言だと思う。

大丈夫だったのか？

目の前のこいつを見ると今日何度目かのあの恐ろしい笑みを浮かべ
ていた。

どうやら、郁は俺が黙っていた事に対して怒っているわけでもなく、
一番恐れていた嫌われるということもないらしい。

ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、俺にはそんな余裕を持つ事が
出来なかった。

怒涛のようなこいつの突っ込みが始まったんだ。

動揺してしどろもどろになってしまった。

だってだぞ、何でこいつが涼子の事を知っているんだ？

って思った直ぐ後、その経緯も詳しく話してくれたのだが……

この場に真治がいなくて本当に良かった。

あと後まで、言われそうだ。
こいつは、ひとしきり話して満足したのか
またね

の一言を残して、去っていった。
疲れた。

郁は、何だかご機嫌だ。

ここに着た時よりも凄くいい顔になっている。
呆れられもいよいよな話だったが、これで良かったのか？
それにしても。

やっぱり苦手だな

思わず口にしていた。

だけど、あいつはきつと郁の性格を熟知しているだけに。

これは俺の憶測でしかないのだが、きつと郁を安心させるような事を言ったのだろうなと。

俺の周りに、というか知っている女にはいないタイプの女だ。

男だったらいい友達になれそうなのかもな。

あれだろ、郁の大事な人なんだからな。

いい奴だな。

俺の言葉に心配そうな顔をした郁にそう言つと

うん、とつても

と元気な声がかえってきた。

折角お勧めのコーヒーだったのにも関わらず、あいつの出現で全く
味わうことが出来なかったコーヒーをもう一度頼んで、店を出た。
郁のあの大きなパフェはいつの間にか完食していた。

結構な時間いたらしく、郁の高校の生徒は帰り道にも、駅にも見当たらなかった。
心の中に見せつけてやりたかったという気持ちがなくなったわけではなかった。

郁の家の近くのいつもの公園に寄った時、あいつの事を黙っていたことをもう一度謝った。
すると

「だって、それだけ私の事を必死で探してくれたんでしょ」

そう、本当にその通りだ。

おどけて言った郁に真面目に返した

「必死だったよ。今もね。」

郁の顔は一瞬で赤くなつた。

「じよ、冗談だってば。」

冗談なんかじゃない。

郁は分かっているんだ。

「丁度いいや。」

全部言ってしまうおうと携帯を取り出した。

そう、どうして今日郁の高校まで行ったのか。

メールの交換っていったって2回だけだと告げ、郁の事で連絡を取るために必要だったと正直に言った。あの必死だった時の事。

一瞬顔が曇ったのが分かったがそう説明すると納得してくれたようだ。

写メを見せる。

郁は目を丸くしていた。

俺が嫉妬するって、そんなに驚く事？

郁は分かっているんだ。

どうしようもないこの気持ち

「だって、郁をみてこんな顔して……。」「
改めて言葉にすると胃がキリつとした。」

すると、郁は思ってもみない行動にでた。

ベンチに座る俺の耳に口元を近づけて

「これはね、写メを撮った桜を見ているんだよ。」
と囁いた。

耳にかかる郁の息に俺の膝が「くゆっ」つとなる。

座っていなくなったら、膝が落ちたかもしれない。

それほど、効いた。

郁のその言葉が真実なのかは分からない。

郁はそう思い込んでいるようだけど。

だけど、もうそれ以上頭が回らなかった。

俺の前で無邪気に笑う郁に、いつまで我慢ができるだろうか。
なんて不埒な事を考えてしまう自分がいた。

罪な友達？2

圭吾君は焦ってる？それに比べ桜は余裕と言った顔で。

「浅野君が言えないのは、無理もないよね。だってあんなに必死だったもんね。でもこういうことと違ってずっと後で分かるより、話ちやった方がずっと気が楽ってもんよ。」

そう言っつて圭吾君に了承をとった後、桜は事の経緯を話してくれた。

私は初めて聞く話に驚いたなんてもんじゃない。

じゃあなに？桜と圭吾君はあの日私より前に会っつたって言うことなの？

「ごめん、情けなくつて話せなかった。」

しゅんとなった圭吾君。

私はブンブンと首を振った。

だつてそうでしょ、私を探しに高校まで来てくれたんでしょ。

それつて、私に会いたくてだよね。

これが嬉しくないはずがない。

私ばつかりつて思つてた私にとつたら飛び上るほど嬉しい事なんだから。

それに背中を押ししてくれた桜だつて。

その後は、んつ後もか桜の独壇場で、いろいろな事に圭吾君は突っ込まれてタジタジだった。

中でも驚いたのは涼子さんの事が出てきた時。

正直これには私が焦った。

だってそれこそ私も話していなかったから。

圭吾君固まつてるし。

だけどそれはやっぱり桜なんだよね。

上手に話をするもんだから、すっかり桜のペースに乗せられている。途中大丈夫だった？って圭吾君は私に話を振ってくれたけど、本当に大丈夫だったよ。って。

だって、あの時の涼子さんの言葉、胸に響いたもん。

言われて当然だったし、何より前に進めたし。

感謝してるんだよ、ほんと。

この話はもうおしまいとまた桜に遮られた。

そのあとも散々話した桜は「またね」と嵐のように去っていった。でもそんないつもと違った圭吾君の姿が見れて楽しかったかも。

ぼつりと圭吾君が

「やっぱり苦手かも」と呟いた。

でもそれはちつとも嫌な風に聞こえなくて。案の定次に続いた言葉は

「いい奴だよな。」だった。

私は大きく頷いた。

圭吾君がコーヒーをおかわりして、ちよつと2人で桜の話をして、喫茶店を出た。

もう大丈夫だよね。

周りを見ても生徒らしきひとはいない。

駅に着くまでもちよつと不安だったけれど、誰にも会うことなく電車に乗れた。

そして、圭吾君といつものように家の近くの公園に立ち寄った。ベンチに座ると

「黙っててごめんな。」

つてもう一度誤ってくれた。
そんなに謝ることじゃないのに。ちょっと胸が苦しくなる。

私はその場の雰囲気と和ませようとして

「だって、それだけ私の事を必死で探してくれただけでしょ。」
って言ったなら。

真顔で

「必死だったよ。今もね。」
って。

自分でふった言葉なのに、返ってきた言葉に私の頭は沸騰してしま
った。

「じよ、冗談だってば。」

呂律の回らない言葉でそういうと

「郁は分かかってないんだ。」
って。

分かりました、分かりましたとも。

「丁度いいや。」

圭吾君は携帯を取り出した。

メールボックスを開くとそこには桜のアドレスが。
ってメールまで知っていたことに驚きだ。

これにはちよつと嫉妬した。

私の顔を見た圭吾君は、内緒はもう嫌だからねと。

私の前に出されたそれには

今日の郁と名うった一枚の写メだった。

あの時の私だ。桜ってばこんな事してたのね。

今日、郁の所にいったのはこれだよ。

これに嫉妬したんだ。

そうやって指さしたのは私の後ろに写っていた大山の姿だった。
何で？

私はそう口にしていたんだと思う。

「だって、郁をみてこんな顔して……。」

尻すばみになるその言葉。

言われてみれば優しい目だ。

私はそつと圭吾君の耳に口を近づけて

「これはね、写メを撮った桜を見ているんだよ。」

つて教えてあげた。

圭吾君はそれつきり黙ってしまった。

何だか難しそうな顔してる？

そんな圭吾君もいなくなって思ってしまう私は重傷かも。

それにしても、驚いた。

圭吾君が嫉妬してくれるだなんて。

でもね。

私の方がいっぱい嫉妬してるんだよ。

2人で出かける時はいつも。

圭吾君を見ている視線いっぱい感じる。

学校でも……

きつとね、一緒の高校に行ったら嫉妬しっぱなしで顔が変わっち
やうかもしれない。

だけど、圭吾君と一緒に通えたら。

そっちの方がいいに決まってるけどね。

帰り際、今度は俺の友達にも会ってみる？
って聞かれた。

勿論って答えたんだ。

その日がいっただかわからないけれど、圭吾君の友達に会わせてくれるって思ったら何だか新しいドキドキが始まったみたいだった。

大きなため息

あと3千円かあ

財布の中身を確認して深いため息をつく。

これからは天気もいいし連休もある。

郁と一緒に出掛けたくても先立つものがないと辛いよな。

リビングでテレビを見ながらまた一つ大きなため息がでた。

ふと視線の端に目に付くものが。

アルバイト情報誌だった。

兄貴が買ってきたそれは、きつと用を終えたのだろう。

あちらこちらのページに折った跡があった。

ペラペラと捲ってみると、見覚えのあるマークが。

これだ！

そういえばあの時張り紙を……

早速メモを取って電話をかけたのだった。

話はトントンと進み、バイト面接もクリアした。

バイトの日も決まった。

そして、内緒にしていた郁にいつ話そうかとワクワクしている俺がいた。

そこはショッピングモールの中にある大きな本屋。

品揃えも豊富で本好きな俺には堪らない場所だ。

そして、一番の利点はそこが郁の家の最寄の駅だったからだ。

ここなら、バイトが入っていてもその前や終わった後、郁に会うことが出来るはず。

情報誌を置いてくれた兄貴に大感謝したくらいだった。

そして、今日郁にバイトのことを話したのだけれど。俺とは打って変わって郁はあまりいい顔をしなかったのだ。最後こそ笑顔をみせてくれたのだけれど。

俺は本当の郁の気持ちが見えなかったんだ。

俺の頭の中では、バイト代で郁と出掛ける事しか頭になかったのだから。

そうして俺のバイトの初日を迎えた。

一通りのことは覚えた。

元々本屋通いの多い俺は大抵の並びは頭に入ってる。

大体どこの本屋でも、本の並びは似たようなものだった。

店長に

「もうちょっと、笑顔を柔らかく」

と言われてしまうのだがこれだけはどうしようもない。

大地に言わせると大分柔らかくなったというのだが。

今までの俺はどんなだったのだろうと考えなくもないのだが。

「あのーすみません。ちょっと聞きたいのですが」

顔を上げるとそこには、制服を着た女の子が立っていた。

「はい、なんででしょう?」

そう言っただけの子を見ると、一瞬その子は、固まった? ような気がした。

何も言わない女の子にもう一度

「何か探し物ですか?」

そうたずねると

「はい、新刊で」
と最近出たばかり本の名前をあげたのだった。
それは、俺も好きな作家で読み終えたばかりの本だった。

「それだったら、こちらに」
そう案内をするとその子は嬉しそうに本を取り
「ありがとうございます」

とペコリとお辞儀をした。
ほんのちよつとだけど、郁に似ているような気がして思わず笑って
しまった。

「何か……」
そう言っつて俺を見る子に

「すみません。あまりに嬉しそうだったのでつい
と慌てて頭を下げた。
すると

「はい、嬉しいんです。やっと手に入ったので。待ってたんですこ
の人の本を」

自分の好きな作者が同じだったせいか
「それいいですよね、自分も最近読んだばかりで」
と話していた。自分でも驚いた、知らない子を目の前に話せる自分
に。

きつと郁の効果なんだろうな。

女の子は買ったばかりの本を大事そうに抱えて帰っていった。
そうして、バイト初日は終わったのだった。

お疲れ様でした、と挨拶をして、店を出ると直ぐに郁にメールを打った。

「今、終わったよ。郁何処にいるの？」

と。
そわそわしながらメールの返信を待っていた。
来た来た、郁から直ぐにメールが返ってきた。

「お疲れさま。バイトどうだった？ 私はもう家にいるんだ、何だか疲れちゃって、今日は早めに寝るね。バイバイ。」

バイバイって、おい。

どうしてだろう、郁のメールはとても寂しいものに思えたのは、でも疲れているって書いてあるし。

また明日、会えればいいよな。

こんなに近くににいるのにな。

ちよつとでも顔を見たいと思う気持ちを抑えて、電車に乗り込んだ。

家につくと母さんが

「どうだった？ バイト初日の感想は」

嬉しそうに聞いてきた。

「どつって、別に普通だよ」

きつとこれが郁に聞かれたのだったら、違う答えだったに違いない。

「普通って、本当に圭吾はそっけないんだから」

口を窄めていう母さん。

だからそんな若ぶつてどつすんだよ、そう思ったけれどそれは言わずにおいた。

夕飯を食べて、部屋に戻った。

郁に電話をしようと思つた携帯を持つのだが、さっき疲れているって
言つてたしな。

きつと

お休みのメールがくるだろう、そう思つて机に座り本を広げた。

どれくらい経つたのだろう、携帯を気にしつつ本を読んでいたのだ
つたが一向に携帯がなる気配はなかった。

夜も更けてきたので、自分から郁にメールを送つた。

身体は大丈夫？また明日な、お休み

きつと寝てしまつたのだろう、郁からの返信はなかった。

そうして、朝の電車通学。

いつもの場所に立つて、郁の乗る電車を待つ。

電車がすれ違う一瞬、いつも八二カミながら、手を振ってくれる郁。

でも今日は、いつもの場所に郁は乗っていないかった。

郁の乗る電車を呆然としながら見送つたのだった。

大きなため息2

「バイト……するの？」

「来週から。でも週2〜3日位だから」

突然の事だった。

いつものように帰りの駅で待ち合わせして、いつものように駅前を歩いていた時。

学校が違う上に、今はお互い文化祭の準備のためにあつ時間が少なくなっているこの時期に圭吾君はバイトを始めるっていったのだった。

「そうなんだあ」

私は頭の中でちよっぴり寂しいななんて考えていると

「何処でするの？って聞いてくれないの？」
悪戯な笑みを浮かべて私を見た圭吾君。

「何処でするの？」

オウム返して圭吾君に聞いてみた。

「ここなんだ。この3階の本屋」

その言葉に前を見るとそこは私の使う駅の近くにあるビルだった。ここは、洋服や本、CDショップなどの専門店の入るこちら辺では大きなシヨッピングモール。

確か、圭吾君も何度か着たことがあるって言ってたっけ。

「ここなら、バイトが入った日でも郁に会えるだろ」

そう笑う圭吾君だったけど。
どうしてだか私は不安になってしまふのだった。

だってこんなに人目のつくお店に圭吾君がいたら絶対目立つに決ま
ってる。

こうやって歩いているだけだって、女の人の視線を感じるっていう
のにな。

見えるだけで嬉しいって思っていたはずなのに、段々欲張りになっ
てしまふ私がいる。

こうやって、付き合っているにも関わらず。

「郁？」

圭吾君に名前を呼ばれて我に返った。

「駄目だった？」

さっきまでの笑顔が不安気な顔に変わった。
いけないいけない。

私は自分の不安を吹き飛ばすかのように

「駄目なわけないよ」

そう言っつて笑顔を作ったんだ。

「郁ー今日帰り、お茶していかない？」
桜にそう誘われたのだけど。

「ごめん、今日はちょっと」
そう言って桜の誘いを断ってしまった。

「圭吾君とデート？」
半ば呆れたような目で私を見る桜。

「違うよ。今日は会わないっていつかなんていつか……」
途端に目が泳いでしまう私って。
動揺しているの自分でも分かったりして。

「何を隠しているのかな」
だから、その横目で見るのはどうにかして……っていつも言ってるの
に、桜はお構いなしだ。

「別に、隠すって程の事でもないんだけど……」
という私に

「じゃあ、言っちゃいなくて」
楽しそうな桜。

「んーっ。今日から圭吾君バイトなんだ。だからこっさり見てみようかと思って」
段々小さくなっていく私の声。

「それいいじゃん！私も行くからそれ」
桜の言葉は決定事項で。

渋る私の事なんてお構い無しで、ちゃっかり電車で私の隣に座っている桜。

「へー、わざわざ郁の駅でバイト探すなんて、あんた愛されてるね」
だからその変な笑みはやめてって言ってるのに。

「そうなのかな？」

「郁ってば、そうに決まってるじゃん」

桜は私の背中をバシッと叩いた。

桜さん、非常に痛いです。

その本屋はとても広くて、きつと端っこのほうにいたら気が付かないと……と思う。

私と桜はこっそり本屋に入る事に成功？し、圭吾君を捜した。

いたいた。

桜も気が付いたようで、本棚の間に隠れて圭吾君の様子を伺う。

傍目からみたらかなり怪しい2人組だ。

圭吾君は私達に気が付いていないようで、雑誌を綺麗に並べなおしていた。

「うん、やっぱりいい男は何をやっても様になるね」
なんて、一人呟く桜。

丁度その時、一人の女の子が圭吾君に話掛けた。

圭吾君とその女の子のやりとりは全く聞えなかったけれど、時折笑
いあいながらとても楽しそうに話しているようだった。

胸がズキンとした。

圭吾君が他の女の子に微笑みかける姿なんて見たくなかったな。
自分から見にきたのに、矛盾してる。

桜は私の気持ちを察したようで、私の背中をそつと撫でてくれた。
小声で

「しょうがないよ、バイトなんだから」

そういう桜も複雑そうな顔をしていたのだけれども。

再びレジから圭吾君が遠のいた時を見計らってお店をでた。

「そんな顔しないって、ほらあそこのアイス食べに行こうよ」

桜は私の手を引っ張って、あのアイス屋さんまで連れてこられたのだった。

真夏を過ぎ、涼しくなってきたせいか、さほど並ばずに買うことができた。

「やっぱり、嫌だな」

アイスを食べながら、本音が漏れた。

いつもは美味しいアイスがあんまり美味しく感じられなかった。

「そんなに嫌なら、郁も一緒にバイトしちゃえばいいのに」

桜は半分本気とも冗談ともいえることを言うのだったが。

「出来ないよ、そんな事」

本当に自分が情けない。

その後無言でアイスを食べ終わり、気落ちした気分のまま桜と別れ家へと向かったのだった。

部屋に入ってからあのもあの楽しそうな圭吾君の顔が、うーん違うな。

圭吾君とあの女の子の顔が浮かんでくる。まだ初日だっていうのに私の気持ちはどんどん暗くなってしまった。

暫くしてから、メールが入った。

圭吾君だ。

「バイト終わったよ、今何処にいるの？」

きつと終わって直ぐにくれたのかなあ。

折角もらったメールなのに私はそっけない事しか書けなかった。

その晩もいつもだったら、お休みのメールを打つのにそんな気力もなくて。

違うな、モヤモヤした気持ちじゃ晴れなかったからだ。

もう少し落着いたらメールを打とうそう思っていたのにちっとも晴れる事なんてなくて、一人でいじけてやきもち焼いているの自分が情けなくって、圭吾君は仕事をしていただけで全く悪い事をしていないのに。

自分が嫌になる。

結局返事は出せなかった。

中々寝付けなかったせいで、寝過ごしてしまった私。
慌てて着替えて家を出た。

当然、いつもの電車にも乗れなくて遅刻をしてしまった。

そして、携帯もすっかり家に忘れてしまふ始末。

何をやっているんだ私は。

とほほな一日の始まりだった。

すれ違い

おいってマジかよ。

電車がプラットホームの端から消えて行くのを呆然と見送った。

確かにおかしかったんだよ、最近の郁は。

俺はバイトに浮かれて、っていうかその先の郁と出掛ける事ばかりが頭に浮かんで、気になりつつも良く話をしなかったんだ。

必ずと行って良い程返ってきたメールも昨日は返ってこなかったし、朝のメールも。

おまけに、電車までいつもの場所に乗っていないなんて。

もしかして、俺避けられているんだろうか？

途端に背筋に冷たいものが……

俺から、郁が離れていくのか？

鳴らない携帯。

何度見ても、着信はないまま。

こんな事は初めてだった。

目の前に電車が来たのも一瞬気がつかなかった。

プシューというドアの開く音と電車から降りてきた人にぶつかりそうになって初めて気がついた程。

学校についても、意識は遠くに飛んだまま。

真治の言葉もあまり耳に入ってこなかった。

何度も確認してしまう携帯。

見かねた真治が俺の携帯を取り上げる。

「そんなに気になるなら電話すればいいだろ」

そういつて履歴を見始める。

俺だってそうしたいよ。

だけど、メールの返信が返ってきていないのに……

「だってよ、郁ちゃん昨日疲れたって言ってたんだろ？ お前がどうこうじゃなくて調子悪くて寝てたりするんじゃないの？」
真治の言う事は尤もだった。

そっか、避けられているわけじゃないかも知れない。
考えつかなかった。何だか一人焦ってしまったようだ。
意を決して、電話を鳴らす。

郁の電話は8回程コールした後、留守番電話に切り替わった。

それほど調子が悪いのか？

その日はほんと、ポケットに入れた携帯を何度確認した事だろう。
結局、放課後まで郁から電話もメールも俺の携帯に届く事は無かった。

不本意だとは思っけれど、俺は携帯を取り出してあいつに連絡を取ったんだ。

「もっしもーし」

異常にテンションの高いこいつ。

「俺、浅野だけど」

「そんなの解るに決まってるじゃん、ちゃんと名前が出るんだから」
「ノー天気なその答え。俺はこんなに落ちているのに。」

「郁の事何か聞いてる？」

この時俺は、風邪だとか熱だとかそんな答えが返ってくると思っていたのに

「郁？ 聞いてなかった？ 今日は委員会だからさっき教室出て行ったよ」

俺の中で何かが崩れていった音がした。

「そっか、サンキユ」

それ以上何も聞きたくなくて、携帯の電源を落とした。

携帯の向こうでは、桜が郁が寝坊して携帯を家に忘れたと伝えようとしていてくれたなんて知る由もなかった。

「圭吾？」

だらんと垂れさがった腕の先の携帯を見て、真治は何かを悟ったのだらう。

何も言わずに俺の肩をポンと叩いた。

今日もバイトの日だった。

真治が心配してくれて駅までついてくる始末。

終わってるな俺。

別れ際

「元気出せよ、きっとお前の考えすぎだって」

なんて、真治に背中を叩かれたけれどどうしたってそんな風に考えられなくて。

頭の中では解っているんだ、真治が俺を励まそうとしてくれている事を。

だけど俺にはそんな余裕がなくて

「解ったような事言うなよ」

そんな事を口走ってしまった。

言った瞬間ヤバイって思った、それが顔に出たんだらう、真治は

「バイト頑張れよ」

ってそれだけ言うと、手を挙げてくるつと自転車の向きを変えて俺の視界から消えていった。

ガラガラの電車で揺られた。

このまま家に帰ってしまいたくなる衝動。

始めたばかりの俺にはそんな事は出来るはずもなくて。

結局改札口を通り抜ける。

さつき桜が言っていた、今日は委員会だと。

だからいるはずがないって解っているのにホームでも改札口でも郁の姿を無意識に探してしまう俺がいた。

バイト先への足取り重く、ロッカーにいつて鞆を置くと書店のエプロンを身につける。

仕事は仕事だ。

そうは思っただけけれど……。

「浅野君、体調悪いの？」

なんて声を掛けられてしまった。

固まった頬を釣り上げるように笑顔を作り、大丈夫です。なんて言っている自分。

滑稽だった。

どのくらいの時間がたったのだろうか、時間の進みも解らない程ぼーっとしていたらしい。

本の整理をしている俺に影が落ちた。不意に見上げると昨日の女の子が立っていた。

昨日の今頃とは気持ちのモチベーションが全く違う俺。

いらっしやいませの一言も出てこなかった。

そんな俺の顔を見て、一歩下がったその子は

「面白くて、一気に読んじやいました……またお勧めを教えてください
うと思つて……」

尻すぼみの声で顔を赤くしてそう言っていた。

「当店は本マイスターがいますので呼びます。少々お待ち下さい」

マニュアル通りのお決まりの文言。

正直言つて、本当は解る気がするこの子の好きそうな本が。だけど、俺にはそんな余裕がなくて。軽く会釈をして、その子の前を通り過ぎた。

何か言いたそうな顔をしていたけれど見なかったふりをしてしまった。

その後、店長と何か話をしていたようだけど、今は郁の事で頭がいっぱいでその子がどうしたかなんて気にする事もなくて。

その後もただ黙々と本の整理をしていた。

もうすぐバイトも終わろうという時間、制服のズボンに入れてあった携帯が震えた。

もしかして、郁！ 突然波打つように心臓がせわしくなりだした。上がりの時間まで待つ事が出来なくて、店の隅のスペースで周りに人がいないのを確認してから、携帯を取り出した。

メール受信1件。開いた携帯の画面に書かれた文字。

郁でありますように。そう願いながら親指でその文字をクリックした。

そこには

帰りに玉ねぎ買ってきて。 母

一気にクールダウン。

期待しただけに落胆は大きくて。

もう嫌だとはかりに電源を切つてズボンのポケットにねじ込んだ。

「お疲れ、もう上がりの時間だぞ」

柱にある時計を見るとシフト時間を10分過ぎた時間だった。

「お疲れ様です」

その口にする

「おう、本当に疲れているみたいだな。でもうちは客商売なんだから次からは勘弁してくれよな」と店長が笑っていた。

ロッカーに入りタイムカードを押して、エプロンも外さずに、そのまま椅子にドカッと腰を下ろした。郁はもう家に帰ったのだろうか？考える事は郁の事ばかり。

俺何かやったのだろうか？

思い起こしてみるも、正直心当たりは……

何時までもここにいても仕方がない。エプロンを外して、鞆を手にとった。

店を出て、駅の改札口まで考えた。郁の家に行ってみようかと。

だけど、メールの返信がこない事が俺を避けているのかもなんて、マイナスな考えしか浮かばなくて、ヘタレ全開の俺はそのまま家に帰ってしまった。

「ただいま」

靴を脱いで家にあがろうとした時、奥から母親が顔を出した。

「おかえり、ありがとうね」

ありがとうね？ 首を傾げる。

「あれ、圭吾。玉ねぎは？」すっかり忘れていた。

「今行ってくる」脱いだばかりの靴を履いて、自転車に跨った。

すれ違い？

超ダッシュで走ったのに、下駄箱で上履きに履き替えた瞬間に無情にも始まりのチャイムが鳴ってしまった。

最悪だよ。

無駄に広いこの高校。今から廊下を走ったところで間に合うはずもなく、仕方なくとぼとぼと教室へ向かい始めた。

教室のドアに手をかけると、やっぱり出欠を取り始めていて担任の声が響いていた。

なるべく音をたてないようにドアを引いたけれどそれは気やすめにもならなくて、顔を出した途端に教室の皆が振り返った。恥ずかしいったらない。

おまけに私の席は窓際の前から2番めときたもんだ。

「すみません」

と小声で言いながら席の間を縫うように教室を横切る私。

「佐伯。珍しいなお前が遅刻なんて」

担任、だからそんな遅刻って強調しなくたって。

無駄に走ったからか、額から汗が噴き出している。

恥ずかしさも手伝っているかもしれない。

ようやく席に辿り着いて腰を下ろすと、桜からの視線を感じた。

振り向くと、やっぱり。あのニヤリとした顔で後ろ髪を指先でピンとつまんでいる。

もしかして！ 自分の髪に手をやると跳ねてしまった私の髪。

いかにも遅刻しそうで走ってきました、って感じた。

顔の火照りを鎮めるように下敷きで顔をあおいだ。

担任は近くにいるというのに、その声はまるで遠くの方から聞こえるような聞こえ方。

ホームルームが終わって、1限の授業が始まるまでのちょっとした時間、桜が私の席へとやってきた。

「気になって眠れなかったとか？」

核心をついた桜の言葉。昨日の光景を思い出してしまった。

「ほんと、郁つてば顔に出るんだから。気にしすぎだよ、大丈夫だから眼鏡君は。あなたの事しか目に入ってないって」

そうは言ってくれるけれど、どうしたってそこまでの自信なんてないわけ。

「そうだったら、いいんだけど」

何処までいっても弱気な自分がいた。

「いつもの時間に郁がこなかったから、思わず休みかと思ってメールしちゃったんだぞ」

「へっメール？」

全然気がつかなかった。

慌ててポケットに手を通り込んでみるも、携帯どころかハンカチさえ入ってなくて。

机の脇に掛けてある鞆を手に取り、探してみるも携帯は何処にもなくて……

昨日の夜、ベットに寝転んで携帯と睨めっこしてたまでは記憶にあるんだけど、その後どうしたっけ？

朝は焦ってたからな、そう言えば部屋を出る時に持たなかったかもしれない。

「忘れた」

ここに無いって事はそう言う事だよ。

「よっぽど焦って家を出てきたんだろうね、何だかあたふたしている郁が目に浮かぶよ」

桜は呆れたような顔で、まあ郁らしいけど、笑われてしまった。

携帯が無いと気がつかない時は、気にしなかった癖に気がついてしまったら気になるものでって当たり前か。

そう言えば、圭吾君に返事をしてなかったなとか、おはようのメールもしてないやとか。

そればかりが頭の中を巡ってしまふ。

よっぽど、ボケているのか昼休みなんかは携帯を忘れているにも関わらず、廊下で私と同じ着信音が聞こえてくると、ポケットに手を突っ込んでしまったり。

そんな私の行動が桜にはツボだったようで、わざわざ大山に報告にしにいたりするんだなこれが。

私の身にもなってくれ！ って感じだよ。

お母さんの時代には携帯なんて無かったって言ってたけれど、私達にはそんな事考えられないからな。

半日手元がないだけで、こんなにも不安になったりして。

近所でもなく、高校も違う圭吾君と私。

携帯で繋がっているって考えてもおかしくはないと思う。

実際、私達が初めて話すきっかけを貰ったのも携帯だったりするからな。

今から家に帰って取りに行きたい気分だよ。

教室のあちらこちらで、携帯を手取るクラスメートを羨ましい目で見てしまふ。

今日に限って委員会があるんだよ。まさに、なんてこったいって感

じだった。

ふーっと、今日何度目になるか分からないため息をついた時、目の前に大きな影が出来た。

大山だった。

「遅刻のうえに、携帯忘れたって？」

低く響くその声は、桜みたいにからかうものでなく、同情してくれているようなそんな声。

「ほんと、厄日かも」

とまたため息が出た。

大山は一瞬間をあけて

「厄日は言いすぎだろ、なくしたわけじゃないんだから」

そりゃそうだけど、頭に浮かんだその言葉を呑みこんだ。

「まああれだ、お前の相手、メールの返信しないくらいで何か言うような奴じゃないんだろ？ 携帯忘れたって言えば済むことだと思っぞ俺は」

大山ってばエスパーみたいだ、っていうか桜みたい？

私の思っている事を見透かされているみたいだった。

「そう思う？」

「そう思うってそうなんじゃねえの？ 1週間も連絡とれなきゃわからねえけど1日だろ？ 充電し忘れたとか、携帯忘れたとか良くある話なんじゃねえの」

大山の言葉を聞いてちよっとだけほっとした自分がいた。

「あんがと」
そう返した私に

「おう」

と返した大山。

良い奴なんだよね、大山つて。桜は人を見る目があるよな。そう考
える余裕ができた。

放課後になり、委員会に出た。

毎度同じ清掃場所の確認や日程の報告。

何でも今日は担当の先生が会議があるとかで、いつもよりだいぶ早
くに終わってくれた。

終わりの挨拶の後、一番で会議室を出て家に向かった。一分でも早
く家に帰りたくて。

駅に着いてからも、猛ダツシユで自転車を漕いだ。

そう言えば今朝もそうだったかも。

行きも帰りも自転車選手のように街を走り抜けるなんて、滅多にな
いって。

知り合いに会うかもしれないけれどそんな事お構いなしに髪を振り
乱しながらペダルを漕いだ。おかげで、家に着いたのは今までの最
高記録もしれない。

ただいまの声もそこそこに、靴を脱ぐのももどかしい。

鞆を放りだして、片手で靴の踵を持ってポイと投げる。

階段を駆け上がり、部屋のドアを開けると予想通り、枕の隣にちょ
こんとある携帯。

赤いランプが点滅していた。

メールの着信1件アリ。

圭吾君から？ 心臓が大きく動き出す。
おはようのメールかもしれない。
目を瞑って親指を押しあてた。
少しずつつ目を開け画面をみると……

調子悪い？ それとも寝坊？

桜からのメールだった。

そう言えば、朝メールくれたって言ってたっけ……

圭吾君からのメールは昨日のおやすみメールからきていなかった。

さてと、何て返そうか。

メールがきていないっていうことは私が携帯を忘れた事は気がついていないはずだから、余計な事は黙っておいた方がいいのかな、はて何て書けばいいんだ？

付き合い初めてから、メールの返信をしなかった事はお互い一度も無かったっていうのに圭吾君は気にしていなかったのだろうか？
そんな不安が一瞬よぎった。

昨日の晩のようにまた携帯と睨めっこをしてしまう。

時計を見て時間を確認する。確か今日もバイトだったはず。

今から行けば、バイト上がりの圭吾君に会えるだろうか。

よくよく考えてみたら、駅を降りて圭吾君の所に行けば良かったのかもしれない。

そう考えてから、頭を振る。

また昨日みたいに、圭吾君が誰かと話すところをみて嫉妬するかもしれないんだよなと。

うん。どうしよう。

そう考えるうちにも時間は過ぎていってしまっ。

やはり今日のところは、メールかなあ。

携帯の画面に名前を見ただけで、トクンと跳ねる鼓動。
好きすぎるでしょ私。

何度も文字を綴り、そして消していく。

大山の言う通り、今日は携帯を忘れちゃってと書けばいいだけなの
に。

自分の馬鹿さ加減を披露するのもどうなのだろう。

ましてや、遅刻しちゃったなんて。

みじめな姿を見せてはっかかりかも。

呆れられちゃうかもな。

何度も、ため息をついてしまっ。

真剣に悩んでいたら、時間の過ぎるのが早い事、早い事。

えいっ。

今更だな。

私のかっこいいところなんて、初めっからないんだからしょうがない。
い。

と、朝の経緯から今日の反省文のような長いメールを書き終えた。

最後にちよっつと、いや違っ。

ものすごーく、恥ずかしい言葉を添えてみた。

面と向かってはぜっつたい言えないその言葉。

2日も圭吾君に会えないなんて、淋しいよ

一番最後には、ハートマークの絵文字まで添えてしまった。
私にとっては1歩前進かな？

突然だけど

何やっているんだろう俺

暗くなり始めたこの時間、たまねぎを買いに駅近くのスーパーへと自転車を漕ぐ俺。

その道すがら、仲良さそうに寄り添う2人組が目に入ってしまふ。深くため息を吐いた。

郁は俺を避けているのだろうか？

考えたくなくても、そう考えてしまふ。

聞きたいけれど怖くて聞けない。

もし……

「やっぱり駄目だよ、付き合えない」

そう言われでもしたら。

マイナスな考えは渦のように何処までも俺について回る。

郁が俺から離れていってしまう？

そう考えるだけでおかしくなりそうだった。

不意に感じた、携帯の振動。

ポケットからくるその振動は多分母さんからだろう。

どうせ、追加の買い物とかだよな。

自転車を止める事なく目的地へと向かった。

色々な事を考えながら（つて言っても皆、郁の事なんだけど）自転車を漕いでいたら、いつの間にかスーパーの目の前だった。

俺、信号とかどうしていただろう？

ここに来るまでには3つ信号があるはずなのに。

無意識つて怖え。

自転車置き場は、夕方の買い物客だろうか、隙間があまりない程の混みようだった。

やっと見つけた隙間に自転車を押しこんだ。

中に入ると、丁度夕方の特売の時間で、ワゴンの周りに人が群がっていた。

これのせいかなぁ。

その脇を通り過ぎて、玉ねぎを掴みレジへと向かった。

ふと思いついて、ポケットから携帯を取り出した。

後は何を買ったの忘れたのだろう。

何の気なしに開いた携帯。

飛び込んできたのは

「圭吾君」

と題した郁からのメールだった。

急に妙な汗が出てきた。

大丈夫だと自分に言い聞かせながら、一度携帯を閉めると、手に取った玉ねぎを棚に戻し、店の外に飛び出した。

気を落ち着かせてメールを開くと。

携帯を忘れた事、寝坊していつもの電車に乗れなかった事。

そして……

画面を凝視して固まってしまった。

これ郁が書いたんだよね

いつぞやの桜の悪戯を思い出すも、文面からみてもきつと郁に違いない。

顔を見れなくて淋しいよと綴られた文面にハートマークの絵文字。直ぐ様、時間を確認して、俺は駅へと走り出した。

俺の方が会いたかった。

階段を戻るのももどかしく、降りてくる人々を避けながら一段ぬかして階段を駆け上がる。

早く会いたくて。

時間も遅いし、そんなに長い時間会えない事は分かっているけれどそれでも今、郁に会いたくて仕方が無かった。

サラリーマンの帰宅時間と重なるこの時間は俺の通学の時とは全く違う電車の混みよう。

普段では嫌でしかない混み合った車内や、何処からともなく漂ってくる、むさくるしいおっさんの匂いも郁に会うためだと思うと気になる事も無かった。

郁の住む駅に着くと我先にと電車を飛び降りて、ホームを駆け抜けた。

もう少しだから。

こんなに走ったのはいつ以来だろうか？

学校の授業だって、こんなに必死に走った事は無かったかもしれない。

学生服で走るのには正直きついけれど、そんな事は言ってもらえない。郁の顔を思い描いて、走り続けた。

いつもの公園に着いた時には、汗びっちょりだった。息を整えて、携帯を取り出す。

一文字一文字、文字を綴った。

俺も会いたくて。いつもの公園にいるから、少しでいいから出てきて

普通の俺は俺はこんな書き方をしたことがなかった。
時間大丈夫？ 大丈夫だったら出て来てくれないかな？
そんな感じだ。

でも今は違う、駄目だなんて言われたくなくて。
こう書けば郁はきつと出て来てくれる。
そう考えて文字を打った。

返信が待ち遠しい。

あの時のベンチに腰かけ、ぎゅっと携帯を握りしめた。
向こうの道に行く近道みたいで、時折スーツを着た人が俺の前を通り過ぎる。

俺はじつと携帯を握りしめながら、その人達を恨めしく思った。
この人達は郁の近所に住んでいるんだなど。

それはどうしたってしょうがない事なのに、電車を乗らなくては会えない距離がもどかしくて。

待つ時間というものはこんなにも長いものなのだろうか。
ならない携帯をじつと見つめ項垂れる首。

たいして時間なんて経っていないにも関わらず、それも突然やってきたのは俺のほうなのに。

何をしてても空回りをしているような最近の俺。
情けないよなあ。

そう思った俺に影が落ちた。
項垂れた視線の先には、素足にサンダル。

ゆっくりと視線をはわすと、目の前には会いたくて仕方が無かった郁がたっていた。

郁も走ってくれたようで、息が少し弾んでいた。

照れたように笑って、後ろ髪を手で撫でつけた郁。
最近見つけた郁の癖。

「ごめん、突然」

「ごめんなんて言わないで、凄く嬉しいから」
郁はそう言うともた髪を撫でつけていた。

何を話したらいいのだろう。会いに来る事でいっぱいだった俺の頭は上手く整理ができなくて。
少しの間後、郁が俺の隣に腰かけた。

凄く嬉しいから
郁がそう言うてくれた事にほっとした。

「俺、郁に避けられているかと思って焦った」
思わず口を突いた言葉。
格好悪いにも程がある。

「ごめんね……避けるなんて……」
言葉を濁した郁。

もしかして、本当に避けられていたのか？
背中が固まり、手のひらに湿り気を感じた。

緊張が走った。

だけど郁の言葉は俺を飛びあがらせる程嬉しい言葉で。
昨日から、ずっと引つ搔かっていた胸のつかえが取れた瞬間だった。
もっとなんと話していたかったけれど、時間も時間だ、そう言うわけにはいかず。

ちよつとしたハプニングが切っ掛けで、帰る事になったんだ。

帰りの足取りの軽い事ったらない。
きつと気がつかないうちに鼻歌でも歌ってるんじゃないかっていう
ほど。

「ただいま」

機嫌良く、玄関を開けるとカレーの良い匂いがした。
にやけた顔を戻す為に一度冷たい水で顔を洗いいリビングのソファに
座った。

「圭吾、さぞかし高級なんでしょうね」
低い声が背後から聞こえた。

あつ、たまねぎだ。

すっかり忘れていた。

素直に

「ごめん」

と謝ったのだが、母さんの機嫌はあまりよろしくないみたいだった。
それだけではなく、後から食卓に着いた兄貴にまで散々突っ込まれ
てしまった。

玉ねぎの入っていないカレーは確かに物足りなかった。

反省とばかりに食器を洗っていたら

「圭吾はおつかいも出来ない子になっちゃったのね」
と母さんにちくりと言われて、何も言い返せない。

きっと明日父さんにも何か言われるんだろうなあ。

横目でちらりとカレーの入った鍋を見てため息をついた。

全てを終えて、部屋に戻ると携帯を開いた。

さっきのメール。永久保存版だな。

何度見ても、ニヤついてしまう。

今日のメールは何と打とうか。

数時間前の俺が嘘のようだった。

突然だけど2

満足満足。

緊張のメールから解放された私は小腹がすいて、ポテチを頬張ってきた。

母さんに「夕食前に」なんて小言を言われたけれど、ちょっとだけだからと摘まみ始め、気がついたら、袋の底は……食べ過ぎた。

ベットのの上に置きっぱなしの携帯。

圭吾君読んだかなあ。

あのメールどう思うだろう。

自分は返信をすっぽかした癖に、気になってしまっ。

私って自己中だ。

裏返しになった携帯を手にとると赤いランプが点滅していた。

もしかして、圭吾君？

携帯を開いて、確認するとやっぱり圭吾君で。

文面をみるのがちょっと怖い。

寝坊した上に遅刻なんて呆れちゃったかなあ。

意を決して、メールを開くと。

固まった。

公園って。

今何時？ 着信の時間と今の時間を見比べる。

20分前だ。

咄嗟に自分の格好に目をやる。

これなら大丈夫かも。

慌てて鏡をみて髪の毛をチェック。って口の周りがポテチの油でテカッてるし！

勢いよく階段を降りると洗面台で口の周りを流してみる。

タオルでごしごし拭ってもう一度鏡を覗いた。
うん、大丈夫かも。
早くしなくちゃ。

考えれば、取り敢えずメールの返信すれば良かったものを、焦った私はそんな事さえ気がつかなくて。

台所に立つ母さんに

「ちょっとだけ出掛けてくる」

と言い放つと、母さんの言葉を待たずに玄関を飛び出した。

道路に出て、もどかしい足で気がついた、母さんのサンダルを履いてしまった事を。

パタリパタリと音をさせながら、公園への曲がり角を駆け抜ける。

薄暗くなった辺りを公園の外套が照らしている。

あの大きな木の下のベンチに圭吾君の姿を見つけた。

私は息を整えて、一步一步圭吾君に近づいていった。

小さく息を吸って、見下ろす感じになった圭吾君に声を掛けようとしたら、ふいに圭吾君が顔をあげた。

「ごめん、突然」

待たせてごめんねと私の方が謝りたかったのに。

いつもと違う強張った表情の圭吾君を見て、すっかり自分が謝るのが飛んでしまった。

「ごめんなんて言わないで、嬉しかったから」

本当にそうだった。

私の方が会いたかったんだから。

その言葉を呑みこんだ。

そして、圭吾君の言葉が胸に刺さった。

避けてるって……確かに避けているって……そんなあからさまじゃないけれど、結果そう言う事になるのかもしれない。私の知らない

ところで楽しそうに笑う圭吾君の顔を見てしまった時。顔を会わせたくないと思つたのは確かだった。

私でない誰かと楽しそうに笑う圭吾君。色々な感情が押し寄せてきて、余計な事を言つてしまいそうで。

何か無意識に口走つた後、思わず本音が漏れてしまった。

「嫉妬しちゃった」

慌てて両手で口を塞いだ。

何言つちやつてるの私。

圭吾君は何にも知らないつて言うのに……

案の定

「嫉妬？」

つて不思議顔だよ。

余計な事は口走つちゃうのに、肝心なところは出てこないんだよ私の口は。

さて、何を言えはいいのだから。

これ以上圭吾君の顔を見る事が出来なくて、圭吾君の隣に腰かけた。

言いだしてしまった事は仕方がない。

さつき、情けない寝坊と遅刻を暴露したばかりだけれど、ここまできたら、同じかも言うしかない私は、バイトに嫉妬していた事を言つたんだ。

会う時間が減つてしまうバイトへの嫉妬とは言えたけれど。

他の女の子と楽しそうに話す圭吾君に嫉妬したなんて、それは言えなかった。

「ほんとに？」

圭吾君の言葉に一瞬ドキつとする。

もしかして、バイト覗きに行ったのバレテタとか？

動揺してしまつて、心臓はバクバク、きつと今声を出したらきつとおかしなことになる、咄嗟にそう思った私は、こくりと頭を下げていた。

何だか身体が縮こまつてしまつて、これじゃ私、拳動不審みたいだよ。

そんな私に聞こえたのは

「郁も嫉妬してくれるの？」

という圭吾君の声だった。

何ですと？ 嫉妬してくれるのですと？！

普段から、しまくつてますけれど。

何を言ってるのか、圭吾君は分かっているのだろうか？

「してるよ、いつも」

半ばやけくそみたいなセリフだった。

「何か、俺。嬉しいかも」

信じられない言葉を発した圭吾君をちらりとみると、本当に少し嬉しそうな顔をしているように見えた。

その顔にドキツとした。

完全ノックアウトです。

昨日はあんなにモヤモヤしていた気持ちが嘘のようだよ。

照れてしまつて、こつやつてベンチに座り、言葉が出ないのはきつと圭吾君も同じだったと思う。

そんな静寂の中

きゆるるる〜

と間の抜けた音。

私のお腹の馬鹿一つ。

何かね、自意識過剰かもしれないけれど、良い雰囲気だったんだよ。夕暮れの公園で、2人ベンチに座って……ちよつと気持ちも盛り上がって。

圭吾君なんて、必死で笑いを堪えようとしているみたいで、手の甲を口にあててるし。

「もう嫌だ」

自然と口から言葉が洩れた。

すると、圭吾君は

「俺はそんな郁だから……だから好きなんだ」

お腹の音の恥ずかしさと、今の圭吾君の言葉で体中が熱くなってしまった。

両手で頬を抑えても、その熱さは火照りなんて言葉を通り過ごして
るし。

私は母さんのサンダルの先っぽを見つめながら

「私の方がずーっと好きなんだから」

と訳のわからない言葉を言ってしまう始末。

恥ずかしさで顔を上げられない私に圭吾君は

「いーくっ」

優しく名前を呼んでくれた。

私は両手を頬にあてたまま、少しだけ顔をあげた。

満面の笑みの圭吾君がそこにいた。

「ずっと一緒にいたいけど、今日はもう遅いし、送っていくよ」

私はぶんぶんと首を振って

「大丈夫、直ぐ近くだから」

って。圭吾君、知ってるっていうの。

ゆっくりと立ち上がった圭吾君につられて、私も腰を上げる。

「後でメールするから」

圭吾君の言葉に私は頷く。

「じゃあね、気をつけてね」

私はそう言つと、公園の出口に向かって歩き出す。

「おやすみ、郁」

おやすみ、なんてちよつとくすぐったかった。

私も振り向いて

「おやすみ、圭吾君」

って言つてみた。

公園の角を曲がる時、もう一度振り返つたら圭吾君はだまさっきの場所に立っていて、私に手を振ってくれた。

私も大きく手を振り返し、最後のばいばいをした。

ふゝ。

両手で頬を確認するもまだまだ、熱い。

こんな顔で家に帰つたら、母さんになんてからかわれるか分からない

い。

一生懸命、両手で頬をあおいで少しでも火照りをさまそうと試みた。

「郁か？」

聞きなれた声に振り返った。

父さんだった。

間一髪だったかもしれない。

「お帰り、早かったんだね」

ニコって笑ってみた。お願いこれ以上何も突っ込まないで。

直ぐ態度にでてしまう私。墓穴を掘ってしまうに違いなかった。

「何をしているだ、ほっぺた叩いて」

ククツって笑われてしまった。

「顔が小さくなるかなあなんて」

誰もが見破るだろうその嘘に父さんは真顔で

「郁は十分、顔、小さいじゃないか」

と言ってくれた。私は

「ありがとう」

と言ってみた。

目の前に父さんがいるっていうのに、さっきの圭吾君の

ずっと一緒にいたいけど

って言う言葉が私をおかしくさせていて、何度も何度も顔を叩いてしまう私がいた。

わかってる？

「お疲れ様」

満面の笑みで俺のバイト上がりを出迎えてくれた郁。

ここに誰もいなかったら、こうなんて言うか、そう、ぎゅーっとしてしまいかもしれない衝動。ぐっと堪えて、郁の隣に並んだんだ。立ちっぱなしのバイトもさることながら、お客に対して笑顔で接さなくてはいけなのがちょっと堪えるのも事実だったりするが、こーやって郁に会えるだけで、そんな事はぶっ飛んでしまっ、俺って幸せだよな。

2人並んで歩く商店街。もう夕方だというのに、まだ蒸し暑くって、今さっきまで冷房の効いた本屋にいたから尚更のかもしれない。自然と額に汗がにじんだ。でもそれは郁も同じで。

「もう9月だっというのに、まだまだ暑いね」
ふーっと息を吐きながら郁が呟いた。

「そうだな、もう9月なんだよな」
そう言いながら、目に入ったのはアイス屋の行列だった。何気なく郁を見ると、やっぱり視線はアイス屋で。

「並ぼう」
そう言いながら、どさくさに紛れて郁の手を取った。未だに手を繋ぐのも緊張してしまうなんて、相当やられてると思う。

行列に並んだ時に、一瞬郁の手が緩んだのだけど、俺はその手を離すのが惜しくってぎゅっとまた握り直してしまった。すると郁も少しだけ握り返してくれた。

願う事なら、ずっと並んでんでいたいかもなんて考えてしまった俺
まるで、中坊みただ。

だけど、願い虚しく、段々と列は減って言っていく訳で、とうとう
俺達の注文の番がきてしまった。

さすが地元だけあって、郁は何を食べるのか決まっっていて、俺の方
が迷ってしまった。お金を払うその瞬間まで、手を離せなかったの
は言うまでもない。

あわよくば、また手を……なんて考えていたにも関わらず、郁はこ
機嫌で両手でしっかりとアイス握っている。

これだから、俺ばかりなんだろっな、とちよっとアイス相手に嫉
妬してしまったり。でも、本当に嬉しそうにアイスを頬張る郁をみ
るのも好きだったりするから仕方がないか。そんな事を考えていた
俺に

「どうしたの圭吾君？ 早く食べないとアイス融けちゃうよ」

なんて言う郁。右の口元に少しだけアイスをくっつけてるよ。あー
こんな時安っぽいドラマだったら、男の唇で掠めつつたりすんだ
ろっな。なんてまた要らぬ妄想をしてしまったじゃないか。俺、怪
しくないか？ 誤魔化すように今にも融けそうなアイスに口を付け

「美味しい」

なんて、言ってみる。郁は俺の言葉を聞いてにこりと笑うとまた、
アイスを頬張った。今度は口元にべっつりのアイス、それを器用に
舐め取っていた。そんな仕草にもグツときてしまっただなんて、マジ
やばいよな。

バイトをしている時は中々時間が進まないっていうのに、郁という
時間はあっという間に過ぎていってしまう。これといった話をして

いるわけではないが、郁といると飽きないって言うかなんて言うか。学生の俺達はそんなに遅くまで一緒にいれるはずもなく、今日もまた、別れる時間が近づいてしまう。一日がもっと長ければいいのに。

そして、いつもの公園に。別れるまでのその時間を名残惜しげにベソソに座る。

「そういえば、文化祭の準備進んでる？」
何の気なしに話しかけたその言葉。

「ん〜、今はちよつと中断で、体育祭の方かなあ。圭吾君のところは体育祭の準備とかないの？」
意外な答えが返ってきた。体育祭か、郁は何に出るのだろう。頭の中でまだ見た事の無い郁の体育着姿が……いかにいかに頭を振った。

「うちは春だったから。郁は何に出る？」
そう、そんな軽い気持ちで聞いたその問いに

「そっかあ、圭吾君のところは終わっちゃんだね。私はパン食い競争と障害物だよ。だけど、それより大変なのは、クジで当たった応援団の方。女子が学生服来て、男子がチアリーダーの格好で応援合戦するのにね」

隣で、笑いながら話している郁。だけど、俺は途中から全く話が頭に入ってこなくて。

郁が、学ランを着るって？ 何処のどいつの学ランを着るつもりなんだ？ どうしようも無い程の嫉妬の固まりがこっぴどい身体の中から沸いてきて、呑気に話している郁にもちよつとムッとしてしまうほど。

郁々、自分が何を言っているのか、分かっているのか？
小さくため息をついた俺に

「でもこの応援合戦が結構盛り上がるんだよね」
なんて、また。

俺にとってはちっとも面白くないって言うの。

目の前に転がっていた小石をつま先で蹴っ飛ばしていた。

わかってる？2

さつきから、時計が気になって仕方が無い。んゝまだ、10分しか経ってないじゃん。

ベットに寝転んで、漫画をペラペラと捲ってみるけれど、ちっとも読んだきがしない。

いつもよりバイト早く終わるから、今日会えないかな？

圭吾君からそんなメールが届いたのは、昼休みが終わる頃だった。昨日も一昨日も圭吾君のバイトが入って無かったにも関わらず、私の方が体育祭やら文化祭の打ち合わせで、会えなかったんだ。今日は圭吾君バイトなんだよなあ、なんて思っていたところにこのメール。これが嬉しくないはずなくって、即行返信しちゃったよ。

了解です、いつものところで待っているね

って。本当だったらハートマークまで入れたいところだけど、やっぱり何だか恥ずかしくって。さつきまで、憂鬱だった放課後が待ち遠しくて仕方が無くなったんだ。

そして学校をダッシュで飛び出して、圭吾君のバイトが終わるのを待っているところ。

お気に入りのTシャツを引っ張り出して、この前買ったばかりのジーンズに着替えたら、後はやる事が無くって、何を焦って帰ってきたのか自分でも良く分からなかったりするけれどいてもたっても居られなかったんだよ。駅前まで行っていてもいいんだけど、そうしたらまた、圭吾君のバイト姿を見たくなくなってしまいそうだし。前回の一件もあるから、バイト先にはあれから行っていなかったりする私。桜には、心配し過ぎだよって言われたばかりだったする。

だってかっこよすぎでしょ圭吾君ってば

あの少し唇をあげて笑う圭吾君を思い浮かべてしまって、全身がか
ーっと熱くなってしまうた怪しい私。もう一度漫画に視線を戻して
みる、どのページにもかっこいい男の子に可愛い女の子。私もこん
な風に可愛かったら、心配なんてする事ないんだろう、自分で言っ
ててちょっと虚しい。三角関係のお話とかも前は普通に読めたのに、
今はちょっと胸が痛くなったりするのは、自分に重ねてしまうから
なんだよね、意味無く感傷的になってしまったり。

ふーっと大きなため息をついてしまった。

漫画を見て思い出した。そう言えば、昨日決まった、体育祭の応援
団の話ですっかり忘れていた。従兄の龍太兄ちゃんってまだ学ラン
持っているかな？ 今年卒業したばかりだからあるといいんだけど、
ど、って電話をしなくちゃだった。

どうしてまあ、こんな暑い時期に学ランを着なくちゃいけないのか
が分からない。

只でさえ暑いっていうのに、冬服だなんて、拷問に等しいんじゃない
だろうか。

おっと、電話、電話。えいっとベットから起き上がり、ちらりと時
計を見上げた。やっぱりあんまり進んでいないよ。

久し振りに掛ける従兄弟の家、電話にでたのは母さんに似て、異様
にテンションの高い恵理子おばちゃんだった。

「久し振りだね、元気だった？」

の声をかわきりに、おばちゃんは、機関銃のように話し始めた。私
が相槌を打つと次から次へと話がかわって、息つく間も無いほど。
ひとしきり話し終えたおばちゃんが、思い出したかのように

「郁ちゃん、何か用だった？」

なんて、気がつくの少し遅くないだろうか。でも母さんのお姉さんだからそれも有りかとやっそこ本題に移れた事にほっとしたよ。

「あのね、龍君の高校の時の制服ってまだ有る？」

「制服って？」

事の経緯を話さずいきなり、そんな事を言い出した私もいかなものだろう、応援団になってしまった事をおばさんに説明した。

「郁ちゃんらしいね、あみだで当っちゃったのね」

何だかツボだったらしく、ケラケラと笑いだしてしまった。

ヤバイ、このパターンは折角の本題がすれていつてしまう前兆かもしれないと察した私は

「もしかして、もう無かったりしてます？」

自分から聞いてみた。

「どうだろう、龍太に聞いてみないと。後で電話させようか？」

「じゃあ、お願いします」

と電話を切った。何時話してもパワフルな人だよ。何だか圧倒されてしまった。

何気に時計に目をやると、何ですと！ 1時間半も話しこんでいたなんて。殆ど恵理子おばちゃんの声ばかりだったけれどね。

でもこれで、時間を潰せたかと思ったりして。よし、出発だ。

いつもだったら、自転車の駅への道。少しでも一緒にいたくってわざと自転車を置いていつて知られたら呆れられちゃうかな。といつてもバレバレかもしれないけれど。

歩き出した足がいつの間にか、スキップなんかしている私。心と一

緒に足も弾みたいんだよ、きつと。

駅を挟んだ反対側の商店街は、いつも賑やかだったりする。地元の高校へいった子達が、ふらふらしている姿もちらほら。実を言うところの前の待ち合わせの時よっちゃんを見かけたんだけど妙に恥ずかしくって声を掛けられなかったんだ、ごめんよっちゃん友達がないの無い奴で。

今日は誰にも会う事なく、いつもの場所に到着。

ガードレールに腰かけて、圭吾君が歩いてくる方向をじっと見つめた。

まだ、ガンガンに頑張っている日差。座ったからなのか額から汗がどーっと出てきた。

背中にもじとつと汗が。私もしかして汗臭くなったりしていないかな？ 両肩を鼻に近づけて思わず匂いを嗅いでしまった。……これくらいなら大丈夫かな？

微妙なところだ。ハンカチでペタペタと汗を拭いて慰めになるかわからないけれど、自分をちょっと仰いでみたりして。

そろそろかな？ 携帯で時間をチェックしてドキドキが復活。

ほら、時間ぴつたり。向こうから圭吾君がやってきた。

「お疲れ様」

自然と頬が緩んじやうんだよね。ってこの顔を見て普通にしている人を探す方が難しいと思う。それに……今日はなんで？ 急いでくれたのか普段がそうなのか分からないけれど、シャツのボタンが一つ嵌ってないんですけれど。

お陰で圭吾君の鎖骨がちらりと……ちょっとやばくないですか？

無性に照れてしまって、変な汗まで出てきちゃう。お陰で喉が、乾いてしまって仕方がないよ。何か今変な事を口走ったかも私。圭吾君は堪えてくれたけれど、どうも鎖骨に視線が行ってしまいそうでまともに顔を見れないって。そして前を向いた私にアイス屋の行列。

確かに喉は乾いているけれど、そんなにもの欲しそうな顔しえいたのかな？

って、私圭吾君に手を引かれている。手までじっと汗が噴き出しているのがよくわかる。

ドキドキが爆発しそうで、恥ずかしくって嬉しくって。行列に並んでも圭吾君の手は離れる事なくって。ちよっただけ桜の言葉が頭を過った。自信持ちなって言ってくれたあの言葉。

そんな事を考えていたら、私達の順番がやってきた。お金を払う時に圭吾君の手が離れてしまった。あんまりドキドキしすぎたからちよっただけホットしたり。だって本当に心臓が爆破しそうだったから。未だにこんなにドキドキするなんて、私ってほんとうに圭吾君の事好きなんだなあって。

あんなに楽しみだった時間も、あっという間に過ぎていってしまふ。圭吾君と一緒にいると時間がたつのが早すぎだよ。アイスを食べて、他愛もない話をして。

今日ももうすぐ帰らなくてはなんだね。圭吾君に送って貰っていつもの公園。

って圭吾君、眉間に皺が寄ってるよ。何？何が起きた？

さっきまでは、笑いながら話をしていたはずなのに。

その後も、圭吾君の眉間の皺は無くならないまま、別れてしまった。最後にまたねって言ってくれたけれど……

胸につかえたような感じのまま、自分のベットにダイブした。

すると、携帯にメールの着信音。この曲は圭吾君だ。

恐る恐る携帯を開いた。そこには一言

さっきの話、俺のじゃ駄目かな？

俺のじゃ駄目かな？ ってもしかして、もしかする？

それって、学生服の話？

ポツと顔に火がついたかと思った。頭の中も沸騰しているみたい。

圭吾君、分かっているのかな。

私、ドキドキが激しすぎて倒れそうそうだよ。そりゃ一瞬考えたよ
決まった時、圭吾くんにつて。

でも、でも。

本当に倒れそうです。

来る？

送っちゃったよ……

揺れる電車のドアに背中を預け、送信済みとなったメールの画面をパタリと閉じた。

いつもながらに言葉の足りないそのメール。

面と向かって言ってしまったら、きつと余計な事を言ってしまうそう。

嫉妬丸出しっていうのも、みつともないだろ。

郁は、なんて言うだろう。また、きつと俺がこんなキリキリしているなんて考えずに

「大丈夫だよ」なんて返ってくるんじゃないかと思ってしまう。

はあく何度目か分からないため息をついて、携帯をポケットにしまった。

郁からの返信がこないまま夕飯の時間。俺はなんとなくそわそわして、携帯はポケットにいれたまま。借りるねって只一言の返事が欲しいだけなのに。

もしかしたら、もう借りちゃったとか言わないよな。だとしても、他の誰の制服だって、郁の袖に通したくないっていうの。

「圭吾、食事はもっと美味しそうな顔して食べてね」

なんて母さんから突っ込まれる。勿論意味を含んだその笑い顔を見れば本気でそう思っていない事は一目瞭然。そういう気分なんだよと心の中で返事をして、箸を進めた。

後一口で、ご飯を食べ終わると言う時に、ポケットの携帯が震えだした。思わずあっと声が漏れてしまい母さんの視線が俺に向けられる。だからそのニヤニヤした笑いはやめてくれて。俺は急いでこ

飯をかきこんでご馳走様と手を合わせた。

「いえいえ、こちらこそご馳走様」
全くとんでもない母親だ。

部屋に着くまでの時間ももどかしく、階段を上りながらメールを開くと

「ありがと。借りるね」

と短い返事。改めて携帯を見て、借りるねと言葉に思わずヨッシャとガッツポーズをしてしまう俺。まるで小学生のようだ。そんな舞いがついていた俺の背中にふとした気配。嫌な予感と共に後ろを振り向くと、鼻歌をしている母さんの後姿が目にはいった。またみられたのか？ またからかわれそうかも。残りわずかな階段を駆け上げると、携帯を片手にクローゼットを開いた。

つて一昨日までであった俺の学ランは何処に？ 確かにここに掛つていたはずなんだが……。

もしかして……母さんにまた突っ込まれる話題を提供するようですよつと癪だが仕方がない。

一度上がった階段をまた降りて母の姿を探した。リビングでコーヒーを飲んでいた母さん。

俺の顔を見るなり

「あら、良い顔。明日の朝ご飯はその顔がいいわね」
なんて。ムツとするのを抑えながら

「あのさ、俺の学ラン知ってる？」

我ながらぶつきら棒な言い方だ、だけどそれは照れでもあって。そんなとこまで見透かされてしまうんだよな。

「学ランなら、昨日クリーニング屋さんよ。すっかり忘れてたんだけど、父さんがスーツ出すついでに一緒に出しといたから。衣替えは10月だからまだ間に合うでしょ？」

だから、なんでそんな嬉しそうな顔をして言うんだよ。

「え、えーつと。ちよつと必要なんだ。何時戻ってくる？」
平常心平常心。

「ちよつと必要って。急ぎで出した訳じゃないから明後日かな？」
かな？ ってなんだよかなって。

「解った。ありがと」

俺はそれだけ言うともた階段が上がった。これ以上何か突っ込まれたんじゃ、たまったもんじゃない。

それより返信だ。っていうか、電話するか。先程のメールをもう一度眺めて郁に電話をした。

t u r r u r u r u . t u r r u r u r u .

呼び出し音がもどかしかった。

「もしもし。圭吾君」

郁の声はいつだって耳に心地が良い。

「もしもし。郁」

ようやっと呼べるようになった彼女の名前。願わくば俺だけがそう呼べればいいのにと。

「あのー、ありがとね。お言葉に甘えてかしてもらえるかな」

ちよつとだけ小さくなった声。貰えるかなって当たり前だっていうの。

「勿論、それで学ランなんだけど今クリーニング屋にあつて。明後日かえってくるんだけど都合大丈夫？」

電話の向こうで何やら呟いている郁。容易にその顔も想像出来た。

「うん、今週は委員会やらいろいろあつて早く帰れるのは明後日くらいしかないかも。体育祭は土曜だから、えーつとー」

俺が郁の家まで持っていけばいい事なんだけど、そこでちらりと浮かんだ考え。

いいよな、大丈夫だよな。自分で自分に問いかけてごくりと唾を飲

み込んだ。

「来る？」

だから、なんでこう俺って言葉が足りないんだ。

「へっ」

ほらみる、郁のこの声。もう一度ゆっくり言葉にした。

「明後日、学ラン取りに来ないか？ 俺んちに」

言えた。だけど郁は返事をしてくれなくて。

「郁？ やだ？」

単語だけの言葉。断られたらちよつと凹む。

それでも、黙り続けたままの郁。俺はたまらず

「いいんだ、それだったら俺が持っていけばいい事なん

」

「行く、取りに行くよ。へへっ何か緊張してしまった」

俺の言葉にかぶさるように発せられた郁の声の後

はっつと慌てたような声が出た。

その後の会話は何だかきこちなくて。

「おやすみ」と電話をきくと安堵のため息がでていた。

たかが、家に来るだけだっていうの。そういいながらも何だかそわそわしてしまう俺がいた。

来る？2

どれくらい携帯を見つめていたのだろう。

携帯を思いつきり握りしめていて、手が携帯の形に固まってるみたいだった。

これって、そうだよね。

さっきの話俺のじゃ駄目かな？

そりゃね、過ったよ。圭吾君の学ランをとって。

でも、でも妙に照れくさくて。それに体育祭で着たら汚してしまうかもしれないし。

そんな事を考えつつも、あの圭吾君の学ランに袖を通す自分を想像してしまったり。

なんか最近怪しい過ぎるって私。

そんな時、突然携帯が鳴りだした。驚いたのなんのって、あたふたしてしまっただよ。

別に見られる訳でもないのに、周りを見渡してしまった。着信は龍太兄ちゃんからだった。

「よう、久し振り。学ラン欲しいんだって？」

おばちゃんとは違って話が早い。いきなり本題からやってきた。

「うん、そうだったんだけどね……あの〜自分から言い出して何だけどね」

何だか、怪しすぎる自分の心を見透かされてしまいまさうでもってしまった。もう借りれたからって言えばいいだけなのに。

「ふーん、そっか」

龍太兄ちゃんは多くは語らなかつたけれど、事情は察してくれたらしい。

「うん、ごめんね。大丈夫になつたんだ」

突っ込まれなかつたとほっとしたのも束の間。

「彼氏だろお」

そう来ましたか。そう来るんですか。そっとしておいて欲しいところを龍太兄ちゃんはストレートに突っついてきた。

「へへへっ」

笑ってみるも、それはちつとも誤魔化した事にはなってなくて。

「まあそれが一番じゃねえの。郁にとつても相手にとつても」

何だか悟ったような口ぶりで、もう恥ずかしいと思ったらなかった。

「あのね、おばさんには……」

心配事その1、恵理子おばさんに知られた日には、家族ぐるみでからかわれる事間違いないときたもんだ。

「解ってるって、おふくろに報告したら、きつとお前大変な事になるぞ。それこそ根ほり葉ほり」

龍太兄ちゃんの声が何だかとおつても楽しそうに聞こえるのは気のせいなのだろうか。

そんなやりとりをして、じゃあまたねと電話を終えた。

何だかんだ言つて喋っちゃうんだろうなあ。お正月は餌食かも。

少し先だけど、親戚中が集まるお正月を想像して身震いしてしまつた。

そうそう、圭吾君に返事をしなくちゃだった。

でもいざとなつたら、ちよつと緊張しちゃったり。だってあの圭吾君の学ランだよ。

まさか、こんな事になるとは。嬉しいけれど、照れくさい。

いろいろと文面を考えて、メールを書いたら消しての繰り返し。

結局

ありがと。借りるね

という一言だけ書いて送ってしまった。

なんかすつごく緊張してしまった。だけど、その直ぐ後、それを数倍上回る緊張が圭吾君の電話と共にやってきたんだ。

頭の中に、圭吾君の学生服を想い浮かべながら

ありがとうなんて言ってみただけけれど、学ランを貰う都合を聞かれてそれに続いた言葉に度肝を抜かれた。

来る？

「来る」って？ 頭の中が一瞬弾けたみたいで、私の口は勝手に

「へっ？」

なんて間が抜けた言葉が出てしまった。口を押さえなければもう遅かった。

すると圭吾君はちゃんとした言葉で

明後日、学ラン取りに来ないか？ 俺んちに

今度は声すら出ずに固まってしまった。圭吾君のお家に呼んでくれたんだ。

これが嬉しくないはずなくて。だけど、嬉しすぎて言葉が出てこなかったんだよ。

やだ？ なんて言われても、返事が出来ないほどパニック状態で。

やっとこ声が出たのは、圭吾君が持ってきてくれるって言い始めてからだった。

「行く、取りに行くよ。へっ何か緊張してしまった」

緊張してしまったのは事実だけど、そんな事まで言ってしまった私、テンパリ過ぎでしょ。

思わず口元に手がいつってしまったけれど、遅すぎだってさっきと同じだよ。

頭の中はもう違うところに飛んで行ってしまったみたいで、圭吾君との会話はとつてもチグハグなものになってしまった。

電話を切る間際

「じゃあ明後日な、おやすみ」

ってあの低い声で言われてしまって。ドクンと鼓動が跳ねた。

「おやすみ」

という私も声はちよっと裏返ってしまったような。

付き合い初めて数か月経つというのに、まだこんなドキドキしているなんて。

火照った頬に手をあてて、カレンダーを見つめた。

明後日かぁ。きっと明日と明後日は何にも手につかないんだろうな。そんな事が容易に想像できてしまう私って。

あーどうしよう。

何がどうしようなのか解らないけれどそう口走っている私が出た。

そわそわの一日

「おーい圭吾帰ってこーい」

そんな声が遠くから聞こえるような感覚。目の前でちらちらと動く手にはっとした。

「やっと戻ってきた。でれっとした顔して何を想像していたんだか失笑と共にそんな言葉が降ってきた。」

「してねーよ」

そうは言って口元を引き締めてみるものの今しがたの頬の緩みはバレバレだったようで。

目の前の悪友は肩を揺らしながらそっぽを向きはじめた。

郁と付き合い始めてから幾度こんなやりとりをしたか解らない。

だってしょうがねえだろ。

郁が来るんだぞ……俺の部屋に……。

「今度はなんだ？　もしかしてとうとう？」

その声は冷やかかし以外のなにものでもなくて、下世話な奴だと冷めた目しか出来なかった。

いや、聞いてくれるなと言ったところか。俺の冷め視線を感じたのが真治は探るような視線こそすれど何も聞いてはこなかった。いつもの俺だったらつい喋ってしまうところだが、今日だけは話したくないと思った。本当に話す程の事でもないしな。真治を無視して目の前の教科書に目を落とすふりをした。考える事は放課後の事だけ。一番の問題は母さんだ。

あの母さんが普通にしてくれるかどうか気がかりでならなかった。中学の時も……思い出すだけで身震いしそうだった。初めて涼子が家に着た時だって、その晩の夕飯の居心地が悪かったのって。きつ

と今日もそうなるだろう。

せめて、兄貴が家に居ない事を願うばかりだ。

刻々と時間が過ぎて行く。当然の事ながら授業はまったく耳に入らず。

机の中から代わる代わる教科書を出すだけ、気がつけば窓の外を眺めている俺がいた。

今日ほど、空を眺めた日は未だかつてないくらいに。

ホームルームが終了すると、真治捕まらないうちに教室を出た。あいつを構っている時間なんてないからな。廊下を早足で通り抜けながら途中すれ違つ友人に手を上げて学校を飛び出した。

「ただいま」

そう声は出しているみるものの、鍵の掛つた家は誰も居ない事は承知している。

きっと母さんは買い物ついでにクリーニング屋に寄っているに違いない。

部屋のドアを開けると、いつもよりもほんのちょっとだけすっきりした空間。

普段から、ちらかしてはいないので、そんなには気にもならなかったが、机やベットの周りの読みかけの小説を本棚に戻したり昨日の晩部屋の中をうろつろつとした事を思い出してしまった。

いつもだったら放りだす鞆もきちんとか机の隣に立てかけて、ポケットから携帯を取り出すと見慣れたアドレスをクリックした。

今日は大丈夫？ 駅に着いたら迎えにいくから

送信済みの文字を目で追う。送ったばかりだというのに返信が待ち遠しくて。

こういうのを「そわそわ」した気持ちっていうのだろうか。じつと

しているのももどかしくて、何度も本棚をいじってみたり。そのうち、自然と足が玄関に向かっていった。どうせなら、駅で待つていけばいいんだと。

自転車にまだがると、駅への道を走りだした。ともすれば、空回りしそうな足。頭と心だけじゃなくて、足までもかよ。と自分に突っ込みを入れながら。駅まで100メートルというところで、ポケットから振動を感じた。待つていた郁からの返信がやってきたのだ。

実はもう駅に着いてしまったんだよ。今、丁度花火の時に寄ってくれた学校の近くにいます。迎えに来てくれるのだったら学校の門のところでもいいかな？

もういるのか？ 慌ててきた道を引き返す。学校への道のりはここから反対方向だっというの。さっきよりも勢いをつけてペダルを踏み出した。夕方の住宅街を人を除けながら前に進む。顔を上げると少しだけ校舎の屋上にある給水塔が目に入った。そして最後の角を曲がると校門のわきにそびえ立つ銀杏の木が視線の先に見えてきた。ここからはちよつとスピードを緩めて、少しだけ息切れた息を整えながらペダルを漕いだ。人気のないこの路地裏は良く見渡せて、校門の壁に寄りかかる郁が目に入った。段々とはつきりしてくるシルエットにまた自然とペダルを漕ぐ足が速まる。あと10メートルというところで、俯いていた郁が顔を上げこちらを向いた。その顔がゆっくりと笑顔になっていくのを目の当たりにして、思わず名前を呼んでいた。

本当は、落ち着いて「お待たせ」とか何とか言おうと思つていたのに「迎えに来てくれてありがとう、早かったね」と先に言わせてしまった。

「郁こそ、早かったね」

いつもの道を2人で並んで歩くのは何だか不思議な気分だった。

「荷物乗せて」

郁の手にある荷物を自転車の籠に促すと、郁は

「ありがとう」

と鞆を籠に置いた。そしてもう片方の手に持ったままの包み。

「そうそう、これね。ケーキを買ってみたんだ。前を通ったらとても美味しそうだったから」

そう言っただけでケーキ屋の包みを高く掲げた。俺も良く知っているこの辺でも美味しいと評判のケーキ屋だった。

「美味しそうじゃなくて、美味しいよ」

俺の言葉に、満面の笑みを浮かべる郁。

「そうなんだってね、お店で一緒になった人にそう言われたよ。何でもこのタルトは絶品だとか。ショートケーキは甘さ控えめだけど、すごく美味しいとか。迷わず購入してしまった」

その時の事を想い浮かべているのだろう、郁はすごく楽しそうな顔をしている。それはそうと、タルトにショートケーキかあ。俺と同じ好みだったり。甘いもの好きの郁だったらきつと喜ぶに違いないそれらのケーキ。俺が買った訳でもないのに妙に嬉しくなる俺がいた。

他愛も無い会話をしているうちに、気がつくやうに家の前。

「ここだから」

そう言っていると、突然郁の足が止まった。

「大丈夫かな？ 突然おじやまして」

さっきまでの顔は何処へやら、急に引き締まった顔になった郁。

本当は、俺だっただけ緊張しているっていうの。

「大丈夫に決まってるだろ、ちょっと……その何だろ。外野は煩いかもしれないけれど」

俺の言い方が悪かったのか、ますます顔をこわばらせる郁。

「あ……えーっと。歓迎され過ぎるかもって事だよ」

俺も何て言ったらいいのか解らずにちょっと声が窄んでしまったり。

自分の家の前で2人立ち止まっていた時だった。

「何やってるの、こんなところで。あら、貴方さっきの」
妙に明るい母さんの声だった。

「あつ。初めまして……じゃないつと、やっぱり初めまして。佐伯郁です。今日は突然すみません」

挨拶を終え顔を上げた郁と母さんの目があって、初めに笑いだしたのは母さんだった。母さんの手には郁と同じケーキ屋の包み。それにつられて笑う郁。俺の事なんて目に入っていないようだ。

「いらっしやい、さあさ上がって。待ってたのよ」

郁にそう言つと俺に向かつてなんだその目は。その目はやめろつてそれに待ってたつて家にいなかつたじゃないか。

少しだけ、柔らかくなつた表情の郁の背中に手を当て玄関に入った。するとどうだ、俺の事を無視して何でリビングに連れていくんだ？

テンションの上がりまくつた母さんに何を言つても無駄で。あげくの果てには

「圭吾、あんたもケーキ食べる？」

なんて。俺の客なんだつてば。勘弁してくれよ母さん。そしてまた信じられない一言が。

「あつ、そうそう母さんクリーニング取りに行つたはずなのに、買い物したら忘れちゃつたのよ。圭吾取りに行つてくれる？」

と。間髪入れずに郁も立ち上がつて

「私も一緒に」

そう言つてくれたのだが

「いいのよ、郁ちゃん。ケーキ食べて待つてましょ」

なんて。頼むよ本当に。学ランがないと話にならないじゃないか。

郁は少し困つたような顔をしたが、母さんはそんな事ちつとも気にならないようだ。こそつと郁に耳打ちすると、郁は母さんの顔をじつと見つめて、にっこり頷くと

「じゃあ、私待っているね。気をつけて」と言うじゃないか。
俺はしぶしぶとクリーニング屋へ急いだのだった。一分でも一秒でも早く家に戻ろうとまるで競輪選手になったかのように自転車をかっ飛ばしたのだった。

そわそわの一日2

郁ったらまた得意の百面相しているよ

顔を見なくてもその声は良く聞いている桜さんの声でありまして。

だな

これまた最近妙に桜と気が合っている大山の声だったりする。

ここで振り返っては格好の餌食と化してしまう。反射的に捻りそうになる首にぐつと力を込めて聞かぬ存ぜんぬとばかりに、私は目を瞑った。

運がいいというか何というか、今日は教員会議があるらしく6限がカットになるらしい。

部活に所属していない私はいつもより早く帰れるわけでした、これって都合がいいのかもって。

折角だから、圭吾君の住む街を少し散策してみようかな。

なんて事を考えていたら、隣の席の内田に腕をつつかれた。

「始まるぞ」って。我にかえったらみんな起立をしているところだった。私ったら先生が教室に入ったなんてちつとも気がつかなかった。小さな声で「サンキュッ」っていうと後ろからクスっという笑い声。桜だよ。この帰りのホームルームの後、ダッシュ決定だなと心の中で呟いた。

刻々と近づくその時間、当然の事ながら担任の話なんて、全く耳に入らなくて。週番の号令が掛って最後の挨拶、顔を上げると同時に私は予定通り教室をダッシュで駆けだした。

電車の扉にもたれながら、自分に言い聞かす。

落ち着くんだよ、初めての圭吾君の家、そそっかしい事だけはしないようにしないとだ。

最初が肝心って言う言葉もあるくらいだからな。

そんな事を考えていたらあつという間に目的地。電車を降り、トイ

レに入ると髪を整えて鏡の前で笑う練習を試みた。だってもう緊張で顔が強張っているのが解っていたから。

まだ時間あるよね。携帯で時間を確認しながら一人呟いてみる。やっぱり何かお土産とか持って行くべきだよな。べつ、別に圭吾君のお家の人にどうとかって言うんじゃないくて、ほら、学生服も借りるからと一人頭の中でごちゃごちゃ考えながら。

駅の階段を降りながら、圭吾君はここを毎日通るんだなあとか思いっきり妄想してしまったり。周りを歩いている学生達を横目で見ながら、圭吾君と同じ駅を使う人達をかなり羨ましいと思ってしまう私が出た。

階段を降りて、右に曲がると商店街。花火大会の時に圭吾君が教えてくれたんだ。直ぐそこには本屋さん「ここには良く来るんだ」って言うてたっけ。本屋さんの入り口からちよつと中を覗いてみたら特に読みたい本がある訳でもないのに思わず本屋さんの中に入っていた。確か、歴史物と推理物って言うてたよな。私には一生縁遠いものだったりするけれど。早速本屋さんの中を見物。奥のコーナーでは大学生だろうか若そうな男の人がエプロンをつけて本を並べていた。圭吾君もバイトでこんな事をしているのだろうなと凝視してしまった私。

あまりにも見続けていてしまったせい私に気がついたそのお兄さんに

「何かお探ですか？」と声を掛けられて、焦ってしまった私は

「何にもお探しではありません」なんて変な日本語を言いながら本屋さんを後にした。

気を取り直して商店街をふらついてみる。

すると、数件先にとても可愛い外観のケーキ屋さんを発見。シ

ヨーウィンドウからお店の中を覗いてみると、ガラスのショーケースに可愛いケーキが並んでいるときた。このケーキをお土産にしよと迷わずお店に入るとこれまた美味しそうな匂いがお店の中いっぱいに広がっていて、もう涎が出そうだった。ガラスケースに顔を近づけて、素敵過ぎるケーキを物色開始しのはいいけれど、どれも美味しそうで中々決まらない。いくつ買っていけばいいのだろう。溢れ出た唾をぐくり飲み込むと一旦ガラスケースから顔を離して、考えてみる。家族分プラス私の分？ そんな事を考えていたら後ろから柔らかな声が聞こえてきた。

「迷っちゃうわよね、どれも美味しそうだものね」

振り返ると、女の人がほほ笑んでいた。

「そうなのですよね、どれも美味しそうでみんな食べたいくらいです」

なんて、思わず口にしてしまった。初対面の人にまでこの食い意地を見せてしまうなんて、恥ずかしすぎでしょ私ってば。だけどその人は笑いもせずに

「ここは初めてなの？」と話掛けてくれた。

「はい。そうなんです。どれも美味しそうで目移りしてしまって、そう言つとその人は

「そうね、どれも美味しいわよ、因みに私のお勧めはこのショートケーキとタルトかな」

なるほど視線の先のショートケーキとタルトねとか。

「じゃあ、それを買ってみようかな、ありがとうございます」

思わぬ助け船を貰った私は、教えて貰ったショートケーキとタルトを購入した。

会計を待つ間にも、その人とケーキの話で盛り上がってしまった。

お店の雰囲気そのままの包みを手にして、また散策の開始。

やっぱり学校かな、一度しか来た事がないけれど、確か一本道だったよな。

自転車の荷台に乗って圭吾君の腰に手を回して、でも下駄が気になつて足が痛くて。

あの時の事を思い出して、カーツと顔をが熱くなった。段々と学校のシンボルである櫛の木が見えてきた時に携帯が震えた。この着信は、圭吾君からだ。ケーキの包みを小脇に抱え携帯を取り出した。そつと耳に押し当てると、大好きな声。いつの間にか時間が経っていたようで、圭吾君は家に帰った後だったらしい。小学校で待ち合わせをすると決めて、携帯をきると私は小走りで大きな櫛を目指して歩き始めた。今にも走りだしたいところだけれど、ケーキを崩すわけにいかないからな。そうは思うも段々と小走りになっていたりして。迷わず着いた学校の前。ドキドキが収まるようにと何度深呼吸したか分からない。「落ち着け私」とまるで呪文のように繰り返して呟いてしまった。何だかじつとして黙っていると自分の鼓動が聞こえてくるみたいだった。それを紛らわすように意味無く数を数えてみたりして。でもやっぱり緊張のせいか数は増えるはずなのに、何時の間にか減っていたり。どんだけ緊張してるっていうんだ。何度目か分からない300の数字を唱えた後、ふと顔を上げると圭吾君がそこにいた。こんな時いつもなんて話しかけていいのか迷ってしまったりするんだよね

こんにちはじゃ他人行儀な気がするし、どうもっていうのも違う気がして。結局前置きなして

「迎えにきてくれてありがとう、早かったね」

なんて言葉しか出てこなかった。圭吾君は学生服で自転車に乗っていた。これは初めてみるバージョンだ、なんて事が頭に浮かんでいたりして。今日は私も制服だから、こんな風に歩いているとまるで同じ学校の生徒みたいで何だか嬉しかったりする。そして、もしかして私つてばまた自転車に乗っちゃうのと思ったけれど、圭吾君は自転車を降りたまま私と並んで歩いていてちよつとだけほつとしたり。今日は2人とも口数が多かったような気がする。ケーキの話だったり学校の話だったりそんな事を放しているうちに圭吾君の足が

止まってしまった。とうとう来てしまったよ、圭吾君の家に。

途端に緊張が押し寄せてきた。

突然きた事を心配すると、圭吾君から意味深な言葉がかえってきた。外野が煩いって？ 一瞬固まってしまった。

すると直ぐに今度は歓迎され過ぎって。目眩がするかと思った。

そして、また衝撃が。聞き覚えのある声に振り向くとそこにはさっきの女の人の人だ。

まさか圭吾君のお母さんだったなんて。テンパってしまった私は本日2度目の変な日本語を言ってしまったって、けれど、圭吾君のお母さんはケーキの包みをみて笑ってくれた。いや、もしかしたら私の事を笑われた？ でもどうする事も出来ないし私も一緒に笑ってみたり。

それでもって、背中を押されて入った圭吾君の家。お邪魔しますとは言ったものなぞだか私は圭吾君のお母さんとリビングのテーブルと一緒に座っていたり。それでもって圭吾君が出掛けてしまつて。まさか肝心の学生服が無いなんて。

慌てて私も一緒にと言ったのだけれど、圭吾君のお母さんの誘惑に負けてしまった。

圭吾の小さい時の笑える写真見てみない？

こっそり言われたその言葉、気がついたら私

「じゃあ、私待っているね。気をつけて」

なんて言っていた。

きてみれば？

何でこんなところで信号に突っかかるんだよ。

普段は滅多に赤にならない手押し信号に引つかかった。信号を押し
た中学生はもう背中しかみえない。マジで早く行きたいんだって
うの。ポケットにねじ込んだクリーニングの引換券をきゅつと握っ
て、ペダルに足をかけた。

クリーニング屋はもうすぐそこ、看板の先が見えていた。信号が青
に変わった瞬間にペダルを踏みこんだ。店先に自転車を置いて自動
ドアを潜ると、久し振りにみた店主の奥さん。嫌な予感がした。俺は
「浅野です」と出来るだけ小さな声で言うとポケットの中で丸めて
しまった引換券をカウンターに置いた。おばさんは、ちよつと待っ
ててねと引換券片手に店の奥へと。その背中を見ながら気が付きま
せんようにと心の中で願ってみるも、学生服と父親のスーツを手
にしたおばさんはにっこり笑って

「誰かと思っただわよ、圭吾君だったのね」と俺の顔をじつと見つめ
てそう言った。

「どうも」それ以上でも以下でも無く。クリーニングさえ手に入
ればここには無いと言うのに、おばちゃんは服を手に携えたま
ま、機関銃のように喋り始めてしまった。確かに、最近会っていな
い同級生の情報はそれなりに嬉しいものだが、今日は今日だけは勘
弁願いたかった。俺は曖昧に返事をしているのに、おばちゃんは一
向に察する事もなく話しは止まらない。途中意を決して「あの……」
と話しかけてみるも、見事にスルーときたもんだ。マジ頼むよそう
願った時にふいに店の電話が鳴った。おばちゃんは「ちよつと待っ
てね」と言っただけで、カウンターに置かれたそれらの服をすかさ
ず手に取って確認した。確かにうちのだな。それさえ済めば帰るの
みだ。

「ありがとうございました」と小さな声でお礼を言つとおばちゃん
は受話器を抑えて

「こちらこそ、また宜しくね」と言つと、受話器を耳に当てて大き
な声で話し始めた。ちよつと待つててだなんて、またあの電話を待
つていたんじやいつ帰れるものか解つたもんじやないつつうの。

手にしたスーツと学ランは結構がさばつて自転車の小さな籠にいっ
ぱいになった。折角クリーニングに出したのに皺になるかもしれない、
大きめの袋を貰ってくればよかつたかもほんの少しだけ過つたが、
ちらつと振り返つた店の中。それこそ、電話を切られてまた話しが
始まつたら元も子もないと多少気になりつつも元来た道を走りだし
た。母さん頼むよ、俺のいないところで変な話はしてくれるなよ。
行きよりも更に力を込めてペダルを踏む俺がいた。最近の運動不足
もあつてか家に着いた時には息が上がつてしまつていた。勢いよく
自転車のスタンドを蹴つ飛ばして少々乱暴に自転車を置いた。
腕にクリーニングを引っかけて、玄関の扉を引き寄せる。

「ただいま」

靴の踵を踏みつけてリビングへ。

「あら、圭吾早かつたわね」

「お帰り圭吾君」

重なる2人の声。郁の顔は多少うるたえているように見えなくもな
いけれど、大丈夫だったのだろうか？ ソファにクリーニング屋か
ら取つてきた服を放りだして、テーブルに近づくと。

マジかよ、ほんと何でこんなもん持つてくるんだよ。

そこには俺のアルバムがある訳で。幼稚園の運動会の写真が張つて
あるそのページ。母親の顔を一睨みするとぱたりとそのアルバムを
閉じた。

「おー怖い」

なんて、言う母さん。郁に至っては

「可愛かったよ」

だなんて。まあ確かに幼稚園児にカッコいいはないだろうけれど、ちよつと凹むって。

ちよつとバツが悪そうに俯く郁に

「今度は郁のを見せて貰うからね」

と言ってみた。俺の言葉を聞いてか途端にあたふたし始めた郁。だけど、確かに興味はあるよな。幼稚園の頃の郁って。

「圭吾の分もコーヒー淹れてきますか」

テーブルに手を突いて立ち上がった母さんが背中を見せると俺は郁の耳元で囁いたんだ。

「約束だからね、郁のアルバム」って。

小さな声で

「見せなくちゃ駄目？」

だなんて言われたけれど

「うん、駄目」

と郁の目を見て頷いている俺がいた。

あつと言う間にコーヒーを持ってきた母さん。ここでまた母さんに何か言われてはたまつたもんじゃないと、母さんからお盆ごとコーヒーを受けると郁の分のコーヒーと2人分のケーキも乗せて

「じゃあ、上にいるから」

と郁の腕を引いた。

「あら、もういつちゃうの？ お母さんもっとお話がしたかったのに」

ときたもんだ。だから嫌だつていうの。

目が泳いでいる郁にもう一度促して、学ランを郁に持たせると階段

を上った。

「あつじゃあ、すみません」そんな声が聞こえた。背を向けてはいるがぺこりとお辞儀する郁が目に見えかぶ。少しの間後、階段までやってきた郁に

「ここだから」

と自分の部屋の前に立つ。毎日毎日、過ごしている部屋のなのにちよつと緊張しているようでドアノブを持つ手が汗ばんでいた。

べ、別に疾しい事は何もしないって。と自分に言い聞かせてみたり。

「お邪魔します」

と俺の部屋に一步踏み入れる郁。

ただ、学ランを貸すだけだけ。

喫茶店だって、映画だって、公園だっていつも2人でいるはずなのに。

何だかぎこない2人。

床の上のクッションに郁を促すと、机にお盆を置いてふーっと深い息を吐いてしまった。

やばっと思つて郁を見ると、郁の俺と同じようにふーっと深い息を吐いているところだった。

目がばつちり合つて、一呼吸置いたあと2人で嘔き出した。

「だつて、物凄く緊張したんだもん」

真つ赤になつてそういう郁。

「ごめんな、あんな母親で」

すると、ブンブンと首を振つて

「ち、違つたのそういう意味じゃなくつて。素敵なお母さんだね」
つて。何処がだよと、心の中で突っ込みをいれている俺がいた。

それから、圭吾君らしい部屋だね。と本棚を見上げて郁がそう言ったのだけれど、正直その他は何を話しているのか覚えていなかった

り。

自分の部屋に郁がいる事が嬉しくって。舞い上がる気持ちを抑えるのに必死でいつの間にか飲みほしてしまったコーヒー。

頼るコーヒーが無くなってちよつと焦ったり。

そうだ、肝心の学ランだ。

ベットの上に置いた学ランを手に取ってビニールを剥がして

「着てみれば？」

と郁の前に差し出すと

「へっ」

と郁が目を丸くした。

「大丈夫、大きいから郁の制服の上からでも充分羽織れると思うよ」
嫌だっって言われたらちよつと凹むかもと思ったけれど。

暫し考えた郁は

「じゃあちよつとだけ、着てみようかな」

と学ランを手に取った。

心の中で『よっしや』とガッツポーズを取ったのは言うまでもないか。

きてみれば2

待ってるね、なんて言ったものの……

ぼっちり目が合ってしまった圭吾君のお母さん。ほほ笑んでみたつもりだったけれど、私上手に笑えているだろうか。圭吾君はお母さん似かも、綺麗に通った鼻筋とかそっくり。思わず見とれてしまいそうになってしまった。

「コーヒーと紅茶どっちが好きかしら？」

聞いてくれた言葉に

「お構いなく、大丈夫です」

と答えた私に

「あら、ケーキだけじゃ淋しいでしょ」

とにっこり笑ってくれたのもだから

「じゃあ、紅茶でお願いします」

と大きな声で言ってしまった。恥ずかしいっいたらない。またやらかしてしまった。どうやら私は緊張すると声が大きくなるという事を今更ながらに気がついてしまった訳で。

「じゃあ淹れて来るわね」

今のほほ笑みは笑われたって事かもしれないと、どうしようもなくなってしまうた。

圭吾君速く帰ってきてー。行ったばかりだというのに本当に私大丈夫なのだろうか。

「ごめんね、レモン切らしちゃってミルクティーで良かったかな」
キッチンからの声に

「はい、ミルクたっぷりなのミルクティ大好きです」
なんて余計な事まで口走ってしまったたり。

圭吾君と一緒にいる緊張とはまた違った緊張でいっぱいになってしまった。

「はいどうぞ」

目の前に出されたカップはとっても可愛くて。

「可愛いカップ」

とうっとりしてしまった。

「やっぱり女の子は違うわね」

なんてニッコリ笑ってくれて。

きつと私の顔は真っ赤に違いない。

「あっそうそう。この前ね見つけたのよ。引き出しの中にとっておきの一枚を」

そう言つて何処からかあらわれた一枚の写真。

そこには、幼稚園くらいだろうか顔をクシャクシャにして泣いている圭吾君がいた。

今の圭吾君からは全く想像できなくて。それにしてもこんな泣き顔も可愛いなんてもんじゃない。

自然と顔が緩んでしまう。

「ね、傑作でしょ。これ前はアルバムに挟んであったのだけど、圭吾がはがしちゃってね。捨てられちゃ困ると思つて隠してたのよ」
その時の事を思い出しているのか圭吾君のお母さんの顔はとっても柔らかい表情をしている。

無性に思ったのは他の写真も見てみたいって事で。

そんな私の気持ちを察してくれたのか

「他のも見て見る？」

と悪戯っ子のような笑みを浮かべる圭吾君のお母さん。

私は間髪入れずに

「是非見てみたいです」
なんて言ってしまった。

圭吾君のお母さんは何だか無愛想な子になっちゃってね。なんて言
いながら1冊のアルバムを持ってきてくれた。

そこにはまさにお宝の圭吾君がいっぱいあったわけで。

「この写真は？」

なんて説明を受けながら小さい頃の圭吾君の写真をいっぱい堪能
する私。

初対面の圭吾君のお母さんとはとても気さくな人で、笑うとやっぱ
り圭吾君に似ている。

始めは圭吾君もいなくて大丈夫かななんて心配していたのに、アル
バムの効果なのか会話も弾んでいる私達。

何より、どうしたものか圭吾君と一緒に居る時より緊張していない
ってどう言う事なんだろう。

不思議な感覚だった。

解ってる私？ 今、他でもない圭吾君のお母さんと一緒なんだよ。
そんな事をちらつと脳裏に浮かべてみるも、やっぱりどうしてか、
圭吾君と2人っきりの緊張にはならない訳でして。

「そうそう、ケーキも召し上げね。って郁ちゃんが買ってきてくれ
ただ方だけどね」

なんてウインクを頂きました。こんな感じだからなんだろうか？
それにしても圭吾君のお母さん可愛すぎです。

フォークで一掬いして口に入れると、それはもう絶妙な甘さで。喉
の奥からごっそりと唾が……。

最高に美味しいケーキだった。

その時ふと圭吾君が言っていたいた事を思い出した。

「圭吾君のお母さんはお菓子を作るの上手だって聞きましたよ」と話掛けてみると

「あら、圭吾そんな事言ってたの？ 私には上手だなんて言っただ事ないけれど。そうね、最近は作ってないかな。張り合い無くて。あつ郁ちゃんがまた遊びに来てくれるのだったら張り切って作っちゃうわよ」

「いいんですか。是非お願いします。うわー楽しみだな」

そこまで言っただけ気が付いた。圭吾君に断りもなく遊びに来るなんて言ってしまったと。

今日だって学生服を取りに来るっていう名目なのに。図々しくも遊びに来るだなんて。

調子に乗り過ぎたのかもしれない。

ちよつと心の焦りが出てきたその時。

「ただいま」

と圭吾君が帰ってきた。

息が切れているのは相当急いで来たのだと思う。

うつすらと光る額の汗。無意識にだるう腕で拭ったその仕草。ドキッとした。

そんな圭吾君を直視出来なくて。

「お帰りなさい」だなんて言葉にもちよつと照れもあったり。

そしてアルバムに気が付いた圭吾君は私の目の前のアルバムを閉じてしまった。

まだ、幼稚園だったのに。すつごく残念なんですけど。そんな事を考えている私の頭上で繰り広げられる漫才のような2人の会話。つい「可愛かったよ」なんて余計な口を挟んでしまった。

すると、圭吾君はお返しとばかりに

「今度は郁の見せて貰うからね」

なんて。これには私の方がちよつと焦ってしまった。聞かなかった事になるかな？　なんて甘い考えは通用しなかった訳で。圭吾君のお母さんが席を立つた時、私の耳元とびーつきり優しい声で囁かれた。

「約束だからね、郁のアルバム」って。

「見せなくちゃ駄目？」って言うてみたのだけど

「うん、駄目」

ってこれでもかかって笑顔で返されてしまった。

そんなこんなで頭がテンパリ始めた私に更なるテンパリがやってきました。

流れる動作で私のケーキがお盆に乗せられて。私、圭吾君に腕を引かれているし。

「あら、もう行っちゃうの？　もっと……」と言う事はやっぱりそうだよ。

見る見る間に学生服を手に持たされて、先に行っちゃったよ。

「あつじゃあすみません」

頭を下げると、圭吾君のお母さんまたもやウィンクしているし。

始めの緊張は何処へやら、とても自然と笑える私が出た。

背を向けた私に小さな声で

「宜しくね」と声を掛けられて、ちよつと驚いたりして。私まで小さな声で

「こちらこそです」と訳のわからない返事をしてしまった。

もう一度お辞儀をして、圭吾君の後を追った。

圭吾君は階段の途中で待つてくれていて、笑顔で迎えられた私はドキンと心臓が跳ね上がった。そして「ここだから」って。

どうする圭吾君の部屋だよ。今日の私の脈はきつと最高記録を達成するに違いないと確信。

「お邪魔します」

だなんてちよつとおかしい言葉の後、思わず部屋に入る時に息を止めてしまったり。

目の前に広がるこの空間は紛れもない圭吾君の部屋。

あんまりじろじろ見ちゃいけないって思うけれど、見てみたい私がいて軽い混乱状態。

圭吾君に進めてくれた床の上のクッションに腰かけても、上手に呼吸が出来なくて。

思わず大きなため息のような息をひとつ。

た、ため息じゃないから、慌てて圭吾君をみると丁度同じように大きく息を吐き出すところだった。

その顔が何とも困ったような顔で、きつと私も同じ顔をしているに違いない。

二人一緒に嘔き出してしまった。

「だって、緊張したんだもん」

つい口にしてしまった、勝手に動かないでよ私の口。頬がかーっと熱くなった。

「ごめんな、あんな母親で」

どうやら、圭吾君は大きな勘違いをしているようで。私が緊張しているのは圭吾君あなたのせいなのですけれど。それもあんな母親って凄く優しいお母さん、そうこの勘違いも解かなくては。

私はブンブンと首を振って

「ち、違うのそういう意味じゃなくって。素敵なお母さんだね」
って言ってみただけれど、上手く口が回らなくて思いつきり動揺して
いるみたいでフオローも何もなあってなくて。話題を変えようという
いる話掛けてみただけどフオローになったかどうだか微妙だったり。

そして、ちよつとだけ会話の開いた次の瞬間、徐に学生服にかかっ
たクリーニング屋さんのビニールを剥がしながら、圭吾君が爆弾発
言を繰り出した。

な、なんですとここで学生服を着て見ればですと！

圭吾君は私の前に学生服を差し出しているし。とーっても迷うとい
うか恥ずかしいのだけどここで断る勇気が無い私は言ってしまった
よ。

「ちよつとだけ着てみようかな」って。

そっちの方が勇気いったんだと解ったのは、学生服に袖を通す時だ
った。

ケーキの甘さ

郁が学ランを手に取ってから、部屋の中は微妙な空気が漂っているような気がするの俺だけだろうか？

郁がゆつくりと袖を通し始めて、思わずごくりと喉が鳴りそうになるのを必死で堪えた。

この静まりかえった部屋の中で、喉が鳴ったら絶対きまづくになるって、それ以前に恥ずかしすぎるだろ。

思った通り俺の学ランは郁には大きくて。郁の制服の上からでも余裕で着れる大きさだ。

少し斜を向いた郁が一つ一つボタンを嵌めるのをじっと見つめてしまった。

なんか、ちよつと あれだな。いらぬ妄想が頭の中を駆け巡ってしまふ俺。

最後のボタンを留めた郁がちよつと俯いてこちらに向き直す。まじやばいって。

「やっぱり圭吾君って大きいんだね」
なんて。離れた場所に座ってしまった事に後悔したり。

同時に沸き上がる心配。これ見て何とも思わぬ奴がいるのだろうか？

全く初めに応援団なんて言いだした奴らが恨めしいったらない。俺は無意識に顔を顰めてしまったようぞ

「変かな？」

と聞かれてしまった。慌てて

「似合ってるよ」

と言い返してみたものの女の子に学ラン似合ってるってどうなんだろう？

俺の言葉で顔を緩ませると、「じゃあ」と言っただけで背中を向けた郁は直ぐにボタンを緩め始めた。

着る時もそうだけど、目の前でボタンを外されるっていうのも結構くるもんだ。疾しい気持ちを悟られないように、俺もまた背を向け頭の中に沸き上がった妄想を打ち消そうと話題を考えるのに必死になっただけ。

それにしても、俺の部屋の中に郁がいるって。

結局はそこに考えがいきついてしまっただけ。

話題のかけらも出てこなかった。

気がついたら郁はもう学ランを畳んでいて

「汚さないように気を付けるからね」

とすっかりいつもの制服姿になっていた。

「別に気にしなくてもいいよ」

ちょっと残念な気持ちとちょっとほっとする気持ち。

何でか解らないけど、正座をしている郁。

もしかして、郁まだ緊張している？

ちらつと見える膝頭に、俺やっぱり何もしないなんて出来ないかも。ドクドクと心臓が跳ねているのはどうにも抑えられないようだった。

そんな微妙な雰囲気壊してくれるのもまた郁だった。

それはとっっても郁らしくって。

くぅーと遠慮気味？ に鳴った郁のお腹。

目の前のキーキをお預け状態だったからな。

真っ赤になった郁の顔。
はいと手渡したケーキを膝元において

なんでこう言う事聞かないかな、私のお腹

きつといつもの独り言。

そんな郁が堪らなく可愛かった。

ケーキを持ってさりげなく郁の隣に座ってみたものの。

恋愛マニュアルなんて類の本、読んだ事がなかったけれど、もしかして読むべきだったのかもしれない。

無邪気そうにケーキを頬張る郁。

ベタな漫画で、頬についた食べ物を……

駄目だ、そんな事出来ない。

だけど、視線はしっかりと郁の口元にいつてしまっている俺。

今まで、いくらだってチャンスはあったはずなのに。

偶にしか会えなかったから。

気まづくなったら嫌だから。

ゆっくり進めばいいと思ったから。

全部、俺の逃げだ。

大丈夫。きつと郁は俺の事。

「圭吾君？」

ふいに名前を呼ばれ、頭の中を見透かされたのではないかとちよつと焦ってしまった。

「ん？」

なんて返してみたものの。やっぱり口元に目がいってしまって。俺の視線の先に気がついた郁が

「もしかして、ついてる？」

なんて口元を拭い始めた。

もう、限界だった。

「郁」

名前を呼ぶものもどかしい。

郁は口元にあてた手を下ろして、顔を上げた。

反対に俺はゆっくりと郁の頬まで手を伸ばして

「キスさせて」

郁の身体が強張ったのを感じたけれど、俺は郁の唇に自分の唇をそっと重ねた。

これまでで一番じゃないかと思うほど、顔を真っ赤にした郁。唇が離れた今も、固まったままだ。

やっぱり駄目だったか？

少し不安になりかけたその時、郁の口が開いた。

「圭吾君、大好きだよ」と。

それはとても嬉しい言葉だけれど、郁さん、俺を煽ってどうするんだよ。

必死で堪えているっていうのに。

「俺も、郁の事大好きだから」

ちよっと前までは陳腐に思えて仕方がなかった台詞。こんなにもしっくりくるもんなんだと知った。

唇の端に少しだけ感じたケーキの味。甘さ何て、分からなかった。

ケーキの甘さ2

それはとつても突然で。

ちよつと掠れた圭吾君の声。

これは聞き間違い？ そう思ったのも束の間。

私の顔には圭吾君の手が添えられて

一瞬の事だったけど、圭吾君の柔らかい唇が私の唇に落ちてきた。

本当にこんな私でいいの？

緊張しすぎてお腹とかなつちやう私だよ。

頭の中ではそう思うけれど、私の口からはびっくりするほど素直な言葉が出てきた。

普段だったら絶対言えない言葉。

まだドキドキが止まらない。

体のあちらこちらに力が入ったまま。

ほっぺが異様に熱くなってる。

「俺、本当に郁の事好きだから」

もう一度降ってきた圭吾君の声。

夢の中と勘違いしてしまいそう。

これは現実なんだよね。

「私の方がずっと圭吾君の事好きなんだから」
小さく呟いた私の声が聞こえたように

「俺だって負けないし」
なんて。びっくりするような言葉が返ってた。

その後、圭吾君が何か呟いたけど私には聞き取れなかった。
もういっぱいいっぱいだったから。
心臓がいくつあっても足りなさそう。

「あー俺も郁と同じ高校だったら良かったのにな」

「本当だね。私も圭吾君と一緒にだったら良かったのになって思うよ」
これからある体育祭や修学旅行。
一緒に時間を共有できたらどんなに楽しいだろうって思う。
でもそのぶん、いっぱい嫉妬もしそうだけだね。

圭吾君がそう話し出してくれたおかげで、少しずつだけど緊張がほぐれてきたみたい。

だけど、どうしたって唇の感触は消えてくれなくて。
会話をしながらも、圭吾君の口元に目がいつてしまいそうになる私は怪しい人みたいだ。

上の空だったのかもしれない。
だって、耳の奥にはさっきの圭吾君の声がまだ残っているんだから。

思いだしたら、また顔が熱くなってきたかも。
何やってるんだろう私。

「郁？」

圭吾君の眼鏡のフレームが少し傾いた。私を覗きこむ圭吾君は直ぐ

近くに顔がある訳で。

目の前のレンズにはうつすらと私の顔がうつっていた。

恥ずかしくなって視線を逸らした先に一枚の写真が目に入った。
バスケットのユニフォームを着た集合写真。

遠目に見ても直ぐに解った。今より少しだけ幼い顔の圭吾君。

「あの写真は中学の時だよね」

そんな解りきった事を聞いてどうするんだろって思うけど、聞いてしまったものは仕方が無い。

圭吾君は後ろを振り返ると

「地区大会で2位だったんだ」
って教えてくれた。

ちよつと前に聞いた事ある。バスケットをしていたんだ、って。

聞いちゃいけないような気がして聞けなかった。

どうして続けなかったの？ と。

「見てもいい？」

圭吾君が頷くのを確認すると、膝の上で、さっきの私達の事を全部見ていただろうキーキを床に置いて圭吾君の机に近づいた。

綺麗に整頓された机の上に一つだけ置かれたフォトスタンド。

まだ眼鏡をかけていないのか、バスケットをする時だけ外しているのか解らないけれど眼鏡をしていない圭吾君がそこにいた。

初めて見たかも眼鏡を外した圭吾君って。

眼鏡もいいけど。どちらもかっこいい事には変わりが無い。

「強かったんだね」

こちら辺はバスケットが盛んな学校が多いから地区大会で2位なんて凄い事だと思う。

「そうかも。この時の試合も惜しかったんだよ。あともうちょっとだったんだ。けれどそれも実力のうちなんだよな。だから、この写真みんな笑ってないだろ。微妙な顔でさ。悔しくって泣きまくった後で写真なんか撮りたくないって言ったのに顧問がいいから撮れっ。その時は何だかなって思ったけど、今じゃこの写真が一番いいのかもって思ってるんだ」

ゆっくりと話してくれた圭吾君。少しだけ細められた目。きっとその当時を思い出しているんだろうなって思った。

勢いで聞いてしまった。

「続けなかったんだ」

圭吾君はちよつと苦そうな顔をした後

「膝をやっちゃったんだ。今はもう何ともないけどね」と笑った顔は少し淋しそうに見えてしまった。

「残念だったね」

そう言った私にまた爆弾が降ってきた。

「後悔はしてないよ、部活に入らなかったからこそやって郁と出会えたんだから」

圭吾君って。どうしてこう私の寿命を短くするような事言うのだろう。

やっと落ち着いてきたところだったのに。ふと思いついた、膝を痛めたって。

「桜もそうなんだよ。中学の時、陸上部でね。最後の大会で足を痛めて続けられなかったんだって。やっぱり桜も今は大丈夫だって。」

だけど時々校庭を見てるんだよ、切なそうな顔して。速かったみたいだからきつと悔しいんだろうなって」

「そっか。あいつもなんだ。でも俺は違うって言うてるだろ。郁に出会えなかった方がよっぽど後悔だつっつの」

圭吾君は本当に解っているんだろうか。

本当におかしくなりそうで、もう何も言えなくなってしまった。

ふと見上げた時計。

随分と時間が経っていたのに気がついた。

外はもう暗くなり始めて、カーテンの向こうに見える街灯に明りが灯されていた。

「もうそろそろ……帰るね」

私の声に圭吾君も時計を見上げた。

「もうこんな時間なんだな」

一日がもつと長ければいいのに。

私には忘れられない日になった今日と言う日。

「郁、これ食べていくだろ？」

悪戯に笑う圭吾君、手には私の食べかけのケーキがのっていた。

「うん、勿論」

それはいつもの雰囲気です。

いつもらしく帰れるかなって思ってた言葉だったけど。

本当は唇の感触を消したく無くて。

何も食べたくなかったなんて言えないかった。

唇に触れないように大きな口を開けて食べたの気がつかれなかったかな。

そんな変な心配もしたりして。

食べ終わると用意してきた紙袋に圭吾君の学生服を丁寧に入れた。

頭の中に、次にここに来るのはいつなんだろうなんて思ったもの内緒の話。

名残惜しみながら、圭吾君の部屋を出ると、奥から圭吾君のお母さんが出てきてくれた。

「良かったら、夕食と思っただけど今日はお家の人も用意しているでしょうからね。今度は是非食べて行ってね」

その言葉がどんなに嬉しいか。

私は圭吾君と約束もしていないのに

「はい、宜しくお願いします」

なんて言ってしまうって。圭吾君の顔を見れなかった。

そして、渡されたケーキの箱。

「私が選んだケーキだから間違いないはず。また来てね」とお土産まで貰ってしまった。

「ありがとうございます」

これでもかってほど頭を下げてしまった。

「じゃあ俺、郁送っていくから」

いつもより少しだけ低い圭吾君の声だった。

「ちゃんと送るのよ」

「当たり前だろ」

そんな会話を聞いて顔が緩んでしまう。

うちにはお姉ちゃんしかいないから、そんな会話も新鮮だったり。

「お邪魔しました」

最後まで笑顔で見送ってくれた圭吾君のお母さん。
素敵なお母さんだった。

「駅まででいいからね」

そう言う私に

「却下。ちゃんと送らせて」と荷物を取り上げられた。

いつかのように、圭吾君の自転車の荷台に2人乗り。

秋に入ろうとするこの季節。
頬を撫でる風は私の熱を冷ましてくれようとするのだけれど、そんなものじゃ追いつかなくて。

本当に夢みたいだな。

なんて思っている私がいた。

やっぱりな

「圭吾頼む。基礎解析の宿題見せてくれ」
両手を合わせて頭を下げるのはいつもの事。

「ごめん、無理」

期待していた言葉と違うからさぞかし驚いたんだろう。真治は合わせたままの手を下げ目を丸くしていた。

いつもだったらなんだかんだ言ってたって断った事はないんだが、今日ばかりは仕方無い。

俺だってやってないんだから。

「圭吾そんな事言わないで頼むよ。俺さっぱりだったんだって」
そんな口を窄めて気持ち悪いって。

「違うんだよ、俺もやってねえんだよ。見せてやりたくても見せられないんだ。だから無理」

「珍しい事もあったもんだ。なんかあったのか？」

神妙な面持ちでそう言われてもな。

普段だったらちやかす癖に、普通に心配されてるし。

「いや、ただ忘れただけだから」

昨日はそれどこじゃなかったんだ。

口元まで出かかるとは言わなかったけど、言ってしまったら嬉しさが半減するようでこれだけは絶対言わないと決めていた。

「それなら良いけど、バイトきつかったら減らすなりなんなりしないと大変だぞ」

「別に。って言うかお前に言われたくない」
「つっけんどんな話し方は予防線を張っているのかもしれない。自己防衛だ。」

「ふーん」

頼む、それ以上突っ込むなよ。探るような目で俺を見るんじゃないやねえって。

俺はいたたまれず、机の中から読みかけの本を引っ張り出した。

「圭吾、やらない気か？ 余裕な顔しないで早く宿題しようぜ」

どうやら真治はこの休み時間に宿題をすと思ったのが、前の席の椅子を引き、机の上にノートを広げた。

「面倒くさいから、いいよ俺は」

しおりを頼りにページを捲る。

本屋で働く特権は、宣伝を見なくとも新刊の小説を見つけられる事だ。

電車の中吊りや新聞の広告欄に載っていない良作、秀作つてのも結構あるからな。

指先がかわいているせいでページが捲れてくれなくて、右手の人差し指を下唇にあてた。

その瞬間、昨日の郁がフラッシュバック。

やばいと思った時にはもう遅い、したり顔で俺を覗きこむ真治がいた。

「圭吾、顔赤いぞ」

どうやら、本に何か書いてあったと勘違いしてくれたようで、本の前に顔を突き出して、じーっと文字を追っているよう。

危ない危ない。思わずほっと息を吐きそうになって慌てて息をとめた。

こんな時の真治の勘、えらく鋭いからな。用心に越した事はない。未だ文字を追っている真治を尻目にまだ乾ききれない指をページの隅に押し付けた。

「お前が期待する事は何にも書いてないって。それより誰かに見せて貰った方がいいんじゃないかねえの」

机から落ちそうになったノートを指さした。

「何か怪しいんだよな」

なんて呟きながらも、周りの奴らに声をかけ始めたのを見てようやく胸を撫で下ろせた。

この次に郁に会えるのは、明日か明後日か？

せめて同じ学校だったらな。何度思った事だろう。

ましてや、今年は修学旅行もあるから尚更の事。

誰とも知らない同級生に嫉妬をしてしまうなんて可笑しすぎだろ。ってというか想像もしたくないけど。

この時期はくつつく奴が多かったりする。

修学旅行を目の前に俄かカップルっていうのだろうか。

郁も、そんな野郎に狙われたりとかしないだろうか？

一度始まった妄想はとどまる事は無くて、そんな事を考えていたらチャイムの音も気がつかなかった。

「やっぱさ、今日の圭吾おかしいよ。ぼーっとしてないか？」
放課後、真治がしつこいっいたらない。

と言っても真治は俺の具合を心配しているみたいなんだけど。

「別に、おかしくないって」

ほんと、あんまり話掛けられると碌な事ないからな。

上の空だった俺に、真治は突然思い出したかのように話した。

「そついやさ、俺はいつ郁ちゃんに会えるんだ？ 確かそのうちつて言つてなかつたか？」

真治にとつたら何気ない一言だったのかもしれないが、俺にとつたら昨日の今日な訳で。

特に顔に出る郁だから……つて俺も郁の事に関しちや同じなのだが、別に真治に会わせたくないつて訳じゃないけど。こんな事ならもつと前に会わせておけば良かったのかもしれない。

そんな別にとつて食おつつてのじゃないんだから、ケチケチすんなつて。

真治の大きな独り言が聞こえてきた。

「いや、郁 今忙しいんだよ、今週は体育祭だし、修学旅行や委員会とかあるらしくて。俺だつてあんまり会つてないんだよ」
頭の中で尤もらしい事を並び立てて言つてはみたけど。

「ふーん、何か俺に会わせたくない理由でもあるかと思つたよ。忙しいんじゃないや邪魔しちや悪いな」
そつかそつか郁ちゃんとも修学旅行かあ。

また俺の考えたくない事を。きつと最後の呟きは俺に対しての嫌味だな。

そつ言えば。。
郁の体育祭つて土曜だったよな。

そつか、そこに真治と行くつて言う手もあるのかも。
いや、待て。あの格好を真治に見せるのも……。
バイトは2時から。だから綾南から行くとする。

真治の事はさておいて、郁の学校からバイト先までの移動の時間を頭の中で逆算をしていたのだが。

こんなもんだよな。

体育祭当日の朝。郁からのメールを見てやっぱりなと窓の外を睨みつける俺がいた。

やっぱりね

送信っと。

窓を閉めているにも関わらずしつかりと聞こえる雨音。

天気予報は50%だったから、そうだろうなとは思っていたけど。それにしても50%で雨が降らないなんて事があるのかな？

カーテンレールに掛けてある圭吾君の学生服を見つめて小さくため息をついた。

体育祭は中止になったけど、学校はあるんだよね。

ベットの淵に手を掛けてよっこらせと立ち上がった。

埃を付けちゃったら嫌だからね。独り呟きながらクローゼットに学生服をしまった。

何だかちよっとくすぐったい。私の部屋のクローゼットに圭吾君の学生服があるだなんて。

朝から一人で百面相しちゃったよ。

部屋から出ようとした時に携帯が鳴った。

圭吾君から、さっき送ったメールの返信。

おはよう。学生服は大丈夫、まだ衣替えには早いから。この前も言ったけどクリアリングは気にしなくてもいいから。体育祭残念だったね。今日は郁、学校かあ、気をつけてな

この前も言ったけど、か。あの日の事を思い出してまた顔が……。頬が一気に赤くなるのを感じる。

慌てて手で仰いでみるけど、そんな事は全く役に立たなくて。

こんな顔じゃ、お母さんに何を言われるか分からない。

洗面所に直行して、冷たい水で顔を洗わなくちゃだ。
その前に圭吾君に、返信しとこう。

ベットの淵に座り直し、携帯を開くと親指を走らせる。
他愛もない遣り取りだけど、普段一緒に居られない分、それがとても嬉しくて。

またもや、にやけてしまった顔をパシパシと叩いて階段を駆け降りた。

冷たい水で顔を洗ったから、火照った顔は落ち着いたけど緩んだ頬は元に戻っていないらしく。

お母さんじゃなくて、お姉ちゃんに突っ込まれた。

「朝から何、にやついてるのー」
なんて。

「何でもありません」と言いきって目の前にあるトーストを勢いよく頬張った。

お姉ちゃんは変な視線を私に向けたままで、居心地が悪いつたらない。

圭吾君の学生服を見つけられてから、からかわれっぱなしなんだよね。

妙に鋭いお姉ちゃんから逃れるように、朝食を食べ終え家を出た。

土曜の学校って少し新鮮な感じ。

朝の電車もいつもより空いているから快適なこと。

サラリーマンのかわりに遠出をするのか、リュックを背負った家族連れだったり、御洒落をして楽しそうに会話をしている女の子達だったり。

同じ車内なのに、こんなにも雰囲気が違うものなんだな。

電車を降りて水たまりと格闘しながら着いた学校。

昇降口には、昨日のうちに用意したのだろうテントやライン引きが置かれていた。

教室に入ると、ぬかるんだ校庭に歪んだ白線。昨日まではお天気だったのにね、と空を仰いでみたり。

今日は、みんなも何処か落ち着かないみたいだった。

そんなこんなの放課後。机の中の教科書を鞆に詰めている時に、ふと感じた視線。

振り返ると、桜と大山が二人揃って顔を背けたじゃない。

今日はずっとこんな感じだったんだよね。

桜に聞いてみてもはぐらかさちゃうし。

というか、この2人最近良く一緒にいたりするんだよね。何気に良い組み合わせだと思うのだけど、実際どうなっているんだろう。

これでお終いつつ。最後の教科書を鞆に詰め終わると、私は2人のところに。

「感じ悪いよ、2人共。今日は一体なんだつて言うの」

ちよつとむくれ気味に声を出すと、大山は顔を下に向けちゃうし、桜に至つては。

何？ 何なのその笑いは。

小刻みに肩を震わせ、上目使いで私を見る桜。

ちよつと怖いんですけど……。

嫌な予感がした。桜の笑いが止まった時、私の予感は的中してしまった。

「郁さあ。私に何か隠してるでしょ」

そう言つて、人差し指を口にあてる桜。

え、えーっ。

もしかして、桜は魔法使いだったりするのだろうか？

だって、実を言うと朝から怖かったんだよ。勘の鋭い桜に何か言われるんじゃないかと思って。

休み時間一緒にいたら、絶対バレちゃいそうというか、突っ込まれそう。

だけど、今日に限って桜は静かだったし、私よりも大山と話した方が多かったから。

放課後になって安心してたのに。

一体なんで？

「やっぱりね。郁のこの顔みたら決定でしょ？」

それは私じゃなくて、大山に向けた言葉でして。

大山も

「ああ、そうだな」

なんて、言っちゃうし。

私は突っ立ったまま、というか固まってしまった。

「やっぱりね。郁、あんた面白過ぎ。ほら、それ。今みたいに口元に何回手をやってるんだっていうの。私が数えただけでも、16回。それって自分から気がついてくれて言ってるようなもんだよ」

私は更に固まってしまった。

む、無意識って怖い。

確かにね、ちょっと思い出したり。

でもそれはね。

だって、勝手に思い出しちゃうんだもん。

「じゃあ、帰るね」

桜から逃げるように背中を向け鞆を持ってダッシュ。
だって、追及されたらって思うと気が気じゃないじゃない。

昇降口で靴を取ろうとして、気がついた。
無意識に口元に手をやっている事に。

こ、これが！

だから、無意識なんだってば。
下駄箱に向かって呟く私が出た。

上の空

郁は今頃

自分のいない空間で楽しんでいるだろう姿を想像しては落ち込んで土曜の天気とは違ってかわって今日は体育祭日和だったりする。
はあ

あの時の郁の姿は目に焼き付いていて。

大きめの学ランを羽織るその姿は可愛すぎだろ。

彼氏の鼻真目じゃないと思う。

そんなこんなの日休み。

購買で買ったパンをかじりながら窓の外を眺めていると、ポケットの中の携帯が震えた。

メールだ。

発信者名をみて、思わず身震い。

そして、意味深なタイトル。

「これ以上のものをお望みなら課金して下さい」

本文がなく添付されたその写真は紛れもない郁のもので。ただよ、何だよこれ後ろ姿じゃないか。

俺の学ランを着た郁の後姿。

背中に垂らされた緑色の鉢巻。

部屋で着た時は座っていたから解らなかつたけど。

短パンをすっぽり隠して、素足が、素足が。

目眩がしそうだった。

これやばいだろ。

隠し撮りをしたのだろう、少し遠めの後姿。

課金って。そう言う事なのか？

一度メールを閉じて、考える。

あいつは悪魔だ。

そんな事を思っていたら、2通目のメール。

今度のタイトルは

「高くつくよ」

ときたもんだ。

嫌な予感がしつつ、メールを開くと。

満面の笑みの桜の顔だった。

これくらいはやりそうだ。

全くムカつく奴だ。

肝心の郁はこれっぽちも写ってないじゃないか。

段々とイライラとしかけたその時にまたもやメールが。

タイトル無しのそのメールには

郁が少し顔を赤らめながら楽しそうに笑っている姿があった。

思わず口元が緩んだけれど、それはながく続かなくて。

もやもやしたこの気持ちは、そう紛れもない『嫉妬』だ。

最近こんな風に笑う郁を見ていないような気がする。

気にし過ぎなのかもしれないけれど、やっぱり釈然としない。

本来なら桜に礼のメールでも送るところだろうが、それも出来ない俺がいた。

同じ学校じゃないなんて、初めっから解りきっているっていうのに。嬉しいはずの写メなのに。

予鈴がなって、食べかけのパンを口にねじ込んだ。

このパンのようにもやもやした気持ちも消えてなくなればいにと、必要以上に噛み砕いた。

「何だか荒れてるねえ、とうとう郁ちゃんに愛想でも尽かされちゃったとか？」

学食から帰ってきた真治が呑気そうに俺の肩を叩いた。

返す言葉もなくて、無言で机から教科書を引っ張りだすと、真治は何を勘違いしたのだから

「マジかよ」

と一言。

「そんな事ねえよ」

そうは言い返してみるものの、あの笑顔の先には誰がいたのだろうと考えるも仕方のない事を考えてしまう。

「なら良いけど、お前ここんとこ浮き沈み激しくないか？ そんな眉間に皺寄せると。おっと、ここから先は禁句だな。まあ、彼女のいない俺には羨ましいけどな」

にやりと笑って真治が席に着くと、自分の眉間に人差し指をあてた。

皺なんて寄ってねえつつうの。

窓の外は変わらずいい天気だ。

郁はまだ俺の学ランを着ているのだろうか？

緑色の鉢巻か。

そう言えば俺も緑色だったっけ。

はあ。

今日何度目かのため息をついた時、チャイムが鳴った。まだ黒板を写し終わってないのに気がついて慌ててノートに書き写す。

そんな調子のまま放課後。

「圭吾、今日帰りに何か食っていかないか」

腹減った、と腹をさする真治に

「行く」

と一言返した。

桜にメールを貰ったせいで、昼は食べた気がしなかったから丁度良かったかもしれない。今日はバイトもないしな。

真治と自転車を並べて駅前のマツクへ。

昼時でも無いのに結構な人がいた。

注文を終え、席についた途端に真治が

「なあ、なんでこんなに女の子がいるのに俺には彼女がいらないんだろう」

なんて言うもんだから、思わず口にしたコーヒを吹きそうになった。

俺からしたら、またいつもみたいに何か突っ込まれるのじゃないかと構えていただけに、この呟きのような一言には意表をつかれた。

何て言っているのかも解らず、もう一度コーヒを口元に運んだ。

確かに、これだけ人がいるのにどうして郁なのだろう、思わず笑みが零れる。

「笑うなって結構切実なんだって」

そうは言っているが、普段お茶らけている分、本気さが伝わってこない。

「そのうちじゃねえの？」

俺だってそうだったんだから。
そう突然だったから。

他愛のない話しをしていると、携帯が震えた。
またあいつだ。

ハズに構えて携帯を開くと

「とっておきの一枚」
と題した一枚の写メ。

思わず息をのんだ。

それは遠くから撮られた郁の姿。

今度は後ろ姿じゃなくて、横を向いているけれど

俺の学ランを着て、恥ずかしそうにギュッと裾を握っている郁がいた。

今日一日あったもやもやが晴れていくようだった。
これって、そうだよな。俺の勘違いじゃないよな。
この一枚だけには本文もついていた。

あんたの学校の校章。随分と役に立ってたよ
真治がいる事も忘れて、思わずニヤケてしまう俺。

「もしもし。浅野君、何がそんなに嬉しいのかな？」
身乗り出すようにして覗きこむ真治から逃げるように携帯を畳む。

「何でもないって」
そう言ってはみるけれど、この顔はそう簡単に直せないって。

家を出る直前まで、必要以上に何度も畳み直した圭吾君の学生服。皺にしてなるものかと、目下満員電車の中で格闘中だったり。スピードが落ちて、電車がホームに滑りこむ。いつもだったら、あの場所に圭吾君が立っているんだよな。体育祭の準備の為に30分早い登校時間が恨めしい。いつものようにちょっとだけ出来たドア横のスペースに身体を入れて、反対のホームをじっと見つめた。

そう言えば初めて圭吾君を見た時はこの学生服を着ていたんだよな。この手の中にその学生服があるだなんて。

圭吾君のいないホームが段々と遠ざかっていくのを見ていると、鞆を抱く手に自然と力が籠った。たかが学生服、されど学生服。ちよっぴり圭吾君と登校しているみたいな気がしたりして、怪しい妄想をしながらの学校への道のりは、とっても足が軽かった。

「郁おはよう。ちゃんと学ラン持ってきたでしょうね」
教室に入るなり、桜は意地悪そうな笑みを浮かべてる、解っている癖に。

桜は手元の鞆からゆっくり私の顔に視線を上げて満足したようだった。
ふっと笑って、再度私の顔を覗きこむ。きっと私の顔は赤いとうん、赤いに違いない。

「早く見てみたいな、郁が着てるどころ」
桜の言葉で私の顔はまた沸騰。着る前からこれだから桜は怖いんだ。

段々と教室に人が集まってきた。

やっぱり体育祭とあってか、みんなそわそわしているみたい。

それもそのはず、この体育祭で我がクラスが優勝したら、担任がご褒美をくれるっていうんだから。

そのご褒美がなんなのかは謎だけど、何だかみんなノリノリで、高校生にもなつてこんなに体育祭が盛り上がるって、他の高校とかでもそうなのだろうか。

そして私はまた妄想が。見た事も無い圭吾君の体育着を想像しちやったり。

「郁、みんな着替えに行くって」

そう桜に話掛けられるまで私の妄想は続いていた。

机の上に学生服を入れた鞆を置いて、体操着に着替える為に教室を出た。

さあ体育祭の始まりだ。

朝から陽ざしの強いなんのって。

校長先生、張り切っているのは解るけど、何もしないうちから倒れそうなのですが。

場の空気を読みとって早く話を終わらせてくれないかな。きっとそう思っているのは私だけではないはずだ。

朝礼台の上に立つ校長先生のやけに広い額には玉のような汗が。校長先生だつて顔が真っ赤だよ。

そんな校長先生がポケットから取り出したハンカチで三度汗を拭いた後、やっと朝礼台を降りてくれた。

私は、周りのみんなを始め、担任までもがホッと息をついたのを見逃さなかった。

それからの開会式の早い事。

あっという間に解散となつて、全校生徒ちりじりになってクラス席へと戻ってきた。

いつもとちよつと違う緊張の体育祭。

「郁、ちゃんと応援してよね」

鉢巻を片手に桜が、軽く跳躍を始めた。

凄く絵になるんだよね。

中学時代の桜を知らないけれど、きつと速かったのだろう。実際、そんな話も誰かに聞いた事がある。

体育の時は本気で走らないから。

いつしかみた、校庭を見つめる桜の目。きつと陸上やりたいのだと思う。

そんな事を思っていた私の前でどつき漫才が始まった。

お前そんなに気合入れて、引きずって行く気じゃないんだろうな

あんた重たいんだからちゃんと足あげなさいよね

桜が大山に体当たりをしてるけど、びくともしない。

じゃれてるようにしか見えないんだけどね。きつと、周りもそう思ってるに違いない。

二人は一緒に二人三脚に出る為に、じゃれあいながらスタート地点へと向かっていった。

私が声を掛ける隙が全くなかったよ。

競技はというと

スタートこそ、躓いたものの二人の追い上げは凄かった。っていうか大山の迫力に圧倒されたって感じかな。それにそのスピードについていく桜も凄い。

桜って足が長いんだよ、背丈の違いがあるはずなのに大山と足の長さ…… これは内緒にしておこう。

大山が桜にいじめられそうだから。

向かった時同様、何やら言いあいながら二人が戻ってきた。

先生のご褒美に一步近づいたって事でクラスのみんなからハイタッチで迎えられる二人。

凄く楽しいって顔してる。

そんなこんなで、一つ一つ競技が進んでいく、我がクラスは目下隣のクラスと首位を争っているところだったり。

私かというと障害物リレーでは平均台で転びそうになるものの必死で首位をキープ。

パン食い競争に至っては、吊るされるパンの位置が高すぎて、首がどうにかなるかと思ってしまうた。

結果はビリ、クラスに貢献できなかったけれど、誰に非難される事もなく、反対に真顔でジャンプしている顔が面白かったとみんな笑顔で迎えてくれた。

そんな申し訳ない結果だったけど、私にとって小腹がすき始めたお昼前にパン食い競争をしてくれたことはとてもラッキーだったりして。

そしてそして、とうとうやってきてしまったこの時間。

学生服を羽織るだけの女子と違い、カツラをかぶりメイクをまでもしなくてはいけない男子はそうそうに着替えに行ってしまった。普段は無骨な男子がチアリーダーの格好なんて想像しただけで、噴き出しそうだよ。

つと私にはこんな余裕なんて何処にもないんだった。

既にこの大事に持ってきた袋を抱きしめてはいるものの中々袖を通せないでいる。

隣のクラスの子はもう既に着替えが終わって改めて鉢巻をしめなおしていたりするんだけど。

そんな私の気持ちを探したのか、桜がひよいとやってきた。

「そんな気にする事ないんじゃない？ たかが服だって思ってたらしいじゃん。それより郁顔赤いよ？ 照れと暑さもあるだろうから、水道行つて顔洗つてきな。ついでに向こうで羽織つてきちゃいなよ。それにね、郁が思うほど、周りは気にしてないから大丈夫。ほら行つてきな」

捲し立てられるように桜に言われ、背中を押されると私は水道へと足を踏み出した。

周りは気にしてないつて、そんな事解つてるつていうの。独り言を呟きながら、水道の蛇口を思いつきり捻つて顔を洗つた。少しだけ火照りが収まったみたい。

そうだよ、変に気にしているのは私だけなんだよ。いろいろな思いで複雑のは確かだったり。

それは圭吾君の学生服に袖を通すつて照れも大いにあるのだけど、どうしたつて、あの日の事を思い出してしまうから。

えいつと袋に手を入れて学生服を取りだし

そのまま一気に袖を通した。やっぱり圭吾君の学生服は大きくて、手首も出てこない。

裾だつてそうだ。太ももの半分近くまで覆っている。

やっぱり何だか恥ずかしくつて、校舎の影で一人立ちつくしてしまつた。

すると直ぐに校庭がどつとわいた。

着替えに行つた男子がみんな校庭に戻つてきたのだ。

軽く息を整えて、クラスの輪に戻つていった。

みんなチアガールに注目していたから、私が着替えたなんて気がつかれないなんて思つたのは甘かつたみたい。

大きすぎる圭吾君の学生服は妙に目立ってしまったらしくてクラス

の中でもお調子者の村岡が私に声を掛けてきた。

「佐伯、なんか暑そうだぞ、何なら俺の短ラン貸してやったのに」と。

その声で、注目を浴びてしまった。

「馬鹿だな、村岡。郁はその学ランじゃなきゃ駄目なんだって。何処をどう見ても綾南の校章じゃないでしょ」

助けてくれたのか、煽られたのか真意は明らかじゃないけれど、余計に注目を浴びてしまっているのは確かかも。

桜ってそういう奴なんだ。穴があつたら入りたかった。

そんな私を助けてくれたのは他でもない大山だったりする。

「これ凄いきついんだけど」

目の前にやってきた大山の格好は酷かった。

全身パツンパツンのチアガールならぬチアボーイ。

スコートの下に履いた短パンが殆ど見えてるって何処までミニなんだろう。

私からの注目が逸れ、感謝するところなんだけど、どうしても笑いを耐える事が出来なくて皆と一緒に笑ってしまった、なんて恩知らずなんだ。

そして、応援合戦。

大山の存在あつてか、私達のクラスの番になると、校庭いっぱいにとっと笑いが。

姿はどうであれ、大山の良く通る声での声援は圧倒されちゃうほど。我がクラスの応援合戦は上々の仕上がりだった。

改めて見る男子の格好がおかしすぎて、応援合戦が終わっても盛り上がる、盛り上がる。

圭吾君の学生服を着ている事を一瞬忘れてしまつくらいみんなと一緒に笑っていた。

カシャ、となつた携帯の写メの音に振り向くと、満面の笑みの桜がいた。

「似合つてるじゃん、記念に一枚ね」

そう言われて、未だ着たままの学生服に気がついた。

私とした事が。

桜が次のターゲットである大山のところに向かうと、私は学生服のボタンにそつと手をかけた。

学生服を脱ぐと背中に大量の汗を感じた。そりゃそうだ、この炎天下、所謂冬服を着ているのだから。

みんながいる手前、匂いなんて嗅げないけれど、きつと汗臭くなつてるんだろつな。

急いでクリーニングに出せば大丈夫かな。そんな事を思いながら、朝同様丁寧に畳んで袋にしまった。

そして 応援合戦の盛り上がり、の雰囲気そのままに臨んだその後の競技は騎馬戦に、クラス対抗リレー。

接戦をものにした我がクラスは、見事総合優勝という快挙をなしたのだつた。

上の空2（後書き）

随分と間が空いてしまって、どうやって書けばいいものかすっかり解らなくなってしまう。おまけに内容が無いうえに纏らなくて。暫く置いて考えてもみたのですが、どうにもこうにもならなくて……。平謝りです。少しづつ書けるようにはなってきたと思うのですが、また暫く間があいてしまうかもしれません。自然消滅だけはしたくないので、また思い出して頂いた時、ふらっと遊びに来て頂けたら嬉しいです！

嫉妬だろつな

「それでね、桜ってば凄かったんだよ」

目の前の郁はその時の事を思いだしているのだろう。凄く楽しそうに身ぶり手ぶりで説明してくれている。

一番最後のクラス選抜のリレーに出た桜の事を凄いだの、かっこいいだの。ちよつと妬ける。

きつとこの場にいたら、したり顔で俺の事を見るに違いない。あいつはそういう奴だ。

だけど、郁が知らないだろう俺の待ちつけ写メの事を考えたらここは我慢なんだろう。

「圭吾君聞いてる?」

軽いトリップ入った俺に珍しく郁から突っ込みが入った。

「聞いてるって」

正直、こんな風に話が出るか不安もあったんだ。

この前の事は後悔してないけど、ぎくしゃくしたらどうしようと思っていたのも事実なのだから。

「はい、おまたせ」

郁の前にはあんみつ、俺の前にはわらび餅。

祭りの時に初めてきた、この甘味処は今や常連になりつつある。

小さすぎるちゃぶ台が心地よいなんて不思議なものだ。

一気に話しすぎたのだろう、少しゆるくなったお茶をぐくぐくと飲

み干す郁。

あんみつに手をかけるだろうと思ったら、突然郁が声をあげた。

「これ、本当にクリーニング出さなくていいの？」

膝の上に置いていた袋を持ち上げた。

いいの？ なんて。

そのまま渡してと言ったのは俺の方なのに。

「うん、そのままでもいいんだ」

そう言っているのに往生際悪く

「だって、汗臭いよ」

と小さな声で呟いた。

「だってたった一日だろ？ この前も言ったけど、俺はこれを一学期間毎日きているだから気にしないって」

「本当に？」

俺は返事をしない代わりに、大きく頷き袋に手を伸ばした。

郁の香りが残ってた方がいいんだって言った方が納得するのだろうか。

そんな事、言えっこないけど。

誓って言うけど、俺は変態なんかじゃない。

ぺこりとお辞儀をしながら、学ランが入った袋を渡された。

この学ランに袖を通すのが待ち遠しいって思う俺はやっぱり変態なのだろうか……

「どうもありがとう」

という郁に

「どういたしまして」

と言う俺はきつと締まりのない顔をしているのだろう。

郁はというと待ってましたとばかりにスプーンを持って『いただきます』のポーズ。

ちよつとだけ顔が赤いような　気のせいかな？

本当に嬉しそうに食べるんだよ。

ちよつと妬けるくらい幸せそうな顔。

あんみつと張ったところで仕方が無い事なのだけど。

今日は桜といい、あんみつといい……。

まあ良しとするか、郁が嬉しいのなら。

「そうそう、段々秋の雲になってきたよね」

思わず、喉がくつと鳴る。郁のこんな突然の話題変更も慣れたもんだ。

「今年は暑かったから、やっとっていうのかも知れないね」

今年は本当に暑い夏だった。

「去年は、桜とか同じクラスの子で食べ物持ちよって、ほら、私の学校の一個手前の駅に大きな緑地公園あるじゃない？ あそこにピクニック行っただよな。遠足みたいで楽しかったな」
また桜か、と思いつつ、ふと思う。　ピクニック、食べ物？
と。

郁を見ると天井に視線を向けて、何やら思いだしている様子。

あんみつのせいなのか、その時の事を思いだしているせいなのか、かなり嬉しそうな顔。

「ピクニックか。食べ物って？」

頭の中の疑問がすりと口に出ていた。

「みんなで、作って持ちよったんだよ。凄く美味しかったなあ」
遠足みたいなピクニックに美味しい食べ物といたら郁にとって最高かも。

そして、気になるのが”作って持ちよる”という言葉。

「郁は何を作ったの？」

同じ学校ならば、郁の作ったお弁当とか見れるのに、とまた少し齒がゆくなる。

郁は少し、頬を膨らませてつつけんどんに言ったんだ。

「私は、みんなからおかず禁止令が出て”おにぎり”担当になったんだよ」

本当に、あれだけは失礼なんだから。最後のは俺に向けた言葉じゃなくて、郁の呟きだろう。

そんな拗ねた顔も、可愛いと思ってしまう。

「でも、おにぎりだって立派なもんだよ」

フォローしようと思っただけで良い言葉が思い浮かばなくて、何が立派なのだから自分でも意味不明だ。

「うん、いっぱい握ったんだよ、たうらことかシャケとかこんぶとか。美味しかったんだからね」

そんな郁の言い方が可愛すぎだろ。思わず、笑みが洩れてしまった。決して馬鹿にしたんじゃないんだけど、郁はそう取れなかったみたいで。

「あー圭吾君、笑った。本当に美味しかったんだからね」

頬をぶくつと膨らませて、いる郁。俺の望む言葉を言ったと気がついてないのだろうな。

俺は心の中で、小さくガッツポーズ。

「じゃあさ、そのおにぎり食べさせてよ。今度の休み、緑地公園行こう。郁の作ったおにぎり持ってさ」

まさかそうくるとは思ってなかったのだろう、目を泳がせ始めた郁。面食らったって感じか？

急に、勢いを無くした郁に向かってもう一度念押しだとばかりに

「郁の作ったおにぎり食べたい」

わらび餅を箸で掬って、ゆっくりと口に運んだ。

まるで、おにぎりを食べるかのように大きく歯を浮かす。

「真面目に言ってる？」

「うん、至って真面目。楽しみにしているから」

「本当に？」

「本当だよ」

これだけの念押しに観念したのか、郁はこくりと頷いて頬を赤く染めた。

「でも、おかずは期待しないでね。その……」

最後の言葉はごにごによと聞こえなかったが、良しとしよう。

「おにぎりだけで、十分だよ。凄い楽しみだ」

これは決して大げさなんかじゃなくて。

「そんな期待されると、プレッシャーなんだけど」
俺と対照的に段々と落ちていってるような気がしないでもないけれど。ちよつとこれは譲れないかも。

「郁のおにぎりが食べたいだけだから」

「うん。じゃあ頑張る」

そこまで嫌じゃないよなと、卑屈な思いも出てくるけど、やっぱり郁と出掛ける事が嬉しくて。

そんな風におもつのは俺だけじゃないよな。

郁の頭はおにぎりに向かったようだ。
小さな声で

「やっぱりシヤケは外せないよね」
と呟いていた。

郁が作ったのなら、具なんてなんでもいいんだけどな。
そう呟く俺がいた。

嫉妬かな？

「それでね、凄かったんだよ、桜って」

甘味処に入って座った途端に、意識しちゃってどうしようもなかった。

だって、このちゃぶ台小さすぎるんだもん。

気にしてないと、圭吾君の口元に目がいつちやいそうになる。

そのせいで、体育祭の話をしているのだけど、緊張しているのか、自分でも早口なのが良く解る。

だけど、テンパればテンパるほど、私の口はどんどん動いてしまつて。

気が付けば、圭吾君、天井を見てるみたいだった。

「圭吾君聞いている？」

気がついたらそんな事まで言いだしてしまった。

そんな自分に驚いて、ぴったり止まった私のお口。

圭吾君は天井からゆっくり顔を下ろすと私の眼を見て

聞いているよ

って極上の笑みだ。

もうね、ドキっと思わず息をのみこんでしまい、どうしようかと思つた時。

『おまたせしました』
と救いの声。

顔見知りのバイトさんがあんみつとわらび餅を運んできてくれた。

ほっとして、小さく息を吸い込むと喉の渴きに気が付いて、ぬるく

なった日本茶に手を伸ばした。相当渴いていたのか、一口二口じゃ、

ちっとも喉はちっとも潤わなくて結局全部飲み干しちゃったよ。

落ち着いたところで、今日の本題をと、膝の上に置いていた圭吾君の学生服を手に取った。

この数日間、部屋にあるだけなのに凄い存在感だった圭吾君の学生服。

こういうのを名残惜しいというのだろうか？ そんな変な事を考え
てしまう私って怪しい奴なのだろうか。

それより、何よりこのまま渡すのに凄い申し訳なく思っちゃうんだ
よね。

折角クリーニングに出したのに、体育祭で着てそのまま返すだなん
て。

昨日の晩、シュツシュと消臭剤を掛けて、汗臭くないかチェックは
したけど、やっぱり不安だ。

汗臭いなんて、思われちゃったらちょっと悲しいんだけど……
袋を差し出したつも、ちょっと抵抗してみたけど、圭吾君は頑とし

て譲らない。
ちよつとの押し問答の後圭吾君の手が袋に伸びてきた。

少しだけ掠った指先に、嬉しくなる私はやっぱり怪しい奴なのじゃ
ないだろうか。

圭吾君は学生服が返ってきた事にほっとしているのか、何なのか解
らないけど、少し目を細めてにっこりしている。

圭吾君それは目の毒ってやつです。

それにしても、これからこの学生服はいつも圭吾君と一緒にいるわ
けだ。

洋服相手にといいのもどうかと思うけど、ちょっと嫉妬してしま
そう。

『でもその学生服に袖を通したんだよね』

思いだしたら私のドキドキセンサーはまたもや上昇して、堪らずスプーンを手を取った。

あんみつ、あんみつ。

もっと怪しい妄想に入りそうな気配を感じ取り、脳内の隙間にあんみつをインプット。

だけど、こんなに近くにいるんだからそう簡単には消えてくれない私のドキドキ。

圭吾君って、綺麗に食べるんだよな。

わらび餅のきなこって美味しいけど、私が食べたら机の上はきなこ天国になってそう。

ほら、上手に掬い取って口の中に吸い込まれていくよう……
って私また圭吾君の口元を見てしまった。

怪しすぎるよ、私。

何か他の事でも考えた方がいいのかも。

来る途中で見上げた空を思いだした。

ありきたりだけど、そんな天気の話しをしてみたり。

よし、普通に会話出来てるなんて思っていた私は、自分で爆弾を落とすとした事に

気が付いていなかった。

自然と出てきた去年の今頃の話。

楽しかったピクニックの話だったけど。

あれ、私おにぎり作る事になってる？

圭吾君とピクニックですと！

それはそれで凄く嬉しいのだけど、おにぎり作る？ 私が圭吾君に？

何度か聞き返してみたけど、圭吾君はすっかりおにぎりモードらしい。

あの笑顔を向けられたら、私が断れるはずなんてないわけです。

頭の中では、既におにぎりがいっぱいだ。
心配すぎる、只握るだけだけど……

おにぎりにはやっぱりシャケ外せないよね
本当におにぎりだけでいいのかな？

卵焼きくらい作った方がいいのかな……
仕方ない、お姉ちゃんに指南して貰わなくちゃかな。

私の気持ちとは裏腹に、凄く楽しそうな顔をしてるんですけど、圭
吾君。

頼むから期待なんてしないでね。

ピクニックの日が待ち遠しいような、そうでないような。
今更幻滅するものが増えても、変わらないような気もするけれど、
やっぱり料理って重要ポイントだったりするんだろうな。

今まで食べるの専門だったからな……

せめて形の良なおにぎりを握らなくちゃ。

明日から特訓だ。

やっぱりシャケだよな。

そんな事を考えていたせか、最後の一口だったあんみつは何となく
シャケの味がしたような。

微妙な味わいだっただよ。

日曜日の朝

「圭吾、今度の日曜日さ」

「パス」

まだ話しの途中だった真治の声をスパッと切って本に目を落とした。顔を上げなくても解る、真治はきつと呆気に取られて俺の顔を見ているのだろう。

何となく視線が痛い。

「お前なあ。まだ何も言つて無いだろ、冷たい奴だな。たまには相手しろつて。俺暇なんだよ」

「駄目」

そうその日は郁と一緒に公園に行く約束があるから、これは譲れない。

「郁ちゃんか？ どうせまだ予定は入つてないんだろ？ たまにはいいじゃん、先月オープンした古着屋なんだけど、圭吾の好きそうな洋服ありそうだぜ」

ここまで言う真治は珍しくて、俺は読みかけの本を閉じると真治の顔を見上げた。

「なつ圭吾行こうぜ」

どうしてそこまで食い下がるのか、きつと理由があるんだろう。

真治は解り易いからな。ちゃんと理由を言わなくちゃいけない気がした。

「悪い、その日は郁と出掛ける予定を入れてあるんだ。なんだった

「ら今日バイトないし放課後に行くか？」

真治の言った店はここから俺の地元から二駅先。いけない距離じゃない。真治からいい返事がくるとばかり思っていたのに、こいつ信じられない事を言いだした。

「いや、日曜がいいんだ。そうだ、どうせだったら、郁ちゃんに俺会わせがてら、俺も一緒に出掛けるってはどうだ？ いい加減会わせてくれたっていいだろ。俺、郁ちゃんに会いたいし」

は？ 何で真治がピクニックに？

まあそうだよ、いろいろ世話になった真治に紹介したいとは思っけど、その日だけは絶対駄目だ。

郁のおにぎりだぞ。絶対駄目。沸騰しかけた頭をぶんと振って言葉を探した。

まさか、郁のおにぎりを食べさせたくないだなんては言いたくないから。

それより以前に公園に遊びに行くだなんて言いたくないし。

そんな事行ったらこいつマジでついてきそつな気がするから。

「その日だけは駄目なんだ。だったら土曜か来週の日曜日は？」

俺にとつたら最大の譲歩だ。

秋晴れの天気が続くこの時期、週末は郁と出掛けたくてバイトのシフトは入れてなかったはずだから。

その分、平日はいつもより多く入ってるけど。

真治はどこぞの漫画に出てくるやつみたいに、腕を組むと暫く考え込んでいた。

考え込んで出た答えは意外なものだった。

「土曜かあ。それじゃあ、来週の日曜日にしとく。ドタキャン無し

だからな」

なんだかごちゃごちゃと聞こえたが、真治は来週の日曜で納得したらしかった。

何で俺がついていけなくちゃなんだとも、やっぱり思っけどあんまり深く考えない事にした。

真治には悪いが、俺の頭は既に日曜日のピクニックでいっぱいだったのだ。

そして、待ちに待った日曜日。

俺は物置の中を搜索中。

確かここにしまっただと思っただが。

我が家では、めっきり用を無さ無くなったビニールシート。

あつた方がいいよなあと昨日から探しているのだが、全く見当たらない。

母さんに聞けば一発で解るのだろうが、何を言い出すのか解らないだけに躊躇している。

待ち合わせの時間まで後二時間。

コンビニで買えばいいかと思いなおした。

物置のドアを閉めて玄関に入ると、母さんが俺を呼んでいた。

やけに機嫌のいい声で、ちょっと引いてしまう。

一体なんだって言うんだ。

また突拍子も無く買い物頼まれるのだろうか。

キッチンに入ると鼻歌を歌う母さんの後姿。

一瞬声を掛けるを迷ってしまった。

俺の気配に気がついた母さんが、満面の笑みで振り返った。

「圭吾、今日郁ちゃんと会うんでしょ？」

それはそれはニヤーとした顔で、返事をするのを止めようかと思

うくらいなのだが、どうしてか、幼い頃から母さんに逆らう事はインプリントされていない俺。

「ああ、そうだけど」

ピクニックだとか、そんな余計な事は言わないけれど、それでも何だか照れるっていうか何て言うか。
微妙な気分だ。

「良かった。圭吾今日バイト無いって言ってたし、昨日から嬉しそうな顔してたから、そうかなあって思ってたのよ。はい、これ。郁ちゃんに持って行ってあげて」
そう言っただけで差し出されたのは、甘い香り漂う代物でした。

「郁に？」

郁にっって言われて渡されたのに、思わず聞き返してしまった。

「そう、郁ちゃんに。だって圭吾、あれから郁ちゃん連れてきてくれないから」

何だっけ母さん、そんな口窄めて言う事じゃないだろ……

でも、あれだ。甘い物好きな郁だったら絶対喜ぶよな。

母さんには面と向かって言えないけれど、母さんの作ったお菓子は
お世辞抜きに旨いから。

「サンキュ」

丁寧にラッピングされた箱を持ち上げると

「あっチーズタルトだから大丈夫だとは思っけど、さかさまにはしないよね」

なんて、言われた。

それくらい解るっていうの。俺の事いくつだと思っているんだか。

何だか妙に照れくさくなって、タルトの入っている箱を持ち上げると、その場を離れてしまった。

背中を向けた途端にさっきより、大きな鼻歌が聞こえてきた。

日曜日の朝（後書き）

びっくりするほどゆっくり更新ですが、今年もどうぞ宜しくお願い
します^^ 　こゆみ

日曜日の朝2

「あっお父さん、三個までにしておいてよね」

テーブルの上、握り終えたばかりのおにぎりに手を伸ばすお父さんに思わず言ってしまった。

「郁の気合入ったおにぎりだからね」

お姉ちゃんのフォローにもならないその声にちよっぴり罪悪感も感じるけれど、そうは言ってられないんだから。

今度は難易度の高い卵焼きに挑戦だ。

お母さんは隣にいてくれるけど、本当にいるだけなんだ。

卵割るところから指導が入るってどういう事なのだろう。相当危なかつしって思っているのだろうな。

確かにその通りなのだけだ。

「だから、郁っ、目を離しちゃ駄目だつて。ほら、そんなに火を強くすると、あつと言つ間に焦げちゃうよ」
慌てて火を弱めてみる。

お姉ちゃん、それで笑いを堪えてるつもりなのだろうか。思いつきり笑い声が洩れてますけど。

というか、何で今日に限ってみんな早起きなの？

お姉ちゃんなんていつもは寝ている時間なのに。

お父さんだって、食べたらずぐりビングに行くっていうのに。はつきり言つて凄くやりにくいのだけだ！

「郁、早くひっくり返さなくちゃ」

お母さんの声に慌てて卵をひっくり返す。

ボソツとお母さんの

「大丈夫、そこは真ん中だから焦けても見えないわよ」
という呟きが聞こえた。

そして、三分後。

「郁にしては上出来よ」
という何とも微妙なお母さんの褒め言葉？ を貰い卵焼きが完成した。

おにぎりとウインナーと卵焼き、それにお母さんお手製のお漬物。
うん、お弁当箱に詰めたらいい感じた。

時間もまだちよつと余裕がある。

やっぱり11時にして正解だったかも。

なんて、思っていたのだけど。

何でこんなに時間が進むの早いんだろうー。

確かに、鏡の前でファッションショーをしたわよ。

スカートにしようか、ジーンズにしようか。

でも、そんなに時間が掛ってるなんて思いもしなかったよ。

念入りに髪を整えるつもりでいたのに、時は既に遅し。

これじゃいつもと変わらないじゃない。

いや、自転車をかつ飛ばしてるからいつもよりも酷いかも。

そんなこんなで好タイムで自転車置き場に滑り込んで、いつものお
じちゃんに

「いつてきます」

と言うと、これだけは横にしちゃいけないとお弁当の入った鞆を抱
えて駅へ向かった。

待ち合わせは、緑地公園の有る駅。

グットタイミングでやってきた電車に乗り込むと、気休めにしかないだろうけれど、手で髪を撫でてみたりして。

案の定、電車の窓にうつった私の髪は見事に……跳ねてました。こんな事なら、昨日から決めていたこのジーンズにしとけば良かった。

そう、散々迷った挙句、私が手に取ったのはベットの脇に出しておいた洋服だったり。

何やってるんだろう、私って。

そうこうしている間に、あっという間に駅に着いちゃった。

お弁当大丈夫だよな。

今更ながら、その中身が気になったりして。

自転車の籠、結構揺れてたかも。

味も気になるけれど、見た目も大事だよな。

ぐちゃぐちゃになってませんませんように、と願いながら改札口を抜けた。

自転車ダッシュのお陰で待ち合わせまでまだ10分もあるからと、ほっとしながら向かったその先に柱の陰から少しだけ見えた足先。急に胸がドクンと跳ねた。

そんな身体の一部だけでも、圭吾君だ、って解っちゃう私って凄いかも。

心の中でそつと近づいて驚かせちゃおうかな、なんて考えてみたけれど足が勝手に速足になっちゃって、後数歩というところで、ちらりと見えていた足先が動いて私の方が驚いちゃった。

「郁おはよ」

と振り向き様に言われて

「おはよ、圭吾君」

って言ってみただけど、何で圭吾君が私に来たって解ったんだろう。

柱の向こうにガラスが有る訳じゃないのに。
軽くトリップしてしまった私の前ににゅっと手が伸びて

「持つよ」

と私の鞆をひよいと持つてくれた。

ちよつと待つてその中にはお弁当が。

「あ、あのね。それ」

おにぎりを作るつて言つてあるんだから、圭吾君も解つていゝるだらうけど何でか私は言いたい言葉も出さずにもつてしまつた。

「ん、あつ大丈夫だよ、大事に持つから。昨日から楽しみなんだよね、郁の大きなおにぎり」

と、鼻血が出そうなサービス満点の笑顔で言つてくれちゃう圭吾君つて何者なのだろう。

向けられた笑顔に私もつられて、笑つてしまふ。

「天気もいいから、散歩がてら歩いていこつよ」

圭吾君の提案に私も大きく頷いた。

バスに乗つたら3つの停留所。

あつという間についてちゃう距離だけど、歩いていけばそれだけ一緒にいる時間が増えるような感じがしちゃう。

黙つて出された手に手を重ねると、一本一本指が絡まつて。

ちらりと見上げた圭吾君の顔。

斜め上を向いているのは照れてるからなのかな？

そんな自分に良い勘違いをしましそつ。

圭吾君の顔を見ちゃつたからか、急に指先がとくとくと波を打つ。

まるで、指先に心臓がついていゝみたい。

嬉しいけれど、恥かしくって。
お弁当の中身がどうなっているかなんて、一瞬で吹き飛んじゃったよ。

閑話 「嫉妬」

「お疲れ」

「お疲れ様です」

タイムカードを押したら、俺は勢いよくロッカールームを駆けだした。

一緒に上がったバイト仲間が

そんなに急いで転ぶなよ なんて笑っているのを背中で受けて、思わず苦笑する。

振り返る事なく、片手を上げたのは返事の代わりだ。

郁じゃないんだから、そう簡単に転ばないっていうの。

最近、ぐっと郁と距離が縮まったと思うのは気のせいじゃないはず。触れ合った手が自然と絡まるようになっていたり。

傍から見ても、友達には見えないと思うんだ。

人目をきにする訳じゃないけど、ちよっと前までぎこちなかったからな。

そう思いながらの待ち合わせの道のりは足が軽くて仕方がない。

あんまり遅くまで、引きとめられないから会える時間が限られる。

一分でも一秒でも早く郁に会いたくて、踏み出す足は自然と小走りになるんだ。

待ち合わせはいつも同じ場所。

駅の反対口の柱の向こう。

郁はいつだって、少し前かがみになって柱に凭れて待ってくれている。

俺を見た時、ぱーっと明るくなる顔は、どうしようもく心を疼かせる。
立ちっぱなしのバイトの疲労なんていっぺんに飛んで行くってものだ。
誰もいなかったら、迷わず抱きしめたいと思ってしまう。
それはあくまでも願望であって、例えば人がいなくても出来なそうなのだけだ。

何でか今日は、少し悪戯心が沸いてきた。
驚かせてみようかと。

郁が凭れているだろう柱の傍までくると、呼吸を整え一旦足を止めた。

そんな時、急に聞こえた『郁』の声。

どうやら誰かと一緒らしい。聞こえてきたのが女の声で一安心だ。
郁の地元の駅とあって、誰と会っても不思議じゃない。

ふと頭に、夏祭りの光景が浮かんだ。

誰だか知らないけれど、郁に俺がいるって事、知ってもらうのも必要かも、と。

こんなに可愛い郁が誰かに好かれる事はありえない事なんかじゃないのだから。

一歩踏み出そうとしたその時、飛んでもない言葉が飛び交っていた。

「そっか、あの頃ずっと榎山さとりが好きって、郁言ってたもんね」

「うん、大好き。最近すっかり見てないけど、今何やってるんだろ」
う

マ・キ・ヤ・マ・サ・ト・ル？

大好き、だ？

片足が宙に浮いたままの格好で、脳天から雷を浴びたかのような衝撃。

整えたはずの呼吸が段々と荒くなってきた。

煩くなる心臓に落ち着けと手をやり、耳を澄ませる。

立ち聞きなんて趣味悪すぎだけど、今はそんな事言ったられないから。

「さあ、私も最近ぱったりだから。見る暇もないしね」

誰かかもしれないこの女はそいつを知っているって、そんなに好きだったのか、そいつの事。

「あー話してたら、急に見たくなってきちゃったよ。後で覗いてみようかな」

「郁、本当にああいう甘い言葉好きだもんね。郁はさ、彼がいるんだから、彼に言って貰えばいいじゃん。あーさては欲求不満を、槇山ワールドで発散したいってか？」

「もう、よっちゃんてば、そんなんじゃないってばー」

女は豪快に笑っているけど、俺にはちっとも笑えない。

というか、よっちゃんってあの女か。

桜みたいに眼力のあるあいつ。

郁も何でそんなに無邪気なんだよ。

槇山ワールドって何だよ。

甘い言葉が好きだった？

最早俺の頭の中はパラレルワールドだ。

もしや、元カレの名前なのか？

はたまた、片思いの男の名前？

ほんのちよつと前の浮かれた気持ちが急にしぼんでいく。

「じゃあ、またね」

「うん、またね」

どうやら逢瀬は終わったらしい。

俺は気持ちを奮い立たせて、足を踏み出した。

柱の角から、よっちゃんとやらが出てきた。

俺の顔を見て、一瞬ギョツとしたように見えたのは気のせいかな？

俺の事、認識してるって顔だよな。

何か言った方がいいのかもしれないが、言葉が出てこなくて、俺は少しだけ顔を下げた。

相当強張った顔をしていたに違いない。

それなのに、この女すれ違い様に

「どうも、郁が首を長くして待ってますよ」

だなんて、言っただけで去っていった。

聞いてたんだぞ、さっきまで他の奴の話しをしていた癖に。

ドクドクとする鼓動は動揺からだ。

恐怖というものなのかもしれない。

女が出てきた柱の直ぐ横に郁がいた。

心なしか、顔が赤い。
さっきの奴の事でも思いだしているのだろうか。
堪らない焦燥感。

「あつ圭吾君、御疲れ様」
につこり笑う郁はいつもの郁だ。

この笑顔は俺に向けているんだよな。
俺は大きく頷いて、郁の手を握った。

初めはびっくりした顔をした郁だったけど、耳まで真っ赤に染めながら、指を絡ませるのは俺の事好きだからだよな。

いつもよりも、握る手に力が入ってしまうのは、郁を放したくないって思うから。

郁もそれに応えてくれたのか、指先にちょっと力を入れてくれたみたいだった。

何か話そうと思うけど、言葉が見つからなくて、自分が本当に不甲斐ない。

そんな時郁が遠慮がちに、声を出して俺を見上げた。

「ねえ、圭吾君。ちょっと行きたいところがあるんだけどいい？」
正直ドキっとした。行きたいところと言われさっきの会話がフラッシュバックした。

「行きたいところ？」

「うん、今さっきバイトを終えた圭吾君には悪いと思うのだけど、
その本屋さん」

郁が指さしたのは、駅の構内にあるそんなに大きくない本屋だ。
断る理由なんてなくて

「いいよ」

と返事をしたら、郁の顔が明るくなった。その反応の良さにまた嫉妬心。

俺を引つ張るように本屋に入った郁が真つ先に向かったのは少女漫画雑誌だった。

バイト先でも人気のあるその雑誌、今日も何冊かレジを打ったものだ。

郁は中を開く事なくじつと表紙を見つめている。郁の頭越しに一緒に覗いてみると、そこには

「あつたー。うわーまだこれ、連載してたんだ」
はしゃぐ声の先には

” 槇山さとる ” の文字。

あんまりにもホツとし過ぎて全身から力が抜けていくような感覚におそわれる。

漫画家かよ。

あまりにも空回りし過ぎだろ、俺。

自分が可笑し過ぎて、思わず失笑だよ。

そんな俺を見て郁は勘違いしたようだった。

「あー圭吾君笑ったな。この人の漫画凄く面白いんだから。そうそう、さつきよっちゃんに会ってね」

俺に笑われたと思ったのか、プクッと頬を膨らませて漫画の面白さを説明し始める郁。

バカみたいな嫉妬だけど、郁と一緒にいるとそんな嫉妬をし続けるのだろうな、と思ったり。

「そんなに面白いんだったら、今度見せてよ」
それはほんの好奇心。

だって、その人の書く甘い言葉が好きなんだろう？ と心の中で呟いた。

「圭吾君、絶対笑いそうだから、やだよーだ」

今の今まで面白いと力説してた癖に、見せてと言ったら嫌って言うか？

ほんと、郁といると面白い。

まあ、面白いだけじゃなくて嫉妬もしたりいろいろいるけど。

甘い言葉かぁ。

というか郁の思う甘い言葉はどんな言葉なのだろう。

後でこっさり店の本を覗いてみよう。

きっと忘れる事は出来ないだろう。槇山さとの名前。

取り敢えず、打倒槇山なのか？

そんなわけわからない事を考えてしまっ俺がいた。

閑話 「嫉妬」(後書き)

お久し振りです^^ 以前使っていたお話ですが閑話としてアップしてみました。

暫く書いてなかったので勘を取り戻す為に恥ずかしすぎて読み返せなかった初期のお話を見ました。

そして最初の数話を少しだけ改稿してみました。

これ以上読み進めるには勇気がいるのでまた後ほど……

誤字脱字のオンパレードですが大目にみて頂けたら嬉しいです。

続き、少し書きはじめました。

来月中には更新出来ればいいなと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4163e/>

電車通学

2011年10月1日12時41分発行